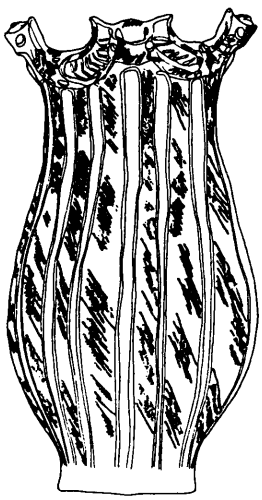
三重県埋蔵文化財調査報告　99—1

平成３年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第１分冊 ——



１９９２・３

三 重 県 教 育 委 員 会

三重県埋蔵文化財センター

『平成３年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』　正誤表

訂正箇所	誤	正
例言	６．～報分の報筆者～	６．～報分の執筆者～
表目次	Ⅷ勝地大坪遺跡（A・B 地区）・勝区大坪古墳群	Ⅷ勝地大坪遺跡（A・B 地区）・勝地大坪古墳群
27頁　第７表40項目	円形河口品	円形加工品
ＰＬ．２	ＳＨ15　完堀状況	ＳＨ15　完掘状況
47頁　第36図	砥石（251）	石臼（251）
92頁　表14　竪穴一覧表	～新し	～新しい
100 頁（２箇所有）	（川戸逹也）	（川戸達也）
100 頁　１行目右	（しょのつじ）	（じょのつじ）
101 頁　１行目表題	Ⅵ　上野市沖　馬場遺跡	Ⅶ　上野市沖　馬場遺跡
103 頁　２段目８～９行目	～古墳数は106 基に～加えて109 基にな～	～古墳数は113 基に～加えて116 基にな～
117 頁　第22表表題	１号墳墳付近包含層出土土器一覧	１号墳付近包含層出土土器一覧
128 頁　第101 図スケール	0　20cm	0　10cm

117 頁　第22表98項目

誤	98	17－4	〃	C10-1号墳石室	14.6	(4.0)		やや粗	〃	〃	1/3		
正	98	17－4	〃	C10-1号墳石室	14.6	(4.0)			〃	〃	〃	1/3	

序　　文

埋蔵文化財は、一度壊されると再び元に戻すことが困難であるなどの特性から、可能な限り現状保存していくことを大原則としておりますが、各種の公共事業を進めていくことも私たちの社会生活にとって重要なことであります。そのため、埋蔵文化財の保護と公共事業の促進との間には、様々な問題が生じておりますが、関係機関の御理解・御協力を得ながら埋蔵文化財の保護と公共事業の促進が円滑に進められるよう努めてきているところであります。

各種農業基盤整備事業の内、県営ほ場整備事業は北勢・中南勢・上野地域を中心として、例年数百ヘクタールにおよぶ大規模な公共事業でありますから、計画段階での分布調査や試掘調査などにより事業計画地内に所在する埋蔵文化財の件数や面積も大規模となっている状況であります。

これらの遺跡の保護については、県農林水産部・各農林事務所・各土地改良区等の県営ほ場整備事業関係機関と再三にわたる協議をもち、極力現状保存に努めているところであり、県営ほ場整備事業施工上、どうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し記録保存を図ってきているところであります。

ここに報告いたしますのは、現状保存が困難なため記録保存した埋蔵文化財の発掘調査の結果でありますが、この成果が多方面で活用されることを切望するものであります。

最後に、協議から発掘調査にかけて多大の御理解と御協力をいただいた県農林水産部・各関係事務所及び各土地改良区の方々をはじめ、発掘調査にあたって御助力をいただいた地元の方々に、心より感謝いたします。

平成４年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　中　林　昭　一

例　　言

1．本書は平成３年度農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査結果の内、中勢管内（大里地区・芸濃北部地区）、上野管内（上野北部地区・上野南部地区・上津地区・滝之原地区・阿山地区）のものを第１分冊としてまとめたものである。

2．調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。

3．調査体制は下記によった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

4．調査にあたっては、三重県農林水産部農村整備課、耕地課各農林事務所、各土地改良区及び地元の方々、各市町村教育委員会に協力を頂いた。

5．大里西沖遺跡・大石遺跡・勝地大坪遺跡の縄文土器については泉拓良氏（奈良大学教授）の指導・助言を得た。

6．各遺跡の整理・報告書作成は、調査第１課の各担当者があたり、管理指導課がこれを補助した。また、文末には報文の報筆者名を記し、文責を明記した。

7．本書で用いた遺構表示記号は下記により、挿図の方位は全て国土座標第Ⅵ座標北である。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＥ：井戸　　Ｐ：柱穴・小穴

ＳＨ：竪穴住居　　ＳＸ：墓　　ＳＤ：溝　　ＳＺ：その他

8．本書で報告した記録及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

9．当報告書作成にあたっては、以下の方々のご協力を得た。

足立　純子　　新井ゆう子　　尾家　　恵　　柿原　清子　　角谷　和代
北山美奈子　　小池　洋子　　小林佳代子　　島村紀久子　　杉原　泰子
鈴木美智子　　瀧川ひとみ　　田中　美樹　　中村美智代　　中山　豊子
西村　秋子　　前村　浩子　　松本　春美　　森島　公子　　脇坂　栄子
前川　友秀（皇学館大学）　　水谷　芳春（立正大学）
山口　順哉（奈良大学）

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前　言 …… 1

Ⅱ　津市　大里地区内遺跡群 …… 5
（南所遺跡・大里西沖遺跡・若林遺跡・小谷Ａ遺跡・小谷Ｃ遺跡）

Ⅲ　安芸郡芸濃町椋本　大石遺跡 …… 35

Ⅳ　上野市外山　外山大坪遺跡 …… 79

Ⅴ　阿山郡阿山町　馬田遺跡 …… 99

Ⅵ　上野市服部・羽根　鉾坪遺跡・北城遺跡 …… 100

Ⅶ　上野市沖　馬場遺跡 …… 101

Ⅷ　名賀郡青山町勝地　勝地大坪遺跡・勝地大坪古墳群 …… 103

Ⅸ　名張市滝之原　天久保遺跡 …… 145

図版目次

Ⅱ　大里地区内遺跡群

ＰＬ．１　大里地区遠景他

ＰＬ．２　大里西沖遺跡　遺構　ＳＨ15

ＰＬ．３　大里西沖遺跡　遺物　縄文土器

Ⅲ　大石遺跡

ＰＬ．４　遺跡遠景・Ａ地区全景

ＰＬ．５　遺構　ＳＨ48・ＳＨ49

ＰＬ．６　遺構　ＳＨ50他

ＰＬ．７　遺物　石器・縄文土器

ＰＬ．８　遺物　縄文土器

ＰＬ．９　遺物　縄文土器・中世の遺物

Ⅳ　外山大坪遺跡

ＰＬ．10　遺構　調査区全景他

ＰＬ．11　遺物　土師器・須恵器

ＰＬ．12　遺物　出土状況他

Ⅷ　勝地大坪遺跡

ＰＬ．13　遺跡遠景・調査区全景

ＰＬ．14　１号墳遺物出土状況

ＰＬ．15　２号墳遺物出土状況他

ＰＬ．16　３号墳・縄文時代の土坑（ＳＫ３）

ＰＬ．17　Ｂ地区全景・Ｂ地区ＳＸ１

ＰＬ．18　遺物　縄文土器・石器

ＰＬ．19　遺物　１号墳出土土器

ＰＬ．20　遺物　２号墳出土遺物

ＰＬ．21　遺物　１号墳・２号墳出土鉄製品

ＰＬ．22　遺物　2号墳出土鉄製品・3号墳出土遺物

挿図目次

Ⅰ　前　言

第１図　平成３年度調査遺跡位置図

Ⅱ　大里地区内遺跡群

第２図　遺跡位置図

第３図　遺跡地形図

第４図　調査区周辺地形図

第５図　Ａ・Ｂ・Ｃ・D_2区平面図

第６図　Ａ～Ｃ・D_2・D_3区土層図

第７図　D_1区平面図

第８図　D_3区平面図

第９図　D_4区平面・土層断面図

第10図　Ａ～Ｃ・$D_{1\sim3}$区出土遺物実測図

第11図　D_4区溝ＳＤ１他出土遺物実測図

第12図　D_4区溝ＳＤ２他出土土器実測図

第13図　調査区東壁土層図

第14図　大里西沖遺跡調査区平面図

第15図　竪穴住居ＳＨ15平面・土層断面図

第16図　土坑ＳＫ35遺物出土状況

第17図　掘立柱建物ＳＢ41～43付近平面図

第18図　掘立柱建物ＳＢ44平面・断面図

第19図　土坑ＳＫ13・溝ＳＤ19･20･14土層断面図
第20図　縄文土器実測図
第21図　縄文土器・石器実測図
第22図　大里西沖遺跡出土遺物
第23図　小谷Ａ遺跡・小谷Ｃ遺跡調査区位置図
第24図　小谷Ｃ遺跡遺構平面図
第25図　小谷Ｃ遺跡出土遺物実測図
第26図　波状口縁深鉢口縁部変遷概念図
Ⅲ　大石遺跡
第27図　遺跡位置図
第28図　遺跡地形図
第29図　調査区位置図
第30図　ＳＨ48遺物出土状況・平面図，ＳＨ48炉実測図
第31図　Ａ地区平面図・土層断面図
第32図　ＳＨ49平面図，ＳＨ49･50炉実測図，ＳＫ46・ＳＺ38遺物出土状況
第33図　ＳＢ１・３平面図・断面図
第34図　集石遺構・土坑墓・土坑遺物出土状況
第35図　土坑墓・ピット遺物出土状況
第36図　溝平面図・立面図・断面図
第37図　ＳＨ48出土遺物実測図
第38図　ＳＨ48出土遺物実測図
第39図　ＳＨ48出土遺物実測図
第40図　ＳＨ48出土遺物実測図
第41図　ＳＨ48出土遺物実測図
第42図　ＳＨ48出土遺物実測図
第43図　ＳＨ48出土遺物実測図
第44図　Ａ地区出土石製品実測図
第45図　Ａ地区土坑墓・土坑出土遺物実測図
第46図　Ａ地区土坑・ピット・溝・包含層出土遺物実測図
第47図　Ａ地区ＳＤ37出土遺物実測図
第48図　Ｂ～Ｅ地区平面図
第49図　Ｂ～Ｅ地区出土遺物実測図
第50図　Ａ地区掘立柱建物・溝配置図
第51図　土師器皿底部外面接合痕跡
Ⅳ　外山大坪遺跡
第52図　遺跡位置図
第53図　遺跡地形図
第54図　調査区位置図
第55図　ＡⅠ・ＡⅡ区平面図
第56図　ＡⅡ平面図・ＢⅠ・ＢⅡ・Ｃ区平面図及び土層断面図
第57図　Ａ区土層断面図
第58図　ＳＨ21・ＳＨ16竈実測図
第59図　ＳＫ５・ＳＫ26出土遺物実測図
第60図　遺物実測図
第61図　遺物実測図
第62図　ＳＸ７・ＳＸ８平面図
第63図　ＳＸ８出土遺物実測図
Ⅴ　馬田遺跡
第64図　調査区位置図
第65図　Ｂ地区平面図
第66図　Ｃ地区平面図
Ⅵ　鉾坪遺跡・北城遺跡
第67図　鉾坪遺跡調査区位置図
第68図　北城遺跡調査区位置図
Ⅶ　馬場遺跡
第69図　遺跡位置図
第70図　調査区位置図
第71図　遺構平面図
第72図　遺物実測図
Ⅷ　勝地大坪遺跡（Ａ・Ｂ地区）・勝地大坪古墳群
第73図　遺跡位置図
第74図　遺跡地形図
第75図　Ａ地区調査区位置図
第76図　遺構平面図
第77図　１・２・３号墳墳丘断面図
第78図　縄文時代の土坑実測図
第79図　縄文土器・石器実測図
第80図　縄文時代石器実測図
第81図　石器実測図
第82図　１号墳石室実測図
第83図　１号墳玄室奥壁
第84図　１号墳石室玄門部
第85図　１号墳石室羨道部
第86図　１号墳遺物出土状況図
第87図　１号墳石室内遺物、包含層遺物実測図
第88図　２号墳石室実測図
第89図　２号墳玄室奥壁
第90図　２号墳石室玄門部

第91図　２号墳石室羨道部
第92図　２号墳出土石棺実測図
第93図　２号墳遺物出土状況図
第94図　２号墳出土遺物実測図
第95図　２号墳出土鉄製品実測図
第96図　３号墳石室実測図及び遺物出土状況図
第97図　３号墳出土遺物実測図
第98図　１号墳石室上部出土遺物
第99図　Ｂ地区調査区位置図
第100図　Ｂ地区遺構平面図
第101図　Ｂ地区出土遺物実測図
第102図　Ｂ地区集石遺構ＳＸ１
第103図　２号墳石室石棺内のリン・カルシウム分析試料採取地点
Ⅸ　天久保遺跡
第104図　遺跡位置図
第105図　調査区位置図
第106図　遺構平面図
第107図　遺物実測図

表　目　次

Ⅰ　前　言
第１表　平成３年度農業基盤整備事業地内遺跡一覧(1)
第２表　平成３年度農業基盤整備事業地内遺跡一覧(2)
Ⅱ　大里地区内遺跡群
第３表　D_4区ＳＤ２出土土器の構成比率
第４表　南所遺跡出土遺物観察表(1)
第５表　南所遺跡出土遺物観察表(2)
第６表　南所遺跡出土遺物観察表(3)
第７表　大里西沖遺跡出土遺物観察表
Ⅲ　大石遺跡
第８表　掘立柱建物一覧表
第９表　石製品観察表
第10表　Ａ地区出土遺物観察表
第11表　Ａ地区出土遺物観察表
第12表　Ａ地区出土遺物観察表
第13表　Ａ地区出土遺物観察表
Ⅳ　外山大坪遺跡
第14表　遺構一覧表
第15表　遺物観察表(1)
第16表　遺物観察表(2)
第17表　遺物観察表(3)
Ⅷ　勝地大坪遺跡（Ａ・Ｂ地区）・勝区大坪古墳群
第18表　縄文土器一覧
第19表　石器一覧
第20表　勝地大坪古墳一覧
第21表　１号墳出土土器一覧
第22表　１号墳付近包含層出土土器一覧
第23表　１号墳出土鉄製品・石製品一覧
第24表　２号墳出土土器一覧
第25表　２号墳出土鉄製品一覧
第26表　２号墳出土土器一覧
第27表　３号墳出土土器一覧
第28表　１号墳出土中世土器，鉄製品一覧
第29表　２号墳石室石棺内土壌のリン・カルシウム分析結果
第30表　２号墳石室石棺内土壌のリン含量分布
第31表　２号墳石室石棺内土壌のカルシウム含量分布

Ⅰ　前　　言

1．調査に至る経緯

三重県教育委員会では、毎年８月、開発関係各課に対して翌年度の公共事業計画についての照会を行い、早期に開発事業地内における埋蔵文化財を確認するとともに、その保護に関し遺漏のないよう努めている。

こうした一連の流れの中で、平成２年９月28日付、農備第1052号で平成３年度農業基盤整備事業計画の回答があり、610haにも及ぶ県営ほ場整備事業、73haの公害防除・畜産環境整備等の事業、その他農免農道、広域農道、潅漑排水等の事業が知らされた。

これを受けた当埋蔵文化財センターでは、遺跡地図との照合の上、11月から３か月にわたり全地域を対象に分布調査を実施した。また、これに引き続き遺跡範囲の確定や遺構深度のデータを得るための試掘調査を平成３年１月下旬～２月中旬にかけ随時実施した。その結果、事業地内に69遺跡、715,000㎡の遺跡が確認され、この旨、平成３年２月25日付、教埋第63号で農村整備課並びに耕地課へ報告するとともに、極力盛土保存や地区除外の方向で設計変更を要請した。遺跡保存をめぐる詰めの協議は、３月５日・13日の都合２回にわたり、最終的に県ぽ関係では、12遺跡、約24,000㎡の本調査と、30遺跡、約14,000㎡の立会調査に絞られた。また農道関係では４月に入り、２遺跡、2,700㎡の調査が確定した。なお、このうちの下沖遺跡と赤坂遺跡については、それぞれ嬉野町教育委員会、久居市教育委員会に調査を委託することとなった。

2．本年度調査の経過と概要

４月早々、年間調査計画を作成のうえ、主に上半期に本調査を、９月以降の下半期に立会調査を実施することで農村整備課と協議し、調査は５月の連休明けから開始することとなった。

農免農道の事前調査として始まった城之越遺跡では、調査の初期の段階から古式土師器や木製品を多量に出土する古墳時代前期の大溝が確認され、さらに調査が進む過程で溝の上流部では、法面に石貼りがみられ、立石を配した岬状の突出部を設けるなど他に例を見ない特異な遺構であることが分かってきた。そこで農村整備課と協議のうえ、７月以降に実施予定であった農道の両側に取りつく排水路部分の立会調査も本調査に切り替える旨了解を得、調査を継続することとなった。この間、考古学、庭園史を専門とする多くの研究者の方々から現地指導や有意義な御教示を得、調査に万全を期すとともに、７月下旬、農村整備課、文化振興課、埋蔵文化財センターの三者で城之越遺跡の取扱いについて第１回目の協議をもった。

８月11日の現地公開には、県内外から約1,800名もの見学者があり、現状保存を望む声もあるなど関心の高さを示した。

８月22日には、県教育委員会、県農林水産部、上野市、地元改良区の四者で「城之越遺跡に関する打合せ会議」を開き、遺跡保存の方向性と工事の進捗について調整・検討がなされた。

一方文化庁の指導・助言もあり、国庫補助を得てさらに遺跡の性格と範囲をより明確にするための補足調査が９月後半から開始された。その結果、石貼大溝は３か所の源流部から端を発することや、比較的大型の掘立柱建物群が調査区の西方にあることが新たに確認された。

このように世間の注目を集めた城之越遺跡は、何十回にも及ぶ関係者との調整・協議を経て、最終的に国・県の指定の方向で保存されることとなった。

松阪管内の阪内川左岸地区では、５月から12月にかけて打田、ヒタキ、阿形の各遺跡で、延べ7,000㎡にわたる調査が連続して実施された。打田遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての整然と配置された掘立柱建物群、柵列のほか、遺物では二彩小壺、円面硯、墨書土器等が確認され、有力氏族の邸宅跡とも考えられる貴重な遺跡であることが判明した。またその北方100mにあるヒタキ廃寺では、鬼瓦のほか多量の瓦類が出土し、その堆積状況は一部倒壊したままの状況と判断された。瓦の下で検出した掘立柱建物は、３間×３間の仏堂のような小規模な建物で、出土した軒丸・軒平瓦の型式から８世紀後半

管轄	事業名	地区	事業面積 ha	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積 ㎡	備考
桑名農政	県営ほ場	員弁	12		員弁郡北勢町、員弁町		
		十社北部	10		〃 北勢町川原		
		藤原中部	27	天白遺跡	〃 藤原町本郷	4,000	工事中に発見、工事対応
	公害防除	西員弁	35	精好遺跡	〃 北勢町奥村	44,000	試掘・希薄・工事対応
四日市農林	県営ほ場	四日市南部	5		四日市市小林町		
		芥川沿岸	8	下代遺跡	鈴鹿市中富田町	18,700	継続協議
		井田川	8	(塚田遺跡)	〃 井田川町		試掘・古墳でないと判明
	緑農住区基盤整備	道伯・住吉	13		〃 道伯・住吉町		
津農林	県営ほ場整備	河芸北部	20		安芸郡河芸町三行		
		大里	33	小谷A遺跡	津市大里山室町	2,200	立会調査 300㎡
				小谷B遺跡	〃 〃	600	工事対応
				小谷C遺跡	〃 〃	750	立会調査 150㎡
				西野々遺跡	〃大里山室町	7,000	平成3年12月再試掘、工事可
				若林遺跡	〃大里野田町	3,400	立会調査 140㎡
				大里西沖遺跡	〃 睦合町	38,300	本調査 2,100㎡
				南所遺跡	〃 野田町		立会調査 1,660㎡
				東浦遺跡	〃大里小野田町	6,000	事業次年度送り
				古里遺跡	〃 〃	10,100	〃
		芸濃北部	22	川原遺跡	安芸郡芸濃町椋本	9,600	遺構希薄、工事可
				椋本南方遺跡	〃 〃	49,000	事業次年度送り
				大石遺跡	〃 〃	51,000	本調査3,000㎡、立会調査600㎡
		穴倉川沿岸	14	(穴倉川遺跡)	〃 安濃町中川		試掘、遺構無、工事可
		美里中南部	10	白樫A遺跡	〃 美里村足坂	30,000	地区除外
				白樫B遺跡	〃 〃		〃
				白樫C遺跡	〃 〃		〃
				(橿原B遺跡)	〃 〃		〃 一部試掘・遺構無
		久居	23	下新田遺跡	久居市森町加村	500	立会調査 20㎡、他は盛土対応
				(馬回り遺跡)	〃 庄田町出家		遺構、遺物無、工事可
		榊原	8	尺ヶ寺遺跡	久居市榊原町	77,000	遺構希薄、一部立会調査
				向ヶ平遺跡	〃 〃		遺構無、工事可
				五間田遺跡	〃 〃		事業次年度以降
				大安寺遺跡	〃 〃		遺構無、工事可
		中里	12.5	下沖遺跡	一志郡嬉野町宮野	10,000	本調査 1,700㎡ (嬉野町教委)
				宮野広遺跡	〃 〃 〃	9,000	立会調査 170㎡
		家城	22	高瀬A遺跡	〃 白山町北家城	3,800	工事対応
				高瀬B遺跡	〃 〃 〃	3,000	立会調査 1,000㎡
	一般農道	久居東部	L=1,700m	赤坂遺跡	久居市木造町	1,200	本調査 1,200㎡
	農免農道	津北部2期	L=2,347m	(石田3号墳)	津市大里野田町		自然地形と判明
				(小野田古墳群)	〃 〃小野田町		
				(睦合A・B古墳群)	〃 〃睦合町		
				(すの坪古墳群)	〃一身田町豊野		
				豊野古墳	〃 〃 〃		未試掘
				豊野遺跡	〃 〃 〃	380	〃
	かん排	窪田	L=270m		〃大里窪田町		
	畜環	一志	18.7	平田遺跡	一志群一志町井関	800	遺構無、工事可
		堀坂川沿岸	7	曲里中遺跡	松阪市曲町	63,000	本調査350㎡、立会調査300㎡
		阪内川左岸	45	里中遺跡	〃 大足町	5,400	工事対応

第1表　平成3年度　農業基盤整備事業地内遺跡一覧(1)

(　)は、試掘の結果、遺跡を確認できなかったもの

管轄	事業名	地区	事業面積 ha	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積 ㎡	備考
松坂農林	県営ほ場整備			桜垣戸遺跡	〃 〃	2,000	立会調査 50㎡
				(八原古墳群)	〃 藤之木町		自然地形と判明
				(石原遺跡)	〃 岡本町		遺構無、工事可
				打田遺跡	〃 〃	3,000	平成2年度送り分本調査3,000㎡
				ヒタキ廃寺	〃 阿形町	3,500	本調査 800㎡
				阿形遺跡	〃 〃	50,000	本調査2,500㎡、立会調査680㎡
		西黒部	54	宮浦遺跡	〃 西黒部町	1,900	立会調査 150㎡
				長瀬遺跡	〃 〃	1,300	立会調査 300㎡
				天王遺跡	〃 〃	440	立会調査 440㎡
		機殿	43	(六根遺跡)	松阪市六根町		遺構希薄、工事可
		荒蒔	10	上ノ垣外遺跡	多気郡多気町荒蒔	400	立会調査 150㎡
		明星	11	本郷遺跡	〃 明和町明星	25,000	本調査 4,900㎡
				北野遺跡	〃 〃 蓑村、本郷	25,000	事業次年度送り
		八幡沖	27	(笹川遺跡)	松阪市笹川町		遺跡無、工事可
				下恵本遺跡	〃 〃	2,000	立会調査 260㎡
		丹生	3		〃 勢和村丹生		
	農免農道	天啓	L=1,080m	古墳3基	多気郡多気町相可		未試掘
伊勢農林	県営ほ場整備	中川	22	アラシ遺跡	度会郡度会町坂井	300	遺構希薄、工事対応
				松原遺跡	〃 〃 注連指	400	〃 〃
		一之瀬	14	(丸野遺跡)	〃 〃 川北〃		遺構・遺物無、工事可
		磯部西部	17	(中世古遺跡)	志摩郡磯部町		遺構無、工事可
		南張	4		〃 浜島町		
	畜環	鳥羽	6.4		鳥羽市松尾		
上野農林	県営ほ場整備	河合	5	馬場B遺跡	阿山町馬田	950	立会調査 420㎡
				馬場C遺跡	〃 〃	1,500	立会調査 320㎡
		上野南部第2	11	馬場遺跡	上野市沖	2,800	立会調査 260㎡
				森脇遺跡	〃 市部	1,500	工事対応
		上野南部第3	14	城之越遺跡	〃 比土	25,400	A地点 本調査2,800㎡後現状保存
		上野北部	47	外山遺跡	〃 外山	40,000	本調査 1,700㎡
				塩ノ屋遺跡	〃 東条	10,000	工事対応
				鉾坪遺跡	〃 〃	9,000	工事対応、立会調査90㎡
				壱丁田A遺跡	〃 服部	600	工事対応
				壱丁田B遺跡	〃 〃	1,000	〃
				北城C遺跡	〃 羽根	9,500	〃
				北城D遺跡	〃 〃	2,000	〃
				北城E遺跡	〃 〃	3,600	〃
				北城F遺跡	〃 〃	11,000	立会調査210㎡未実施のまま工事着手。中世城館は次年度送り
				北城G遺跡	〃 服部	1,600	
				伊賀国府推定地	〃 坂之下		範囲確認調査3,000㎡
		柘植川沿岸		物堂遺跡	阿山郡伊賀町物堂	2,000	工事対応
		上津		勝地大坪遺跡	名賀郡青山町勝地	5,150	本調査1,700㎡、立会調査100㎡
		滝之原		天久保遺跡	名張市滝之原	1,000	立会調査170㎡
	農免農道	大山田南部4期	L=328m		阿山郡大山田須原		
	〃	上野南部2期	L=700m	城之越遺跡	上野市比土	1,500	A地点本調査1,000㎡後現状保存。C地点ルート白紙撤回のため調査せず。
	広域農道	伊賀	L=925m	遺跡	〃 西高倉		未試掘
	〃	伊賀2期	l=1,300		名張市滝之原		
尾鷲農林	県ぽ	紀伊長島	13	茂原遺跡	北牟婁郡紀伊長島町	21,000	未試掘、事業次年度送り

第2表 平成3年度 農業基盤整備事業地内遺跡一覧(2)

(　)は、試掘の結果、遺跡を確認できなかったもの

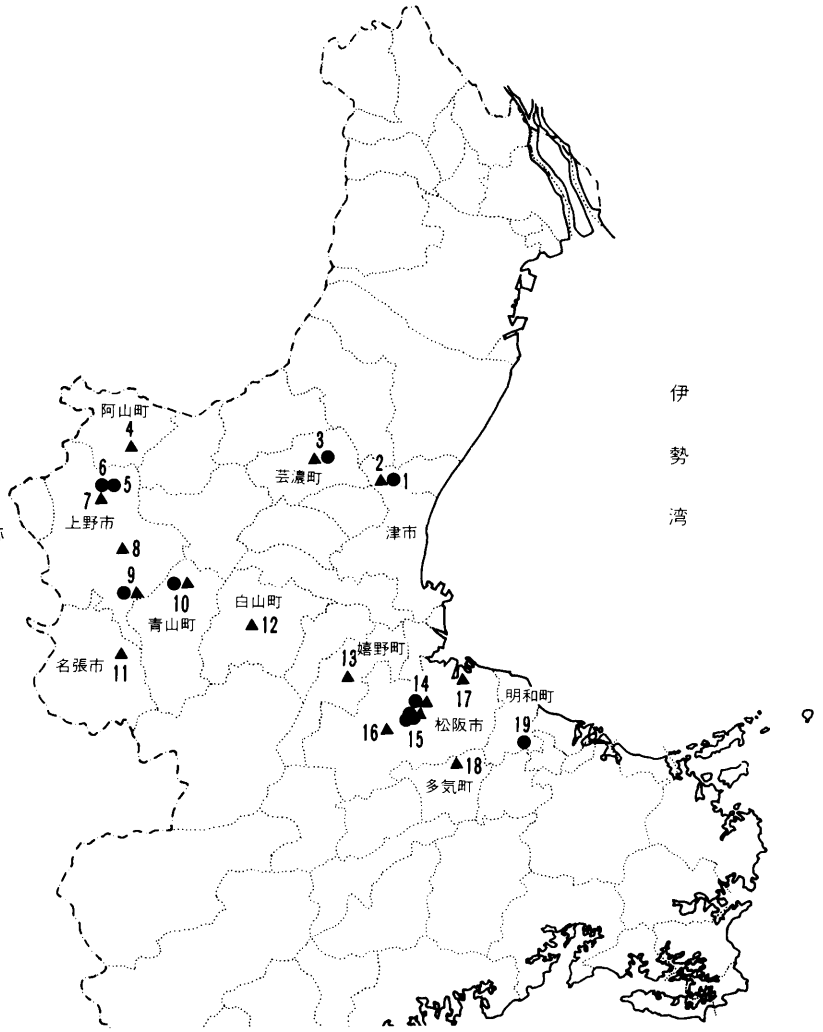
頃とみられ、掘立柱の瓦葺き建物としては数少ない検出例となった。一説には、古代の豪族飯高氏の本拠地が当地域一帯とされており、同氏と打田遺跡・ヒタキ廃寺との直接的な関係までは言及できないまでも、その一端を垣間見たような気がする。引き続き実施した阿形遺跡では、面的な本調査部分と排水路にあたる立会調査部分に分かれたが、調査が進む過程でほぼ全面に遺構が濃密にあることが分かり、立会調査の一部を本調査に切り替えた。特に検出された弥生後期の4条の溝は環濠の一部とみられ、集落の本体が調査区南部に広がることが明らかとなった。電波探査の結果からもほぼこれを裏付けた。また溝出土の弥生後期の土器は、非常に残りが良く一級の基準資料となろう。

一方、上野管内では10月中旬から伊賀国府推定地の調査が開始された。県営ほ場整備事業に先立ち、昭和63年度から始まった確認調査も本年度で4年目を迎え、整備事業の進捗状況との関係もあり、ある一定の保存についての方向を打ち出す必要があった。そのため今回の調査では、過去の調査データから政庁の中軸線を割り出して面的な調査をこれに沿って設定し、政庁の主要建物やその外郭線の確認を主目的とした。調査の結果、当初予想した中軸線はやや西へずれたものの、正殿とみられる7間×4間の四面廂付建物のほか、前殿、東西脇殿が確認され、伊賀国府の政庁は上野市坂之下の国町地区に所在することがほぼ確定的となった。ただ外郭線についてはまだ不明確で今後の課題として残った。

以上のように本年度は、ほとんどの遺跡で発掘史上注目すべき遺構・遺物の発見が相次ぎ、調査担当者の意気込みも例年になく目を見張るものがあり、また調整を担当する者も東奔西走した目まぐるしい一年であった。

（倉田直純）

1．大里西沖遺跡
2．小谷A・C、若林遺跡
3．大石遺跡
4．馬田B・C遺跡
5．外山大坪遺跡
6．伊賀国府推定地
7．北城G、鉾坪遺跡
8．馬場遺跡
9．城之越遺跡
10．勝地大坪遺跡
11．天久保遺跡
12．高瀬B遺跡
13．宮野広遺跡
14．曲里中遺跡
15．打田、ヒタキ、阿形、桜垣内遺跡
16．下恵本遺跡
17．宮浦、長瀬、天王遺跡
18．上之垣内遺跡
19．本郷遺跡



第1図　平成3年度調査遺跡位置図（●＝本調査、▲＝立会調査）

II. 津市　大里地区内遺跡群

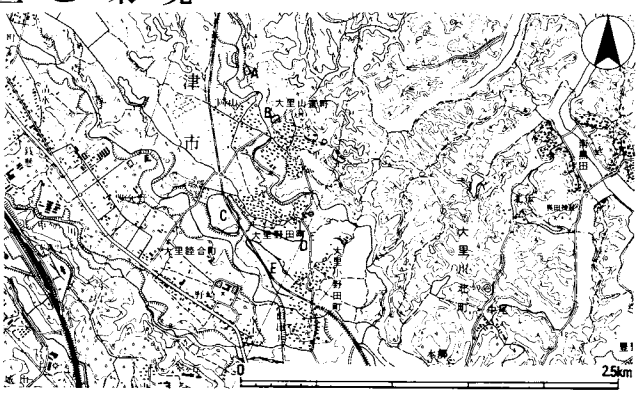
今年度のほ場整備事業（大里地区）に伴って、津市大里野田町・南所遺跡・若林遺跡、大里睦合町・大里西沖遺跡、大里山室町・小谷A・C遺跡の調査を行った。これらの遺跡は隣接するものであり、事業地も同一であることから、「大里地区内遺跡群」として一括して報告することとする。

1. 位置と環境

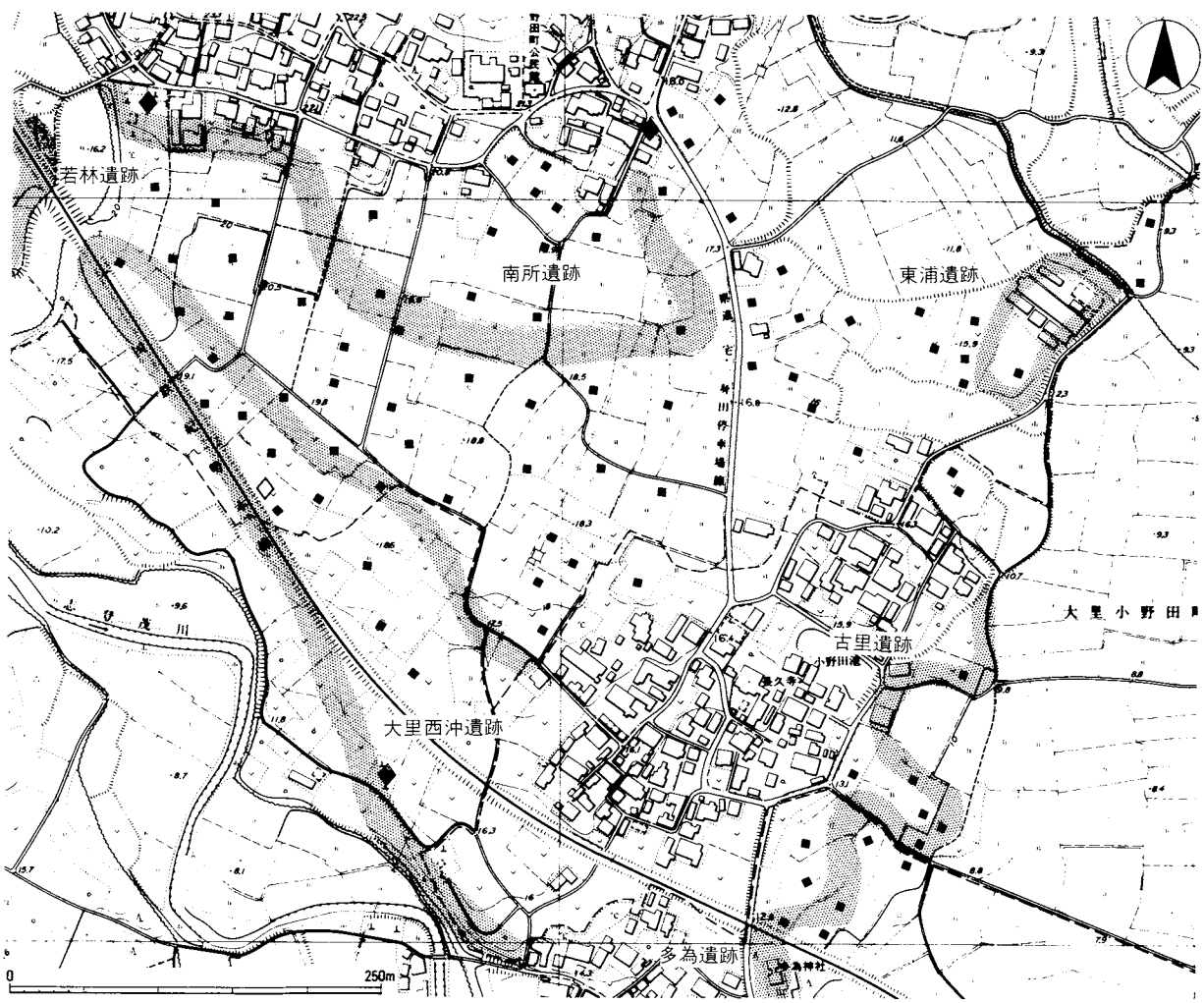
津市大里地区は津市の北部に位置し、芸濃町および美里村とも近い位置にある。伊勢平野と山間部との境目あたりの丘陵上であり、浸食途上の台地であるために各所に急峻な谷が認められる。各遺跡の立地はこれらの谷に挟まれた台地上である。

大里地区の西方低地には一身田の高田本山専修寺がある。また、大里地区には伊勢神宮へと通じる伊勢別街道が東西に縦断している。

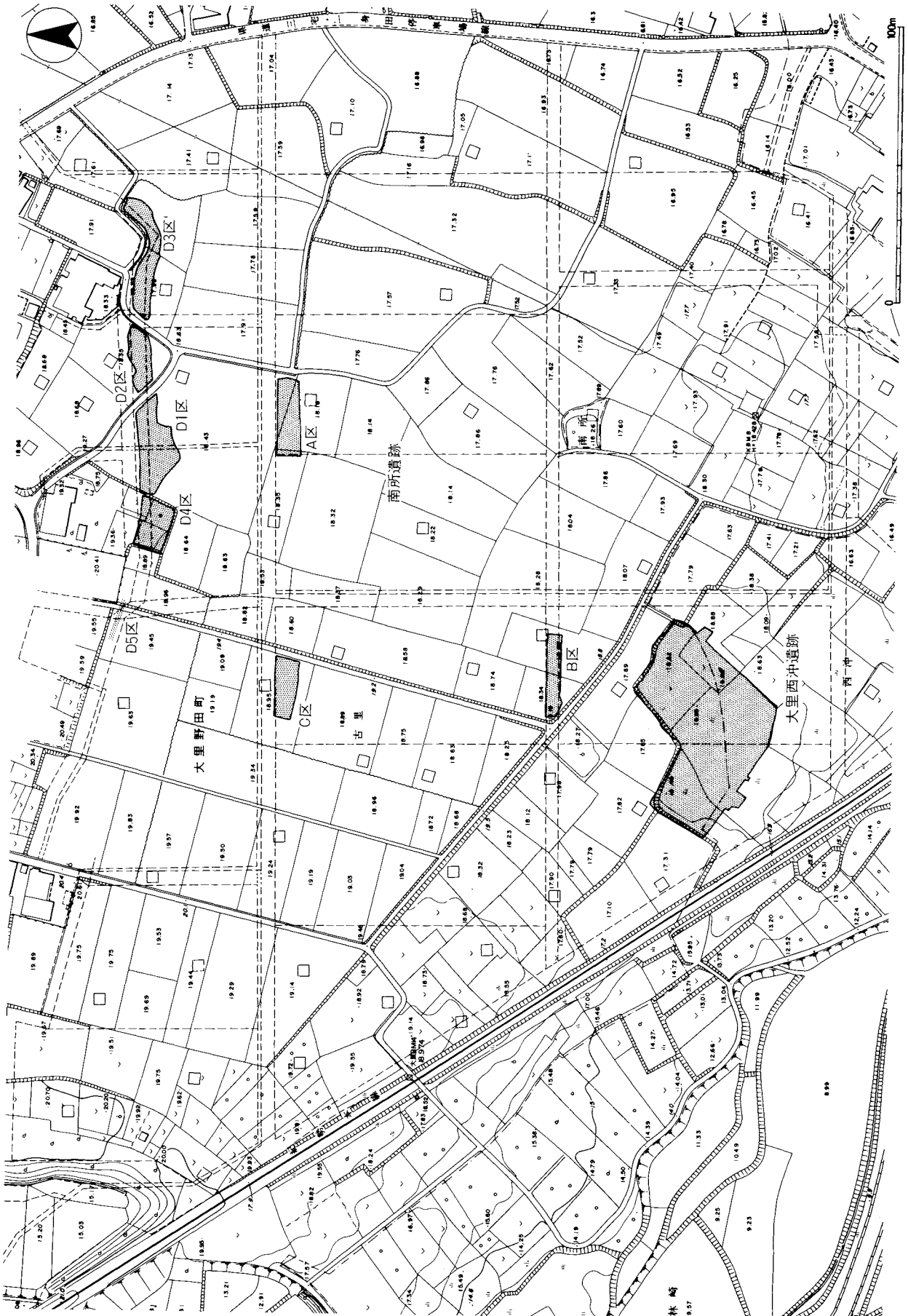
大里野田地内では、あまり顕著な遺跡がこれまで



第2図　遺跡位置図A・小谷C、B：小谷A、C：若林、D：南所、E：大里西沖(1:50,000)（国土地理院『椋本』『白子』から）



第3図　遺跡地形図（1:5,000）　■は試掘坑、◆は五輪塔のある地点（墓）、◇は火葬墓検出地点



第4図　調査区周辺地形図（1:2,000）

確認されていない。昭和63年度に調査を行った若林遺跡[1]が唯一で、そこからは縄文時代中期ないしは後期の土器片、および中世前期の遺構・遺物が若干確認されているのみである。今回調査を行った小谷遺跡・南所遺跡・大里西沖遺跡は大里地区における縄文時代・奈良時代および中世の遺跡の展開を考えるうえで重要といえる。以下、調査の詳細について記述していく。

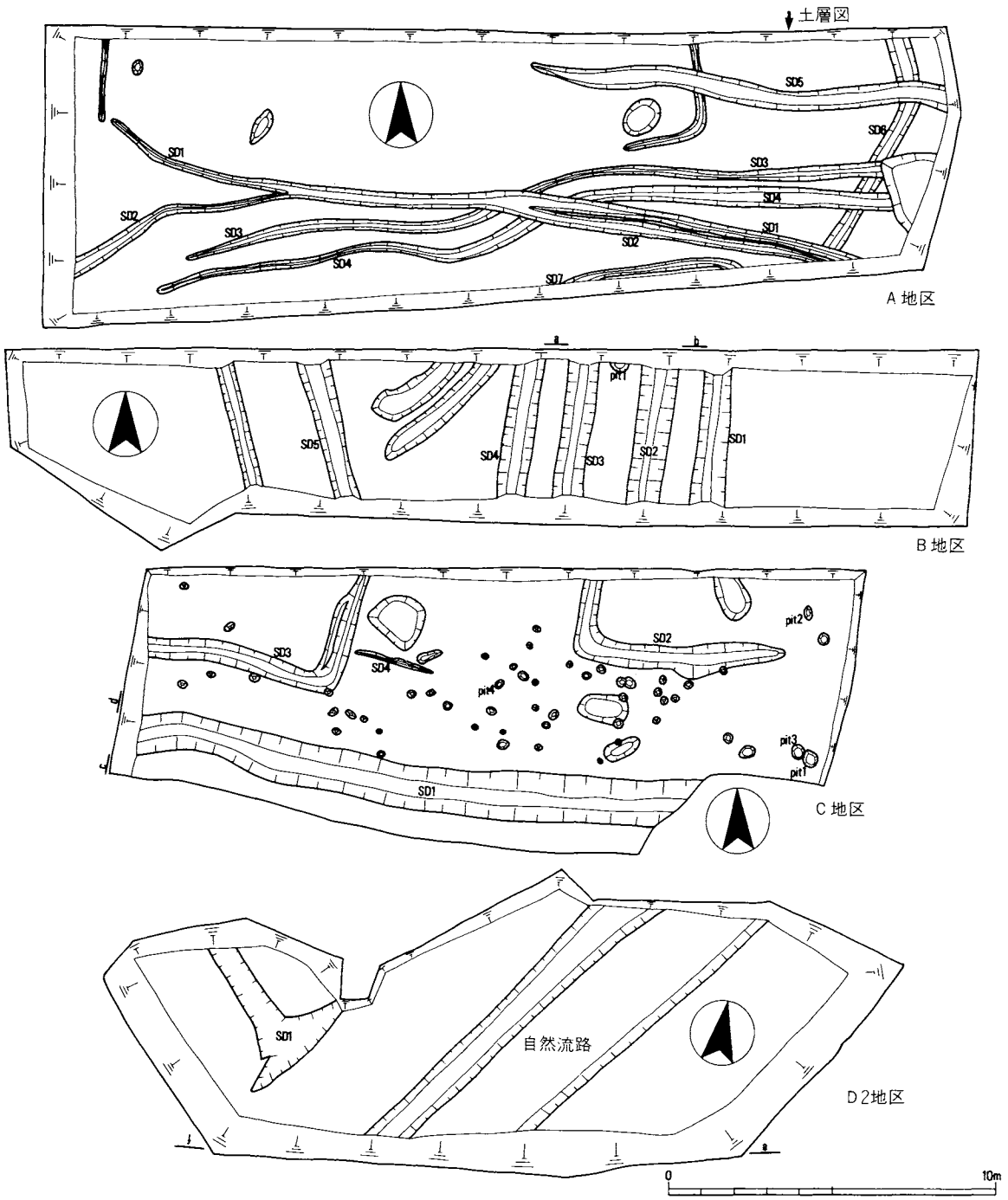
2．南所遺跡の調査

南所遺跡は行政的には津市大里野田町字南所に所在する。現況は水田および畑地である。

調査は1991年５月13日～同年５月29日および同年10月24日～11月７日に行った。

１．Ａ地区の遺構

Ａ地区は標高約18.2mの水田部にあたる。調査面



第５図　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ₂区　平面図（1:200）

積は約243㎡である。基本層序からは２面の水田面が想定される。遺構は暗灰褐色粘質土下の淡黄色粘質土（基盤層）上面で検出した。

検出した遺構は溝８条、ピット数基である。溝ＳＤ３・４とＳＤ５はおよそ3.5m離れるが屈曲をしながらそれぞれ平行に走っている。出土土器からはそれぞれ鎌倉時代末から南北朝時代初頭あたりかと考えられ、機能的には道・排水路が想定出来る。

２．Ｂ地区の遺構

Ｂ地区は標高約18.3mの水田部にあたる。調査面積は約165㎡である。調査区東側は表土・床土の下に黒色土の堆積が顕著であるが、西側および南側にはその堆積が不明確である。遺構検出は黒色土下の礫混じり黄色粘土（基盤層）で行ったが、黒色土が本来の遺構面であると考えられる。基盤層は調査区南側ほど砂礫が多くなっている。

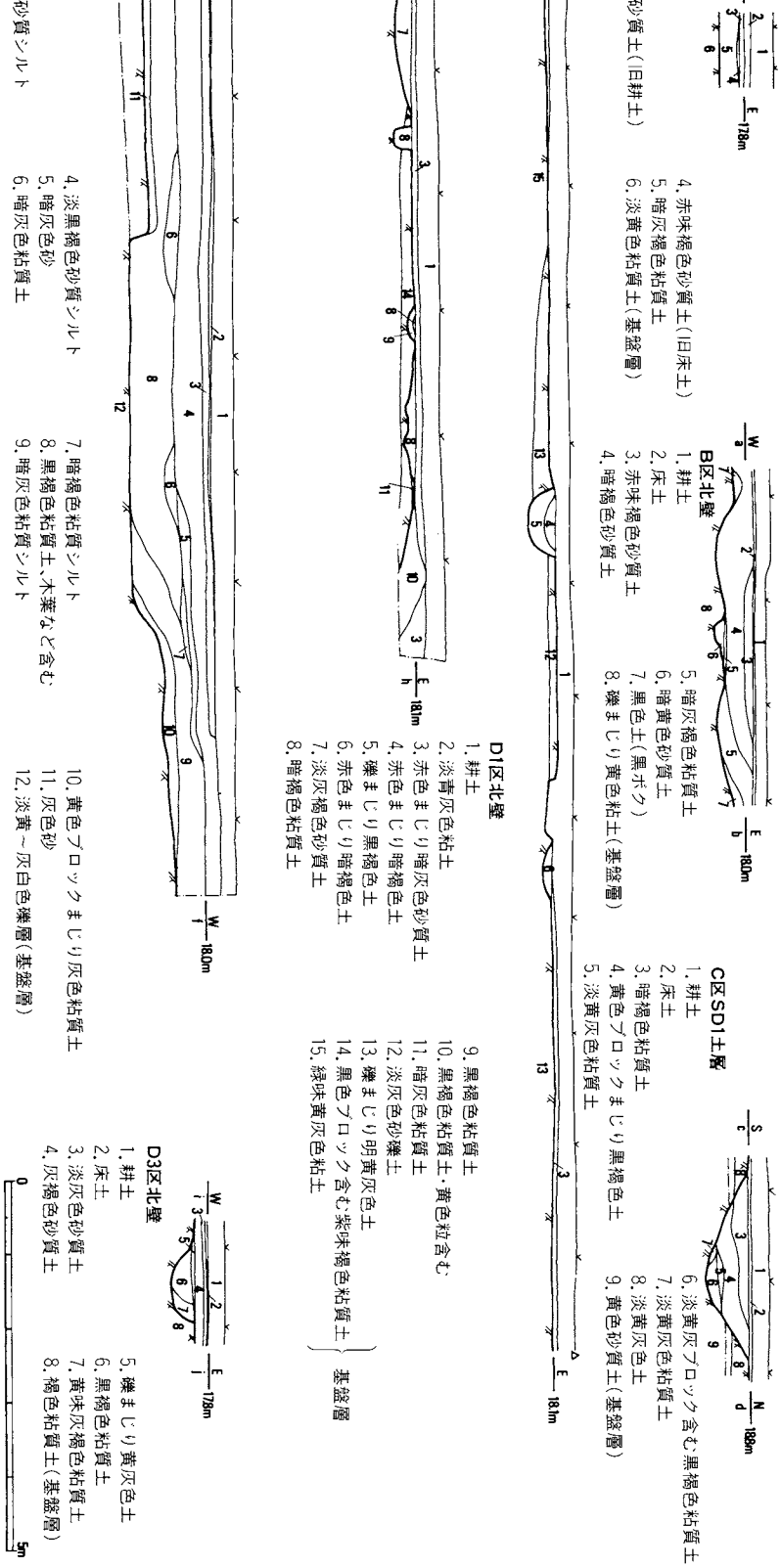
検出した遺構は溝10条とピット１基である。溝はＳＤ１～４が平行に走り、時期はそれぞれ室町時代から江戸時代と考えられる。

ピット１の埋土は黄灰色砂質土である。埋土内から縄文時代の石鏃が出土した。

３．Ｃ地区の遺構

Ｃ地区は標高約18.9mの水田部にあたる。調査面積は約185㎡である。層位の状況はＢ地区と同様である。遺構検出面は淡黄色土（基盤層）である。調査区内ではほとんど黒色土の堆積は認められなかったが、調査前に南側に設定したトレンチでは基盤層が次第に下降し黒色土が厚く堆積している状況が観察された。

検出した遺構は溝３条の他、多数のピットがある。溝ＳＤ１は調査区を東西に走るものである。埋土には奈良時



第６図　Ａ～Ｃ、D_2・D_3区土層図（1:100）

代の土器類を多数含んでいるが、鎌倉時代以降のものであることが判明した。

溝ＳＤ２・３は調査区の北端に位置し、それぞれ「Ｌ」字形に屈曲するものである。埋土からは中世に相当する土器類がそれぞれ出土しており、溝ＳＤ１と時期的に近接したものである。屋敷地を囲う溝であることも想定できるが断定はできない。

ピットは調査区全体で認められた。しかし明確なものではなく、建物としてまとまらない。埋土からは奈良時代の土器類が出土しているが、溝ＳＤ１の時期に基本的に併行するものであろう。

４．Ｄ地区の遺構

排水路に相当する部分をＤ地区としている。現況道路などによって調査区が分断されているため、Ｄ１～Ｄ５地区に分けて行った。

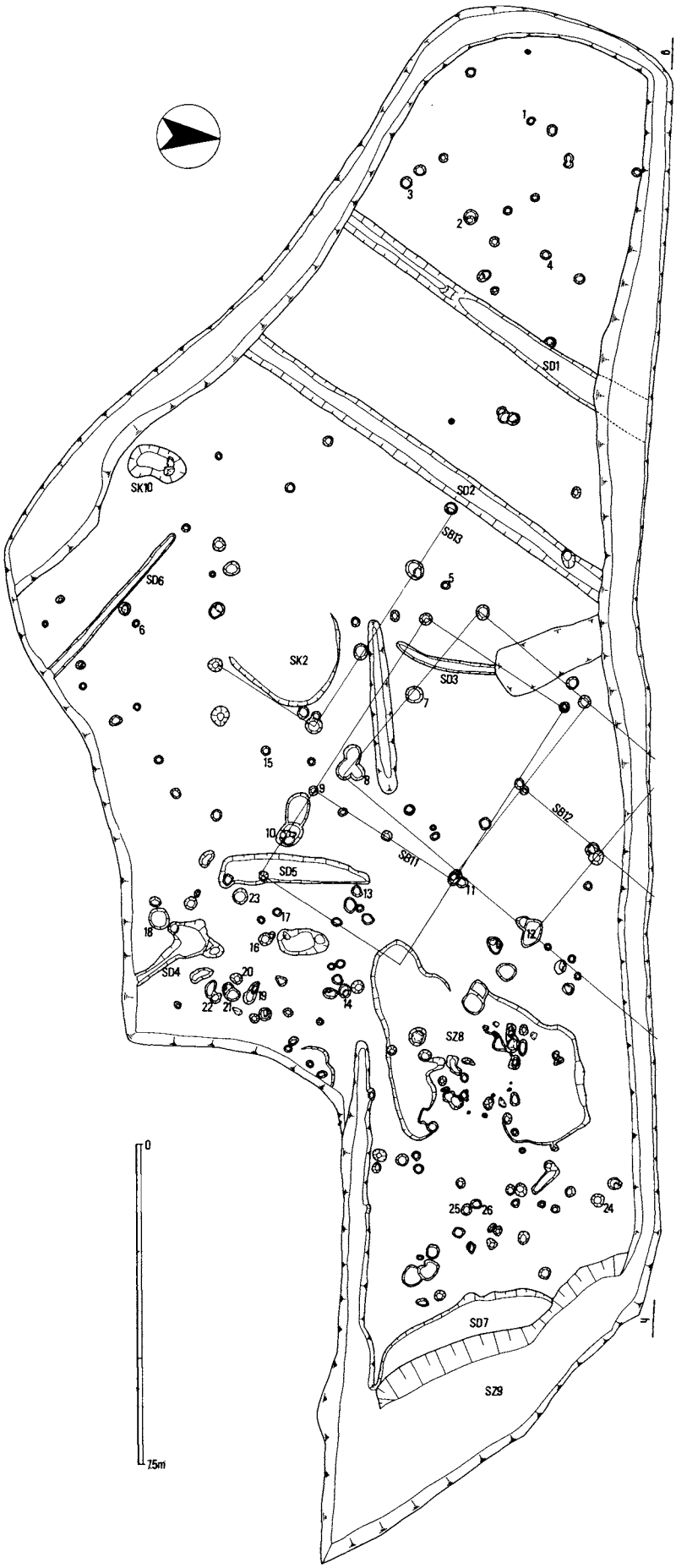
ａ．Ｄ１地区

Ｄ１地区は標高約18.5mの水田部にあたる。調査面積は約330㎡である。層位的には表土・床土直下にて緑味黄灰色粘土～礫混じり黄灰色土（基盤層）に達し、基本的にはその上面にて遺構を検出した。

遺構には掘立柱建物・溝・土坑などがある。掘立柱建物は３棟考えたが、ピットの数から実際はさらに多いであろう。ＳＫ２を伴うＳＢ13が13世紀後半、他が15世紀後半と考えられる。その他のピット出土土器は13世紀～15世紀後半以降にかけてのものである。溝ＳＤ１・２は15世紀後半の遺物を多く含む。この溝は並行していることから、道の機能が考えられるかも知れない。

ｂ．Ｄ２地区

Ｄ２地区は標高約18.4mの水田部にあたる。調査面積は約158㎡である。層位的には表土・床土下に黒褐色系の



第７図　Ｄ₁区平面図（1:150）単独数字はピット番号

粘質土が東側にかけて次第に厚く堆積している。この土層中には部分的に砂層が挟まれており、水流のあったことを示している。基盤層は淡黄～灰白色の砂礫層である。

遺構は流路と溝が認められた。流路は先述のように水流のあったことがわかるが、法面は明確に落ち込んでおり、人為的な掘削溝であることがいえる。

遺物は流路埋土である黒褐色系粘質土中に奈良時代～室町時代の遺物が多量に含まれている。黒褐色系粘質土の最下層から羽釜（第10図51）が出土しており、流路が埋没しはじめた時期が室町時代であることを示している。

c．D３地区

D３地区は標高約18.0mの水田部にあたる。調査面積は約270m²である。層位的には調査区西側には表土・床土の下に淡灰褐色砂質土が堆積しているが、東側にはこの層は認められず、表土・床土直下で基盤層にあたる。基盤層は基本的に黄灰色系粘質土で、中央部分では砂礫を含み、東側では砂礫を含まない粘性の強い淡黄灰色系粘質土となる。基盤層の標高は西側で約17.6m、東側で約17.5mである。

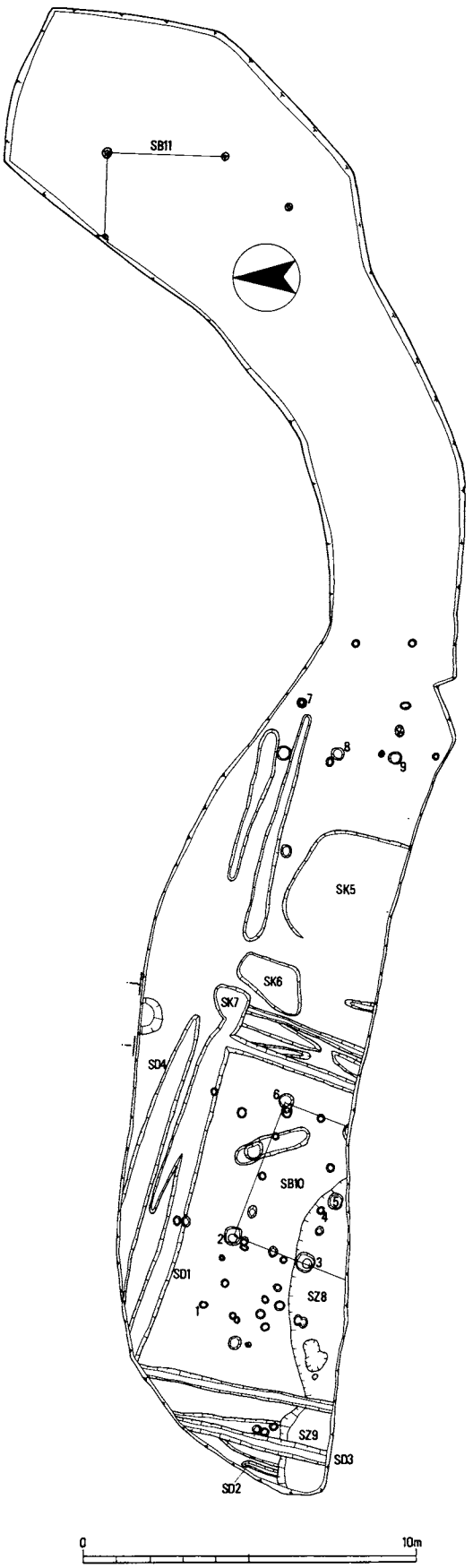
遺構は掘立柱建物・溝・土坑・ピットの他、D２区で検出した流路の肩と思われるもの（SZ9）を検出した。遺構の時期は遺物が少量のため特定し難いが、奈良時代と鎌倉時代および近世以降の遺構が中心と見做される。奈良時代と考えられるものでは土坑および掘立柱建物ＳＢ10がある。鎌倉時代以降と考えられるものにはピットおよび溝ＳＤ１・２がある。ピットは建物としてまとまらないが、１ないし２棟の掘立柱建物は確実に存在するようである。

d．D４区

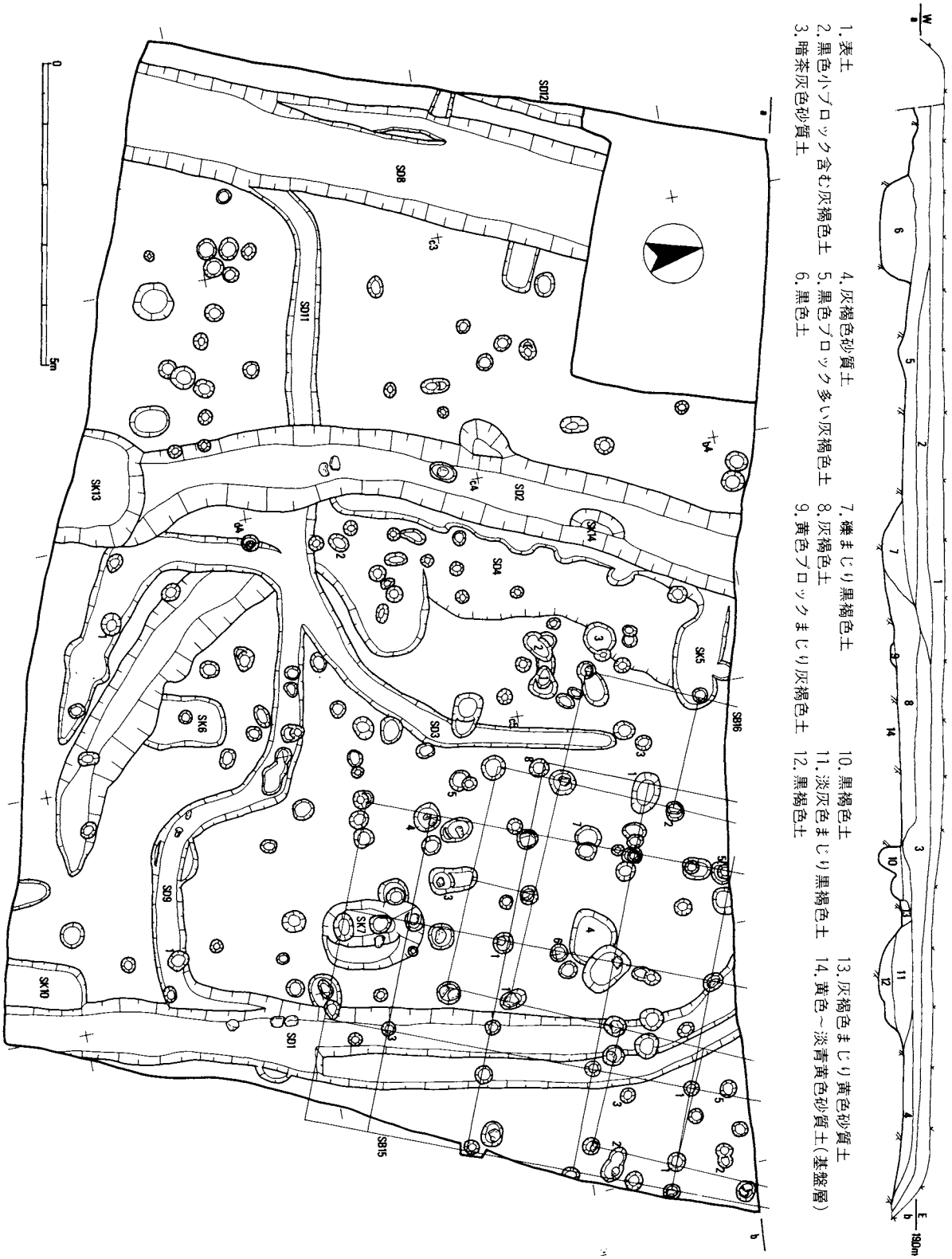
D４区はD１区の西に隣接し、周囲からは１段高くなっている部分である。調査面積は約210m²である。層位的には表土下に部分的に黒色ブロックを含む灰褐色系土が堆積しており、その下の淡緑灰色系砂質土が遺構基盤層に相当する。遺構基盤層の下約１mには明褐色系礫層（段丘礫層）が存在している。

遺構には掘立柱建物２棟以上、大区画溝４条、小区画溝２条、土坑数基、ピット多数などがある。

掘立柱建物は調査区東端部分に集中しており、棟方向はそれぞれ南北棟であるものと考えられる。同



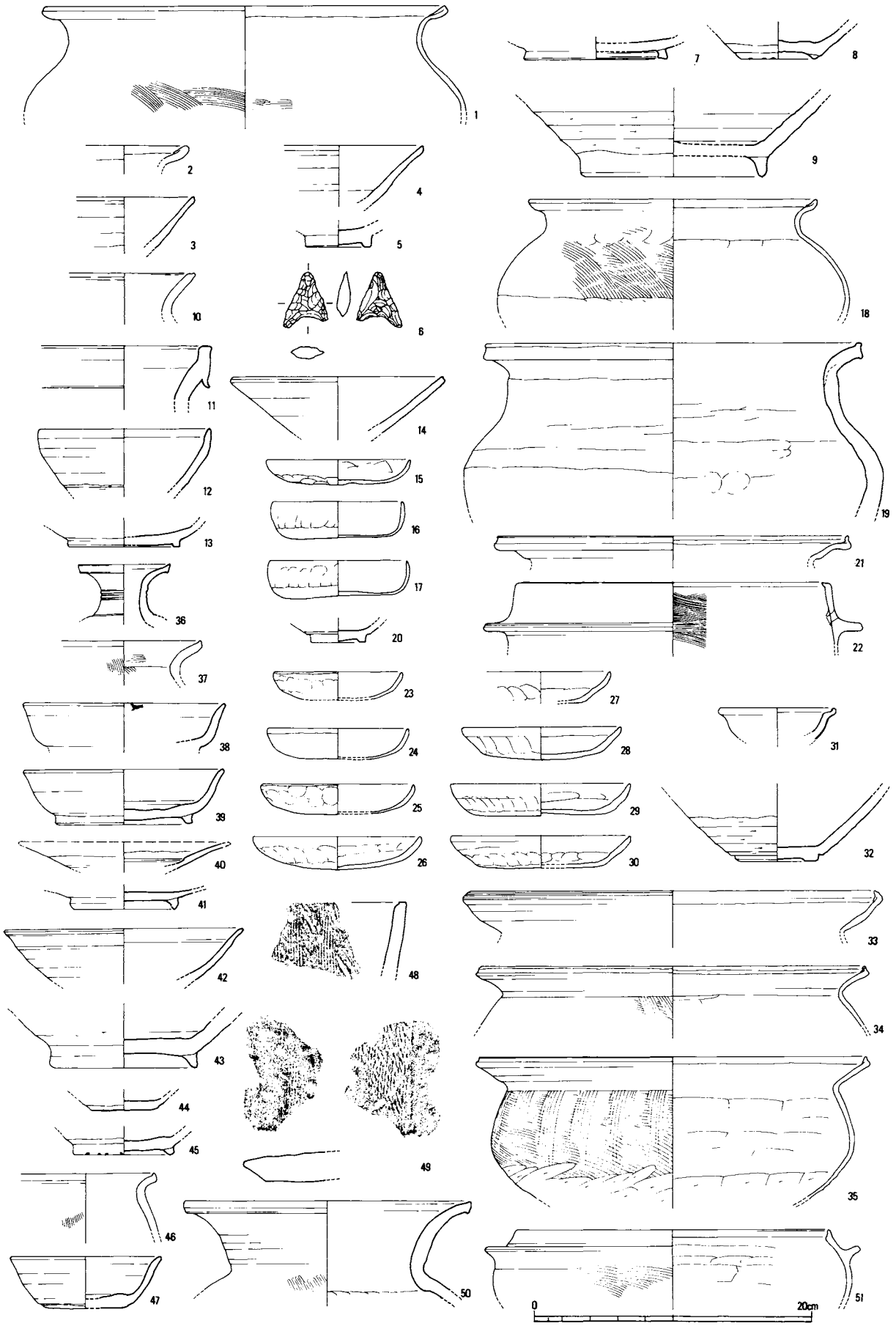
第８図　D₃区平面図（1:200）
※　単独数字はピット番号



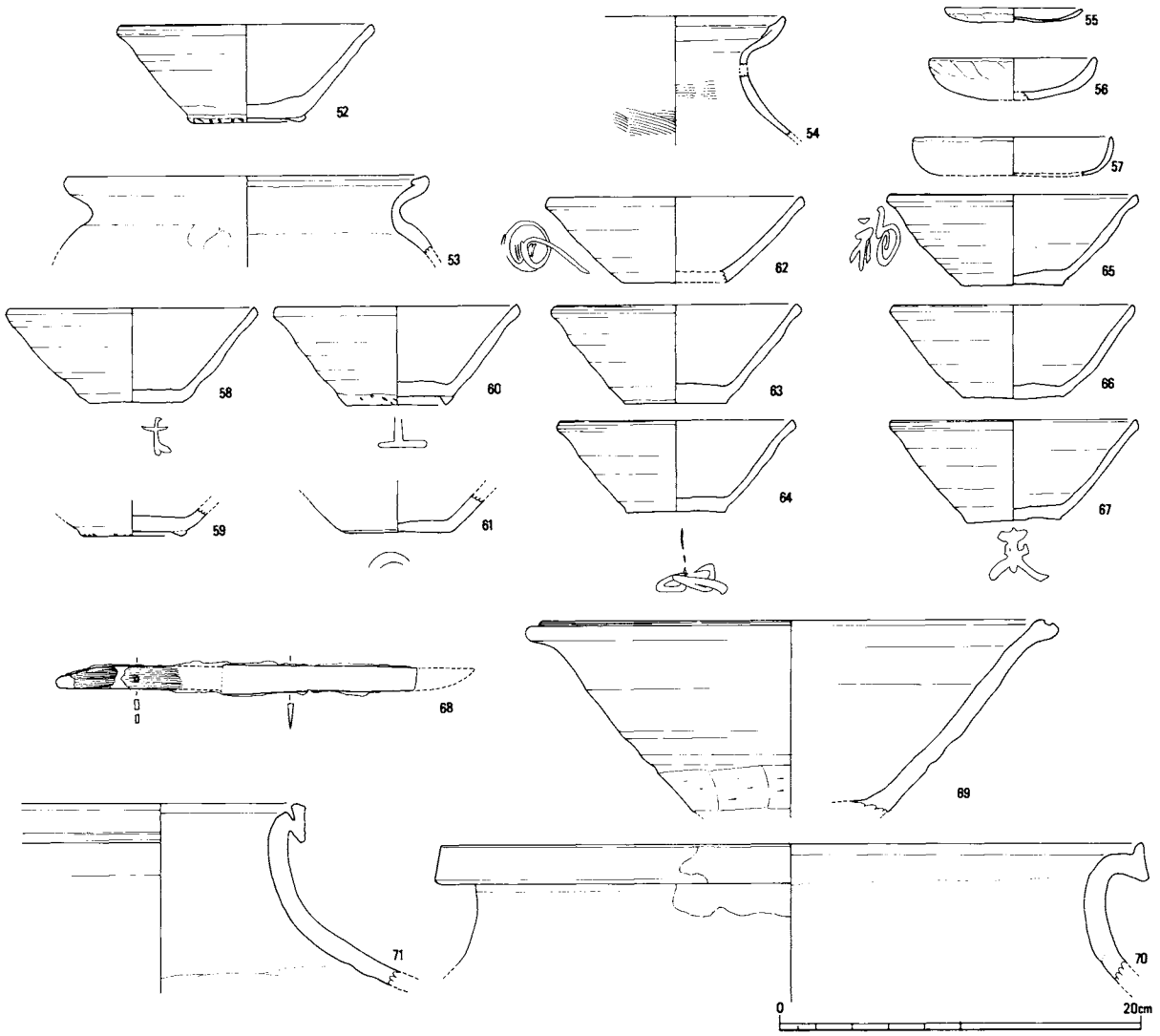
第９図　D$_4$区平面・土層断面図（1:100）　単独数字はピット番号、地区割り線は小地区を示す。

一地点に数回の建て替えがあるようで、一定の場所を占有するように建物が存在していたものと見做せる。ピット内出土土器や溝ＳＤ１との関係からは、これらの掘立柱建物は15世紀中葉あたりに相当するものと考えられる。

大区画溝は、調査区東端の建物群と重なっているもの（ＳＤ１）、建物群の西隣に位置するもの（ＳＤ２・４）、調査区西端に位置するもの（ＳＤ８・



第10図　A～C・D$_{1\sim3}$区出土遺物実測図（1:4）



第11図　D₄区溝ＳＤ１他出土遺物実測図（1:4）

12）がある。出土土器からはＳＤ８は12世紀後葉～13世紀前葉、ＳＤ１は14世紀前葉、ＳＤ２・12は15世紀前葉～中葉と考えられる。

小区画溝には、調査区を東西方向にはしるＳＤ９・11と調査区東半部に認められるＳＤ３とがある。ＳＤ３・９・11はＳＤ２あたりで重なるものであるが、ＳＤ11と同一遺構がどちらなのかは判然としない。これは土地の区画の何らかの意味を示すと考えられようが、正確な意味は不明である。時期は出土土器からＳＤ９は14世紀後葉あたり、ＳＤ３・11は不明である。

ｅ．工事中確認遺構（Ｄ５区）

Ｄ５区は、Ｄ４区の西方約30mにある。試掘調査時点では遺構が確認されなかった地区であるが、排水路工事の最中に遺構が認められたので、急遽調査を行った。

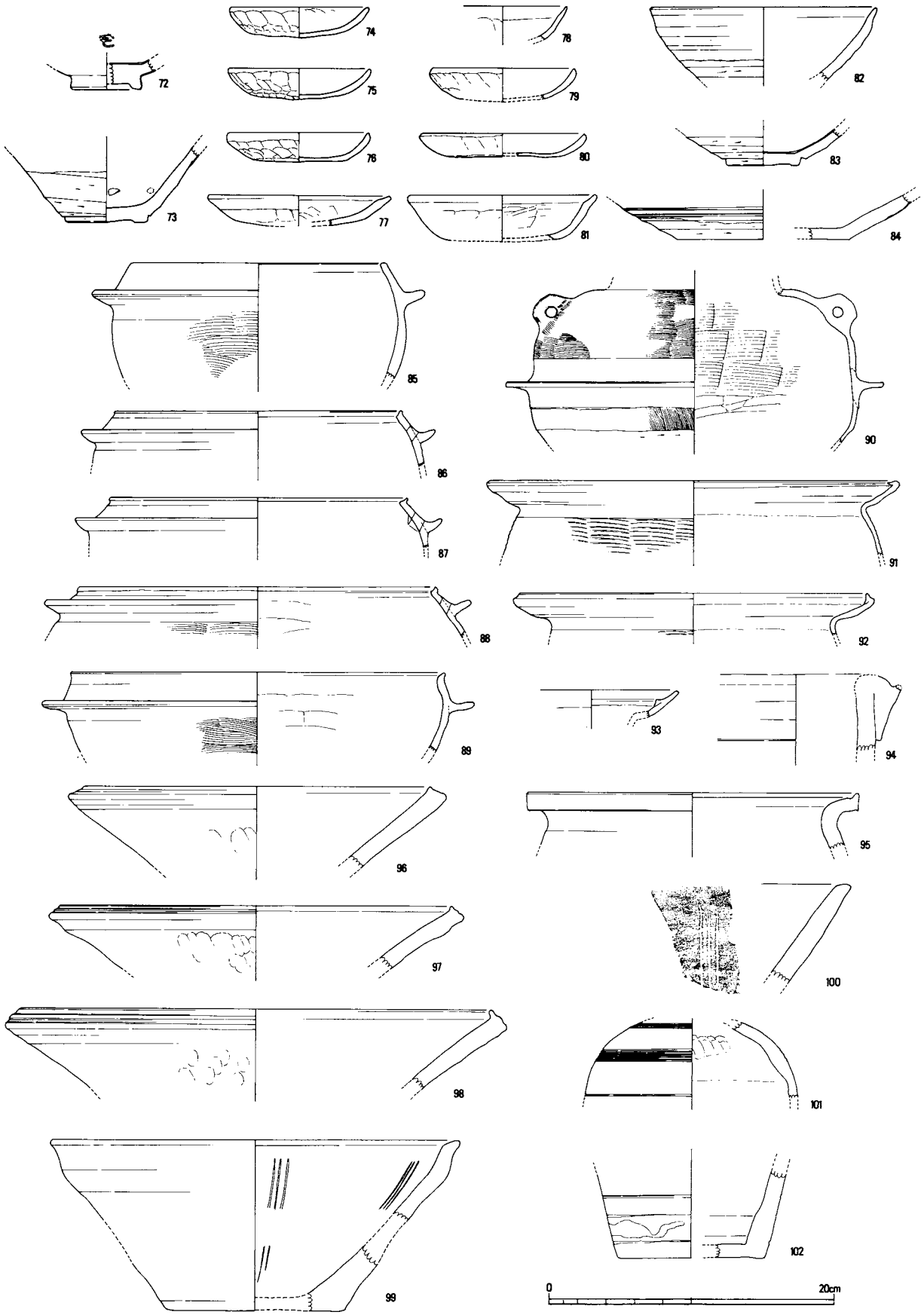
確認した遺構は、溝２条と落ち込み１基のみである。溝２条は平行で、南北方向に延びるものである。調査区の幅が２mほどであったため、厳密な方向は不明と言わざるを得ない。遺物は全く出土しなかったが、埋土の状況からは中世のものと考えられる。

５．出土した遺物

南所遺跡からの出土遺物には、縄文時代・奈良～平安時代・鎌倉～室町時代のものがある。土器の出土地点および詳細は土器観察表を参照されたい。

縄文時代の遺物には、石鏃（第10図６）および石器剝片がある。

奈良～平安時代の遺物には、須恵器・土師器・瓦・灰釉陶器がある。大部分がＤ２区の流路から出土したものであるが、Ｃ区およびＤ３・Ｄ５区からの出土も認められる。須恵器には第10図48のように直線的に開く甕も認められる。瓦（第10図49）は奈良



第12図　D$_4$区溝ＳＤ２他出土土器実測図（1:4）

時代のものと考えられるが、これまでこの付近に寺跡や窯跡の存在は知られず、興味深いものである。

鎌倉～室町時代の遺物には、土師器・陶器がある。

土師器類では、鎌倉時代のものには鍋および皿類が、室町時代のものには鍋・羽釜・茶釜類および皿類が認められる。鍋類は全て南伊勢系[2]のものであるが、室町時代の羽釜は中勢ないしは北勢において生産されているものであろう。皿類には南伊勢系のものとそうでないものとが存在している。

陶器類には常滑・瀬戸美濃・信楽など各地の製品がある。D4区SD1出土の陶器椀（以下、山茶椀と呼称）の大部分は瀬戸産かと思われる。なお、D4区SD2出土土器の構成比率を第3表に掲げる。

これらの遺物の他に、近世かと思われる瓦質土器羽釜と瓦とがある。羽釜はA地区付近で表採したもので、ほとんど焙烙に近い形態を呈するものである。

種類	器種名	図示点数	図示外点数	比率（%）		
土師器	南伊勢系鍋	3	7	17.5	40.3	66.7
	中北勢羽釜	5	8	22.8		
	〃 茶釜	1		1.8		
	〃 皿	5	10	24.6		
陶器	瀬戸椀	2	2	7.0	33.4	33.3
	〃 盤	1		1.8		
	〃 壺	1		1.8	10.5	
	常滑甕	2	3	8.7		
	〃ねり鉢	3	2	8.7	14.0	
	信楽擂鉢	2	1	5.3		

第3表　D4区SD2出土土器の構成比率

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特長	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
1	土師器　鍋	A	SD3	(口)29.6	外:オサエ・ナデのちハケメ・ヨコナデ 内:ハケメ・ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着。	7－3
2	土師器　鍋	A	SD4	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石(多)	軟	淡茶灰	口縁5未満		7－5
3	陶器　椀	A	SD4	—	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5～5.0mmの小石	堅緻	白灰	口縁5未満	山茶椀　瀬戸？	7－4
4	陶器　椀	A	SD5	—	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁5未満	山茶碗　瀬戸？	7－7
5	陶器　茶碗	A	SD1	(高台)4.8	外:ケズリ出し高台 内:釉	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	白灰	高台100	外面に煤が付着している。広義の「円形加工品」か？天目茶椀	7－6
6	石鏃	B	pit 1						ほぼ完形	チャート製	8－8
7	須恵器　坏身	C	pit 1	(高台)10.5	外:回転ナデのち回転ケズリのちはりつけ高台 内:回転ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	青味灰	高台25		8－3
8	陶器　椀	C	SD1	(高台)5.6	外:ロクロナデのち糸きりのちはりつけ高台 内:ロクロナデ	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に籾殻痕	8－1
9	陶器　ねり鉢	C	SD1	(高台)13.6	外:回転ナデのち回転ケズリのちはりつけ高台 内:回転ナデ	密0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台上部20		8－2
10	土師器　甕	C区東	暗褐色土	(口)—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁5		8－5
11	陶器　甕	C区東	暗褐色土	(口)—	外:回転ナデ 内:回転ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	暗赤灰	口縁5	信楽産　胎土には黒色粒が多い。	8－4
12	陶器　茶碗	C区東	暗褐色土	(口)12.6	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	灰～茶灰	口縁20	天目茶椀 釉は黒褐～褐	8－7
13	灰釉陶器　椀	C区東	暗褐色土	(高台)8.2	外:回転ナデのち回転ケズリのちはりつけ高台 内:回転ナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台25		8－6
14	陶器　椀	D1	SD7	(口)15.6	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁15	山茶椀	4－5
15	土師器　皿	D1	pit 7 (SB12)	(口)10.6 (高)1.9	外:オサエのちナデ 内:ナデ・板ナデ	密0.5～1.0mmの小石、赤色粒	良好	淡茶灰	口縁50		4－4
16	土師器　皿	D1	SZ8	(口)9.5 (高)2.5	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	60	南伊勢系 SZ8は調査時SX1と呼称	3－2
17	土師器　皿	D1	SZ8	(口)10.0 (高)2.5	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	90	南伊勢系 SZ8は調査時SX1と呼称	3－1
18	土師器　鍋	D1	SK11	(口)21.0	外:オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁10 頸～体部30	南伊勢系 外面に煤付着。SK11は調査時SKと呼称	3－3
19	陶器　甕	D1	SK11	(口)27.6	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	紫灰	頸部20	常滑産　SK11は調査時SK2と呼称	3－1
20	陶器　茶椀	D1	SD2	(高台)4.0	外:ケズリ・ケズリ出し高台 内:釉	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	高台100	天目茶碗 高台の釉は紫茶・体部の釉は黒～茶	4－3
21	土師器　鍋	D1	SD2	(口)26.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁15	南伊勢系	4－2
22	土師器　羽釜	D1	SD2	(口)23.2	外:ナデ・ヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	鍔部20	頸部の孔は焼成前穿孔	4－1
23	土師器　皿	D1	SD1	(口)9.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁25		1－8
24	土師器　皿	D1	SD1	(口)10.4 (高)2.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁40	南伊勢系に似るが、形態的にやや異なる。	1－6

第4表　南所遺跡出土遺物観察表(1)

No.	器　種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特長	胎　土	焼成	色調	残存度(%)	備　考	実測No.
25	土師器　皿	D1	SD1	(口)11.3 (高)2.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁30	南伊勢系に似にるが、外面のオサエが異なる	1—7
26	土師器　皿	D1	SD1	(口)12.2 (高)2.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5～3.0mmの小石	良好	淡褐	口縁50	内面に強いナデがある	1—5
27	土師器　皿	D1	SD1	(口)—	外:オサエ・ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁5	内面に強いナデがある	2—4
28	土師器　皿	D1	SD1	(口)11.7 (高)2.4	外:オサエ・ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	90	内面に強いナデがある	1—4
29	土師器　皿	D1	SD1	(口)13.1 (高)2.2	外:オサエ・ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	100	内面に強いナデがある	1—2
30	土師器　皿	D1	SD1	(口)13.1 (高)2.3	外:オサエ・ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁60	内面に強いナデがある	1—3
31	陶器　小椀?	D1	SD1	(口)8.6	外:釉 内:釉	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁頸部15	釉は淡緑色 瀬戸産?	2—5
32	陶器　椀	D1	SD1	(高台)6.0	外:ケズリ・ケズリ出し高台のち釉 内:釉	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	瀬戸産平椀　内面にトチン跡あり	2—3
33	土師器　鍋	D1	SD1	(口)30.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁15	南伊勢系 外面に煤付着	2—1
34	土師器　鍋	D1	SD1	(口)28.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁15	南伊勢系 外面に煤付着	2—2
35	土師器　鍋	D1	SD1	(口)28.8	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ・ケズ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁30	南伊勢系 外面に煤付着	1—1
36	須恵器　壺	D2	黒褐色土	(口)6.7	外:回転ナデ・凹線 内:回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰～茶灰	口縁60		6—6
37	土師器　甕	D2	黒褐色土	(口)—	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	赤灰～淡茶灰	口縁5		6—3
38	須恵器　坏身	D2	黒褐色土	(口)14.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	茶灰～灰	口縁25		5—5
39	須恵器　坏身	D2	黒褐色土	(口)14.6 (高)4.0 (高台)10.0	外:回転ナデのち回転ケズリ・貼り付け高台 内:回転ナデ	密0.5殻3.0mmの小石	堅緻	灰	高台100 口縁10		5—4
40	灰釉陶器　皿	D2	黒褐色土	(段部内径)8.7	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁下部15	釉は淡緑色	6—5
41	灰釉陶器　皿	D2	黒褐色土	(高台)7.9	外:ロクロナデのち回転ケズリ 内:ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50		6—4
42	陶器　椀	D2	黒褐色土	(口)17.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁15	山茶椀	5—6
43	陶器　ねり鉢	D2	黒褐色土	(高台)10.8	外:回転ナデのち回転ケズリのち貼り付け高台 内:回転ナデ	密0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100		5—2
44	陶器　小皿	D2	黒褐色土	(底)5.0	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山皿	7—1
45	陶器　椀	D2	黒褐色土	(高台)7.4	外:ロクロナデのち糸切りのち貼り付け高台 内:ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	灰	高台100	山茶椀 高台に籾殻痕	5—3
46	土師器　甕	D3	SK7	(口)—	外:剝離(ハケメ) 内:剝離	密0.5～1.0mmの小石、赤色粒	軟	淡赤灰	口縁5	SK7は調査時にはSK3と呼称	9—2
47	須恵器　坏身	D3	SX9	(口)11.0 (高)3.7	外:回転ナデのちヘラ切り 内:回転ナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	SX2は調査時にはSX2と呼称	9—1
48	須恵器　甕?	D2	黒褐色土	(口)—	外:タタキメのちハケメ 内:ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	茶灰	口縁5		6—8
49	平瓦	D2	黒褐色土	厚さ2.1	上:布目 下:縄タタキメ	密0.5～5.0mmの小石	軟	淡茶灰	小片		6—9
50	須恵器　壺	D2	黒褐色土	(口)21.0	外:タタキのち回転ナデ 内:タタキのち回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石(多)	堅緻	茶灰～灰	口縁60		7—2
51	土師器　羽釜	D2	流路最下層	(口)22.9	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5～3.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	鍔部以下に煤付着。	5—1
52	陶器　椀	D4 -b2	SD8上	(口)14.4 (高)5.4 (高台)6.3	外:ロクロナデのち糸切りのち貼り付け高台 内:ロクロナデ	粗0.5～8.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台一部欠損のみ	山茶椀 高台に籾殻痕 体部下半は煤付着	21—2
53	土師器　甕	D4 -b2	SD8	(口)20.4	外:ナデのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄灰～茶灰	口縁15	南伊勢系	21—1
54	土師器　鍋	D4 -d6	SD1	(口)—	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰～茶灰	口縁5	南伊勢系	19—4
55	土師器　小皿	D4 -e5	SD1	(口)7.7 (高)0.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	70	中・北伊勢にはあまりない小皿である	19—2
56	土師器　皿	D4 -b6	SD1	(口)9.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5～1.0mmの小石、赤色粒	良好	淡茶灰	口縁30		19—3
57	土師器　皿	D4 -d6	SD1	(口)11.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25	南伊勢系	19—5
58	陶器　椀	D4 -e5	SD1	(口)14.2 (高)5.2 (底)5.2	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	90	山茶椀(瀬戸産) 底部に墨書あり	17—2
59	陶器　椀	D4 -e5	SD1	(高台)5.9	外:ロクロナデのち糸切りのち貼り付け高台 内:ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	灰	高台100	山茶椀 高台に籾殻痕	19—1
60	陶器　椀	D4 -e5	SD1	(口)13.8 (高)5.5 (高台)5.6	外:ロクロナデのち糸切りのち貼り付け高台 内:ロクロナデ	密0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀 高台に籾殻痕 底部に墨書あり	18—4
61	陶器　椀	D4 -d6	SD1	(底)6.0	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	乳灰	底30	山茶椀(瀬戸産) 底部に墨書あり	18—5
62	陶器　椀	D4 -d6	SD1	(口)14.5 (高)4.7 (底)5.9	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶椀(瀬戸産) 体部に墨書　○|か?	18—3
63	陶器　椀	D4 -e5	SD1	(口)14.0 (高)5.5 (底)5.8	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶椀(瀬戸産)	18—2

第5表　南所遺跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特長	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
64	陶器 椀	D4-e5	SD1	(口)13.4 (高)5.1 (底)5.6	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁30	山茶椀(瀬戸産) 底部の墨書は略押か?	18—1
65	陶器 椀	D4-e5	SD1	(口)14.1 (高)5.0 (底)5.6	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁40	山茶椀(瀬戸産) 体部に墨書「福」	17—4
66	陶器 椀	D4-e5 ・c6	SD1	(口)13.7 (高)5.2 (底)5.2	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	60	山茶椀(瀬戸産)	17—3
67	陶器 椀	D4-e5	SD1	(口)13.9 (高)5.6 (底)5.2	外:ロクロナデのち糸切りのち下敷き痕 内:ロクロナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	100	山茶椀(瀬戸産) 底部に墨書「来」か「末」か?	17—1
68	鉄器 小刀	D4-e5	SD1	残存長20.2	茎尻は鎬方を斜めに落とす。				切先を欠損する	茎部には木質のこる。目釘穴は1箇所確認	21—5
69	陶器 ねり鉢	D4-e5	SD1	(口)29.8	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	灰	口縁30	瀬戸産か?	20—1
70	陶器 甕	D4-e5	SD1	(口)40.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	灰	口縁25	常滑産 釉は緑黄・暗茶	20—2
71	陶器 甕	D4-d5	SD9	(口)—	外:回転ナデ 内:オサエのち回転ナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁10	常滑産 釉は茶色	21—4
72	磁器 椀	D4-d5	包含層	(高台)3.1	外:ロクロケズリ 内:陰刻	密	堅緻	淡灰~茶灰	高台20	青磁	16—6
73	陶器 椀	D4-b7	灰褐土	(高台)5.8	外:ロクロナデのちロクロケズリ 内:釉	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰~淡茶灰	高台100	瀬戸産平椀 内面にトチン跡あり	21—3
74	土師器 皿	D4-b4	SK14	(口)9.8 (高)2.1	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡橙灰	100		同一手法 16—2
75	土師器 皿	D4-b4	SK14	(口)10.1 (高)2.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡橙灰	100		16—3
76	土師器 皿	D4-b4	SK14	(口)10.2 (高)2.1	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~3.0mmの小石	良好	淡橙灰	100		16—4
77	土師器 皿	D4-b4	SD2	(口)13.0	外:オサエ・ナデのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20		16—5
78	土師器 皿	D4-b4	SD2	(口)—	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10		10—4
79	土師器 皿	D4-b4	SD2	(口)10.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁75	南伊勢系に似るが、別物である。	16—1
80	土師器 皿	D4-b4	SD2	(口)11.8 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	小片のため、口径には問題がある	10—3
81	土師器 皿	D4-b4	SD2	(口)13.4	外:オサエ・ナデのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20		11—6
82	陶器 椀	D4-b4	SD2	(口)16.0	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:釉	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	白茶色	口縁10	瀬戸産平椀 釉は淡黄灰	11—5
83	陶器 椀	D4-b4	SD2	(高台)5.2	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:釉	密0.5~5.0mmの小石	堅緻	白灰	高台100	瀬戸産平椀 釉は淡黄緑	11—4
84	陶器 盤	D4-b4	SD2	(底)12.2	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内: 釉	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	底25	瀬戸産 釉は淡緑・淡茶	13—2
85	土師器 羽釜	D4-b4	SD2	(口)18.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石、赤色粒	良好	淡茶灰	口縁5 鍔部15	鍔部以下に煤付着。	10—1
86	土師器 羽釜	D4-b4	SD2	(口)20.5	外:指オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~4.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	鍔部以下に煤付着。頸部の孔は焼成前穿孔	11—1
87	土師器 羽釜	D4-b4	SD2	(口)21.1	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁15	外面に煤付着(鍔部を越えてある)。頸部の孔は焼成前。	11—3
88	土師器 羽釜	D4-b4	SD2	(口)27.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石	良好	淡黄茶	口縁15	鍔部以下に煤付着。頸部の孔は焼成前。	11—2
89	土師器 羽釜	D4-b4	SD2	(口)26.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁20	鍔部以下に煤付着。	10—2
90	土師器 茶釜	D4-b4	SD2	(鍔部)26.8	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石	良好	淡黄灰	鍔部20	鍔部以下に煤付着。体部の耳穴は棒状工具によって開けられる。	13—1
91	土師器 鍋	D4-d3	SD2	(口)29.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁15	南伊勢系 外面に煤付着。	12—1
92	土師器 鍋	D4-d3	SD2	(口)25.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁15	南伊勢系 外面に煤付着。	12—2
93	土師器 鍋	D4-d4	SD2	(口)—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁10	南伊勢系 外面に煤付着。	12—3
94	陶器 甕	D4-b4	SD2	(口)—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	赤褐	口縁10	常滑産	13—3
95	陶器 甕	D4-b4	SD2	(口)23.6	外:回転ナデ 内:ナデのち回転ナデ	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	茶灰~暗赤色	口縁20	常滑産?	12—4
96	陶器 ねり鉢	D4-b4	SD2	(口)26.8	外:オサエのち回転ナデ 内:ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡橙褐	口縁15	常滑産	14—1
97	陶器 ねり鉢	D4-b4	SD2	(口)29.4	外:オサエのち回転ナデ 内:ナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	灰~茶灰	口縁20	常滑産	14—3
98	陶器 ねり鉢	D4-b3	SD2	(口)35.5	外:オサエのち回転ナデ 内:ナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡褐~橙褐	口縁20	常滑産	14—2
99	陶器 擂鉢	D4-b4	SD2	(口)29.0 (底)12.8	外:ナデのち回転ナデ 内:回転ナデのちすり目	密0.5~5.0mmの小石	良好軟質	淡黄灰	口縁30 底10	信楽産	15—1
100	陶器 擂鉢	D4-b4	SD2	(口)—	外:回転ナデ 内:回転ナデのすり目	密0.5~4.0mmの小石	良好軟質	淡黄灰	口縁10	信楽産?	15—2
101	陶器 壺	D4-b4	SD2	—	外:回転ナデ・櫛目のち釉 内:オサエ・ナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡茶白	体部上半20	瀬戸産 釉は淡緑	15—4
102	陶器 壺	D4-b4	SD2	(底)10.4	外:回転ナデのち釉 内:回転ナデ	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡白茶	底30	瀬戸産 釉は淡緑	15—3

第6表　南所遺跡出土遺物観察表(3)

3．大里西沖遺跡の調査

大里西沖遺跡は、大里睦合町字西沖に所在する。遺跡の立地は南に志登茂川を臨む形成途上の段丘面で、南に向かってゆるやかな傾斜が認められる。現在はＪＲ紀勢線の存在によって明確ではないが、この地形はＪＲ線の南側にも若干続くものである。

調査は、平成３年９月17日～同年11月12日にかけて行った。調査面積は約2,200㎡である。

１．基本層序

調査区の層位には、表土・黒色土・黄褐色系粘質土・および黄灰色礫層が認められる。黒色土は調査区中央から東方のやや高いところで認められるものの、調査区西方では認められなかった。遺構検出面は黄褐色系粘質土上で行ったが、大部分のピットおよび溝は基本的には黒色土上からの掘削と考えられる。黒色土はいわゆる黒ボクであるが、ブロック土が各所で混入しており、純粋な層ではない。

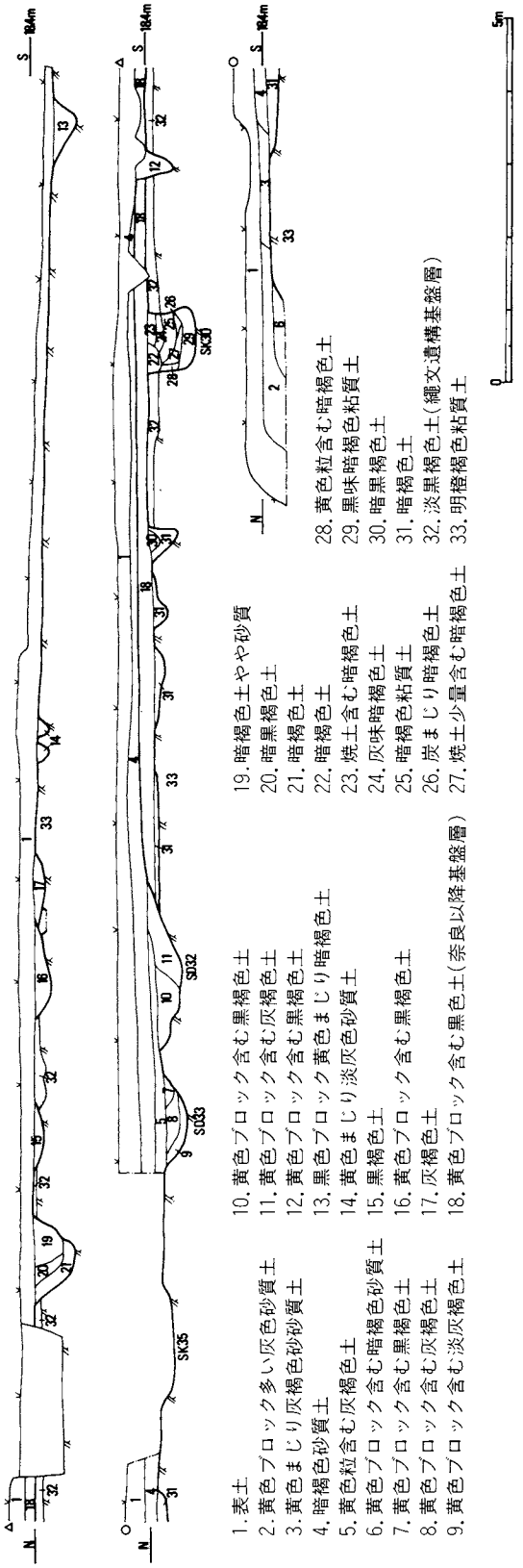
２．検出した遺構

ａ．縄文時代の遺構

縄文時代の遺構には、竪穴住居１棟・土坑４基および落ち込み状のものがある。縄文時代の遺構埋土は淡褐色系粘質土であり、縄文時代以降のものとは全く異なっているため、比較的特定がし易い。

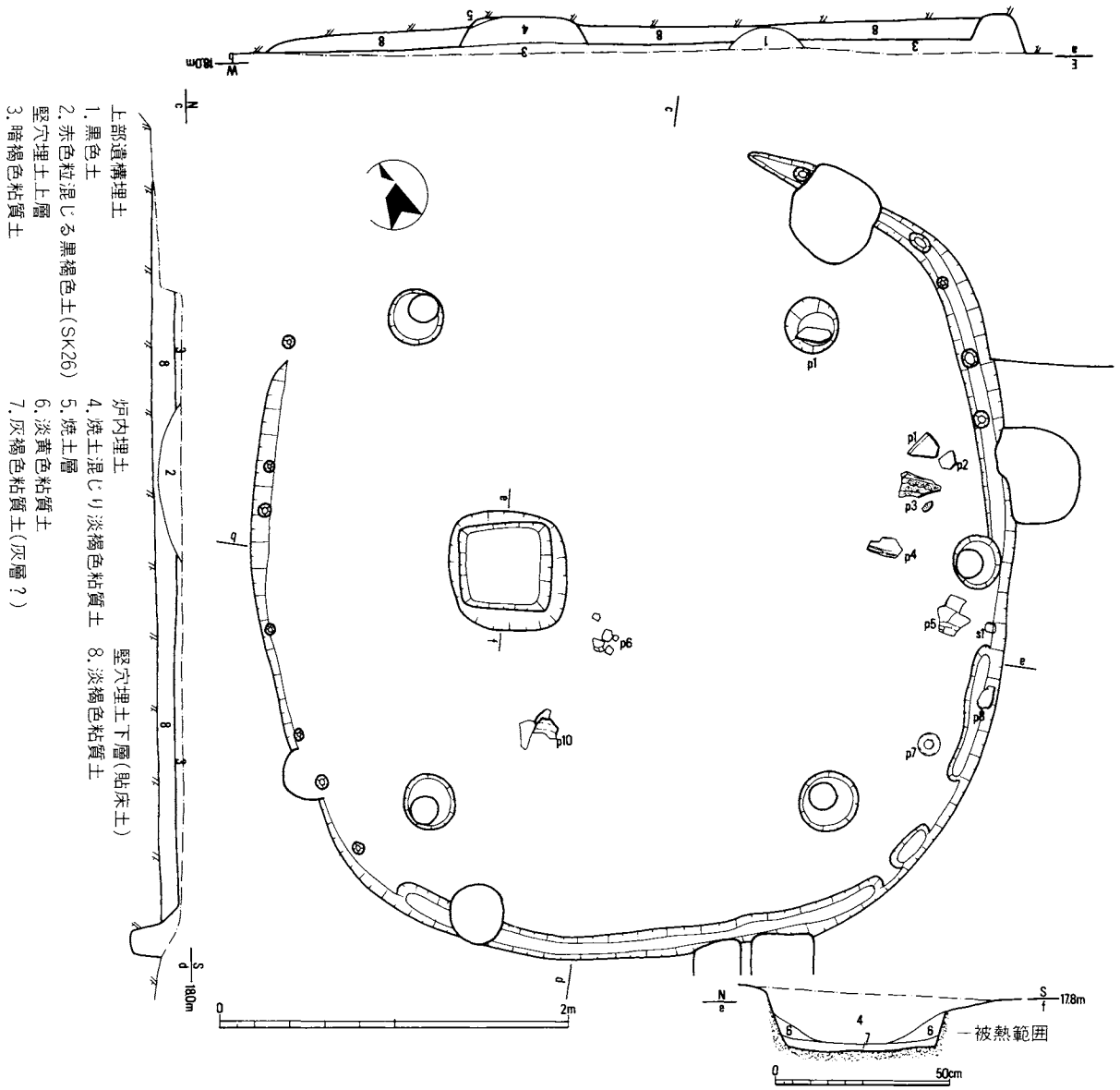
竪穴住居ＳＨ15　調査区南端で円形の遺構を確認したため、拡張を行って調査したものである。遺構の北端は溝ＳＤ14によって破壊されている。平面規模は南北4.8m東西4.4mで、やや長い円形を呈する。壁面の内側には、部分的に壁周溝および壁柱穴が認められる。主柱穴は５個認められるが、それは中心となるものと考えられる４個と、東壁際に認められる１個とに分けられる。前者を結ぶと南北に長い長方形を呈する。後者はその東側長辺から0.8m離れるが、位置としては長辺の中央あたりに相当することがわかる。西側長辺の中央からやや東のところに炉が位置する。この炉は方形を呈するいわゆる地床炉であるが、内側は被熱によって固く締まっている。炉の埋土下層からは、灰が出土している。

遺物は、大きくは埋土上層出土のものと埋土下層出土のもの、および柱穴出土のものとに分けられる。埋土上層からは、深鉢を中心におよそ10個体分が出

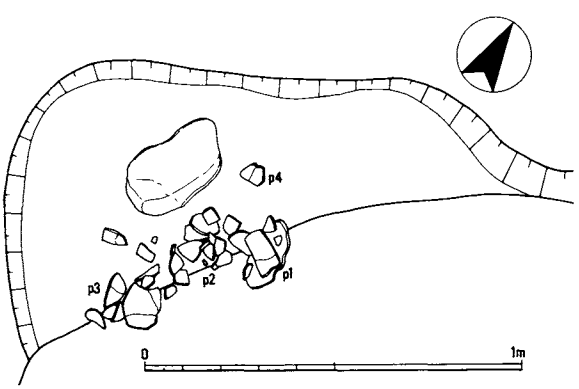


第13図　調査区東壁土層図（1:100）

第14図　大里西沖遺跡調査区平面図（1:300）



第15図　竪穴住居ＳＨ15平面・土層断面図（1:40、炉断面のみ1:20）



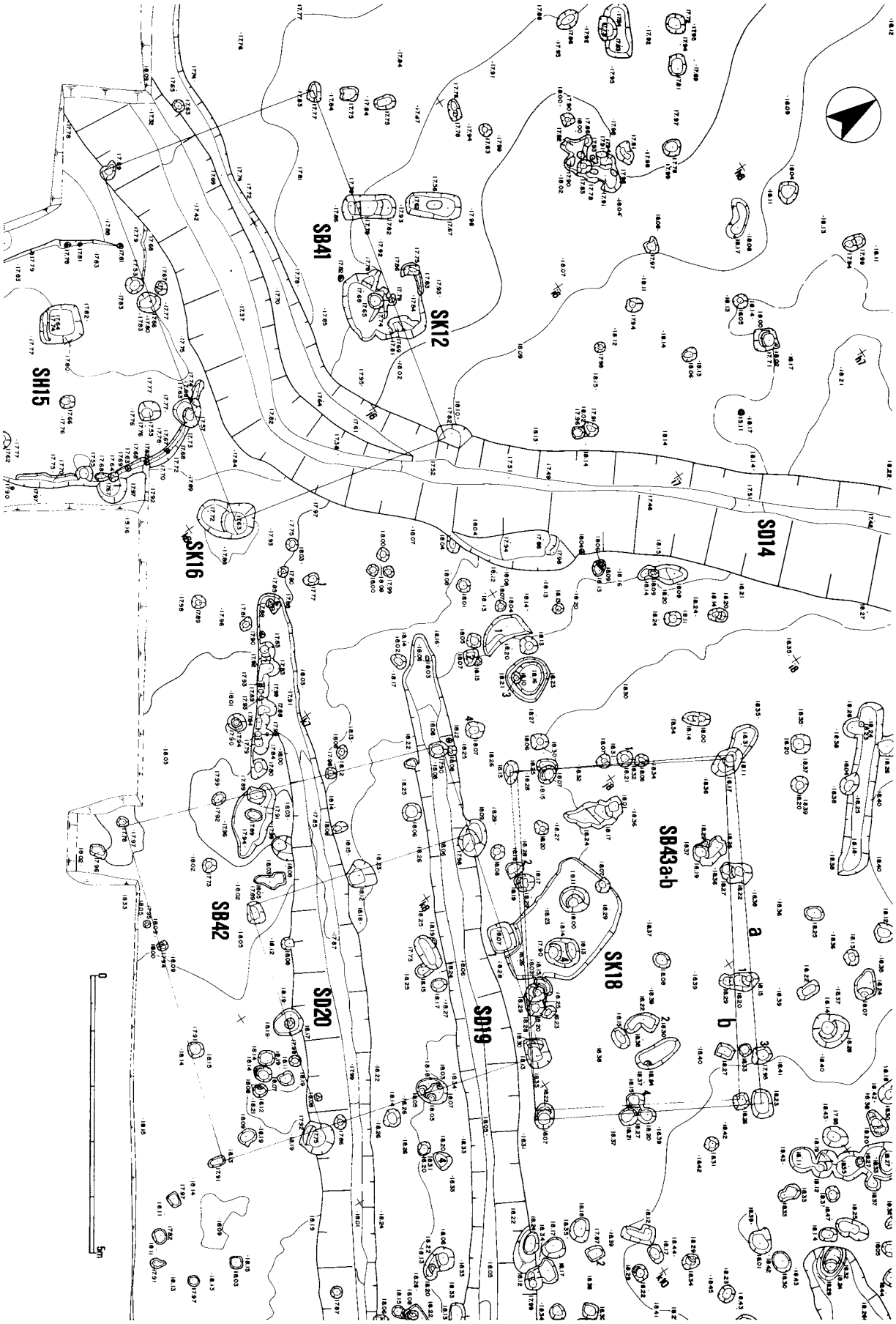
第16図　土坑ＳＫ35遺物出土状況（1:20）

土した。これらの出土レベルはほぼ一定で、東壁側に集中する傾向が認められた。埋土下層からは、小形の鉢が、周溝埋土からは磨製石斧が出土した。小形の鉢は南東隅寄りから出土し、遺構掘削面に接した状態で口縁部を下にして出土した。磨製石斧は東側壁周溝から若干浮いた状態で出土している。

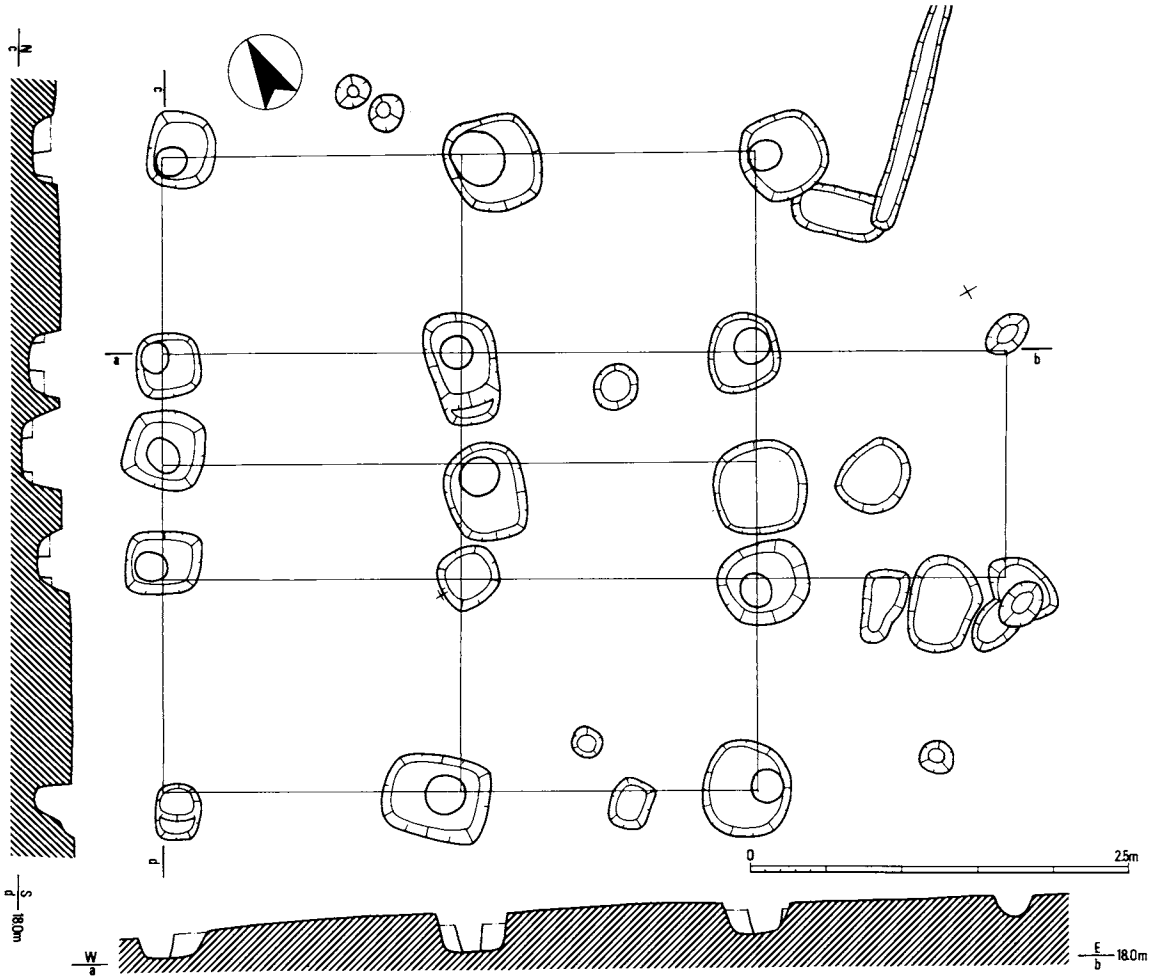
遺構の埋土および遺物出土状況からは、埋土下層は住居内の貼床に相当し、埋土上層は生活面上の堆積土に相当するのもと考えられる。壁周溝の埋土も埋土上層と同一である。しかし、炉は埋土下層の下に強く被熱しており、埋土下層の被熱は微々たるものであった。そのため、埋土下層の下が生活面の可能性もある。

その他の遺構　縄文時代の土坑は、明確なものでは4基を確認した。ＳＫ30・31には少量の焼土が伴っていた。ＳＫ26は楕円形を呈する。

ＳＫ35（第16図）は不定形な土坑である。竪穴住居の可能性もあろうが、土坑の東側が後世の風倒木



第17図　掘立柱建物ＳＢ41～43付近平面図（1:100）



第18図　掘立柱建物ＳＢ44　平面・断面図（1:50）

によって破壊されており、明確なことはいえない。ＳＫ35からは２固体分の土器が出土している。

なお、土坑ＳＫ35の西側一帯には、縄文時代の埋土と特定できる落ち込み状の遺構が多数認められる。しかし、遺物は全く出土せず、遺構の性格については不明と言わざるを得ない。

ｂ．奈良～平安時代の遺構

当該時期の遺構としては、掘立柱建物５棟、焼土坑２基、その他ピットを確認した。

掘立柱建物にはＳＢ41・42・43・44・45がある。ＳＢ43は同一地点での建て直しが認められる（第17図）。総柱建物はＳＢ44（第18図）のみで、これは、「総通し柱構造」に相当するのもと考えられる。ＳＢ44は東側に張り出し部がある。ＳＢ42は南側に庇を持つものである。

これらの掘立柱建物は、ピットからの出土遺物が少なく、時期の特定はできない。少量の出土遺物に見られる特徴から、奈良時代中葉以降、平安時代末よりは新しいものといえるのみである。

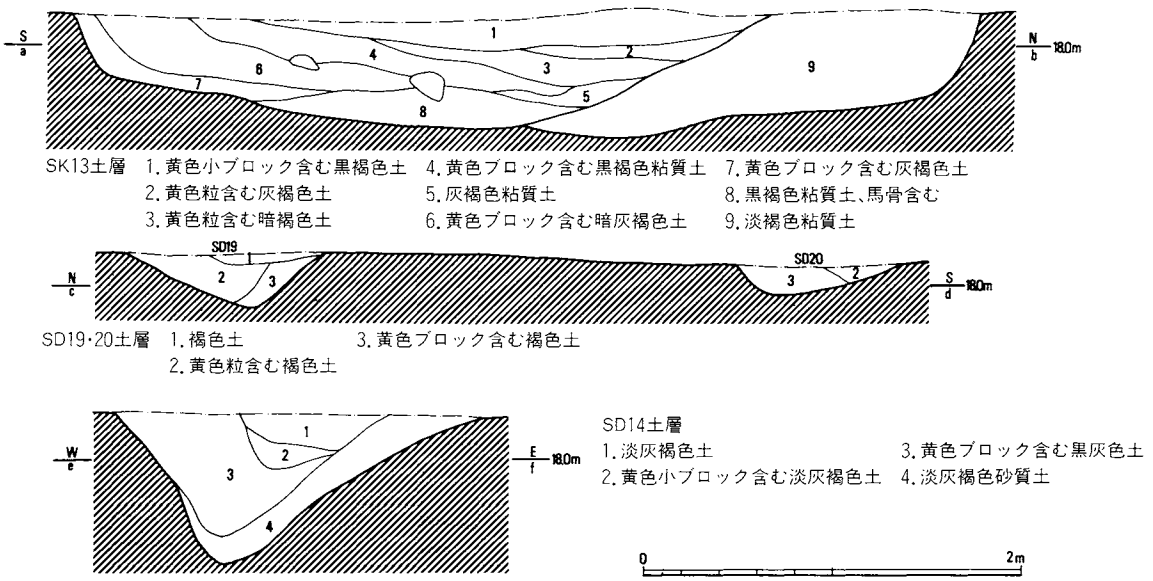
なお、ＳＢ45は２間×２間のものであるが、梁間の柱がそれぞれ外側に突出するものである。特異な構造であるため、縄文時代の竪穴住居の下部遺構の可能性もある。

ｃ．室町時代～江戸時代の遺構

当該時期の遺構には、溝・土坑がある。また、調査区全体から多く検出したピットも恐らくは当該時期のものと考えられるが、建物としてまとまるものはない。

溝ＳＤ14は、調査区内を鉤状に屈曲しながら掘削されているものである。調査区の中央北側で溝ＳＤ37と平行している。調査区北端でＳＤ32と二股に分離する。断面（第19図）は、南東側の傾斜が緩やかで北西側の傾斜が急な「片薬研堀」状を呈する。出土遺物から16世紀後半と考えられる。

溝ＳＤ19・20は調査区南端にある。この２条の溝はほぼ平行して走っており、またそれぞれの断面は



第19図　土坑ＳＫ13　溝ＳＤ19・20・14土層断面図（1:40）

平行する内側の法面の傾斜が強いものである（第19図）。このことから、両者はおそらく道の側溝に相当するものと考えられる。

土坑ＳＫ13は、調査区中央部にある。直径５ｍ前後の楕円形で深さは約60cmである。埋土最下層から馬の骨が３体分以上出土しているが、残りが悪く、ほとんどが歯のみであった。埋土下層は泥の沈澱層、上層はブロック土が混入する（第19図）。埋土上層から16世紀後半の土器が出土している。

ｄ．その他の遺構

その他の遺構として、調査区西端で検出した方形のピットがある。埋土は現在の表土に近く、植樹の跡ではないかと考えられる。　（伊藤裕偉）

３．出土した遺物

出土遺物は調査区の面積のわりには多くない。大部分が縄文時代の遺物である。

ａ．縄文時代の遺物

ＳＨ15出土遺物(1～12) 有文深鉢と無文の粗製深鉢、それに小形の無文鉢、および石器がある。図示していないが石器にはチャートの剝片もある。中期末。

１～５、９・10は有文深鉢である。１は、波状口縁をもつ有文深鉢で、口縁部の文様帯に隆帯による渦巻き文をもち、その楕円区画内に縄文ＲＬを充塡する。胴部は縦位縄文を地文とし、垂下沈線と蛇行沈線を施す。２も波状口縁で、沈線による渦巻き文の内部に刻みを施す。３は山形口縁になると思われ、沈線で渦巻きを描く。４は平縁で、１と同様に口縁部には隆帯による渦巻き文をもつが、その内部は縄ではなく羽状条線である。口縁部と胴部の境は１に比べて直線的であるが、境界として１条の隆帯を貼付する。胴部は不明。５は平縁の口縁部からいちどすぼまり胴部で再び膨らむ器形をなす。頸部と胴部に横方向の蛇行沈線を施し、肩部（胴上部）には櫛状具による条線地に縦方向の蛇行沈線を施す。あまり類例をみない。９・10は胴部破片で、沈線区画内に矢羽状沈線を施す９と、縄文を施す10がある。９はやや頸部がすぼまる器形かもしれない。

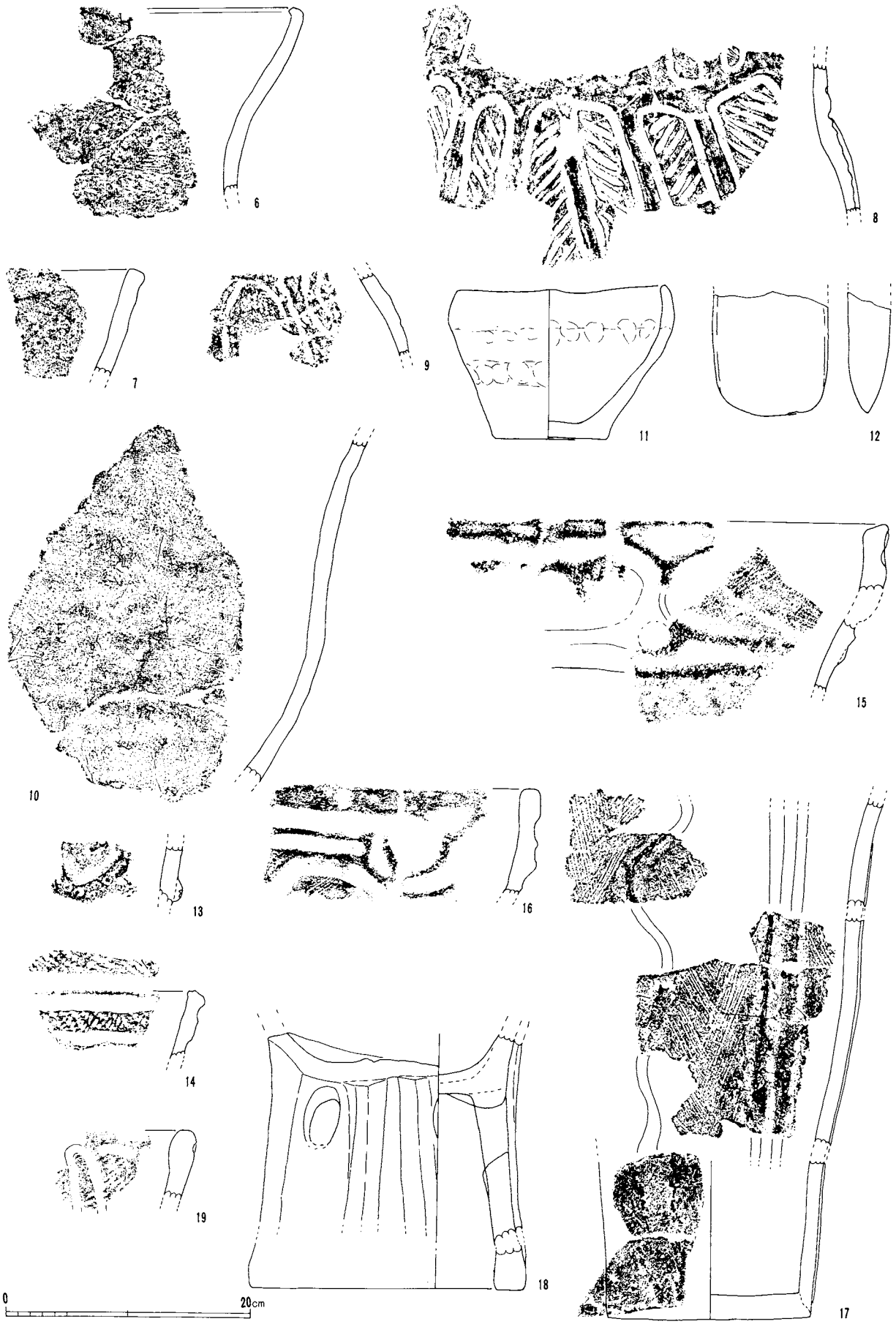
６～８は無文深鉢である。６はやや薄手で、口縁端部はヨコナデによりやや内側に肥厚し、器形もやや外開きを呈する。内外面に搾痕がみられる。７は６よりやや厚手で直線的な器形である。板状工具使用後、ナデを施しているようである。８は胴部破片でナデ調整による。

11はほぼ完形の無文の小形鉢である。胴部から口縁部にかけて内側へ湾曲する。歪みのため口縁部は極小さな波頂がつくようにもみえるが、平縁の可能性が高いであろう。内外面ともナデ調整を施す。

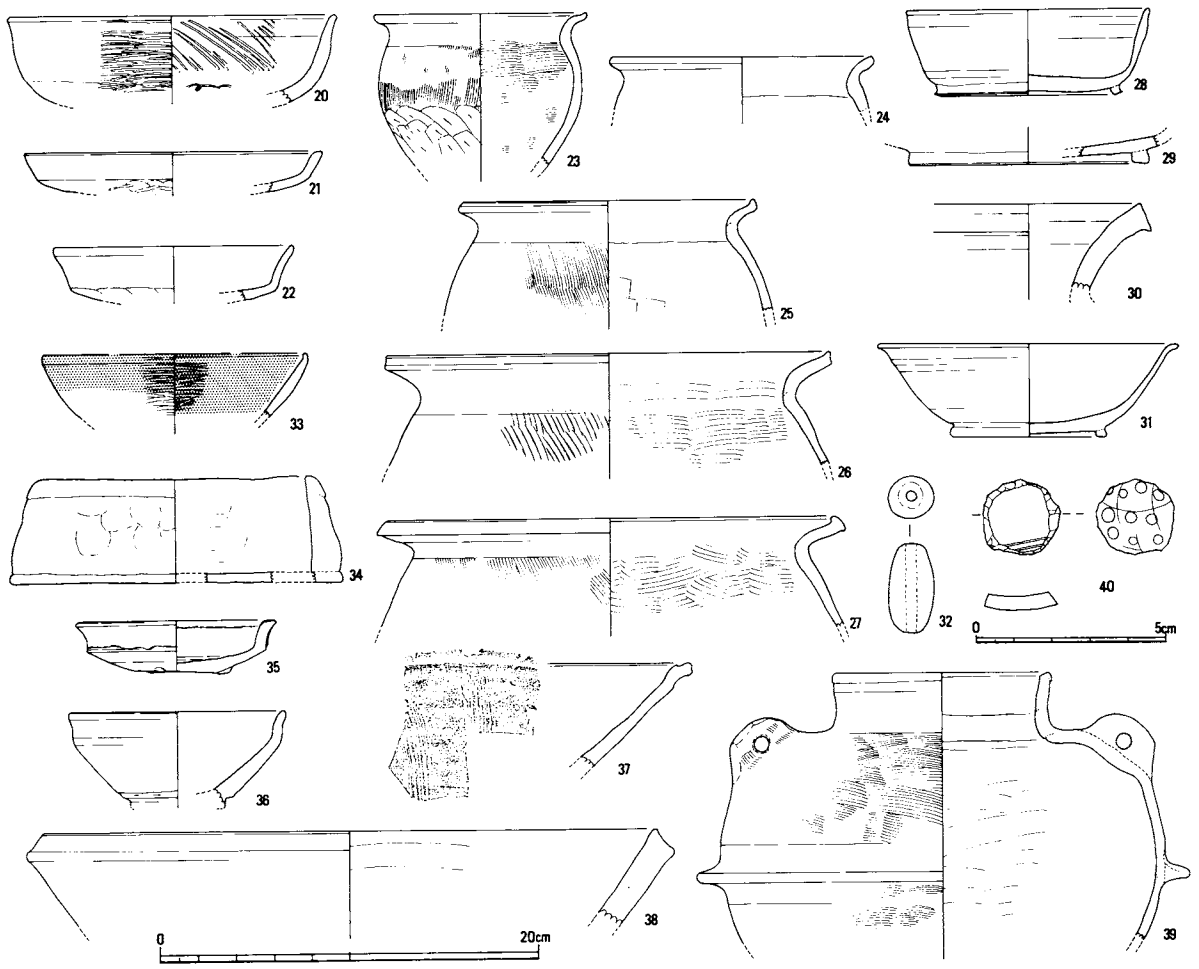
12は磨製石斧で、蛇文岩系の石材を使用する。

ＳＫ35出土土器(15～17) 15と16はおそらく同一個体となるものであろう。平縁の口縁部に隆帯による渦巻き文をもち、その内部に羽状条線を施す。15は隆帯間に凹点がみられる。底部(17)は平底で、胴部

第20図　縄文土器実測図（1:3）



第21図　縄文土器・石器実測図（1:3）



第22図　大里西沖遺跡・出土遺物（40は1:2、他は1:4）

は隆起文を貼付した間に条線を施す。比較的細長い器形をなすものであろうか。中期末。

ＳＫ27出土土器(13)　口縁部の渦巻き隆帯文の部位と思われるが、判然としない。隆帯上に竹管状刺突が施されている。中期末。

ＳＫ30出土土器(14)　平縁の口縁部に凹線と縄文（ＲＬ）を施す。口縁端部にも縄文をもつ。中期末。

包含層出土土器(18)　深鉢の脚部である。縦方向の二本隆帯と円孔がセットで４単位ある。

19は口縁部片で、縄文地に沈線を有する。小片のため判然としないが、口縁部文様帯を持たない土器かもしれない。　（穂積裕昌）

ｂ．奈良～平安時代の遺物

奈良～平安時代の遺物は小土坑およびピットからの出土で、あまり顕著な出土はなかった。須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器がある。奈良時代中頃かと思われるものから平安時代前期あたりにかけてのものがある。31の灰釉陶器は猿投窯編年の黒笹14号窯式[3]に相当しよう。ｋ５pit１およびSK 15からは製塩土器が出土している。土師器甕の形態からは、平安時代初頭あたりかと考えられる。

ｃ．室町～江戸時代の遺物

室町～江戸時代の遺物には土師器・陶器・国産磁器があるが、量は少ない。室町時代の遺物には信楽産の擂鉢があり、山田猛氏の編年[4]のⅢｂ型式に相当する。なお、当該時期の中勢地域に信楽産擂鉢の出土はあまりない。　（伊藤裕偉）

4．若林遺跡・小谷Ａ遺跡・小谷Ｃ遺跡の調査

１．若林遺跡（大里野田町字若林）の調査

平成３年11月14日に140㎡を調査した（第３図左上のスクリーントーン部分）。表土直下で赤褐色砂礫層に達し、遺構は認められなかった。近世以降の国産磁器や瓦質羽釜（焙烙）が出土したが廃棄によるものである。　（伊藤裕偉）

No.	器　種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特長	胎　土	焼成	色調	残存度(%)	備　考	実測No.
20	土師器　杯	j 5	包含層	(口)17.6	外:ヨコナデ・削りのちミガキ 内:ヨコナデ・板ナデのち暗文	密0.5～1.0mmの小石	良好	赤褐～淡褐	口縁15		1－4
21	土師器　皿	m14	pit 1	(口)16.0	外:ナデのちヨコナデのちミガキ 内:ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	明橙褐	口縁15		1－6
22	土師器　皿	j 8	pit 4	(口)12.8	外:指オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰～淡橙灰	口縁25		1－5
23	土師器　甕	j 8	pit 4	(口)11.4	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着。	1－6
24	土師器　甕	j 8	pit 1 (SB42)	(口)14.2	外:剝離 内:剝離	密0.5～2.0mmの小石	良好	茶灰	口縁20		3－1
25	土師器　甕	i 5	SK15	(口)16.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	淡赤褐～黄褐	口縁20		2－3
26	土師器　甕	g 10	包含層	(口)23.9	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁40 (2片)		1－2
27	土師器　甕	k 5	pit 1	(口)25.1	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5～3.0mmの小石	良好	淡橙	口縁25		2－1
28	須恵器　坏身	g 10	包含層	(口)13.0 (高)4.6 (高台)10.0	外:回転ナデのち糸切りのち貼り付け高台 内:回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100 口縁15		1－1
29	須恵器　坏身	g 7	SK13 (混入)	(高台)12.8	外:回転ナデのちケズリのち貼り付け高台 内:回転ナデ	粗0.5～2.0mmの小石 (多)	堅緻	淡灰	高台25		1－3
30	土師器　甕	i 5	SK15	(口)—	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10		2－4
31	灰釉陶器　椀	i 5	包含層	(口)16.1 (高)5.0 (高台)8.4	外:ロクロナデのちケズリのち貼り付け高台 内:ロクロナデのち釉	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	80	釉は淡緑色	3－3
32	土錘	k 11	包含層	(長)4.7 (径)2.4	外:ナデ 内:棒状工具でつくる	密0.5～1.0mmの小石	良好	茶灰	完形		2－5
33	黒色土器　椀	j 11	pit 1	(口)—	外:ヨコナデのちミガキ 内:ヨコナデのちミガキ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐・黒	口縁5	黒色土器A類	3－2
34	製塩土器	k 5	pit 1	(内径)14.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ・板ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	軟	橙褐～赤褐	口縁20	志摩式製塩土器	2－2
35	陶器　皿	e 7	SK 7	(口)10.7 (底)4.0	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち釉	密0.5～4.0mmの小石	堅緻	白灰	完形	釉は口縁部のみ。底部に三足付くが、トチンのようでもある。	4－4
36	陶器　茶椀	j 6	SD14	(口)11.7	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	高台上20	瀬戸産天目茶椀	3－5
37	陶器　播鉢	j 4	SD14	(口)—	外:回転ナデ 内:回転ナデのち擂り目	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	明赤褐	口縁10	信楽産	3－4
38	陶器　ねり鉢	e 12	SD14	(口)34.6	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡橙褐	口縁15	常滑産か？	4－1
39	土師器　茶釜	g 7	SK13	(口)11.7	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5～4.0mmの小石	良好	明橙褐	体部40	中・北伊勢産 耳の孔は棒状工具による	4－3
40	円形河口品		表採	(径)2.1	近世の国産磁器を円形に加工している。	密	堅緻	白灰	完形	素地の磁器には粒状や線状の染め付けがある。	4－2

第7表　大里西沖遺跡・出土遺物観察表

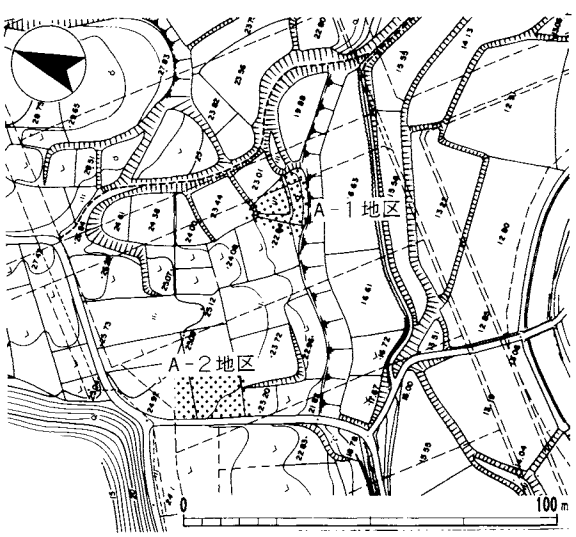
2．小谷A遺跡（津市大里山室町）の調査

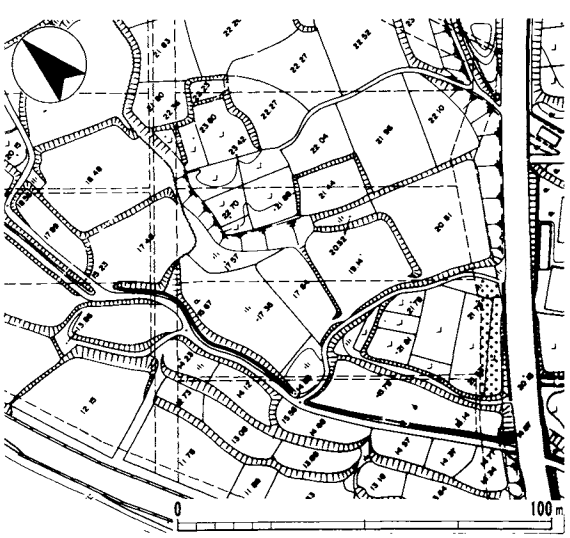
A－1地区・A－2地区の調査を実施した。A－1地区では遺構・遺物とも認められなかった。A－2地区では、時期不明の焼土坑1基・小溝3条を検出したが、遺物は少量で、見るべきものはなかった。

3．小谷C遺跡（津市大里山室町）の調査

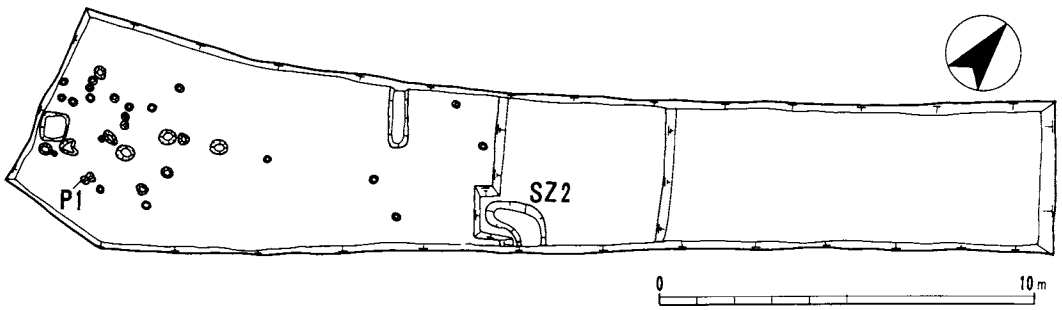
ピットを検出したが、建物にはまとまらない。縄文時代中期末の土器片及び石製品、須恵器片、山茶椀片などが出土した。縄文時代の遺物は検出面内にも認められたため、遺構の見られない調査区北側で下層遺構の検出を試みた。その結果、縄文時代中期末の土器片（2・3）が出土し、土坑らしきSZ2を検出したが、埋土には遺物が認められなかった。

（森川幸雄）

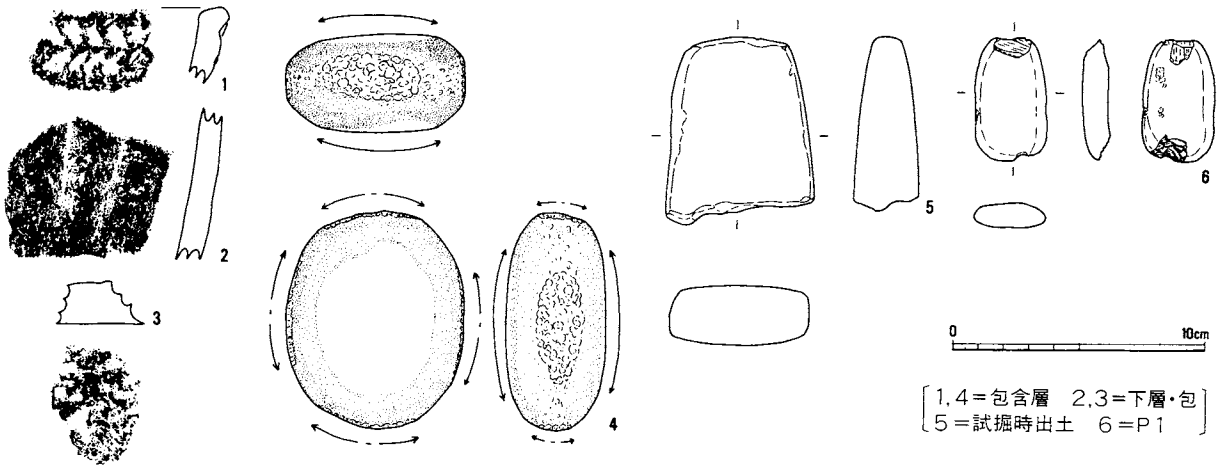




第23図　小谷A遺跡・小谷C遺跡調査区位置図（1:2,000）



第24図　小谷C遺跡遺構平面図（1:200）



第25図　小谷C遺跡出土遺物実測図（1:3）

5. 調査のまとめと検討

1．縄文時代の遺構と遺物[5]

大里西沖遺跡の竪穴住居ＳＨ15はやや楕円気味の円形プランで、ピットを５箇所もつものである。壁際のピットについては、鈴鹿市東庄内Ｂ遺跡[6]に類例がある。また弥生時代の例ではあるが、神奈川県横浜市の歳勝土遺跡にも認められる。歳勝土遺跡[7]における事例については、報告者は出入口の施設と考えている。大里西沖遺跡の竪穴住居ＳＨ15では炉が西側に寄っていることから、出入口にはこのピットが位置する東側を想定するのが妥当である。このピットは垂直に掘られており、仮に出入口とすると階段などの施設を支えるものかもしれない。しかし、支えとして１基のピットでは不可能のようにも思える。事例の増加を待って再検討する必要があろう。

また、竪穴住居ＳＨ15の床面下から、小形鉢が伏せた状態で出土した。位置的には出入口と思われる位置に近く、「埋甕」の機能も想定される。ただし、伏せた状態で出土したことから、別の意味を考える必要もあろう。　（伊藤裕偉）

今回の発掘によって出土した縄文土器は、すべて中期末に比定される資料である。ここでは、ＳＨ15から出土した縄文土器を検討してみよう。

ＳＨ15から出土した器形は、鉢が１点あるものの基本的には深鉢である。深鉢は、有文のものと、若干の無文のものが伴う。

有文深鉢は、さらに口縁部の形状から、波状口縁(1.2)・山形口縁(3)・平縁口縁(4.5)に区別することが可能であるが、口縁部文様の表出方法に着目すると、(1)と(4)は波状・平縁の差はあるが、隆帯による渦巻き区画と、区画内の縄文の充填という点で共通しており、より親近性の強いものと考えられる。

山形口縁は１点(3)だけであり、量的な不安はあるものの、一応、沈線による渦巻き文（もしくは弧線文）をもつこと・側縁部の肥厚が弱く、その部分に縄文の施文を有しないことをその特徴としてあげられよう。

２と５は、類例が乏しくその位置づけがやや困難

である。

2は、渦巻き区画という点は1や4と共通するが、文様表出方法が隆帯ではなく沈線であり、内側に施されているのも縄文ではなく刻みである。この点から、型式学的に新相を呈するものと考えることも可能であるが、通常、沈線による渦巻き区画文へ刻みを充塡する場合、施文は渦巻きには及ばず、楕円区画文のみであることが多いのに対し、2では刻みが渦巻きにも及んでいてやや趣を異にしており、系統差であることも考えられる。

5は、蛇行沈線を縦横に多用する特異な土器で、器形的にも頸部が一度すぼまるものである。一見、「後期」的ではあるが、胎土・焼成・器壁の厚さなど他の出土遺物となんら変わらず、中期末として問題ないであろう。その系統については、今後の類例の増加を待って検討したい。

無文深鉢は、量は少ないが、器形的には、薄手で口縁部が内彎気味に外反して口縁端部が肥厚するもの(6)と、厚手で口縁部が直線的で口縁端部が肥厚しないもの(7)の2類に分けることができよう。

以上、有文深鉢を中心として、SH15出土遺物を概観してみた。上記の遺物のうち、1と4は、口縁部の隆帯による渦巻き区画文と、胴部の縄文と垂下沈線（4は不明）という特徴をもち、東海地方の「取組式[9]」にほぼ型式内容の一致するものであろう。2や5など、その位置づけが現段階では難しいものもあるが、SH15出土土器は、近年増加してきているとはいえまだまだ少ない当地域での当該期遺構出土資料として、貴重なものといえよう。

さて、中期後葉から後期初頭の時期にかけては、全国的に様々なレベルでの土器編年や系統の整理検討が行われているが、県内をみた場合、資料は充実しつつあるものの、まだまだ既存の編年（たとえば加曽利E式や北白川C式など）に発掘資料をあてはめているのが現状である。当然そうした対比は必要であるが、その前提として、それぞれの地域独自の時間軸を設定し、そのうえでそれをもとにした他地域の土器型式との対比を行ってみる必要がある。これにむけ、当該地域（三重県の中北勢地域）の編年作業を行う場合、現状の資料ではすべての存在形式についての型式変遷を確立するにはまだ無理があるが、有文の波状口縁深鉢（当遺跡の1の土器の系列で、関東地方加曽利E式にその系譜があると考えられる形式）については各遺跡で比較的安定した土器の出土がある。現時点では、この形式の型式変遷を時間軸の基軸にすえ、これを指標として他の器種・形式を対応していくことが適当かと思われる。そこで、最後にこの見通しを述べておく。

縄文時代中期後葉の当該地域の有文波状口縁深鉢の変遷を、主に口縁部文様帯の変遷を軸として捉えると、隆帯による渦巻き区画文が沈線化し、さらにそれが崩れていく過程と理解される。これを、型式学的にまとめると、以下のようになるであろう。

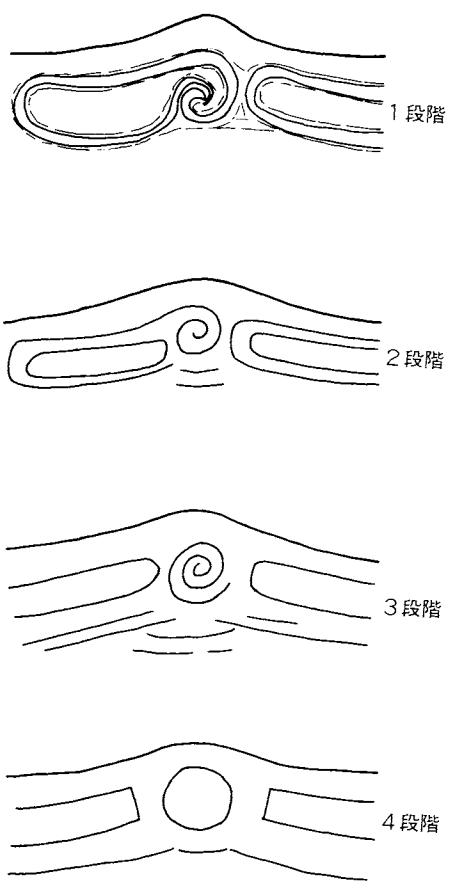
（1段階）隆帯による渦巻き文およびそれに連結する楕円区画文の段階。

（2段階）沈線（凹線）による渦巻き文およびそれに連結する楕円区画文の段階。

（3段階）沈線による渦巻き文と楕円区画文が分化した段階。

（4段階）沈線による楕円区画文のみの段階。

ただし、遺構や遺跡を単位として現状の資料をみ



第26図　波状口縁深鉢口縁部変遷概念図

てみると、とくに２段階以降については連続する段階が同一遺構で共伴することも多く、型式学的な流れは上記のとおりであるが、単独でも時期を画せるかどうかは今後の課題である。今のところ、１段階の資料には当遺跡ＳＢ15出土土器と鈴鹿市西条遺跡ＳＢ１[9]出土土器があり、２段階では亀山市沢遺跡土壙13[10]出土土器と鈴鹿市東庄内Ｂ遺跡ＳＢ８[11]出土土器の主要部分が相当する（若干の３段階が混じる）。亀山市地蔵僧遺跡では２段階と３段階の過渡的な土器から３段階のものまでが出土している[10]。鈴鹿市起Ａ遺跡ＳＫ15[13]出土土器は３段階と４段階が相半ばする状況で、鈴鹿市西川遺跡[14]出土土器では３段階も若干含むが主要部分は４段階である。

上記の段階区分をもとに山形口縁をもつ有文深鉢をみてみると、１段階の当遺跡資料（３）では、山形部の側縁部があまり肥厚していないのに対し、東庄内Ｂから起Ａにかけて肥厚化が進んでおり、その部分に縄文が施されるようになる。新しい段階になるにつれて肥厚化が顕著になるものと思われる。

東海及び近畿地方は、縄文時代中期末に東日本からの加曽利Ｅ式の流入・影響をうけ、それまでの地域色がほぼ払拭されて新たな土器群が成立することが指摘されている[15]が、この場合、今回の調査などから、当地では東海地方の取組式に近い内容をもった土器が成立するとみてよかろう。その後の展開は近畿地方の北白川Ｃ式とも関連して[16]東海とはやや違った動きをみせるようである。今回は、有文の波状口縁深鉢を中心に素描を試みたが、これはあくまで加曽利Ｅ式系統の深鉢についてである。今後は、加曽利Ｅ式の流入以後にも存続するらしい在地土器の系統と、加曽利Ｅ式影響以外の他地域の土器の流入や影響の可能性（当報告の芸濃町大石遺跡出土土器など）を明らかにし、４段階とした土器群よりも型式学的には後出しそうな土器群（嬉野町堀之内遺跡[17]等で存在する口縁部文様帯が消失している土器や、鳥羽市贄遺跡[18]出土土器など）の位置づけを行ったうえで、最終的な当地の中期末葉の土器編年を構築し、さらに他地域との広域的な比較検討が必要である。残された課題は、大きい。

（穂積裕昌）

２．奈良～平安時代の集落について

今回の調査によって、当該時期の遺跡は南所・大里西沖・若林遺跡に広がることが確認できた。しかし、これらの遺跡では遺構・遺物ともあまり顕著ではない。比較的近接する大里窪田町六大Ｂ遺跡・橋垣内遺跡[19]と比較すれば、集落の質的な差が明らかである。

しかし、若林遺跡から南所遺跡にかけての広い範囲に当該時期の遺跡が認められることは注意されてよい。このことは、当該時期の生活領域がかなり広いことを示すとともに、平安後期の集落の実態が不明瞭であることの意味を考えるうえでも示唆的であるといえる。

南所遺跡Ｄ２地区で出土した灰釉陶器や平瓦は現在の大里野田集落の下に、寺院跡を含めた当該時期の大きな集落の存在を予想させる。

遺構では大里西沖遺跡のＳＢ44が注目される。総通し柱構造の建物は、県内では初めての確認例であろう。厳密な時期比定はできないが、今後の類例増加を待って古代の掘立柱建物について充分な検討を行う必要がある。（伊藤裕偉）

３．中世の集落と遺物について

南所遺跡は、調査区周辺の分布調査によって、第３図に示した範囲に中世集落の存在が考えられる。しかし、この範囲は14世紀前葉以前の遺物の存在から考えられる遺跡範囲であり、15世紀代以降はＤ１・Ｄ４区あたりを南限としたあり方へと変化する。これは、14世紀以前には比較的広範囲な集落分布を示していたものが、次第に収束していく状況を示しているものと考えられる。同様なことは玉城町・蚊山遺跡[20]においても観察される。これらの事例から中世集落が次第に一定の場所に収束することが想定でき、いわゆる「散村から集村へ」というあり方を示すものと思われる。ただし、この「散村から集村へ」の移行という問題を考古学的に解決するためには、中世前期からすでに存在している大規模集落の評価や今日まで継続していない集落の評価を含めていかないと本来的な集落論からは遊離するであろう。

伊勢地域では、中世後期の遺物や若干の遺構は調査を行う毎に確認されている。そのため中世後期の遺跡は比較的顕著に確認できるという錯覚を覚える。しかし、この時期の具体的な集落遺跡や建物につい

て、必ずしも良好な事例を指摘できないのが現実である。南所遺跡の事例は、中世後期の集落遺跡が現在の集落と重なっているものがあるという想定を若干ながらも裏付けるものといえよう。

南所遺跡には、煮沸用土器の使用方法を知る上で興味深い資料がある。第12図87の羽釜は鍔部を越えて煤の付着がある。また頸部の円孔の内面には擦れた痕跡があり、外面はこの円孔を起点として右斜め方向に煤の付着の薄い部分がある。この事実は鍔部以下が密閉されない状態で煮炊きを行っていたことを示すとともに、吊り紐を用いて煮炊きを行っていたことを示すと考えられる。このような煤付着の状況と同じものは四日市市赤堀城跡出土の羽釜[21]にも認めることができる。このことから、この類の羽釜は竈で用いたものではなく、五徳などを用いて囲炉裏などのオープンな火処に吊り下げられていたものではないかと考えられる。羽釜という形態を取りながらも、その使用形態は竈を用いたものではないと考えられるということは、土器の形態が即使用状況を表すものではないことを示している。

南所D4区溝SD2では南伊勢系第3段階b型式と第4段階b型式の鍋が出土している。そして、信楽産と考えられる擂鉢との共伴関係も認められる。信楽産擂鉢は、大きくは山田猛氏の編年によるIIa型式に相当しよう。しかし口縁部内面の稜線が比較的明瞭である点からは、IIa型式のなかでも新しい段階に相当するのではないかと考えられる。

信楽産擂鉢と南伊勢系鍋との共伴関係からは、南伊勢系鍋第3段階b型式から第4段階b型式にかけての時期が、15世紀第2四半期～第3四半期に相当する公算がさらに強くなったといえる[22]。南伊勢系鍋第3段階b型式は将来的に細分が可能であり、この資料は第3段階b型式の新しい時期の実年代を考える上で重要である。　（伊藤裕偉）

註

① 伊藤裕偉「若林遺跡」（『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊　三重県教育委員会　1989）

② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1　1990）

③ 櫛崎彰一・斎藤孝正「猿投窯の編年について」（『愛知県古窯跡群分布調査報告』7　愛知県教育委員会　1983）

④ 山田　猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」（『Miehistory』vol.1　1990）

⑤ 縄文時代の様々な事例の解釈にあたっては、泉拓良氏（奈良大学教授）のご教示を得た。

⑥ 谷本鋭次「東庄内B遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県文化財連盟　1970）

⑦ 坂本　明「弥生時代後期の集落」（『歳勝土遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会　1975）

⑧ 増子康真「縄文中期後半土器の編年ー東海地方西部地域ー」（『古代人』34 1978）

⑨ 服部芳人・倉田直純「鈴鹿市徳居町敷田遺跡ほか」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告—第一分冊—』三重県埋蔵文化財センター　1990

⑩ 亀山隆『沢遺跡』I（亀山市教育委員会 1988）(11)註(6) 文献

⑪ 倉田直純『地蔵僧遺跡発掘調査報告』（亀山市教育委員会 1978）

⑬ 田村陽一「鈴鹿市起A遺跡出土の縄文時代中期末葉の土器」（『Miehistory』vol.2 1990）

⑭ 中森成行「西川遺跡の調査」（『郡山遺跡群発掘調査報告』5　鈴鹿市教育委員会 1983）

⑮ 泉拓良「北白河追分町遺跡出土の縄文土器」（『京都大学埋蔵文化財調査報告』III　北白河追分町縄文遺跡の調査京都大学埋蔵文化財研究センター　1985）

⑯ ⑬文献

⑰ 田村陽一「堀之内遺跡」（『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報』V 三重県教育委員会 1989）

⑱ 南野孝順・松本茂一ほか『鳥羽贄遺跡第2次発掘調査報告書』（鳥羽市教育委員会　1987）

⑲ 六大B遺跡・橋垣内遺跡とも三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』III（1991）

⑳ 小坂宜広・前川嘉宏・稲本賢治「度会郡玉城町蚊山遺跡」（『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』VI　三重県埋蔵文化財センター 1990）および三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』2（1991）

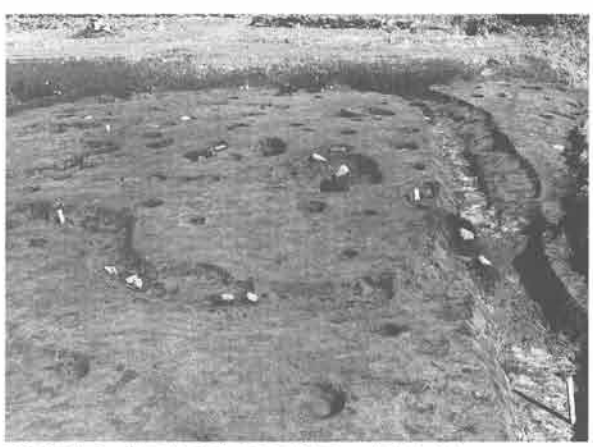
㉑ 春日井恒・上垣幸徳ほか『赤堀城跡2』（四日市市教育委員会 1989）PL6の36・39・41・44参照。

㉒ このことについてはすでに若干の指摘を行っている。新田洋・伊藤裕偉ほか『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊　楠ノ木遺跡　（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991）

PL. 1

大里地区遠景（南上空から）　1991年12月

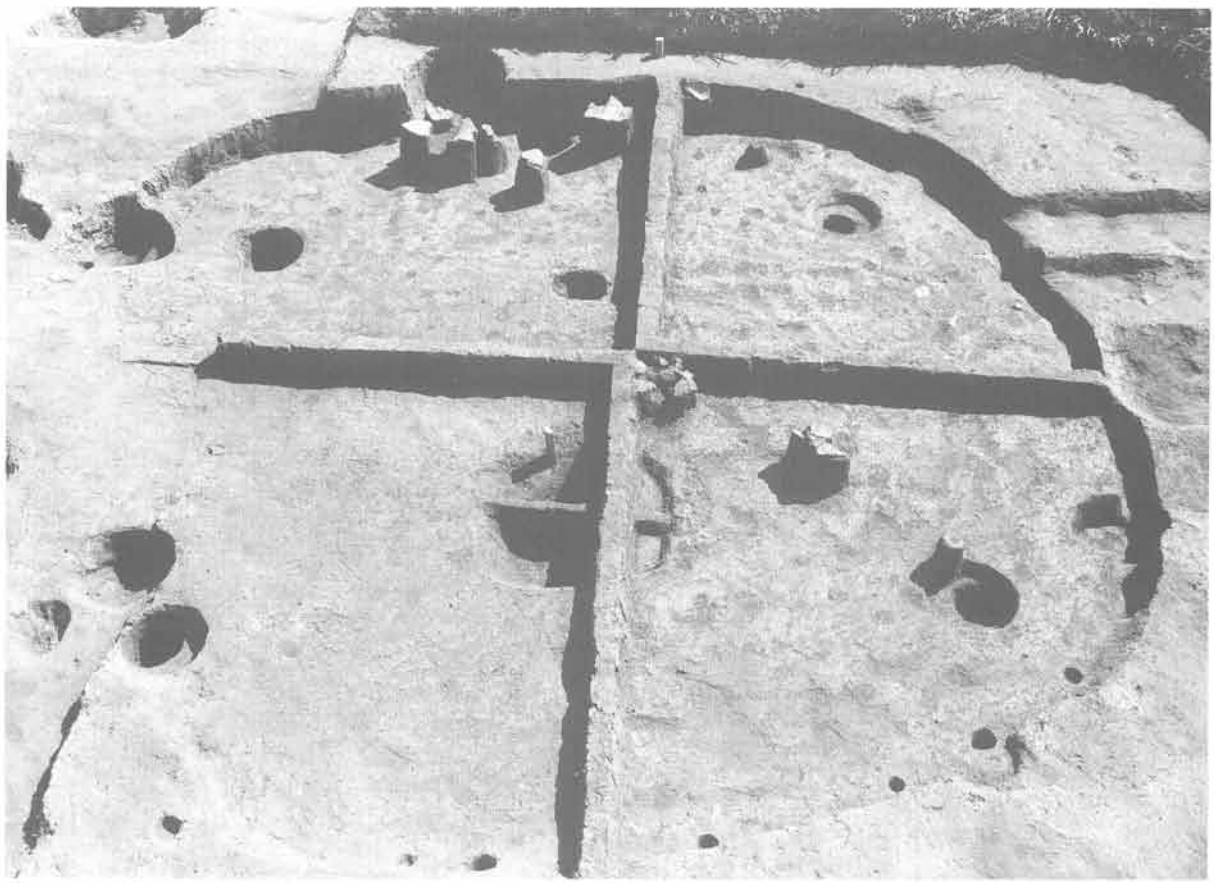
南所D_4区（西から）



南所D_4区　掘五柱建物ＳＢ1付近　（南から）

大里西沖遺跡全景　（北上空から）

土坑　ＳＫ13　（東から）



SH15　全景　（西から）

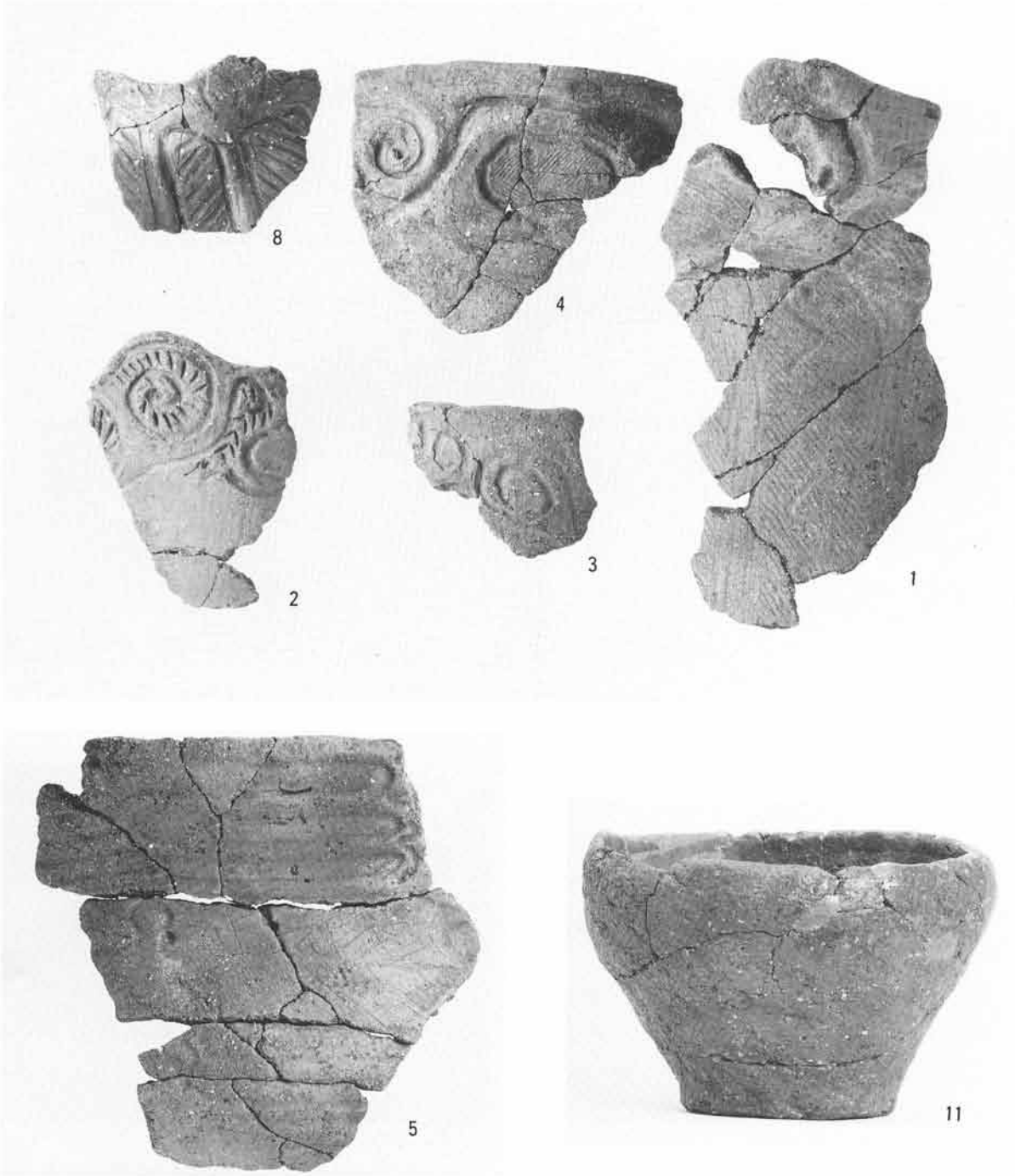
SH15　完堀状況　（北から）

SH15　遺物出土状況　（西から）

SH15　炉断面　（西から）

土坑　SK35　（西から）

PL. 3



出 土 遺 物 （大里西沖遺跡竪穴住居ＳＨ15）

III　安芸郡芸濃町椋本　大石遺跡

1．位置と歴史的環境

安濃川は、鈴鹿山脈錫杖ケ岳付近を源流とし、中流域に広範な段丘を形成している。左岸中位段丘面には黒ボク土壌が、右岸には低地性土壌が分布し、主に水田、苗木畑、茶畑として利用されている。大石遺跡(1)はこの安濃川中流域左岸の低位段丘面に立地し、行政的には安芸郡芸濃町大字椋本字大石に属する。

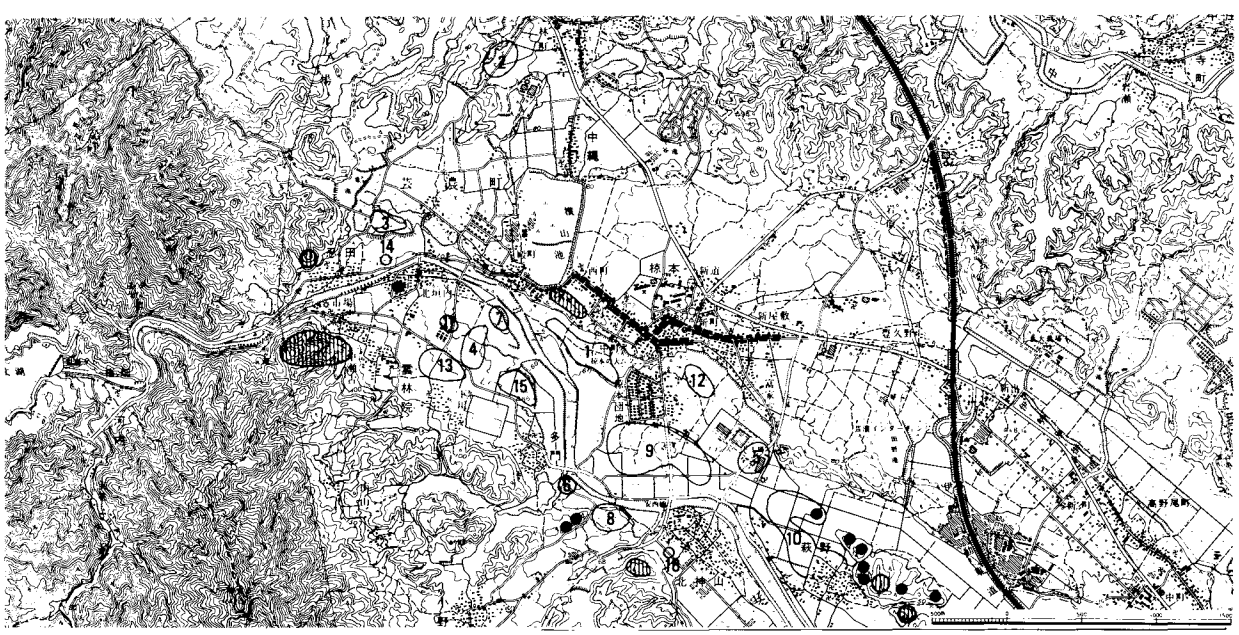
安濃川流域における旧石器時代の遺跡は、現在のところ確認されていない。縄文時代に入っても、上新田遺跡(2)、忍田松山遺跡(3)で石鏃等が出土しているのみであったが、今年度、芸濃町教育委員会により発掘調査された雲林院青木遺跡(4)では、中期の埋甕と思われるものや、後期の中津式土器が多数出土した[1]。これらは、本遺跡出土の中期の遺構・遺物とともに、この時代を考える上での好資料となる。

弥生時代では、馬屋町遺跡(5)、椀田遺跡(6)、栢井戸遺跡(7)、多門遺跡(8)など後期の遺跡が多く確認されている。古墳時代においては後期の円墳が数基存在するが、下流域に比べてその分布密度はかなり低い。律令時代、この地域は安濃郡として編成され、条里制が施行された。椋本南方遺跡(9)、忍田松山遺跡、松山遺跡(10)では奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。

中世にはこの地域にも荘園が分立し、地頭が補任された。それは美濃夜神社蔵の寛元2年の棟札に、忍田、雲林院、生原、椋本4ケ村の地頭名が記されていることからもわかる[2]。又、『神鳳抄』からは忍田等に御厨の存在が確認できる。集落の存在は、忍田松山遺跡、松山遺跡、野垣内遺跡(11)、巾遺跡(12)、下川遺跡(13)に認められ、低位段丘面の開発が一層広く進んだものと考えられる。

近世以降、椋本周辺は伊勢別街道の宿場町として発展し、江戸時代末に至り最盛期を迎える。

（伊藤徳也）



1．大石遺跡　2．上新田遺跡　3．忍田松山遺跡　4．雲林院青木遺跡　5．馬屋町遺跡　6．椀田遺跡
7．栢井戸遺跡　8．多門遺跡　9．椋本南方遺跡　10．松山遺跡　11．野垣内遺跡　12．巾遺跡
13．下川遺跡　14．興遺跡　15．北奥遺跡　16．里ノ内遺跡　●：古墳　⑪：中世城館跡

第27図　遺跡位置図（1:50,000）　（国土地理院・椋本・1:25,000）

2. 調 査 結 果

第29図A～E地区の調査を実施した。A～C地区は、農業基盤整備事業に伴う調査であり、D・E地区は、中勢用水事業に伴う調査である。以下、面的にまとまった調査を行ったA地区を中心に調査結果を報告する。

なお、遺構番号は主な遺構にのみ与えた。

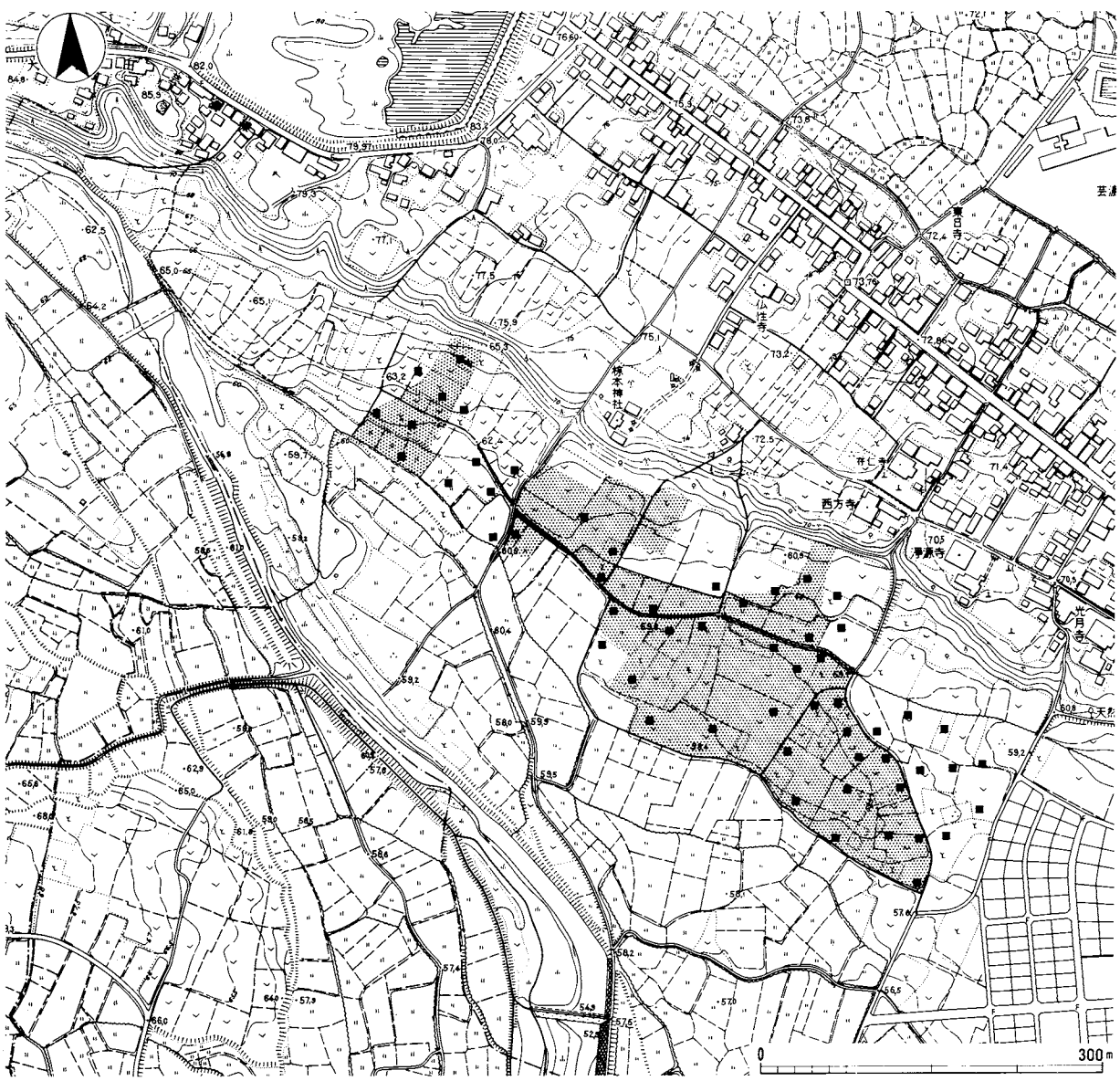
(1) A地区の遺構と層序

主な遺構に縄文時代中期後半の竪穴住居3棟・土坑5基・埋甕1基、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物22棟・土坑墓9基・溝2条、近世の石組溝1条がある。

基本的な層序は、第Ⅰ層：灰褐色シルト（耕作土）、第Ⅱ層：淡黒色シルト（黒ボク）、第Ⅲ層：黄灰色もしくは暗黄色砂混じりシルトであり、調査区南半では、第Ⅱ層は見られない。

遺構検出は、全て第Ⅲ層上面で行った。

中世の遺構は、第Ⅱ層を切り込むものであるが、埋土が淡黒色を呈し、第Ⅱ層内での識別は困難であった。縄文時代中期後半の遺構と第Ⅱ層との新旧関係を明確に判断する材料は今回得ることができなかった。しかし、この時代の遺構埋土に黒色土が入らないことから、第Ⅱ層の堆積が縄文時代中期後半以降のものである可能性が指摘できる。



第28図　遺跡地形図（1:6,000）　■＝試掘坑

第29図　調査区位置図（1:2,000）

この第II層は、純粋な黒ボクではなく、混じりが見られるもので、中位段丘面上に拡がる黒ボク土の二次堆積であると考えられる。

① 縄文時代の遺構

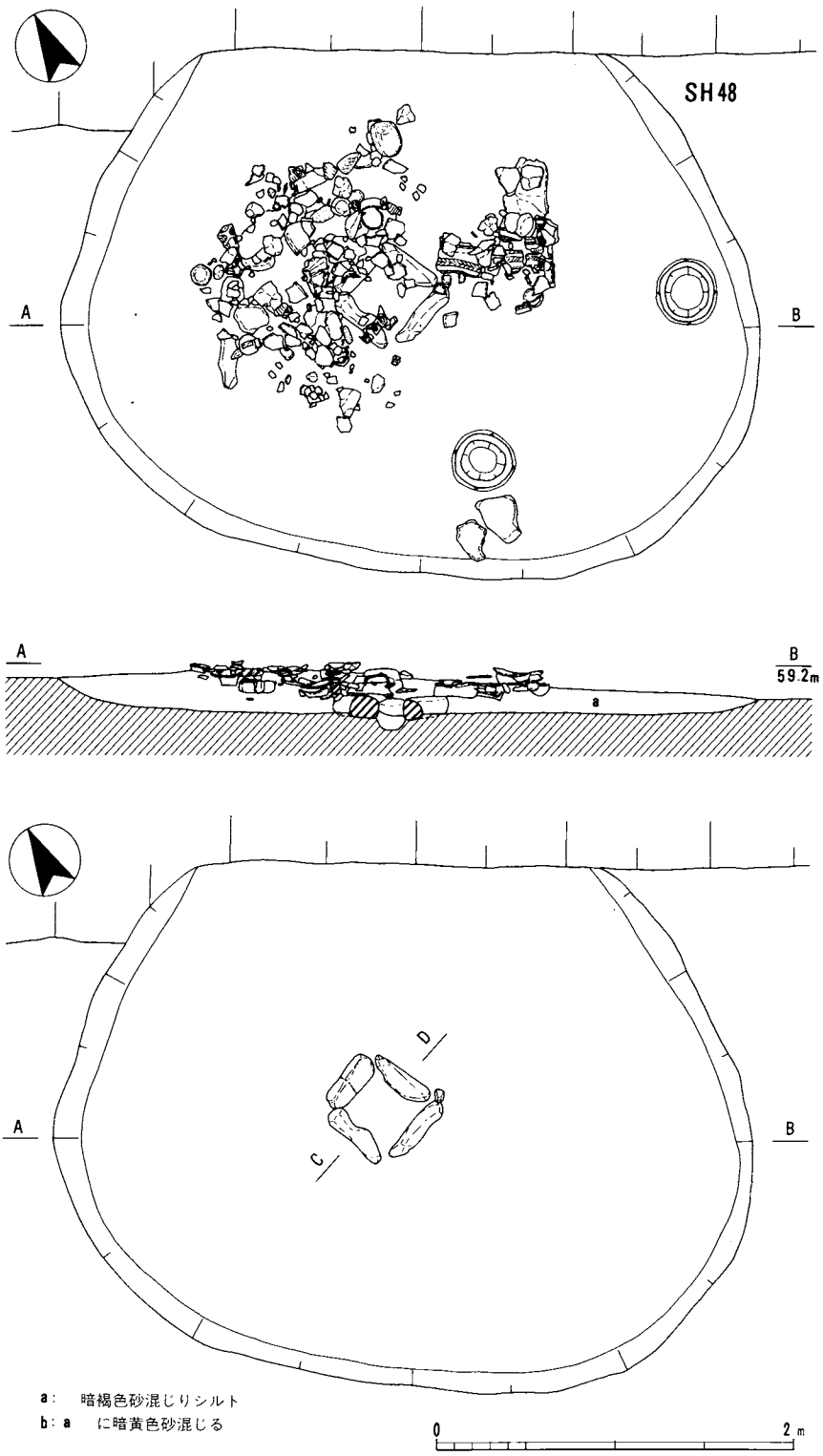
a．竪穴住居

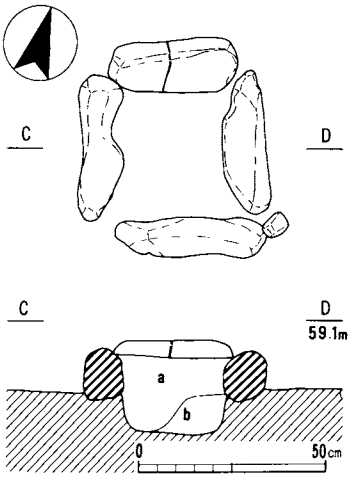
3棟が検出された、いずれも中期末に比定されるもので、これらを繋ぐと、三角形の頂点に位置する配置を見せる。3棟間の距離を炉の中心で測ると、SH48－SH49が24.2m、SH48－SH50が18.8m、SH49－SH50が18.6mである。

SH48　北の一端をSD37に切られるが、楕円形の平面プランを呈し、長軸3.8m、短軸3.3mを測る。深さは24cmと浅く、平面プランは隅丸方形にちかいものであった可能性もある。

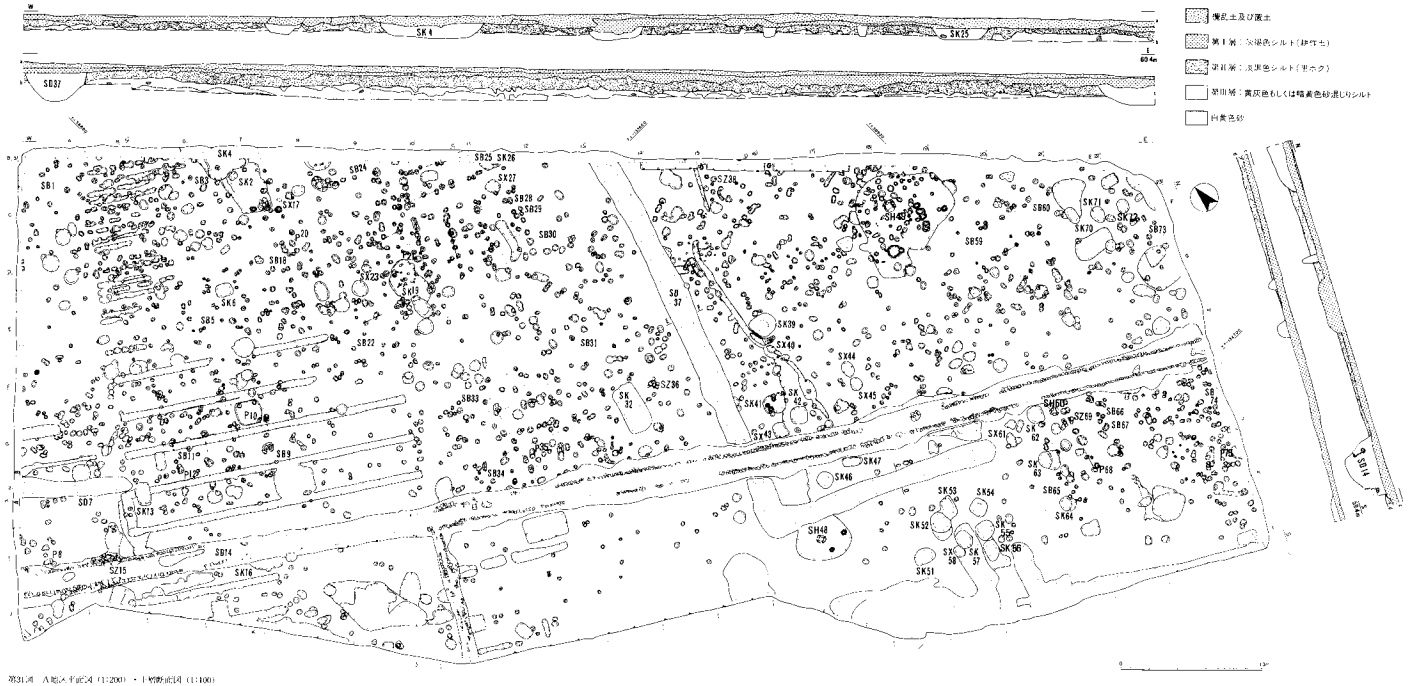
柱穴、周溝、床面などは検出されず、中央に石組炉のみを確認した。床面は、炉石の高さから考えて、もう少し上面であったと推定される。

炉は、長さ40cm程の河原石を4個方形に組んだもので、南東隅外側には炉にもたれる形で、立石が見られた。炉石は火熱を受け、赤化もしくは黒ずんでおり、脆い。南側の炉石は、調査時に欠損をしたが、上面に平坦な面を有しており、他の炉石が縦置きされたものに対して、平置きのものであり、炊き口は南側であったと推定される。この推定にたつと炉はN19°Wの方向を持ち、住居の長軸方向と一致する。焼土は認められず、炉内埋土にわずかな炭化物を認め





第30図　SH48　遺物出土状況・平面図（1:40）　SH48炉実測図（1:20）



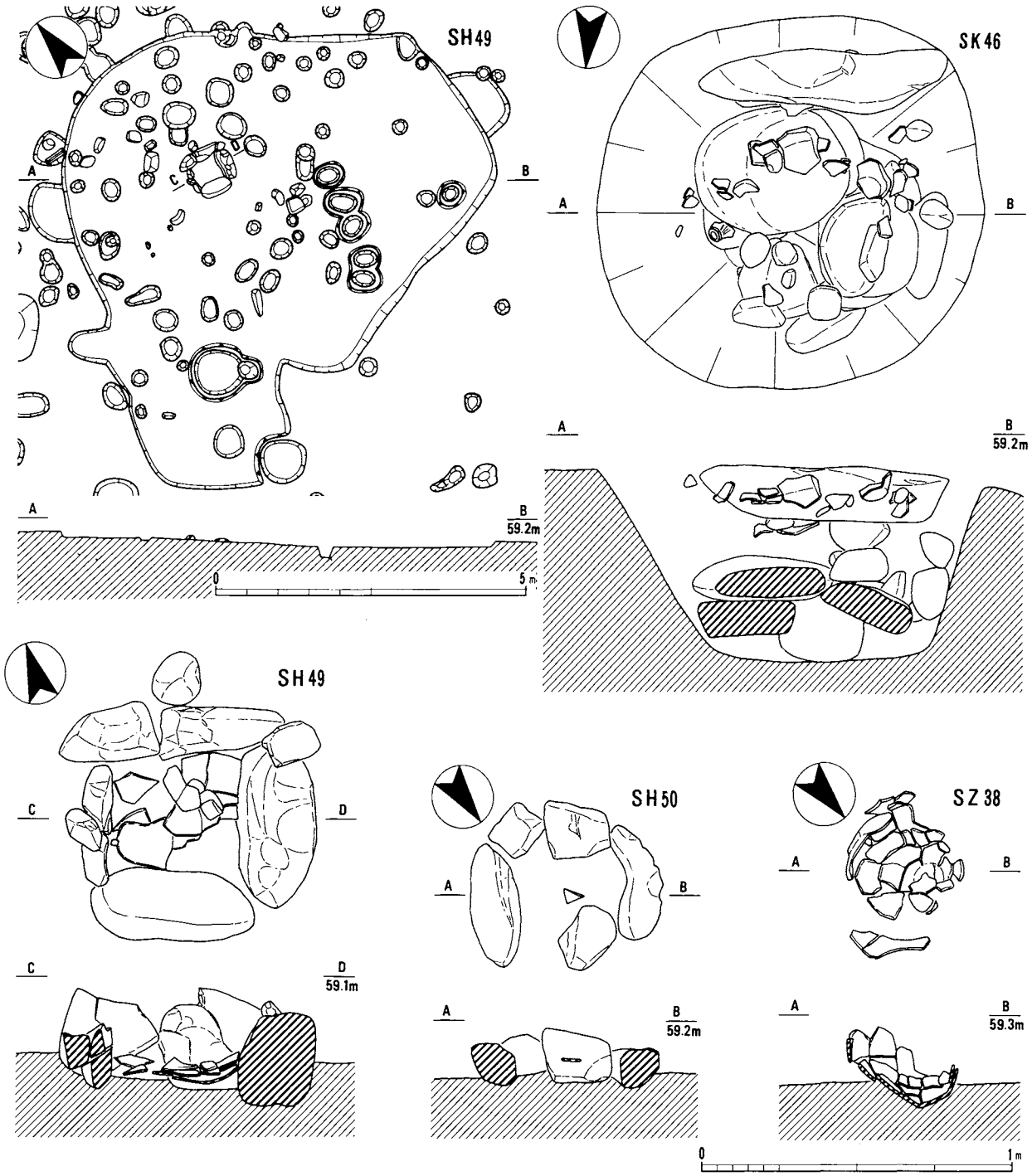
第31図　A地区平面図（1:200）・上層断面図（1:100）

たのみであった。

住居跡埋土からは、中期末に比定される深鉢、鉢、浅鉢片が半完形のものも含め多量に出土した。出土状況は、炉を中心にまとまりを見せ、レンズ状に堆積するもので、炉内及び壁際からの遺物の出土はほとんど見られない。この出土状況は、「吹上パターン」に共通するものであり、遺物は、住居廃絶後、埋土の一次堆積があった後、一括廃棄されたものと思われる。遺物の堆積は炉石上部にまで認められることから、廃棄の行為は、住居廃絶後余り時間を置かずに行われたと推定される。

石器の出土は少なく、石錘１点(123)、サヌカイト・チャートの剝片が１点ずつ出土したのみである。

ＳＨ49　不整形な平面プランで検出された。複数の遺構が切り合うものと思われるが、平面及び断面観察で切り合いを確認することはできなかった。掘削の結果、石組炉を１基確認した。炉を中心に北壁を有効なものと見做すと、径4.8mの円形もしくは、



第32図　ＳＨ49平面図（1：100），ＳＨ49・50炉実測図，ＳＫ46・ＳＺ38遺物出土状況（1：20）

隅丸方形の竪穴住居が想定できる。炉石以外にも、平石、もしくは柱状の石が点在しており、先行する竪穴住居を壊している可能性も指摘できる。

炉は、欠損もしくは破損をしているが、4個の河原石を方形に組んだもので、北東隅外側に炉石にもたれる形で立石が見られる。炉の北側に見られる石は、炉に伴うものかどうか明確でない。炉石は、火熱を受け内面及び底面を中心に、赤化もしくは黒ずんでおり、脆い。南側の炉石は、他の炉石が縦置きされたものに対して、平坦に近い面をやや上に向けており、炊き口は南側であったと推定される。この推定に立つと炉はN14°Eの方向を持つ。焼土は認められず、炉内埋土にわずかな炭化物を認めたのみであった。炉内には、土器片が内面を上に向けて敷かれた状況で出土した。土器敷炉の可能性が考えられるが、土器片はいずれも火熱を受けた痕跡が認められず、根拠に乏しい。炉内出土遺物は、いずれも中期末に比定される。

ＳＨ45　炉だけを確認した。欠損もしくは破損をしているが、4個の河原石を方形に組んだものと推定される。炉石は、火熱を受け、赤化もしくは黒ずんでおり、脆い。焼土は確認されなかった。炉内埋土から中期末に比定される土器片が1点出土している。

Ｂ．土坑

調査区ほぼ中央で5基検出された。ＳＤ14に切られるＳＫ47を除き、全て略円形の平面プランを持つ。規模は、ＳＫ39が径1.9m、深さ44cm、ＳＫ41が、径1.6m、深さ34cm、ＳＫ42が径1.3m、深さ15cm、ＳＫ46が径1.2m、深さ60cm、ＳＫ47が深さ8cmである。いずれも中期後半に比定される土器片が出土しており、竪穴住居よりやや先行する時期の土坑群と推定される。ＳＫ46には、配石が見られた。

ＳＫ46　土坑埋土上位には、破片ではあるが土器が集中し、長さ80cm程の三角柱状の石が南壁に沿って検出された。中位から下位にかけては、径30～50cm程の円形の平石が重なって確認された。性格は不明であるが、意図的な配石遺構と推定される。

ｃ．埋甕

ＳＺ38　深鉢の体部下半から底部が、傾いているものの正立に近い状態で出土した。埋甕の可能性がある。土器内の土には、内眼観察では何も確認されなかった。また、掘形の検出は困難であった。

単独の検出であること、粗製の深鉢であることから、時期決定は困難である。しかし、付近には、中期後半の土器片や河原石が集中して見られる地点があることから、この時期の埋甕である可能性や、周辺に住居跡があった可能性などが指摘できる。

②　平安時代末から鎌倉時代の遺構

ａ．掘立柱建物と区画溝

掘立柱建物22棟が検出された。その中心時期は平安時代末から鎌倉時代前半であり、鎌倉時代後半と推定されるものが1棟ある。これらの多くは、同時期の区画溝と共通する方向性を持って存在し、屋敷地跡の形態をとる。

区画溝ＳＤ37の東にも掘立柱建物が検出されることが予想されたが、確認出来なかった。これは、この付近の第Ⅱ層：淡黒色シルトの堆積が厚く、検出時に、既に柱穴を飛ばしていたためと考えられる。

これら掘立柱建物は、棟方向からＡ群・Ｂ群・その他に大別される。棟方向から見た検討は、調査のまとめに譲り、以下、主な掘立柱建物と区画溝について記述を行う。なお、掘立柱建物の詳細については、第8表・掘立柱建物一覧表を参考されたい。

ＳＢ１　確認された掘立柱建物の中で、最も大形のものである。柱間は2.1mの等間で、桁行両端各1間分が3.1mと広く、この部分は廂と考えられる。南東隅には、東西1間、南北2間に収まる所謂南東隅土坑（ＳＫ２）を伴う。深さは12cmと浅い。土坑内には、南東隅に性格不明の集石が見られる。出土遺物から鎌倉時代前半の建物と推定する。

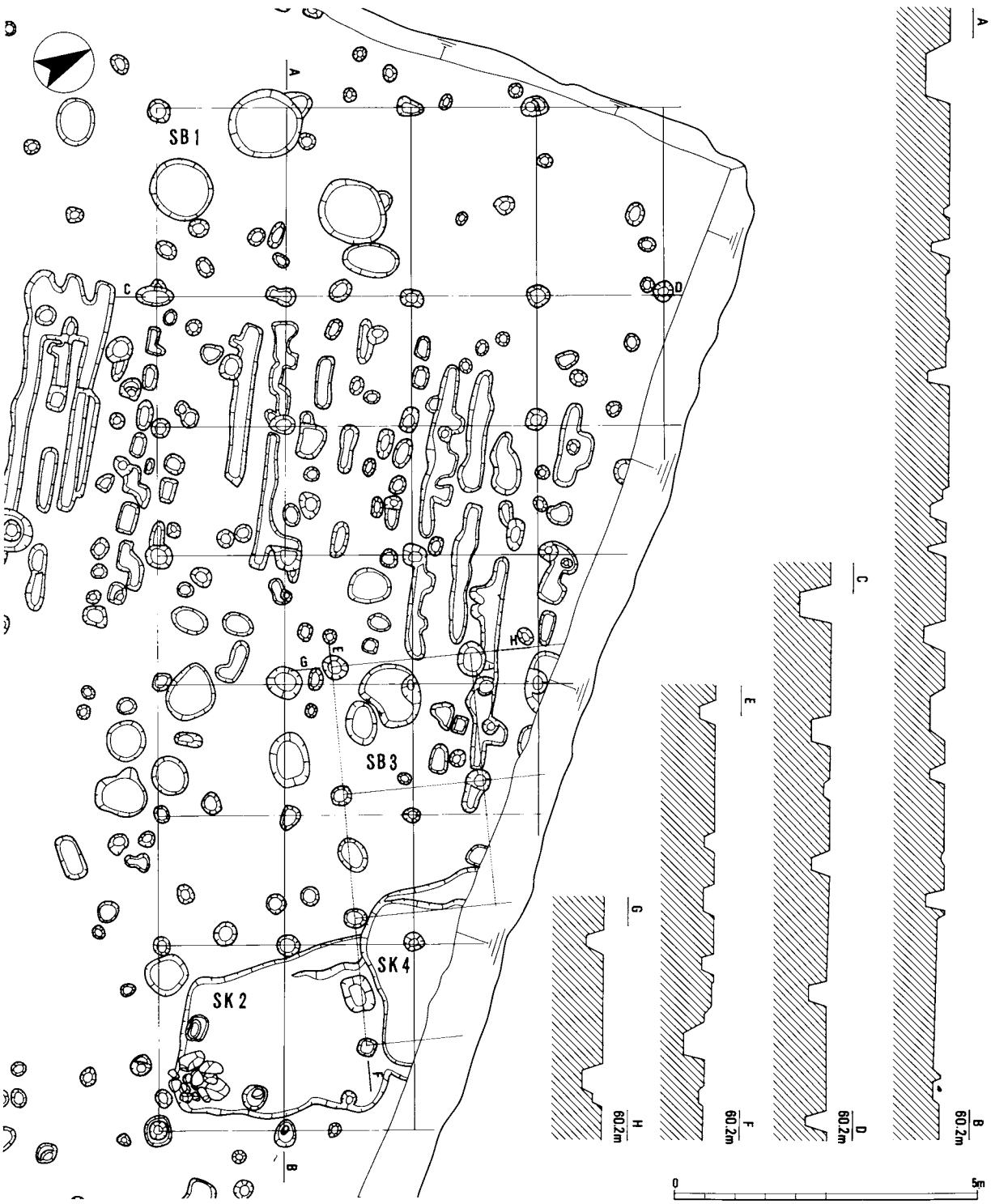
ＳＢ３　ＳＢ１と重複する。全容を窺うことはできないが、土坑（ＳＫ４）を伴うものである。ＳＢ１との新旧関係は、切り合う土坑及び柱穴の埋土に差違が認め難く不明である。出土遺物(200～208)を見ても、ＳＢ１との明確な時期差は認められない。鎌倉時代前半の建物と推定する。

ＳＢ18・31　ＳＢ１に続く大型の建物である。共に南東隅土坑（ＳＫ19・ＳＫ32）を伴う。また、2間×2間の束柱を持たない空間を持つ点でも共通する。この空間を身舎と考え、ＳＢ18は3面廂、ＳＢ31は4面廂の建物を想定したい。ＳＢ18の柱間は、

身舎想定部分で2.5mの等間であり、廂想定部分で、桁行2.6m、梁行2.3mである。ＳＢ31の柱間は、身舎想定部分で、桁行2.3mの等間、梁行2.4mの等間で、廂想定部分で、桁行が東2.6m、西2.5m、梁行が、北2.0m、南1.9mである。共に、身舎想定部分の柱間に対して、廂想定部分の柱間が、桁行は広く、梁行は狭くなる。

出土遺物は、ＳＢ18柱穴から土師器鍋(223・224)などが出土している。ＳＢ31土坑からは、土師器小皿、山皿(209・210)などが出土している。共に平安時代末の建物と推定する。

ＳＤ37　調査区中央にＬ字形に検出された。断面は、逆台形を呈し、幅は1.2～1.8m、深さは40～80cmを測る。溝底の標高は、北端で58.5m、屈曲



第33図　ＳＢ１・３平面図・断面図（1:100）

する地点で58.6m、東端で58.4mを測る。北から南へ、西から東へと低くなる。

出土遺物は多く、器種も多岐にわたる。（第47図）平安時代末から鎌倉時代前半の溝と推定される。

区画溝の性格を有し、南北がN19°E、東西がE24°Sの方向を持ち、後述する掘立柱建物A群の棟方向とほぼ合致する。

ＳＤ７　調査区西端から東に7.5m程伸びる。断面は、逆台形を呈し、幅は1.0～1.5m、深さは約60cmを測る。溝底の標高は、両端とも59.0mでほとんど変わらない。出土遺物(226～240)は、ＳＤ37とほぼ同時期のもので、これらの溝は同時に存在していたと推定される。ＳＤ37と同様に区画性を有する溝と考えられるが、この溝の方向（E44°S）と合致する棟方向を持つ掘立柱建物はない。

b．土坑墓

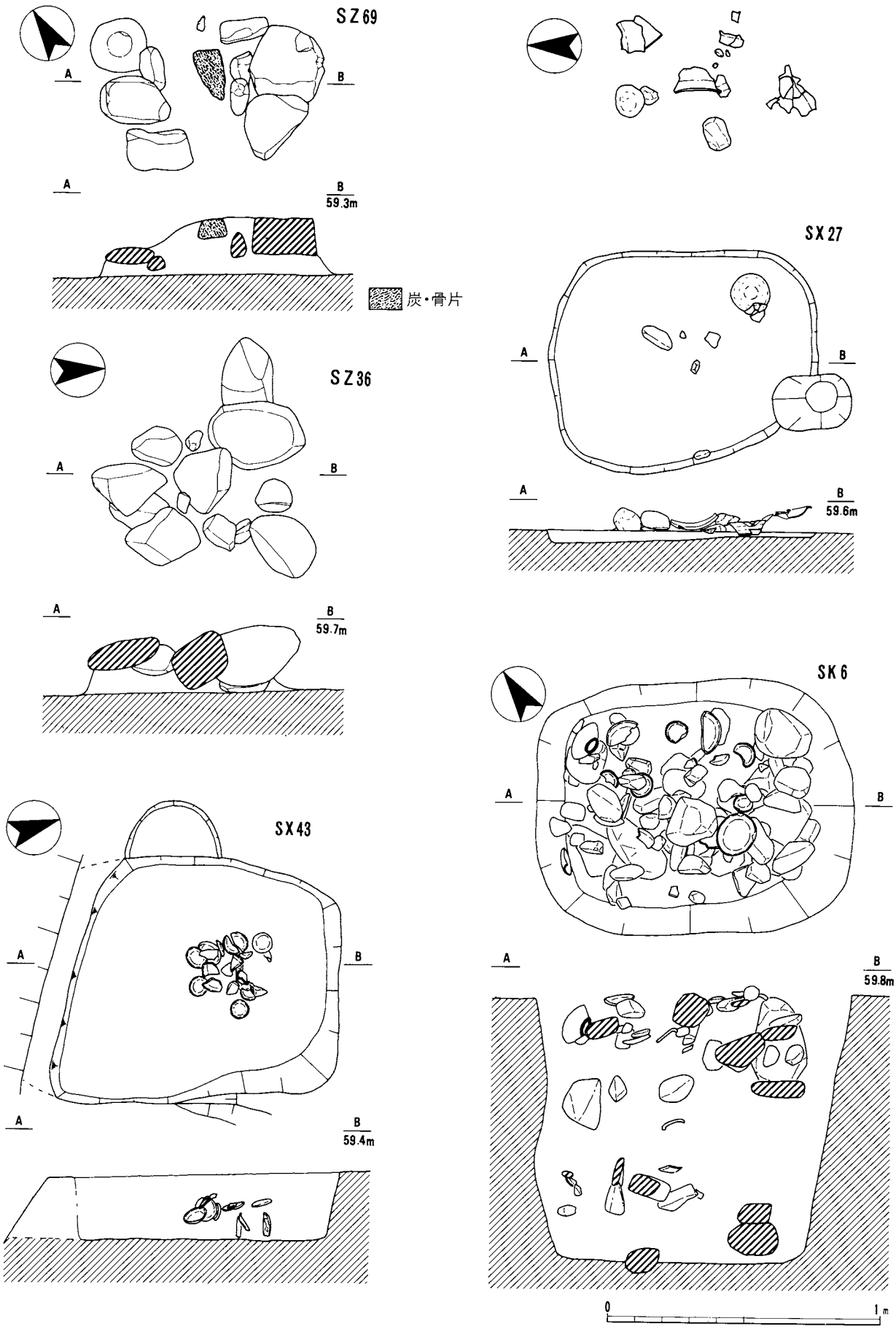
土坑墓と推定できるものは９基ある。時期的には、先述の掘立柱建物と同様の時期幅のものが見られる。これらは、調査区に点在して見られるもので、屋敷内に設けられた墓と思われる。

ＳＸ61　平面プランは楕円形である。規模は、長軸100cm、短軸60cm、深さ14cmを測る。供献用と考えられる土師器鍋・皿、山茶椀、山皿(158～161)が出土した。これらの遺物は、床面より少し浮いた位置に、長軸方向に沿って並んで出土した。平安時代末の土坑墓と推定する。

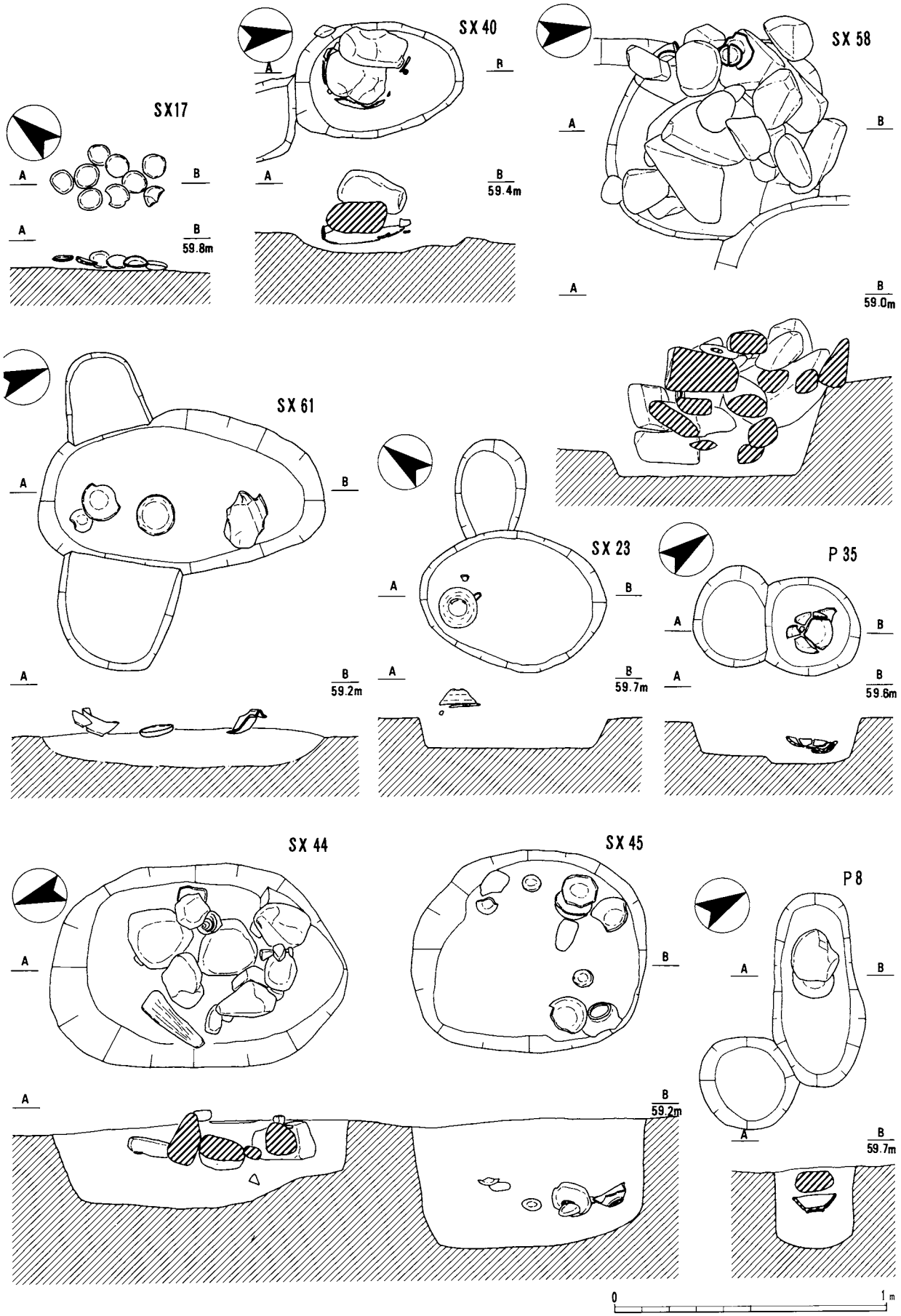
ＳＸ44　平面プランは楕円形である。規模は、長軸110cm、短軸75cm、深さ32cmを測る。5～25cm程の河原石、炭化した木片が、床面より浮いた位置に出土した。石は火熱を受けた痕跡が認められる。これらの石に混じって、ロクロ製土師器皿、山茶椀、砥石(162～164)が出土した。平安時代末の土坑墓と

遺構	規模			柱間寸法 (m)		棟方向		群	備考
No.	間数	桁行(m)	梁行(m)	桁行	梁行	方向	方位		
ＳＢ１	7 ×(4)	16.7	(8.4)	3.1−2.1−2.1−2.1−2.1−2.1−3.1	2.1−2.1−2.1−2.1	東西	E25°S	A	２面(東・西)廂、南東隅土坑有
ＳＢ３	(3)×(1)	(6.2)	(2.0)	2.1−2.0−2.1	2.3	東西	E20°S	A	南東隅土坑？有
ＳＢ５	3 × 2	6.1	4.6	2.0−2.0−2.1	2.3−2.3	東西	E24°S	A	
ＳＢ９	4 × 3	8.4	6.0	2.0−2.2−2.2−2.0	2.0−2.0−2.0	東西	E30°S	B	南東隅柱穴不明
ＳＢ11	3 × 2	6.8	3.8	2.3−2.3−2.2	1.7−2.1	東西	E31°S	B	
ＳＢ18	4 × 3	10.2	7.3	2.6−2.5−2.5−2.6	2.3−2.5−2.5	東西	E19°S	A	３面（東・北・西）廂、南東隅土坑有、平面形歪む
ＳＢ22	4 × 3	8.9	7.1	2.3−2.3−2.0−2.3	2.3−2.3−2.5	東西	E16°S	A	南東隅柱穴不明
ＳＢ24	(4)× 3	(6.8)	7.0	1.7−1.7−1.7−1.7	2.2−2.4−2.4	南北	N31°E	B	
ＳＢ25	(3)×(1)	(6.2)	(1.8)	2.0−2.1−2.1	1.8	東西	E22°S	A	南東隅土坑？有
ＳＢ28	3 × 2	6.6	3.6	2.2−2.2−2.2	1.8−1.8	東西	E32°S	B	ＳＢ29と建替
ＳＢ29	3 × 2	6.9	4.2	2.3−2.3−2.3	2.1−2.1	東西	E29°S	B	ＳＢ28と建替
ＳＢ30	2 × 2	4.8	4.0	2.3−2.5	2.0−2.0	東西	E22°S	A	
ＳＢ31	4 × 4	9.7	8.7	2.6−2.3−2.3−2.5	2.0−2.4−2.4−1.9	東西	E15°S	A	４面廂、南東隅土坑有
ＳＢ33	3 × 2	6.9	4.0	2.3−2.3−2.3	2.0−2.0	東西	E23°S	A	西面廂
ＳＢ34	3 × 3	5.7	5.4	1.9−1.9−1.9	1.8−1.8−1.8	東西	E31°S	B	
ＳＢ59	3 × 2	6.2	3.8	2.2−2.1−1.9	2.0−1.8	南北	N18°E	A	
ＳＢ60	3 × 2	7.1	4.9	2.4−2.4−2.3	2.4−2.5	南北	N９°E	—	
ＳＢ65	3 × 2	6.8	4.0	2.2−2.3−2.3	2.0−2.0	東西	E16°S	A	南西隅柱穴不明
ＳＢ66	2 × 2	4.4	4.0	2.2−2.2	2.0−2.0	南北	E16°E	A	ＳＢ67と建替
ＳＢ67	2 × 2	4.6	3.9	2.4−2.2	1.9−2.0	南北	E16°E	A	ＳＢ66と建替
ＳＢ73	(3)×(1)	(6.0)	(1.4)	2.0−2.1−1.9	1.4	南北	N16°E	A	
ＳＢ74	(3)×(3)	(6.2)	(5.3)	2.2−1.9−2.1	2.0−1.6−1.7	東西	E25°N	—	

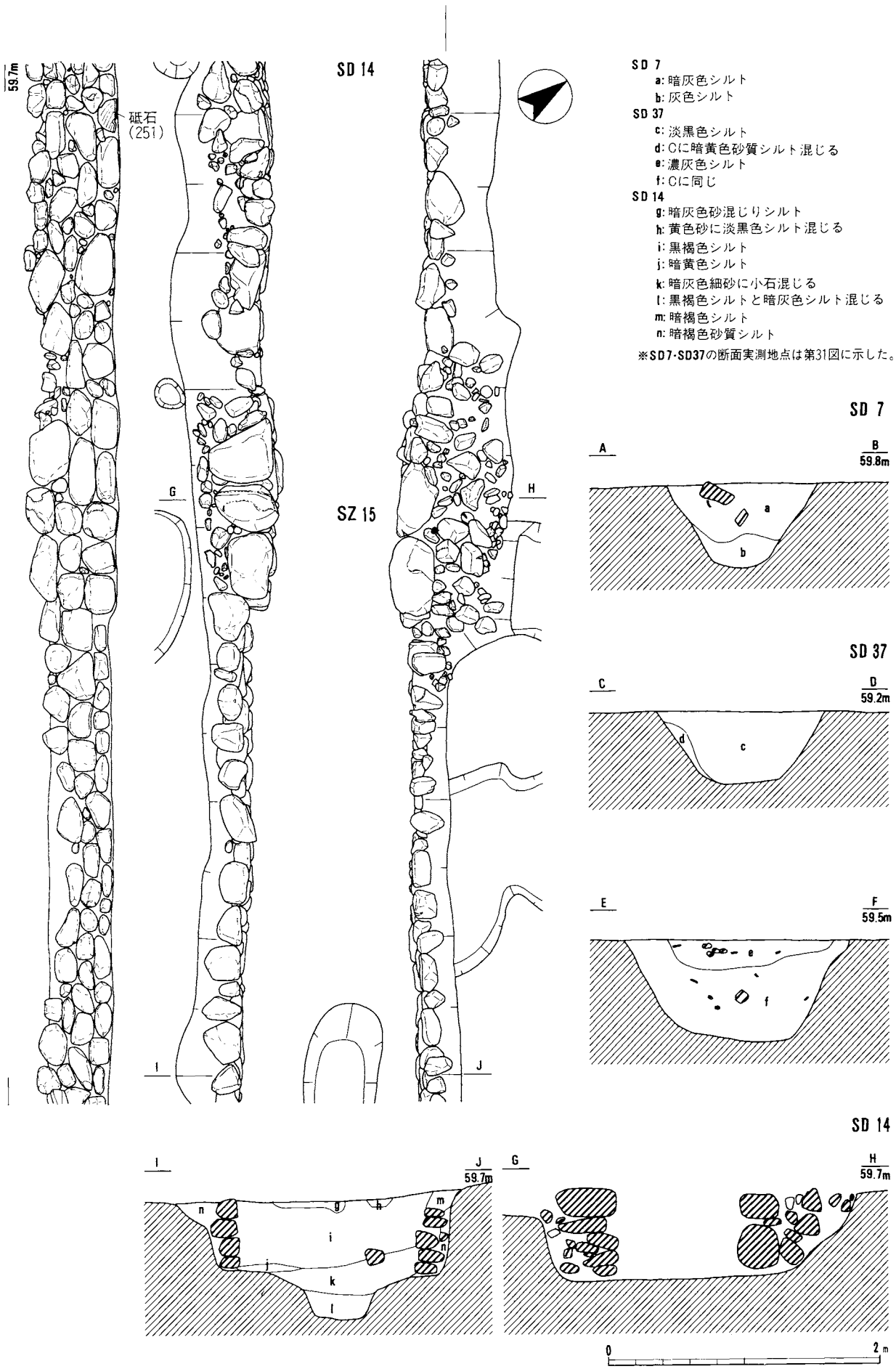
第８表　掘立柱建物一覧表　　※柱間寸法は北もしくは西から



第34図　集石遺構・土坑墓・土坑遺物出土状況（1:20）



第35図　土坑墓・ピット遺物出土状況（1:20）



第36図　溝平面図・立面図・断面図（1:40）

推定する。

ＳＸ45　ＳＸ44の南に並んで検出された。平面形は、略円形である。規模は、長軸85cm、短軸75cm、深さ45cmを測る。壁は急に立ち上がる。ほぼ完形の山茶椀、山皿(150～157)が出土した。ＳＸ44同様、平安時代末の土坑墓と推定する。

ＳＸ17　遺構は検出されなかったが、土師器小皿(133～141)が集中して出土した。平安時代末から鎌倉時代前半の土坑墓の存在が推定される。

ＳＸ43　南側をＳＤ14に切られるため全容を窺うことはできない。深さは、24cmを測る。平坦な床面を持つ。土師器皿・小皿(142～149)が集中して出土した。これらの遺物の下位からは、成人男子のものと思われる後頭部頭蓋骨[③]が床面に出土した。頭蓋骨は火熱を受けた痕跡はない。「首塚」が想定されるが、土坑が南へ延び全身が埋葬されていた可能性も残す。平安時代末から鎌倉時代前半の土坑墓と推定する。

ＳＸ58　平面形は、隅丸方形である。規模は１辺75cm、深さ32cmを測り、石積みが見られた。これらの石積みに混じって、土師器鍋・皿・小皿、山茶椀、青磁(168～175)が出土している。鎌倉時代前半の土坑墓と推定する。

ＳＸ23　平面形は楕円形である。規模は長軸68cm、短軸52cm、深さ11cmを測る。検出面より浮いた位置に、逆立状態の山茶椀(166)とその下から短刀(167)が出土した。この土坑に伴うものと推定する。鎌倉時代中頃の土坑墓と推定する。

ＳＸ27　平面形は隅丸長方形である。規模は、長軸100cm、短軸78cm、深さ4cmを測る。正立状態の山茶椀(165)が出土した。鎌倉時代中頃の土坑墓と推定する。なお、ＳＸ27の西側には、土師器鍋(255)と挙大の石が集中して見られ、ＳＸ27が西側へ広がる可能性や別の土坑墓が存在した可能性が指摘できる。

ＳＸ40　平面形は楕円形である。規模は、長軸62cm、短軸42cm、深さ6cmを測る。土師器鍋・小皿、北宋銭「大観通宝」(176～180)が出土している。鍋は、人頭大の河原石２個に潰された状態で出土した。小皿は、鍋の中で確認された。鎌倉時代後半の土坑墓と推定する。

ｃ．土坑

多くの土坑が検出された。以下、主なものについて記述する。

ＳＫ６　平面プランは隅丸長方形である。規模は長軸116cm、短軸92cm、深さ96cmを測る。多くの河原石が入る。これらの石に混じって完形に近い土師器皿・小皿、山茶椀(181～189)が出土した。遺物の出土は、埋土上位に多く見られる。鎌倉時代前半の土坑と推定する。

ＳＫ51～57　調査区東側南端に集中して検出された土坑群である。平面プランは、楕円形もしくは隅丸矩形で、深さは30～76cmのものがある。ＳＫ51だけが長軸を東西に持つ。ＳＫ51からは、土師器皿、山茶椀(195, 196)、ＳＫ52からは、土師器小皿、山茶椀、山皿(197～199)、ＳＫ57からは、土師器小皿・鍋、山茶椀、白磁椀、青磁皿(190～194)などが出土している。いずれも鎌倉時代前半の土坑と思われ、ほぼ同時期の土坑群と推定される。

ＳＫ13　平面プランは隅丸長方形である。規模は長軸165cm、短軸95cm、深さ77cmを測る。壁は急に立ち上がる土坑で、埋土中位から焼土塊が出土した。出土遺物には、土師器鍋、ロクロ土師器皿、山皿(213～215)などがある。

ＳＫ70・71　調査区北東隅に並んで確認された。平面プランは共に楕円形である。ＳＫ70は、長軸125cm、短軸70cm、深さ100cmを測る。ＳＫ71は、長軸120cm、短軸90cm、深さ103cmを測る。共に深い土坑で、焼土が僅かに確認されている。

ＳＫ62～64　平面プランは略円形で、規模は、径95cm～120cm、深さ33～42cmを測る。２ｍ程の間隔を置いて南北に並ぶ。性格は不明である。調査区内には、これらとほぼ同規模の土坑が多く見られる。

ｄ．ピット

Ｐ８　正立状態の山茶椀(225)とその上位から人頭大の石が１個出土した。建物としてまとまらないピットであり中世墓の可能性も指摘できる。鎌倉時代前半のピットと推定する。

Ｐ35　破損をするが、ほぼ完形の土師器皿(222)が正立の状態で出土した。このピットもしくは、切り合うピットが、ＳＢ34に伴う柱穴になる。

③　近世の遺構

調査区を東西に走る石組溝１条がある。

ＳＤ14　石組は両壁に見られ、底にはない。幅は掘形で1.8～2.5m、石組の内側で1.3m程である。深さは、60～80cmを測る。溝底の標高は、西端で、58.9m、東端で58.3mである。途中、南に向かって分岐する溝が１条ある。西端近くには、他より大きな石が使われている部分があり、橋（ＳＺ15）が設けられていたと考えられる。この橋の位置は、調査前の農道の位置とほぼ一致する。

④　時期不明の遺構

集石遺構２基がある。

ＳＺ36　ＳＢ31の東側に検出された。掘形は確認されず、検出面上に集石が見られた。

ＳＺ69　ＳＨ50の石組炉の南側で検出された。掘形は確認されず、検出面より少し浮いた位置に集石が見られた。集石は東西に向かい合う形で並んでおり、その間に炭及び細骨片が確認された。ＳＨ50に伴うものもしくは、中世墓などの可能性が考えられる。

（２）　Ａ地区の遺物

縄文時代中期後半と平安時代末から鎌倉時代の土器を中心に多量の遺物が出土した。

①　縄文時代中期後半の遺物

縄文時代中期後半から終末に比定される遺物が整理箱で40箱程出土した。

中期後半の土器は、土坑及び包含層出土のものが中心である。口縁部がキャリパー状に内弯する咲畑式の深鉢が多く、勝坂式や曽利系の関東・中部地方の影響下のものも少数ではあるが見られる。

中期末の土器は、竪穴住居及び包含層出土のものが中心である。中でもＳＨ48からは、整理箱にして15箱ほどの遺物がまとまって出土した。これらは残りも良く一括性も高いもので注目される。

石器は、土器に比べ出土量が少ない。

今回は、良好な一括資料と考えられるＳＨ48出土遺物と石器に絞って報告を行い、他は別稿を期したい。

ａ．ＳＨ48出土遺物

全て中期末に比定されるものである。土器には、深鉢、鉢、浅鉢がある。以下器種別に報告する。

深鉢　器形と文様からＡ～Ｅの５類に大別される。

Ａ類は有文の平口縁深鉢である。

(2～4,13～19) は、口縁部が外傾もしくはゆるやかに外反し、口縁部文様帯が隆帯による長楕円形区画文とそれを繋ぐ橋状突起により構成される深鉢で、Ａ類の主体を占めるものである。

区画文の内部には、羽状沈線、もしくは、斜行沈線を施す。橋状突起は、上部に凹点を持つ。(16)は凹点が認められないもので、口縁端部の形態も他と異なり、やや窪んだ端面を有する。区画文と突起は基本的に４単位あるものと推定されるが、(3)では７単位に復元された。

これらの一群は、口縁部文様帯が、口縁直下に施されるもの（13～16)、やや下がった位置に施されるもの(4,17)、明らかに一段下がった位置に施されるもの(2,3,18,19)とに分けられる。(2,3,18,19)は、一段下がった部分に縄文を施す点で共通し、(2)はこの部分に沈線による長楕円形区画文を描き、口縁部文様帯を２段に構成する。

体部文様帯は、口縁部文様帯直下に施される。垂下沈線、垂下する蛇行沈線が見られる。沈線間には縦方向の縄文を充塡するものがある。(2)は、逆Ｕ字状に閉じる２本の平行する沈線と、僅かではあるが蛇行沈線が確認される。

(1)は、口縁部がやや内弯ぎみに立ち上がる点と区画文のつなぎ部が橋状把手になる点で先述の一群と異なる。これらの特徴は、後述の浅鉢と考えたものと共通する要素であるが、頸部の屈曲が弱く、深鉢と考えておく。橋状把手は、上下２箇所に凹点を持つ。

(20・21) は、沈線と隆帯により長楕円形区画文が施される。(20) の沈線は、ナデによるものである。

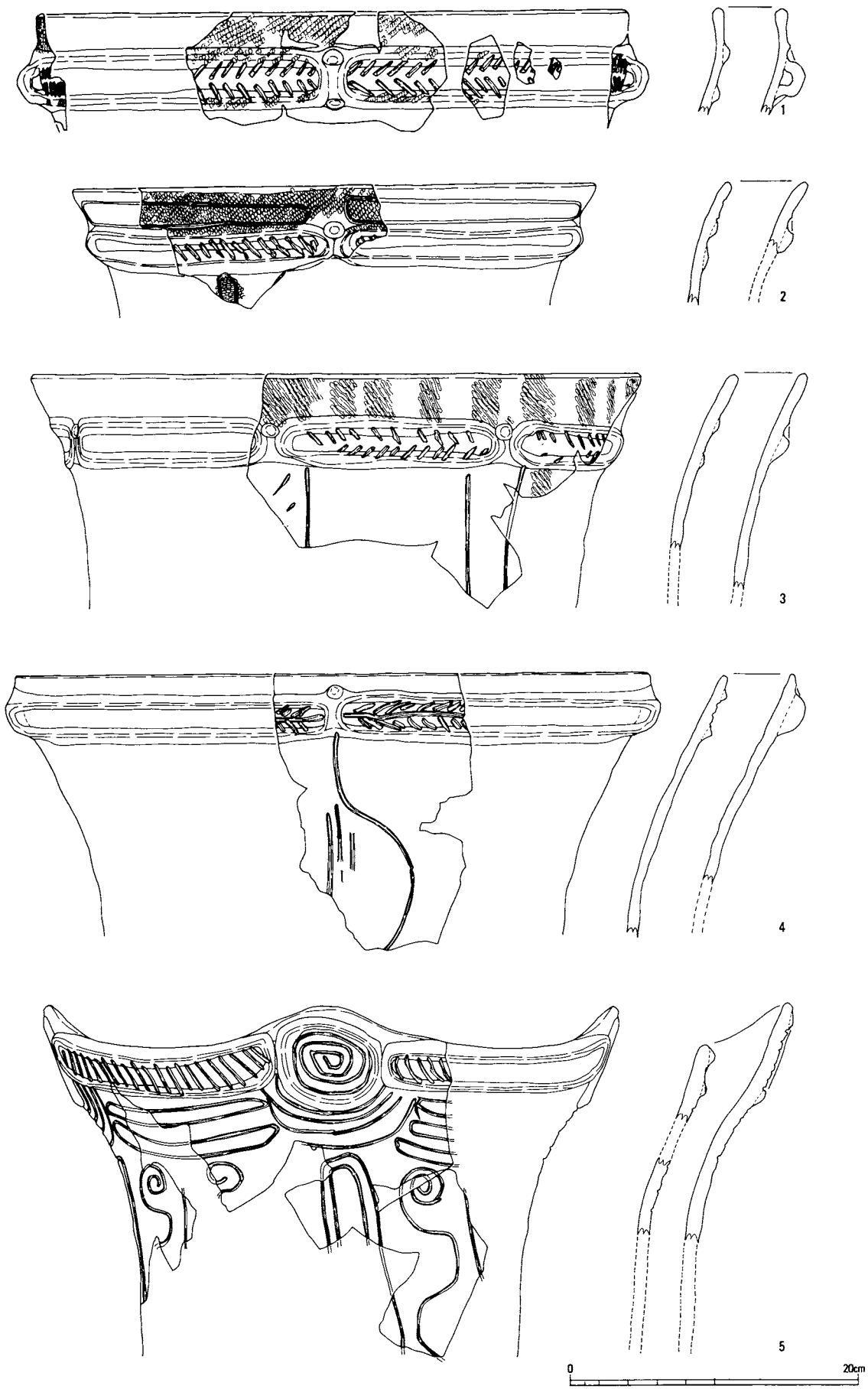
(24) は、沈線により楕円形区画文が施される。

(22・23) は、波状の隆帯が見られる。(22)は、隆帯の上位に三重の同心円弧を沈線により描き、下位には、隆帯と平行する多重の波状沈線を施す。

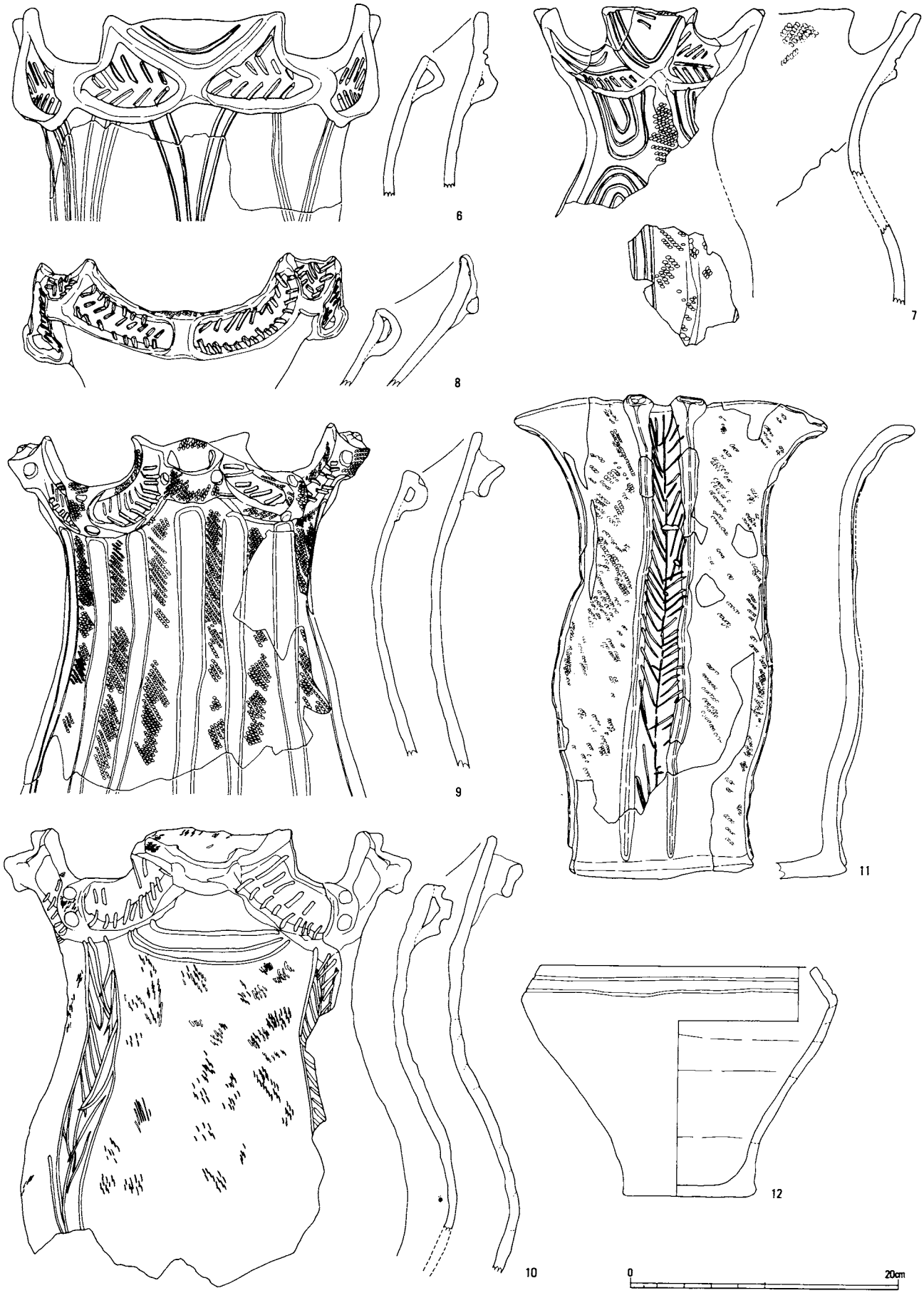
(29) は、口縁端部外面に隆帯を持ち、その下位に横方向の多重沈線を施す。

(30) は、櫛状工具による条線で文様が施される。

(11) は、口縁部が相対する２方向で、注ぎ口状

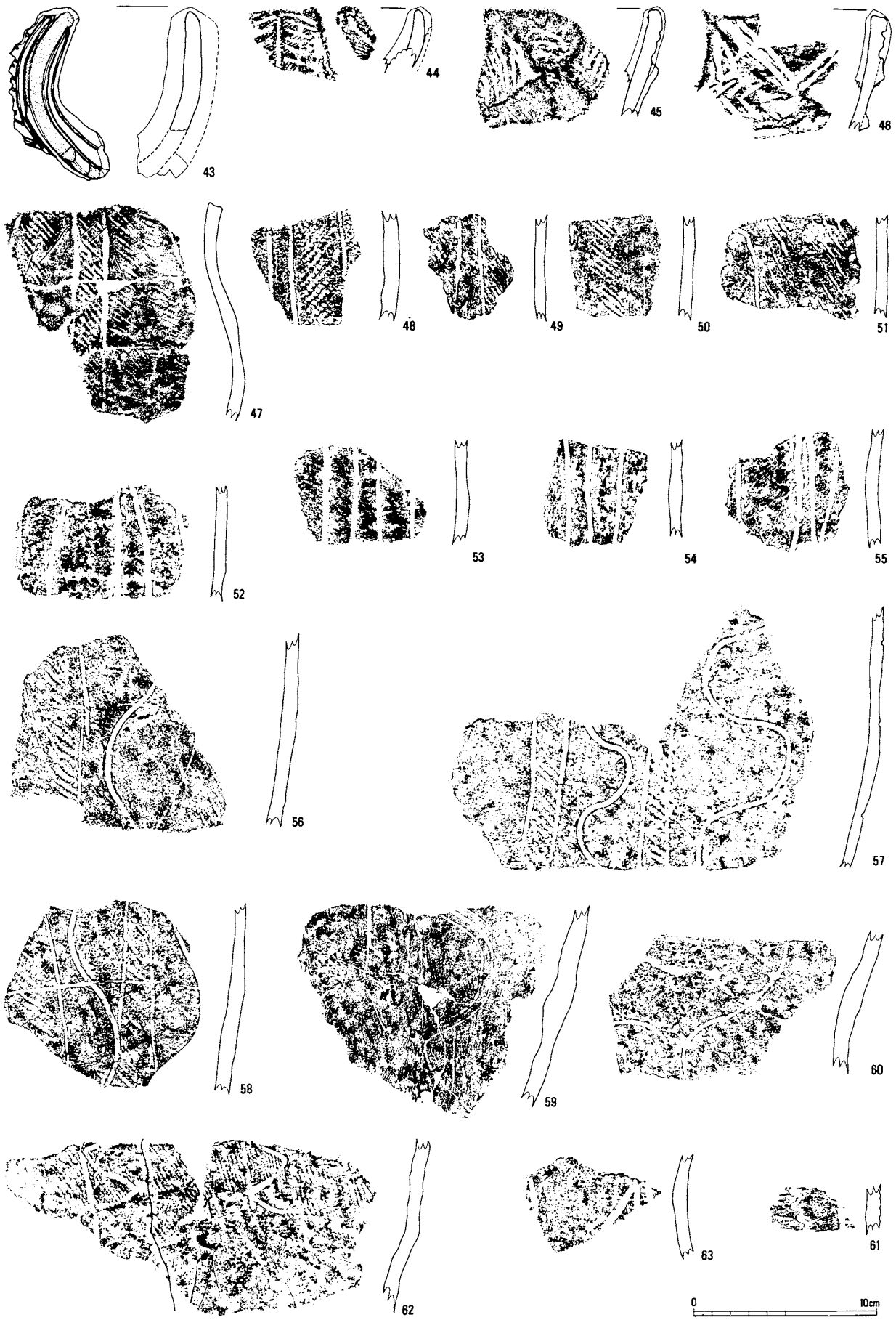


第37図　ＳＨ48出土遺物実測図（1:4）

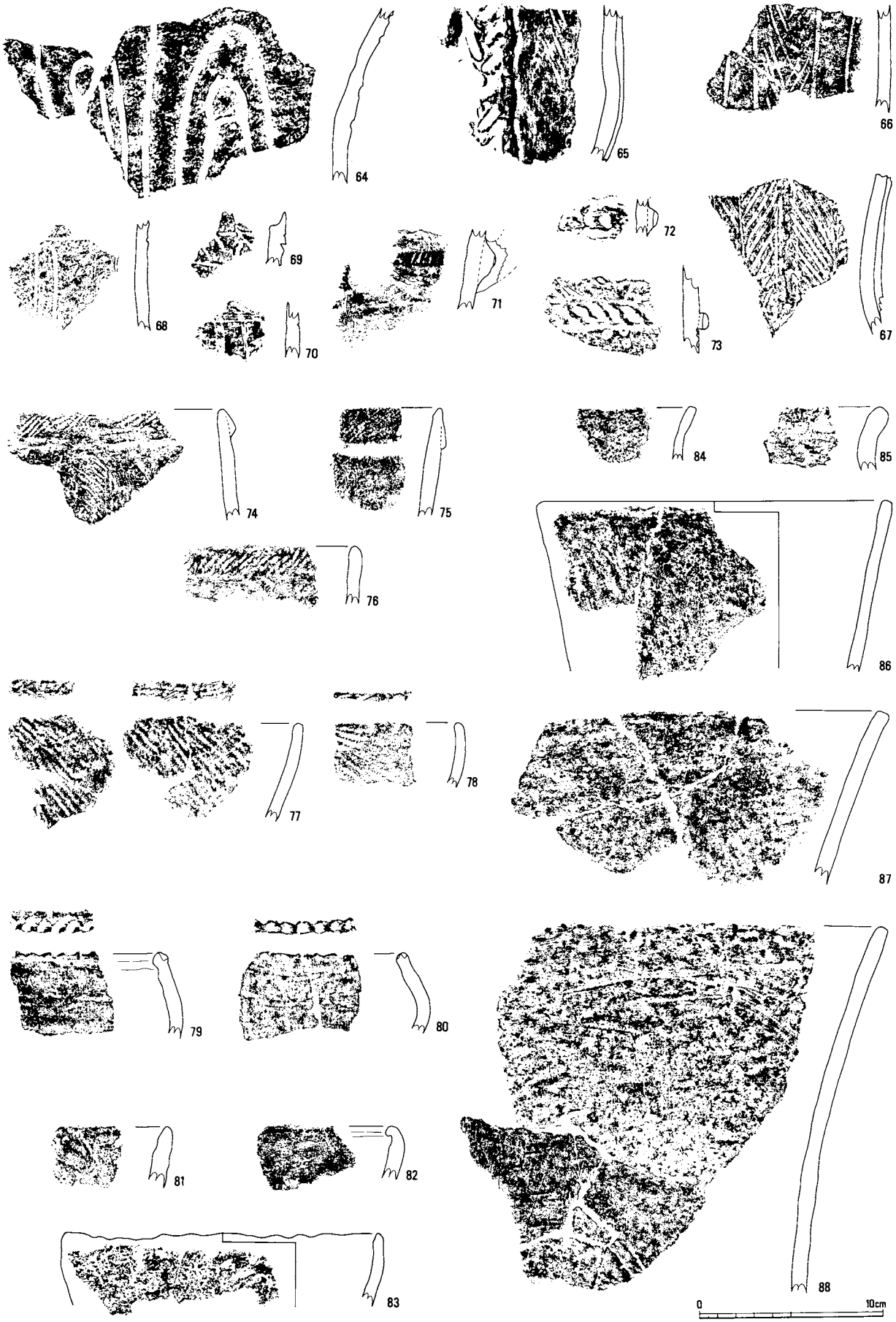


第38図　ＳＨ48出土遺物実測図（1:4）

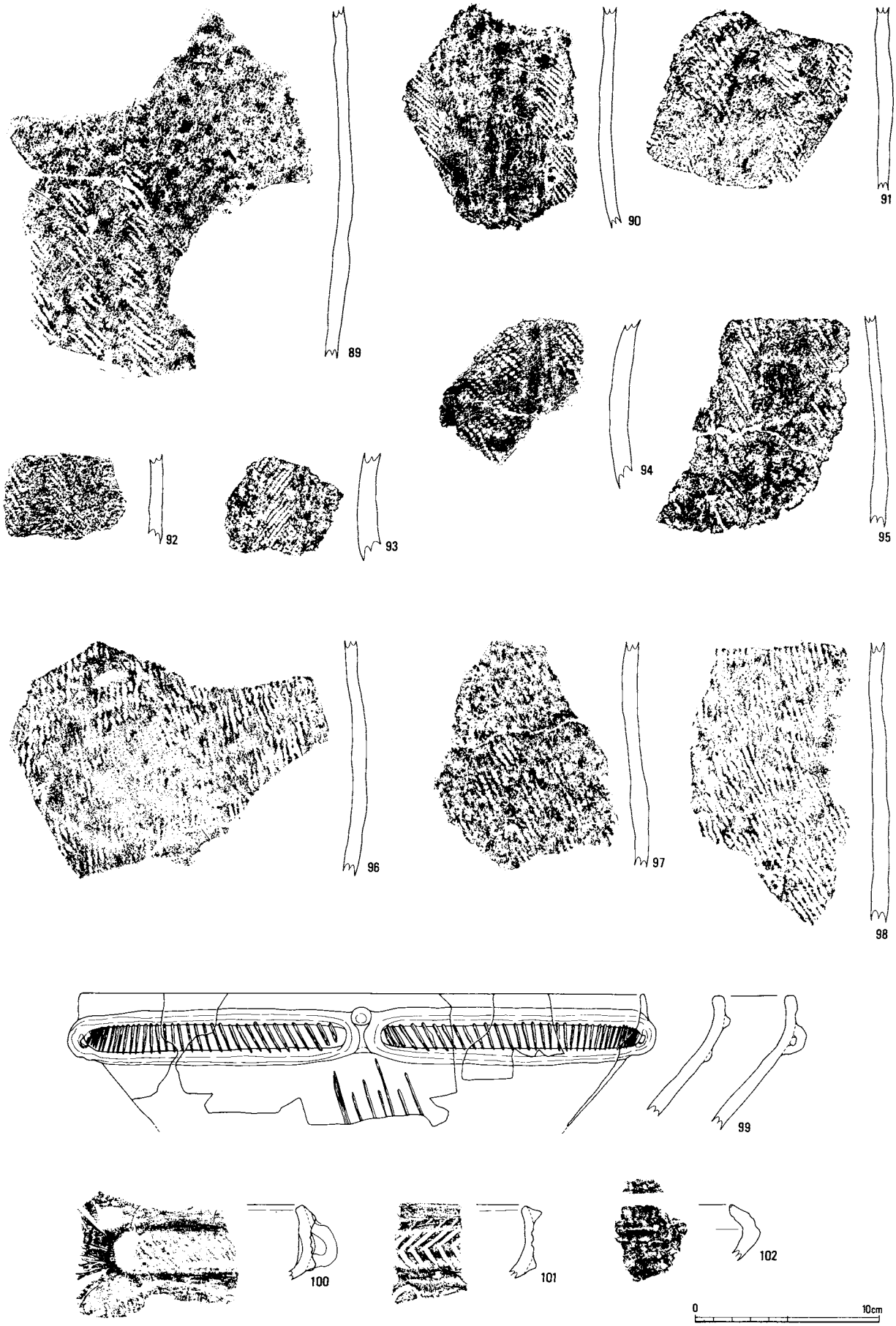
第39図　ＳＨ48出土遺物実測図（1:3）



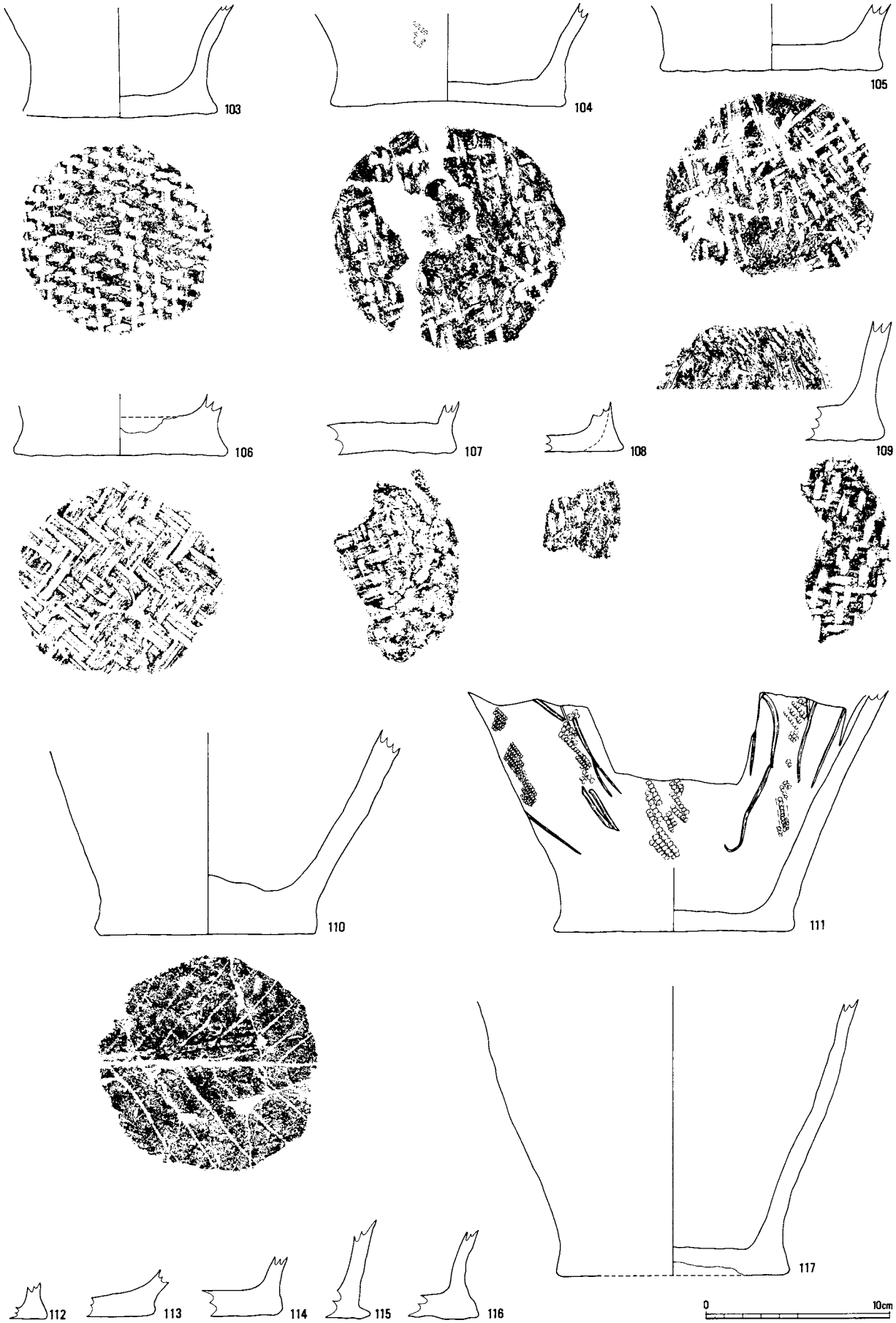
第40図　ＳＨ48出土遺物実測図（1:3）



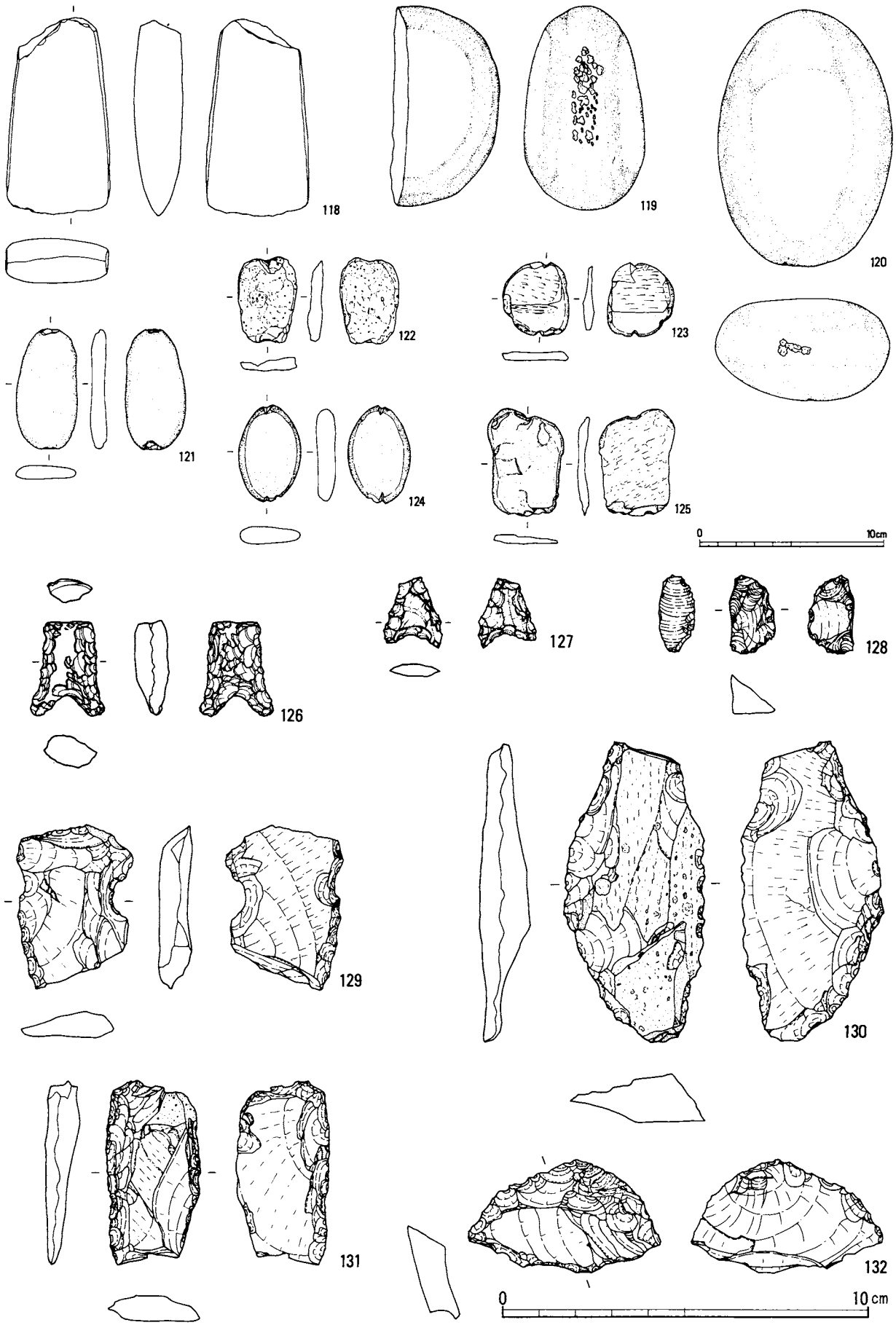
第41図　ＳＨ48出土遺物実測図（1:3）



第42図　ＳＨ48出土遺物実測図（1:3）（99)は（1:4）



第43図　ＳＨ48出土遺物実測図（1:3）



第44図　A地区出土石製品実測図（118～125＝1:3，126～132＝2:3）

に強く外反する深鉢である。注ぎ口状になる口縁端部外面から底部にかけては、垂下する隆帯を施す。残る2方向には、先端に凹点を施した垂下する2本の隆帯を平行に施し、その間に羽状沈線を施す。

B類は有文の波状口縁深鉢である。

(5)は、ゆるやかにくびれる頸部から斜め上方に内弯気味に開く4単位波状口縁深鉢である。波頂部下に隆帯による円形区画文を施し、その内部には沈線による渦巻文が描かれる。円形区画文は、隆帯による長楕円形区画文で結ばれる。長楕円形区画文内部には、斜行沈線が施される。

本例は、連弧文から変形したと思われる頸部文様帯を持つ。沈線によるもので、波頂部下には四重の弧線を描き、長楕円形区画文下には、二段ないし三段の長楕円形区画文を描く。

体部文様帯は、波頂部下では上部を逆U字状に閉じた平行する2本の垂下沈線を二重に描く。長楕円形区画文下では上部を蕨状に巻いた2本の蛇行沈線が向かい合い、その間には1条の垂下沈線が見られるが全容は不明である。

(38～40)は、波頂部付近に沈線による渦巻文が見られる。

(36)は、頸部から斜め上方に内弯気味に開く4単位波状口縁深鉢と推定される。波頂部下には幅が広く浅い隆帯により、扇形の区画文が施される。この隆帯は引き続き隣接する区画文を形成する。扇形の区画文上端の隆帯には連続する刺突が見られ、かなめに当たる位置には、左右に凹点を持つ橋状突起がある。また、区画の内部には円孔が見られる。隣接する区画文内部には、隆帯に沿った沈線と羽状沈線が施される。

体部文様帯は、口縁部文様帯直下に施される。波頂部下には、3本の垂下沈線が見られその左右には逆U字状になる2本の平行する垂下沈線が施され、その間に羽状沈線を施す。

本例は、胎土・焼成が著しく良く、搬入品と推定される。

(37)は、(36)と同様に、口縁部文様帯に円孔を持つものである。

(42)は、口唇部及び口縁端部内外面に縄文が施される波頂部片で、沈線と隆帯により弧状の文様が描かれる。隆帯の下方は、円孔になるものと推定される。

C類は有文の突起状山形口縁深鉢である。

半完形に復元できたものが5個体ある。

(6～10)は、山形部に横位の橋状把手を持つもの

No.	登録No.	器種	出土位置・遺構	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
118	055-01	磨製石斧	J－17 包含層	不明	10.7	5.6	2.7	289.90	
119	040-01	磨石	F－17 包含層	砂岩	10.9	5.8	6.6	578.66	敲打痕有
120	038-06	磨石	I－17 包含層	砂岩	13.9	9.6	5.6	1,060	敲打痕有、磨滅著しい
121	095-02	打欠石錘	H－14 包含層	片岩	6.6	3.3	0.9	29.36	
122	095-04	石錘	E－14 SD37	火山岩	4.7	3.2	0.8	17.98	切目石錘？
123	055-04	切目石錘	K－16 SH48	粘板岩	4.0	3.6	0.6	9.96	
124	055-03	切目石錘	表採	粘板岩	5.2	3.4	1.0	27.84	
125	095-03	打欠石錘	G－15 SK39	粘板岩	5.8	4.2	0.6	17.57	
126	052-07	異形局部磨製石器？	J－22 包含層	チャート	2.58	2.05	0.97	4.82	縄文時代早期？
127	052-06	石鏃	D－15 包含層	サヌカイト	1.96	1.64	0.38	0.85	凹基無茎式
128	096-05	楔形石器	表採	黒曜石	2.15	1.25	1.05	2.35	
129	096-02	石匙	H－21 包含層	サヌカイト	4.5	3.2	0.9	13.65	横長剥片素材
130	096-01	石匙	E－14 SD37	サヌカイト	8.2	3.9	1.4	38.57	横長剥片素材
131	096-03	削器	D－15 包含層	サヌカイト	2.6	5.0	0.9	13.23	横長剥片素材
132	096-04	削器	G－15 SK39	サヌカイト	3.1	5.3	1.0	13.99	横長剥片素材

第9表　石製品観察表

(8～10) と持たないもの(6・7)に分けられる。

(7) は、強くくびれる頸部から斜め上方にひらく。4単位山形口縁深鉢である。体部下半で下膨れになる。山形部には、隆帯によるV字状の区画文が施され、突起間には、口縁部に平行する楕円形区画文が施される。共に口縁端部外面に隆帯は見られない。V字区画文内部には、隆帯に沿うV字状の沈線が描かれ、楕円形区画文内部には、羽状沈線が施される。

体部文様帯は、口縁部文様帯直下に施される。V字状の区画文下には、1本の垂下する隆帯が見られる。楕円形区画文下には、頸部を境に、上下対になるU字状の沈線が三重ないし四重に施される。

(6) は、山形部にV字状の区画文を持つ点で、(7) と共通する。楕円形区画文を見ると、(7) では、V字状区画文の左右に施されていたものが、(6) では、V字状区画文の下を通り、器面を一周する形に施される。結果、V字状区画文は、ややせり上がる。

また、一周する長楕円形区画文を区切ろうとする意識のためか、V字状区画文下と、突起間中央に縦位の橋状把手を施す。

体部文様帯は、V字状の沈線が、二重ないし三重に施される。体部下半には、(7) と同様に、頸部を境に、上下対になる文様が施されると推定される。(8,9,10)は、山形部の横位橋状把手を、口縁に平行する長楕円形区画文で繋ぐ4単位山形口縁深鉢である。(8) は、頸部から、斜め上方に内弯気味にひらくもので、口縁部は上方から見るとほぼ方形を呈し、各コーナーに山形部を持つ。頸部以下では円形になる。(9, 10) は、ゆるやかにくびれる頸部から斜め上方にひらき、体部下半で下膨れになる。いずれの深鉢も、楕円形区画文内部には羽状沈線を施すが、一部、羽状沈線が3段に施されたり、斜行沈線が施されたりする部分が見られる。楕円形区画文中央には、縦位の橋状把手が見られる。これは、先述の(6) と共通する要素である。橋状把手の凹点に着目すると、(9) では、全ての把手に凹点が見られ、(10) では、縦位の把手だけに見られる。(8) では、凹点が見られない。

体部文様帯は(9,10)に見られる。(9) は、上部が逆U字状に閉じる2本の平行する垂下沈線が、各橋状把手下及びその間にもう1単位、合計16単位施され、沈線間外側には縦方向の縄文が充填される。

(10)は、縦位橋状把手下に2本の平行する垂下沈線が施され、その内部には羽状沈線が施文される。山形部下には、多重の弧状沈線が施される。これは、(5) の波頂部下の頸部文様に類似する。

(43～46) は山形部の破片である。(43,44) は、側縁の肥厚が顕著で、肥厚部外面に文様を持つ。

(47～73) は、A～C類の体部片である。

(52～55) は、胎土・焼成・色調などから同一個体と思われる。(56～58) も同一個体と思われ、(2) の体部と推定される。(60)は、(4) の体部と推定される。(62)は、垂下沈線・蛇行沈線が見られ、沈線の上から横方向の縄文を施文する。(64)は、紡錘文的な文様が施され、後期への移行を窺せる。(65)は、垂下する2本の隆帯間に、幅の広い羽状沈線を施す。(70)の沈線は、半截竹管の押し引きによる施文と思われ、両端が鋭く深くなる。(71)は橋状把手になると推定される。(73)は、刻みを持つ隆帯下に竹管による刺突が行われる。

D類は縄文だけで器面を飾る深鉢である。

(74～76) は、口縁端部外面を肥厚させ、この部分に横方向の縄文を施文する。(74)では、以下に、縦方向の縄文が帯状に施文される。

(77,78) は、口唇部及び外面全体に縄文が施文される。

(89～98) は、D類の体部である。

縦方向の縄文が、帯状に施文されるもの (89～95)、外面全体に縄文が施文されるもの (96～98) がある。

E類は無文の深鉢である。

口縁端部に刻みを持つもの(79,80)、口縁端部に面を持つもの(84～88)、持たないもの(81～83) がある。

鉢　2個体ある。

(12)は、「く」字状に内折する口縁部を持ち、口縁端部は面を持つ。口縁部外面には、器面を一周する横方向の沈線が2条施される。

(102) は、「く」字状に内折する口縁部片で、口唇部には、僅かに刻みが確認される。

浅鉢　3個体ある。

(99)は、最も残りの良いもので、体部は直線的に

外傾し、口縁部は受け口状を呈する。口縁端部は面を持つ。口縁よりやや下がった位置に隆帯による長楕円形区画文とそれを繋ぐ橋状把手が施される。区画文内部には、斜行沈線が描かれる。橋状把手は上部に凹点を持つ。体部は無文で、搾痕が見られる。(100,101)は、受け口状口縁部片であり、浅鉢と考える。口縁直下に(99)と類似する口縁部文様帯が見られる。この2例には、口縁部文様帯直下に体部文様帯が確認される。

底部　平底で、底部直上にくびれを持つ点で共通する。半数に網代痕が確認される。(110)は木葉痕が見られる例である。(111)は、(2)の底部と推定される。

脚台になるものは確認されない。

b．石製品

石錘5点、磨石・石匙・削器各2点、磨製石斧、石鏃・楔形石器各1点の他、異形局部磨製石器と推定されるもの(126)1点が出土している。大半が包含層出土であるが、竪穴住居及び埋甕検出地点周辺に見られるもので、(126)を除き、全て、縄文時代中期後半の石製品と考えてよい。遺物の出土地及び詳細は第9表石製品観察表を参考されたい。

②　平安時代末から鎌倉時代の遺物

当該時期の遺物には、土師器、陶器、磁器、石製品、鉄製品がある。大半は、土師器皿、山茶椀が占める。

土師器には、鍋・皿・小皿がある。鍋は、伊藤編年（仮）A段階〜第2段階[4]のものが見られる。皿・小皿は、器壁が厚く、口縁部に強い横ナデを施すものが一般的で、(234,258,259)では、横ナデが二段に行われる。(176,177)は、横ナデの見られない例で、鎌倉時代後半の鍋(180)と共伴するものである。その他、ロクロ製の小皿がある。

陶器には、山茶椀・山皿・鉢・壺・甕がある。山茶椀は、12世紀中頃から13世紀中頃のものが見られる。大半は常滑産と推定される。底部及び体部外面に墨書を行うものが多く、なかでも「侍器」(281)は、階層を窺わせる墨書であり、注目される。

青磁・白磁は比較的まとまった量が出土している。

石製品には、鍋・甑・硯・砥石がある。(305)は、底部に径8㎜程に復元できる小円孔を穿った痕跡が認められ、甑として使用されたものと考える。

鉄製品には、短刀・釘がある。

その他、遺物の出土地及び詳細は、第10〜13表遺物観察表を参考されたい。

C．近世の遺物

石組溝ＳＤ１４から、土師器、陶器、磁器、瓦片、石製品などが出土した。土師器小皿(241〜245)には、口縁部に炭化物が付着するものがあり、灯明皿と考えられる。石臼(251)は、ＳＤ14の石組に使用されていたものであり、中世後期の可能性もある。

（3）B地区の調査

A地区の東約35mに位置する調査区である。A地区とほぼ同時期の遺構・遺物が検出された。

縄文時代中期後半の遺構は検出されなかったが、遺物の出土を見た。A地区で検出されたこの時期の遺構は、さらに東へ拡がる可能性が指摘される。

平安時代末から鎌倉時代の遺構は多数確認された。ＳＸ78は、ほぼ完形の山茶椀(314,315)が2点出土しており土坑墓と推定される。ＳＫ77は、これとほぼ同規模の土坑で、土師器小皿(311,312)が2点出土している。土坑墓の可能性もある。ＳＸ79は、炭・骨片が多量に出土した。古銭が4枚出土しているが、判読できない。

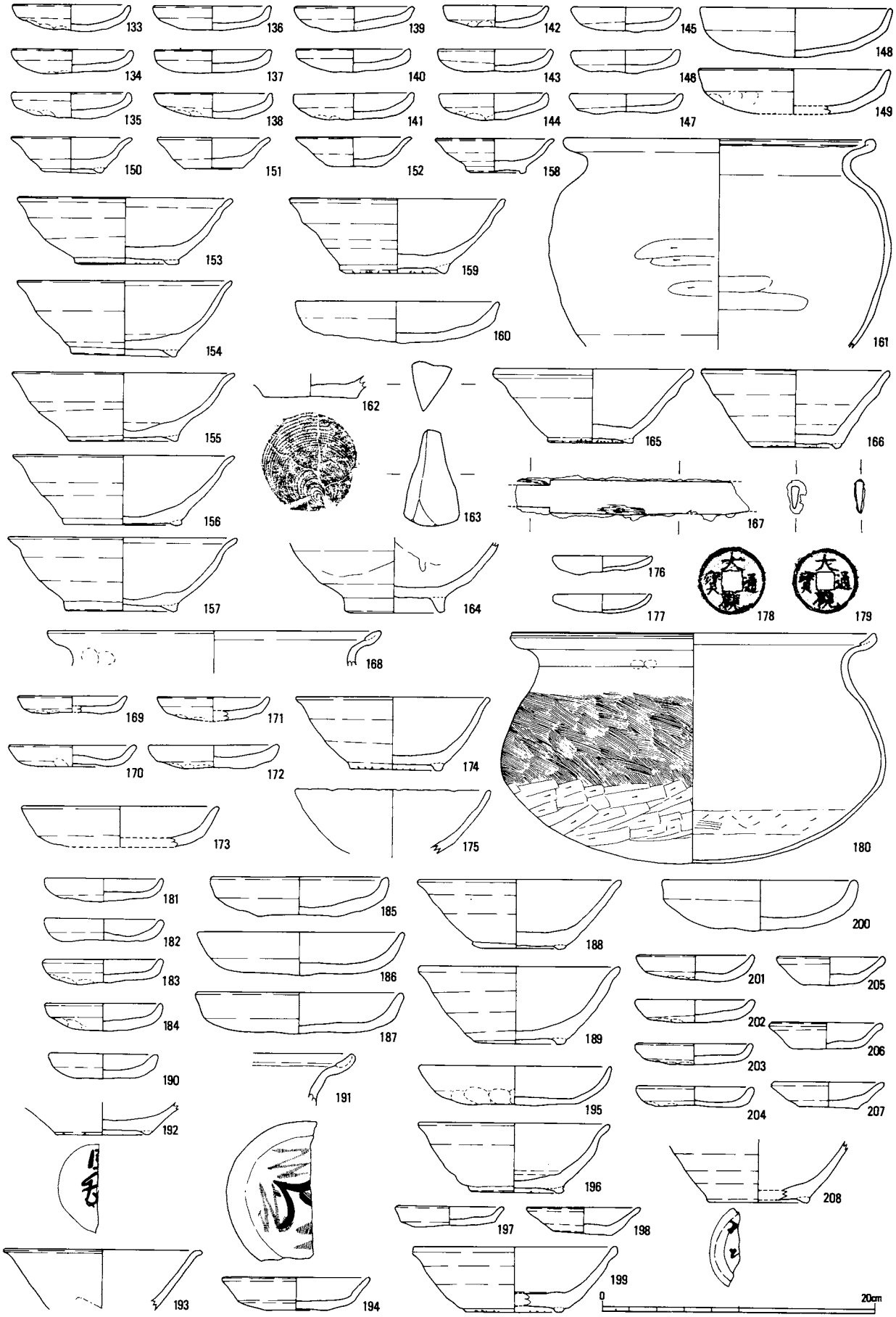
A地区で検出された近世の石組溝（ＳＤ14）の延長線上に、ＳＤ80が確認された。溝底の標高は58.0mであり、ＳＤ14東端の標高より約30cm低い。石組や近世の遺物の出土が見られず、断定はできないが、これらの溝は繋がる可能性がある。

（4）C地区の調査

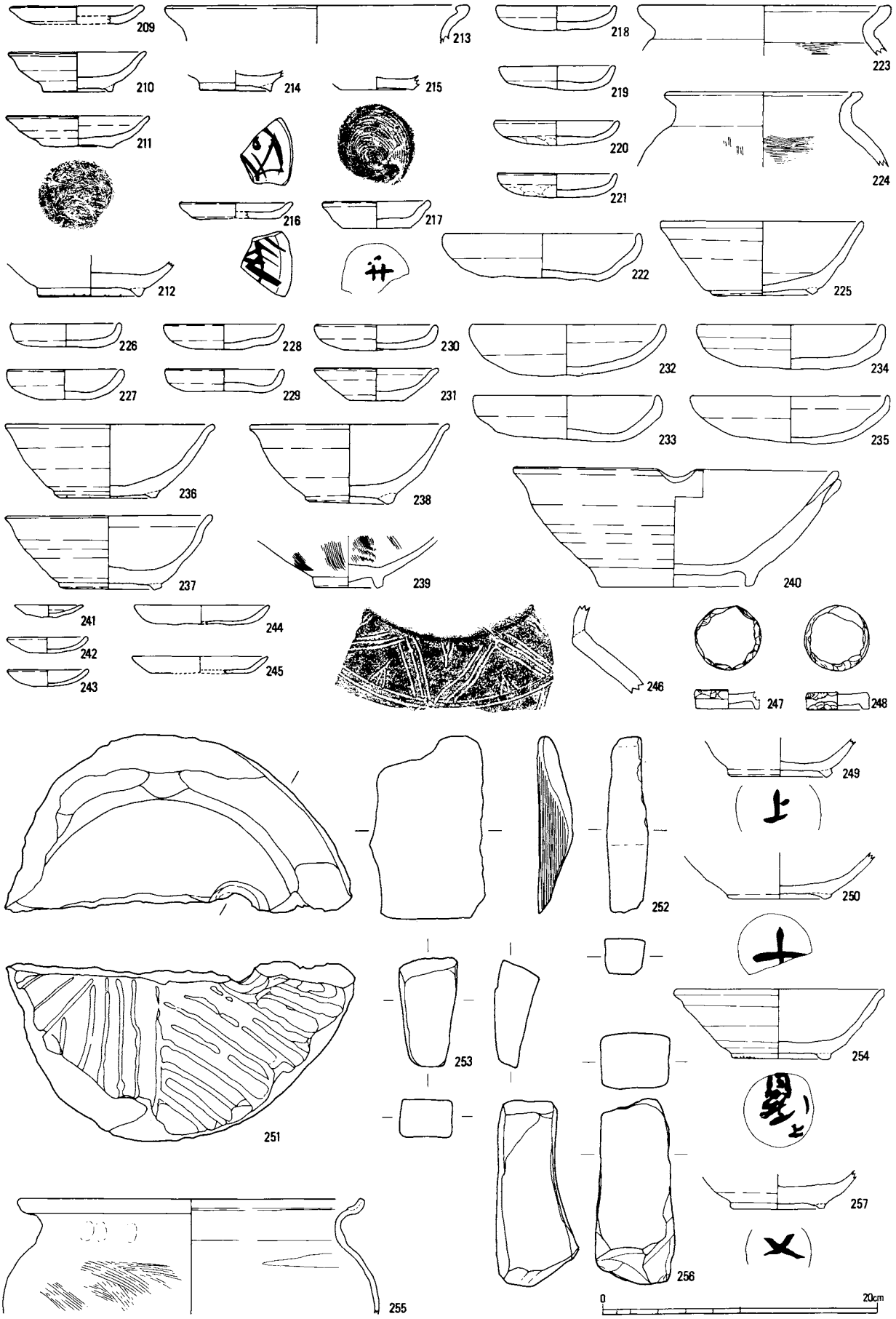
A地区の北約50mに位置する調査区である。

縄文時代中期後半の遺構・遺物は確認されず、A地区で検出されたこの時期の遺構は、北へは大きく拡がらないと考えられる。

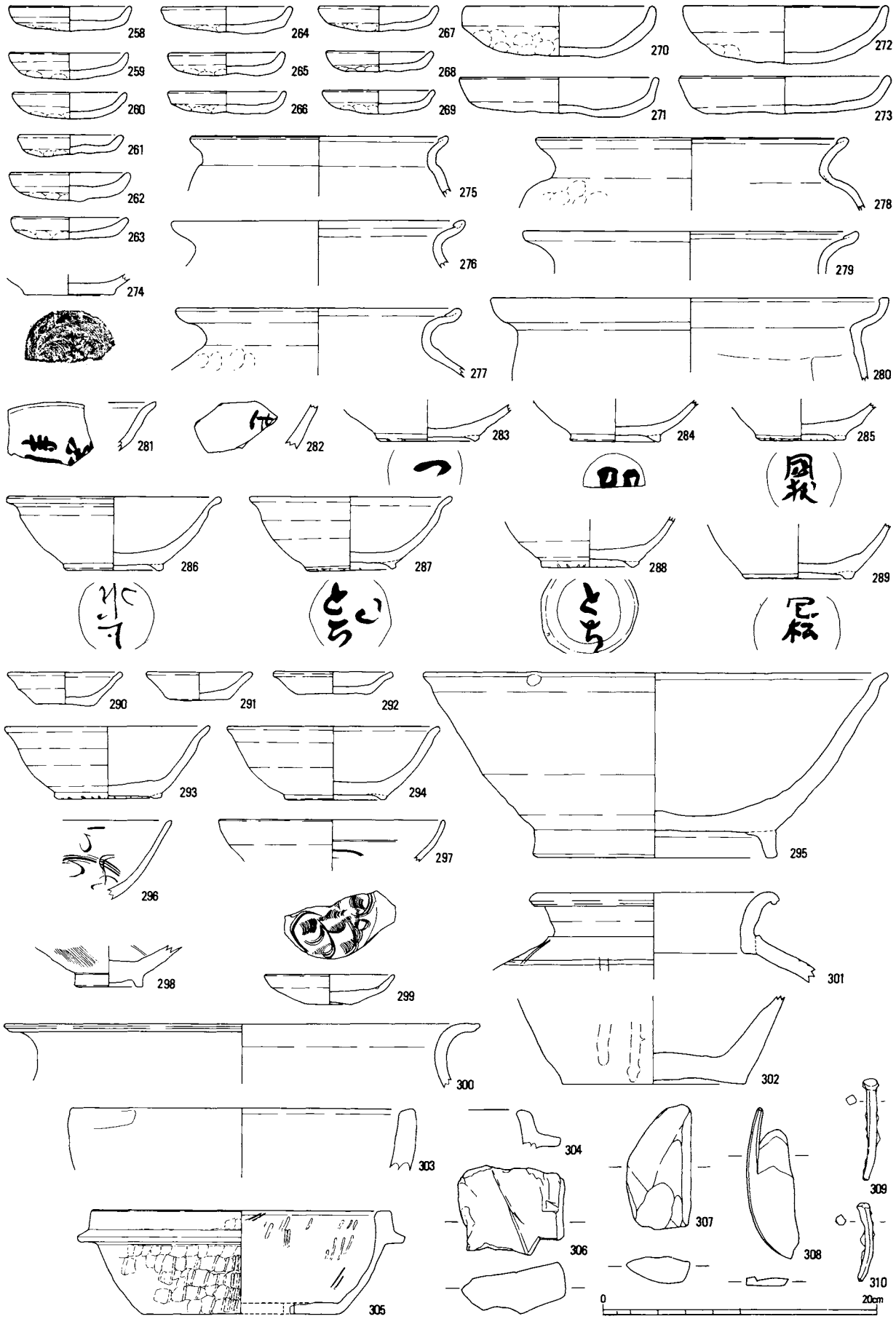
遺構・遺物の中心時期は、平安時代末から鎌倉時代である。ＳＫ87は、壁に2段ないし3段の石組が見られる。土師器小皿・山茶椀(344〜346)が出土した。ほぼ同時期と推定されるＳＫ86の内部に納まるもので、埋土に差違が認められず、掘形の検出は困難であった。ＳＸ81は、遺構は検出されなかったが、



第45図　A地区土坑墓・土坑出土遺物実測図（1:4）



第46図　A地区土坑・ピット・溝・包含層出土遺物実測図（1:4）



第47図　A地区ＳＤ37出土遺物実測図（1:4）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特長	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
133	16-6	土師器 小皿	C7・SX17	8.7		1.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	浅黄橙	完	歪み大
134	21-2	土師器 小皿	C7・SX17	9.0		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい橙	完	
135	16-3	土師器 小皿	C7・SX17	8.9		1.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	浅黄橙	完	
136	37-7	土師器 小皿	C7・SX17	8.7		1.8	内外:ナデ 口:ヨコナデ	密	良	にぶい橙	完	
137	37-5	土師器 小皿	C7・SX17	8.6		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	橙	完	
138	16-8	土師器 小皿	C7・SX17	8.8		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	浅黄橙	完	
139	37-8	土師器 小皿	C7・SX17	8.8		1.8	内外:ナデ 口:ヨコナデ	密	良	橙	完	
140	37-1	土師器 小皿	C7・SX17	8.5		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	橙	完	
141	16-4	土師器 小皿	C7・SX17	8.9		1.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい橙	完	
142	45-9	土師器 小皿	H15・SX43	7.8		1.5	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	95	
143	45-10	土師器 小皿	H15・SX43	8.6		1.6	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	完	
144	45-6	土師器 小皿	H15・SX43	8.1		1.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	完	
145	45-4	土師器 小皿	H15・SX43	8.1		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	完	
146	45-7	土師器 小皿	H15・SX43	8.1		1.6	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	95	
147	45-3	土師器 小皿	H15・SX43	8.4		1.3	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	完	
148	48-2	土師器 皿	H15・SX43	14.1		3.6	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	50	内面板状工具のアタリ
149	48-1	土師器 皿	H15・SX43	14.1		3.3	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅 黄	25	
150	32-9	陶器 小皿	H17・SX45	8.9	4.7	2.6	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	粗	硬	灰 白	65	山皿
151	32-10	陶器 小皿	H17・SX45	8.3	4.6	2.3	内外:ロクロナデ 底:糸切	やや密	硬	灰	95	山皿
152	32-11	陶器 小皿	H17・SX45	8.5	4.1	2.1	内外:ロクロナデ 底:糸切	粗	硬	灰	完	山皿
153	23-2	陶器 椀	H17・SX45	15.9	7.8	4.9	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	85	山茶椀、高台籾殻痕
154	23-3	陶器 椀	H17・SX45	15.8	7.9	5.4	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	80	山茶椀
155	23-4	陶器 椀	H17・SX45	16.4	8.3	5.0	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	90	山茶椀
156	4-1	陶器 椀	H17・SX45	16.3	8.8	5.0	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰 白	90	山茶椀
157	23-1	陶器 椀	H17・SX45	16.8	8.4	5.4	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	粗	硬	灰	80	山茶椀、高台籾殻痕
158	1-2	陶器 小皿	I19・SX61	8.8	4.4	2.3	内外:ロクロナデ 底:削り出し高台	密	硬	灰 白	95	山皿
159	1-1	陶器 椀	I19・SX61	15.9	8.2	5.1	内外:ロクロナデ 見込:ナデ 底:糸切後ナデ、貼付高台	密	硬	灰 白	70	山茶椀、高台籾殻痕
160	1-4	土師器 皿	I19・SX61	15.0		3.0	内外:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ	密	良	明赤褐	完	
161	33-1	土師器 鍋	I19・SX61	23.0			内:ナデ、ヘラケズリ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ、ヘラケズリ	やや密	良	にぶい黄橙	口縁部10	
162	36-1	土師器 皿	H17・SX44		7.0		見込:ロクロナデ 底:糸切	やや密	軟	灰 褐	底部のみ	ロクロ土師器
163	70-4	砥石	H17・SX44									凝灰岩、4面使用痕
164	35-5	陶器 椀	H17・SX44		7.4		内外:ロクロナデ、釉漬け掛け 底:貼付高台	やや密	硬	褐灰色	底部100	山茶椀、釉は黄白色
165	6-1	陶器 椀	C11・SX27	14.8	6.4	5.4	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	密	硬	暗灰	95	山茶椀、高台籾殻痕
166	2-1	陶器 椀	D8・SX23	13.9	6.8	5.6	内外:ロクロナデ 見込:ナデ 底:糸切、貼付高台	密	硬	灰	完	山茶椀、高台籾殻痕
167	34-1	短刀	D8・SX23									木質一部残存
168	35-2	土師器 鍋	K18・SX58	24.6			内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	灰 褐	口縁部10	外面スス付着
169	32-6	土師器 小皿	K18・SX58	8.0		1.2	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい黄橙	35	
170	32-5	土師器 小皿	K18・SX58	9.4		1.5	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい黄橙	50	内面板状工具のアタリ
171	32-7	土師器 小皿	K18・SX58	9.6		1.6	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい橙	25	
172	32-4	土師器 小皿	K18・SX58	8.2		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい黄橙	35	
173	35-1	土師器 皿	K18・SX58	14.6			内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい橙	20	
174	40-4	陶器 椀	K18・SX58	14.4	7.2	5.3	内外:ロクロナデ 見込:ナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	95	山茶椀、高台籾殻痕
175	35-6	青磁 椀	K18・SX58	14.4			内外:施釉	密	硬	素地:灰白 釉:明緑灰	30	輪花椀
176	72-2	土師器 小皿	G15・SX40	7.4		1.2	内:ナデ 外:オサエ、ナデ	密	軟	乳 褐	完	内面板状工具のアタリ
177	72-1	土師器 小皿	G15・SX40	7.3		1.4	内:ナデ 外:オサエ、ナデ	密	軟	淡 橙	完	内面板状工具のアタリ
178	56-4	銭貨	G15・SX40								完	大観通寶

第10表 A地区出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特長	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
179	56-5	銭貨	G15・SX40								完	大観通寶
180	72-4	土師器 鍋	G15・SX40	27		16.7	内:ナデ、ケズリ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ、ハケ、ケズリ	やや密	軟	乳 褐	50	
181	47-9	土師器 小皿	D6・SK6	8.8		2.0	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい黄橙	50	
182	47-1	土師器 小皿	D6・SK6	8.8		1.6	内外:ナデ 口:ヨコナデ	やや密	軟	にぶい黄橙	完	
183	47-4	土師器 小皿	D6・SK6	9.0		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい橙	完	
184	47-5	土師器 小皿	D6・SK6	8.7		2.0	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	淡赤褐	完	
185	49-2	土師器 皿	D6・SK6	13.2		3.8	内外:ナデ 口:ヨコナデ	やや密	軟	浅黄橙	30	歪み大
186	38-4	土師器 皿	D6・SK6	15.3		3.1	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	完	
187	49-4	土師器 皿	D6・SK6	15.4		3.0	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	45	
188	58-3	陶器 椀	D6・SK6	15.1	7.0	7.0	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	完	山茶椀
189	58-5	陶器 椀	D6・SK6	14.9	6.9	5.6	内:ロクロナデ 底:糸切後ナデ、貼付高台	やや密	硬	灰	完	山茶椀、高台籾殻痕
190	32-2	土師器 小皿	K18・SK57	8.1		1.8	内外:ナデ 口:ヨコナデ	やや密	軟	浅黄橙	40	
191	30-3	土師器 鍋	K18・SK57				内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	粗	良	橙	小片	
192	52-5	陶器 椀	K18・SK57		7.2		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	底部100	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書
193	30-5	白磁 椀	K18・SK57	14.7			内外:施釉	密	硬	素地:黄白 釉:淡緑灰	口縁部10	
194	2-4	青磁 皿	K18・SK57	10.9	4.5	2.4	内:ヘラ・櫛による施文後施釉 外:施釉 底:ケズリ	密	硬	素地:灰 釉:淡灰緑	60	底部以外施釉
195	33-2	土師器 皿	K17・SK51	14.2		2.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	にぶい橙	90	
196	30-1	陶器 椀	K17・SK51	14.2	7.0	5.1	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰 白	80	山茶椀、高台籾殻痕
197	32-1	土師器 小皿	K18・SK52	8.0		1.4	内外:ナデ 口:ヨコナデ	やや密	軟	黄 橙	35	
198	62-5	陶器 小皿	K18・SK52	8.4	4.4	1.8	内外:ロクロナデ 底:糸切	密	硬	灰 白	90	山皿
199	35-3	陶器 椀	K18・SK52	15.2	7.4	4.6	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	良	褐 灰	25	山茶椀、高台籾殻痕
200	64-2	土師器 皿	B6・SK4	14.5		3.7	内:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	密	良	暗黄褐	70	
201	47-10	土師器 小皿	B6・SK4	8.8		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	淡黄橙	75	
202	47-6	土師器 小皿	B6・SK4	8.8		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	浅黄橙	完	
203	47-8	土師器 小皿	B6・SK4	8.7		1.5	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい橙	95	
204	47-7	土師器 小皿	B6・SK4	8.7		1.4	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	淡黄橙	完	
205	49-5	陶器 小皿	B6・SK4	8.0	4.2	2.1	内外:ロクロナデ 底:糸切	粗	硬	灰	完	山皿
206	49-7	陶器 小皿	B6・SK4	8.4	5.0	1.9	内外:ロクロナデ 底:糸切	やや密	硬	褐灰	20	山皿
207	49-6	陶器 小皿	B6・SK4	8.3	4.5	1.9	内外:ロクロナデ 底:糸切	やや密	硬	灰	完	山皿
208	53-2	陶器 椀	B6・SK4		7.7		内外:ロクロナデ 底:貼付高台	やや密	硬	灰	20	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「?と」
209	32-8	土師器 小皿	H13・SK32	10.0		1.3	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	淡 橙	35	
210	2-2	陶器 小皿	H13・SK32	10.1	5.3	2.9	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	密	硬	褐 灰	60	山皿
211	37-12	土師器 小皿	I6・SK16	10.6	5.0	2.2	内外:ロクロナデ 底:糸切	密	軟	明赤褐	90	ロクロ土師器
212	39-1	陶器 椀	I6・SK16		7.9		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	密	硬	褐 灰	底部100	山茶椀、高台籾殻痕
213	50-2	土師器 鍋	H4・SK13	22.4			口:ヨコナデ	やや密	軟	黄 褐	小片	外面スス付着
214	50-3	陶器 小皿	H4・SK13		5.2		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	底部60	山皿
215	50-4	土師器 小皿	H4・SK13		5.3		内外:ロクロナデ 底:糸切	やや密	軟	橙	底部100	ロクロ土師器
216	53-5	土師器 小皿	E22・SK72	8.4		1.2	内外:ナデ 口:ヨコナデ	やや密	良	淡 黄	15	内外面墨書
217	53-4	陶器 小皿	J23・P75	8.0	5.0	2.0	内外:ロクロナデ 底:糸切	粗	硬	灰	50	山皿、底部墨書「升」?
218	70-8	土師器 小皿	G6・P10 (SB9)	8.9		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	淡 橙	70	
219	70-7	土師器 小皿	G5・P12 (SB11)	8.6		1.7	内:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	密	良	淡 橙	完	
220	8-8	土師器 小皿	J21・P68 (SB66)	9.2		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	にぶい橙	完	
221	5-5	土師器 小皿	J21・P68 (SB66)	8.8		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	にぶい黄橙	完	
222	71-1	土師器 皿	H11・P35 (SB34?)	14.6		3.2	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	淡暗橙	90	
223	98-1	土師器 鍋	D7・P20 (SB18)	18.6			内:ハケ 口:ヨコナデ 外:ナデ	密	良	乳 褐	口縁部15	外面スス付着
224	98-2	土師器 鍋	D9・P21 (SB18)	14.5			内:ハケ 口:ヨコナデ 外:ハケ、ナデ	やや密	良	乳 褐	口縁部10	

第11表 A地区出土遺物観察表

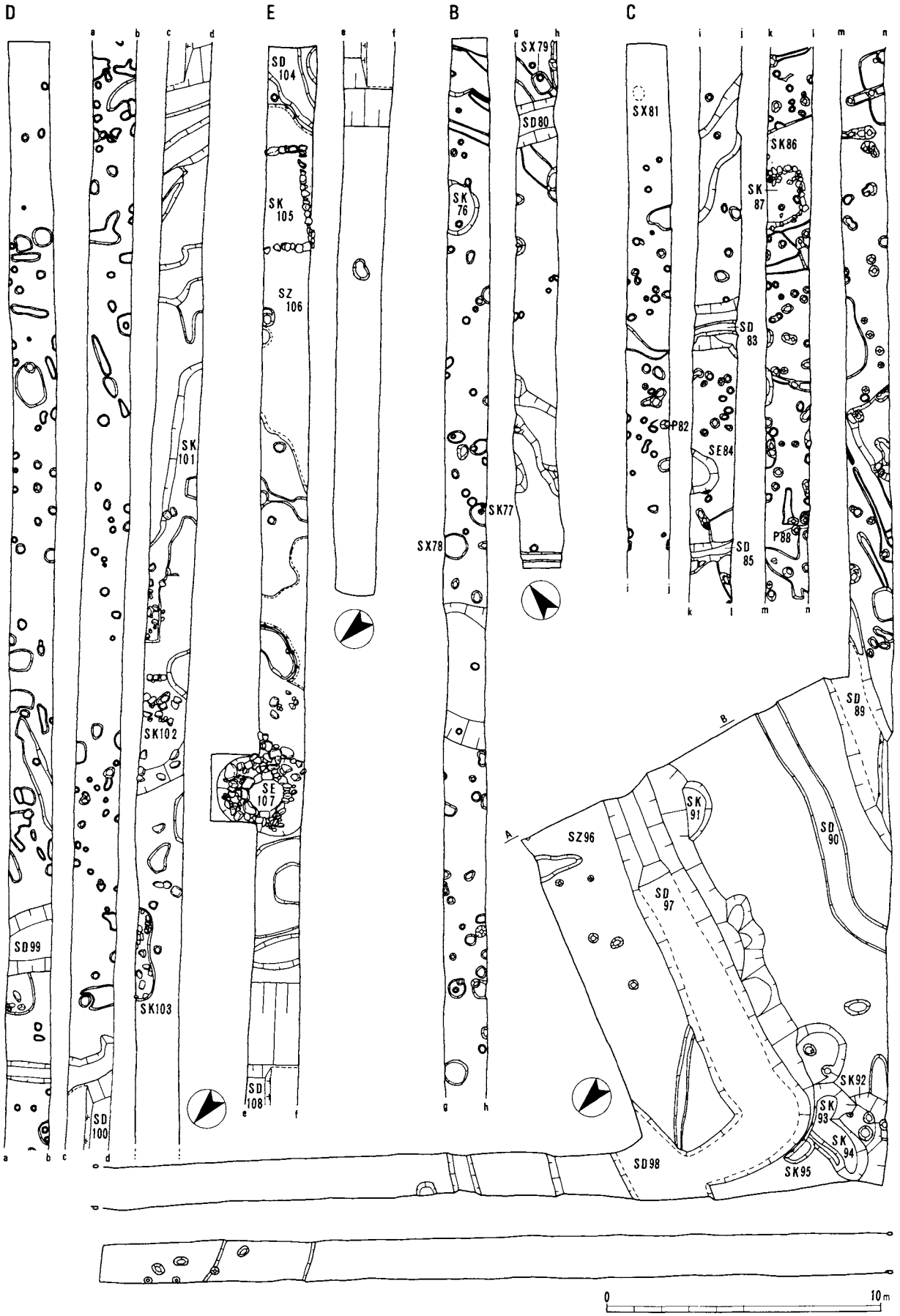
No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特長	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
225	45-11	陶器 椀	I2・P8	15.0	7.9	5.1	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	95	山茶椀、高台籾殻痕
226	54-4	土師器 小皿	G2・SD7	8.7		2.2	内:工具ナデ、ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	にぶい橙	完	
227	46-3	土師器 小皿	G3・SD7	8.2		1.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	にぶい橙	完	
228	51-5	土師器 小皿	G3・SD7	8.9		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	橙	95	
229	54-1	土師器 小皿	G3・SD7	8.8		1.6	内外:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ	密	良	淡赤橙	完	
230	37-11	土師器 小皿	G2・SD7	9.1		1.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	にぶい赤橙	完	
231	46-5	陶器 小皿	G3・SD7	9.1	4.1	2.4	内外:ロクロナデ 底:糸切	密	硬	明灰	80	山皿
232	38-3	土師器 皿	G2・SD7	14.4		3.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	淡黄橙	完	
233	62-1	土師器 皿	G3・SD7	13.9		3.1	内:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	密	良	淡黄橙	完	内面スス付着
234	63-2	土師器 皿	G3・SD7	13.8		3.2	内:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	密	良	淡赤褐	95	外面籾殻痕
235	40-7	土師器 皿	G3・SD7	14.6		3.4	内外:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ	やや密	良	にぶい褐	80	
236	40-2	陶器 椀	G3・SD7	15.4	7.7	5.3	内外:ロクロナデ 底:糸切後ナデ、貼付高台	やや密	硬	灰白	70	山茶椀、高台籾殻痕
237	41-5	陶器 椀	G3・SD7	15.3	7.6	5.4	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	褐灰	90	山茶椀、高台籾殻痕
238	40-3	陶器 椀	G3・SD7	14.7	6.7	5.7	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰白	95	山茶椀、高台籾殻痕
239	51-4	青磁 椀	G3・SD7		5.0		内外:ヘラ・櫛による施文後施釉 底:削り出し高台	密	硬	素地:灰 釉:灰緑	底部 80	高台・底部以外施釉
240	64-1	陶器 鉢	G3・SD7	23.9	12.4	8.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ケズリ 底:周辺ケズリ、貼付高台	密	硬	灰	35	片口鉢
241	62-8	土師器 小皿	I4・SD14	5.0		0.9	内:ナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	橙	95	内面板状工具のアタリ
242	52-2	土師器 小皿	I3・SD14	6.0		1.2	内:ナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	黄橙	85	灯明皿、口縁部スス付着
243	52-1	土師器 小皿	I3・SD14	6.0		1.2	内:ナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	黄橙	完	灯明皿、口縁部スス付着
244	70-2	土師器 小皿	I4・SD14	10.0		1.4	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	橙	25	
245	70-1	土師器 小皿	I4・SD14	10.0		1.2	内外:オサエ、ナデ 口:ヨコナデ	密	良	淡橙	30	灯明皿、口縁部スス付着
246	65-3	陶器 壺	I11・SD14				内外:オサエ、ナデ 頸:ヨコナデ	密	硬	灰	頸～肩部 30	外面線刻、自然釉(暗オリーブ色)
247	48-4	陶器 椀	I2・SD14		4.6		見込:施釉 底:削り出し高台	密	硬	灰黄	底部のみ	円形加工品、見込釉は鉄釉
248	46-7	陶器 椀	I2・SD14		4.6		見込:施釉 底:削り出し高台	密	硬	灰黄	底部のみ	円形加工品、見込釉は鉄釉
249	59-3	陶器 椀	I19・SD14		7.6		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	密	硬	灰	底部 100	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「上」
250	59-4	陶器 椀	I19・SD14		7.7		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	密	硬	灰	底部 50	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「十」?
251	57-2	石臼	I2・SD14								50	花崗岩
252	55-2	砥石	H22・SD14									凝灰岩、1面使用痕 3面に加工時の痕跡
253	52-3	砥石	J9・SD14									砂岩、1面使用痕
254	43-2	陶器 椀	JI8・包含層	15.5	7.3	5.1	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	黄灰	70	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「国能上」?
255	3-1	土師器 鍋	C11・包含層	25.5			内:ナデ、ケズリ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ、ハケ	やや密	軟	黄褐	口縁部 25	外面スス付着
256	52-4	砥石	JI8・包含層									凝灰岩、2面使用痕
257	53-1	陶器 椀	表採		7.1		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	底部 100	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「×」
258	21-5	土師器 小皿	J18・SD37	9.0		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい橙	95	
259	7-7	土師器 小皿	G14・SD37	8.7		2.0	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	完	
260	12-5	土師器 小皿	H14・SD37	8.5		1.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	黄橙	完	
261	14-1	土師器 小皿	J18・SD37	7.8		1.6	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	粗	良	にぶい黄橙	完	歪み大
262	8-7	土師器 小皿	J18・SD37	8.9		2.0	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	完	
263	12-6	土師器 小皿	H14・SD37	8.5		1.6	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	黄橙	完	
264	5-1	土師器 小皿	E14・SD37	9.7		2.0	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	浅黄橙	完	
265	8-6	土師器 小皿	J18・SD37	8.6		2.2	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	にぶい橙	完	
266	7-2	土師器 小皿	E14・SD37	8.6		1.6	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	浅黄橙	完	
267	8-1	土師器 小皿	J15・SD37	8.6		1.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	橙	完	
268	8-5	土師器 小皿	J18・SD37	7.9		1.5	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	にぶい黄橙	完	
269	8-3	土師器 小皿	J18・SD37	8.3		1.8	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	良	橙	完	歪み大
270	24-3	土師器 皿	J18・SD37	14.2		3.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	軟	橙	95	

第12表　A地区出土遺物観察表

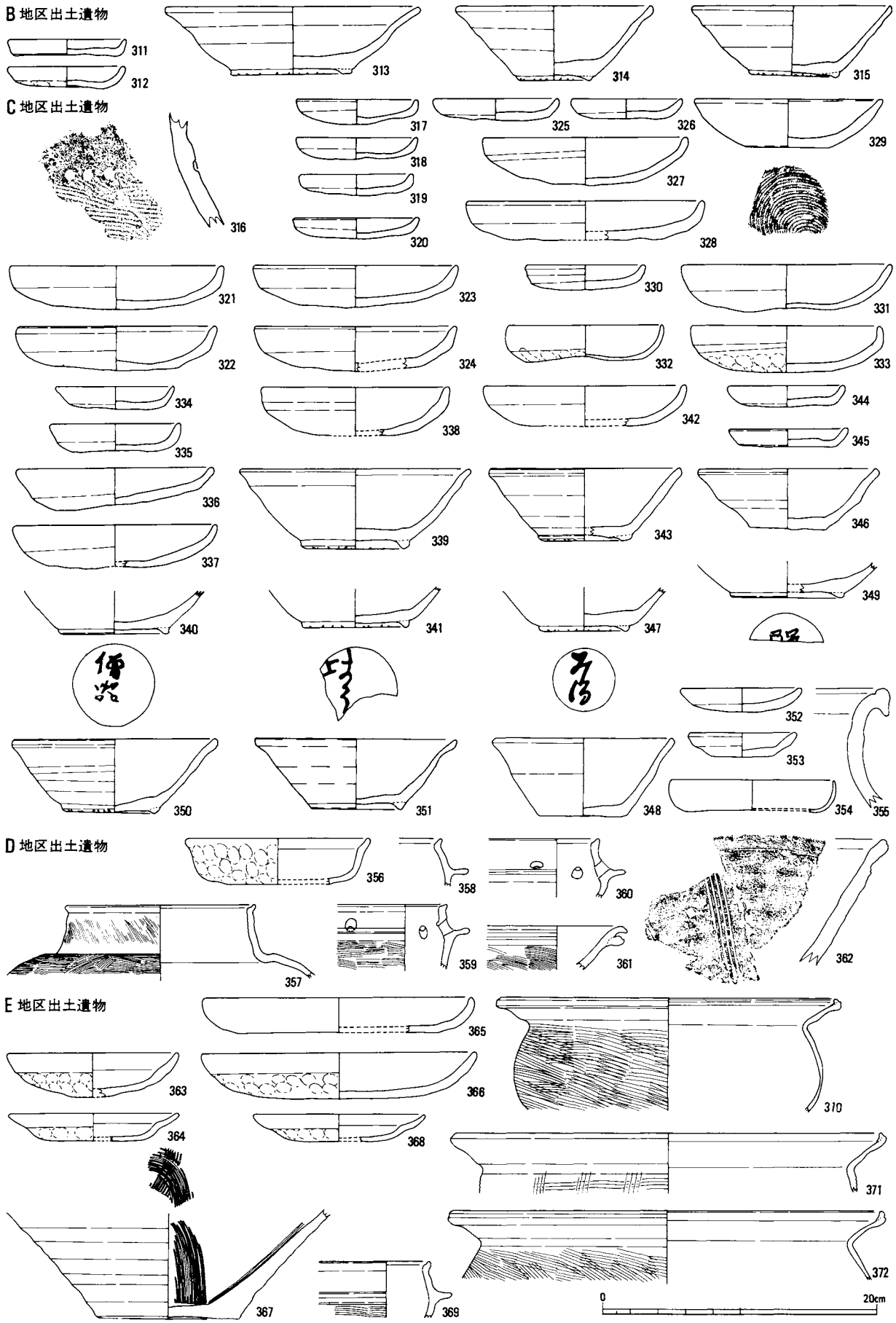
No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特長	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
271	11-3	土師器 皿	F14・SD37	14.7		2.9	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	密	良	淡 橙	50	
272	58-2	土師器 皿	J18・SD37	15.1		4.2	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ	やや密	軟	にぶい黄橙	90	
273	24-4	土師器 皿	F14・SD37	15.6		2.7	内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	にぶい黄橙	90	
274	13-1	土師器 小皿	H15・SD37		6.6		内外:ロクロナデ 底:糸切	やや密	良	橙	底部 50	ロクロ土師器
275	29-4	土師器 鍋	D13・SD37	18.9			内:ナデ 口:ヨコナデ 外:ケズリ	密	良	にぶい橙	口縁部 10	
276	27-2	土師器 鍋	J15・SD37	21.6			口:ヨコナデ	やや密	良	にぶい褐	口縁部 30	外面スス付着
277	44-1	土師器 鍋	J17・SD37	21.1			内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	軟	にぶい黄褐	口縁部 10	外面スス付着
278	44-3	土師器 鍋	J18・SD37	23.0			内:ナデ 口:ヨコナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	にぶい淡黄	口縁部 15	
279	11-2	土師器 鍋	F14・SD37	24.6			口:ヨコナデ	密	良	にぶい橙	口縁部 15	外面スス付着
280	48-5	土師器 鍋	J18・SD37	29.2			内:ナデ、ケズリ 口:ヨコナデ 外:ナデ	粗	良	橙 色	口縁部 10	外面スス付着
281	56-2	陶器 椀	J18・SD37				内外:ロクロナデ	やや密	硬	灰	15	山茶椀、体部外面墨書「侍器」
282	60-1	陶器 椀	J18・SD37				内外:ロクロナデ	粗	硬	灰	小片	山茶椀、体部外面墨書
283	43-1	陶器 椀	J18・SD37		7.7		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	褐 灰	底部 100	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「つ」
284	60-2	陶器 椀	J15・SD37		6.2		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	灰	底部 50	山茶椀、底部墨書「器」の一部
285	53-3	陶器 椀	D13・SD37		6.6		内外:ロクロナデ	粗	硬	褐 灰	底部 100	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「国枝」
286	59-1	陶器 椀	F14・SD37	15.8	7.5	5.3	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	粗	硬	黄 灰	70	山茶椀、底部墨書
287	27-1	陶器 椀	F14・SD37	14.9	6.6	5.3	内外:ロクロナデ 見込:ナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	黄 灰	底部 100	山茶椀、高台籾殻痕 底部墨書「?とち」
288	19-1	陶器 椀	H14・SD37		7.2		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	黄 灰	底部 100	山茶椀、底部墨書「とち」
289	60-4	陶器 椀	J8・SD37		8.0		内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	粗	硬	灰	底部 100	山茶椀、底部墨書「?松」
290	13-6	陶器 小皿	H15・SD37	8.4	4.2	2.3	内外:ロクロナデ 底:糸切	やや密	硬	灰 白	完	山皿
291	8-2	陶器 小皿	J17・SD37	7.9	3.4	2.1	内外:ロクロナデ 見込:ナデ 底:糸切	やや密	硬	灰 白	完	山皿
292	42-1	陶器 小皿	J18・SD37	8.8	5.3	1.6	内外:ロクロナデ 見込:ナデ 底:糸切	密	硬	褐 灰	60	山皿
293	10-5	陶器 椀	J15・SD37	15.1	7.9	5.2	内外:ロクロナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	明褐灰	95	山茶椀、高台籾殻痕
294	24-2	陶器 椀	J18・SD37	15.7	7.7	5.4	内外:ロクロナデ 見込:ナデ 底:糸切、貼付高台	やや密	硬	黄 灰	完	山茶椀
295	3-2	陶器 鉢	H14・SD37	34.0	17.2	13.4	内外:ロクロナデ 底:ナデ、貼付高台	やや密	硬	黄 灰	30	練鉢、輪花2ヶ所残る 見込・底部スス付着
296	5-6	青磁 椀	H14・SD37				内:ヘラによる施文後施釉 外:施釉	密	硬	素地:灰 釉:オリーブ灰	少 片	
297	21-7	青磁 椀	D13・SD37		5.0		内外:ヘラ・櫛による施文後施釉 底:削り出し高台	密	硬	素地:明褐灰 釉:オリーブ灰	底部 100	高台・底部以外施釉
298	7-4	青磁 椀	E14・SD37	16.6			内:ヘラによる施文後施釉 外:施釉	密	硬	断面:灰白 釉:オリーブ黄	口縁部 15	
299	5-7	青磁 皿	G14・SD37	9.6	3.4	2.2	内:ヘラ・櫛による施文後施釉 外:施釉 底:ケズリ	密	硬	素地:灰 釉:浅緑	底部 100	底部以外施釉
300	13-3	陶器 甕	J15・SD37	35.0			内外:ナデ 口:ヨコナデ	やや密	硬	灰	口縁部 15	
301	63-3	陶器 壺	H14・SD37	18.4			内外:ロクロナデ 口:ヨコナデ 肩:線刻	密	硬	淡 灰	口縁部 50	口縁部内外面自然釉(暗オリーブ色)
302	63-3	陶器 壺	H14・SD37		13.1		内外:ロクロナデ、ケズリ	密	硬	淡 灰	底部 100	外面自然垂れる(暗オリーブ色) 底部焼成時に別個体土器片付着
303	26-2	石鍋	H14・SD37	25.4			外:ケズリ				少片	葉蠟石、外面スス付着
304	26-3	石鍋	D13・SD37				外:ケズリ				小片	葉蠟石、外面スス付着
305	2-3	石製品	H14・SD37	22.0	14.4	7.5	内外:ケズリ、ミガキ 底:穿孔				30	葉蠟石、底部円孔僅かに認められる
306	28-2	砥石	G14・SD37									変成岩、4面使用痕
307	21-10	砥石	G14・SD37									泥岩、2面使用痕
308	28-1	硯	H14・SD37									粘板岩
309	43-3	釘	F14・SD37									
310	61-1	釘	G14・SD37									

第13表　A地区出土遺物観察表

土師器皿・小皿(317～324)が集中して出土し、土坑墓の存在が推定される。これらの皿には、接合痕跡が窺えるものがあり注目される。詳細は、調査のまとめに譲る。SE84は、深さ1.2mを測る。土師器皿・小皿(325～328)が出土した。SE84の左右には、やや弯曲するが、平行する2条の溝(SD83・85)がある。ほぼ同時期の溝で、その間は7.5mを測る。SD85からは、土師器皿・小皿(330,331)が出土した。P82・88からは、完形の土師器皿(333,332)が出土している。(332)は、ピット内に伏せられた状



第48図　B～E地区平面図（1:200）



第49図　B～E地区出土遺物実測図（1:4、ただし316＝1:3）

311・312＝SK77，313＝SK76，314・315＝SX78，316・353＝SD90，317～324＝SX81，325～328＝SE84，329＝SK92，330・331＝SD85，332＝P88，333＝P82，334～341＝SK94，342・343＝SK93，344～346＝SK87，347・348＝SZ96，349＝包，350・351＝SD89，352＝SK95，354＝SK91，355＝SD97，356～359＝SK101，360＝SK103，361＝包，362＝SK102，363～367＝SZ106，368＝SK105，369＝SE107，370～372＝SD104

態で出土した。調査区西端の面的にやや拡がった地点には、落ち込み（ＳＺ96）が確認され、その下から幅２ｍ程の溝（ＳＤ97）が検出された。落ち込みの南には、ＳＤ97と平行する幅1.7ｍ程の溝（ＳＤ89）が検出された。溝底の標高は、ＳＤ97で58.2ｍ、ＳＤ89で58.9ｍを測る。共に完掘はしていないが、ＳＤ97からは、陶器甕(355)が出土、ＳＤ89からは山茶椀(350,351)が出土しており、時期的にはＳＤ89が先行する溝と考えられる。

出土遺物では、山茶椀の墨書が目を引く。なかでも「僧器」(340)は、階層を窺わせるもので、Ａ地区の「侍器」と並んで注目されるものである。また、ＳＤ90からは、弥生時代中期後半頃と思われる、壺の頸部片(316)が出土した。頸部には連続する刺突文が施され、肩部には粗いハケメが施される。他にこの時期の遺物は出土していない。なお、ＳＤ90は、山皿(353)が出土する溝であり、(316)は混入品である。

（５）Ｄ地区の調査

Ａ地区西端から、西へ約160ｍ延びる幅1.5ｍの調査区である。Ｄ地区では、縄文時代中期後半の遺構・遺物は検出されず、Ａ地区で検出されたこの時期の遺構は西へ拡がらないことが予想される。また、平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物も調査が西へ進むにつれ見られなくなり、新たに、室町時代後期の遺物(356～362)が出土する遺構が検出された。なお、調査区西側では、遺構・遺物が検出されず、遺構平面図を省略した。

（６）Ｅ地区の調査

Ｄ地区の延長線上、西へ約90ｍ先の調査区である。調査区北の中位段丘面上には椋本神社が在る。また、北西約200ｍ先の中位段丘面上には、昭和59年に芸濃町教育委員会により発掘調査された野呂氏館跡が在る。[5]

Ｅ地区では、室町時代後期の遺物(363～372)が出土する遺構が検出された。ＳＫ105は、壁に１段ないし２段の石組が見られる。土師器皿(368)などが出土した。周囲には、同時期の土師器皿・大皿、陶器擂鉢(363～367)などが出土した落ち込み（ＳＺ106＝完掘していない）がある。ＳＥ107は、石組井戸である。石組の内側で径1.2ｍを測る。遺構内及び周辺には、廃棄時に投げ込まれたと考えられる大きな河原石が確認された。完掘はしていないが、土師器羽釜(369)が出土した。ＳＤ104からは、土師器鍋(370～372)がまとまって出土した。ＳＤ108は、幅5.2ｍ、深さ1.4ｍの大溝である。完掘はしておらず、遺物の出土も少片に留まり、時期決定などは困難であるが、先述の土坑・井戸などと伴う時期の堀と考えることもできる。

出土遺物では、土師器皿(363,364,368)が注目される。これらは、内面に強い稜を持つもので、野呂氏館跡に類似する例が見られる。また、(365,366)は、口径20.2cm、20.0cmを測る大形の土師器皿である。タイプは違うが、野呂氏館跡にも、口径24cm前後及び18.6cmを測る大形の土師器皿が見られる。

３．調査のまとめ

調査の結果、多大な成果が得られた。これら全ての検討は今後の課題とし、以下、縄文時代中期後半の遺物・Ａ地区掘立柱建物・Ｃ地区出土の土師器皿の製作技法について若干の記述を行いまとめに代えたい。

（１）縄文時代中期後半の遺物

今回はＳＨ48出土遺物の報告に留まった。未整理であるその他の遺構及び包含層出土遺物も、質・量的に豊富なものであり、中期後半から終末にかけての貴重な資料になると思われる。

さて、ＳＨ48出土遺物で、目を引くものに半完形に復元された突起状山形口縁深鉢がある。本例は県内に類例を見ないものである。これらの系譜については、搬入品と推定される波状口縁深鉢(36)と突起状山形口縁深鉢(6、7)の口縁部文様帯を構成する区画文のモチーフに類似性が見られ、注目される。同一遺構内出土遺物であり、時間的経過の問題などを含むものの、一つの試案として36→6・7→8・9・10という形式的な流れを想定しておきたい。

また、ＳＨ48出土遺物と、同じく中期末に比定さ

れる本書掲載の大里西沖遺跡ＳＨ15出土遺物及び東庄内Ｂ遺跡ＳＢ８[6]出土遺物の比較においては、大石遺跡ＳＨ48出土遺物は、これらの資料に後出するものと推定される[7]。今後、他遺跡出土遺物との比較検討を通して大石遺跡ＳＨ48出土遺物の明確な位置付けを行う必要性が痛感される。

（２）Ａ地区掘立柱建物

平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物22棟がある。これらの多くは、同時期の区画溝と共通する方向を持って存在するもので屋敷地跡と推定した。以下、掘立柱建物の棟方向と屋敷地跡の性格について述べてみたい。

掘立柱建物は、棟方向からＡ群・Ｂ群・その他に大別される。

Ａ群は、Ｅ25°Ｓ～Ｅ15°Ｓの東西棟及びこれと直交するＮ16°Ｅ～Ｎ18°Ｅの南北棟である。時期的には、平安時代末から鎌倉時代前半に属すると推定する。これらのなかには、時期的な限定が可能な南東隅土坑を伴う掘立柱建物（ＳＢ1,3,18,31）がある。ＳＢ31（Ｅ15°Ｓ）・ＳＢ18（Ｅ19°Ｓ）は平安時代末に推定され、ＳＢ３（Ｅ20°Ｓ）・ＳＢ１（Ｅ25°Ｓ）は鎌倉時代前半に推定される。これらは、各時期の中心的な建物と推定され、Ａ群はさらに細分できるものであろう。

区画溝ＳＤ37は、このＡ群と方向を共にするものである。

Ｂ群は、Ｅ32°Ｓ～Ｅ29°Ｓの東西棟及びこれと直交するＮ31°Ｅの南北棟である。時期の限定は、困難な状況であるが、柱穴遺物から見て、Ａ群と同様に平安時代末から鎌倉時代前半の時期幅に納まる一群と推定される。一時期、この方向の屋敷が営まれたものであろうか。

なお、Ｂ群には南東隅土坑を伴う建物は確認されない。

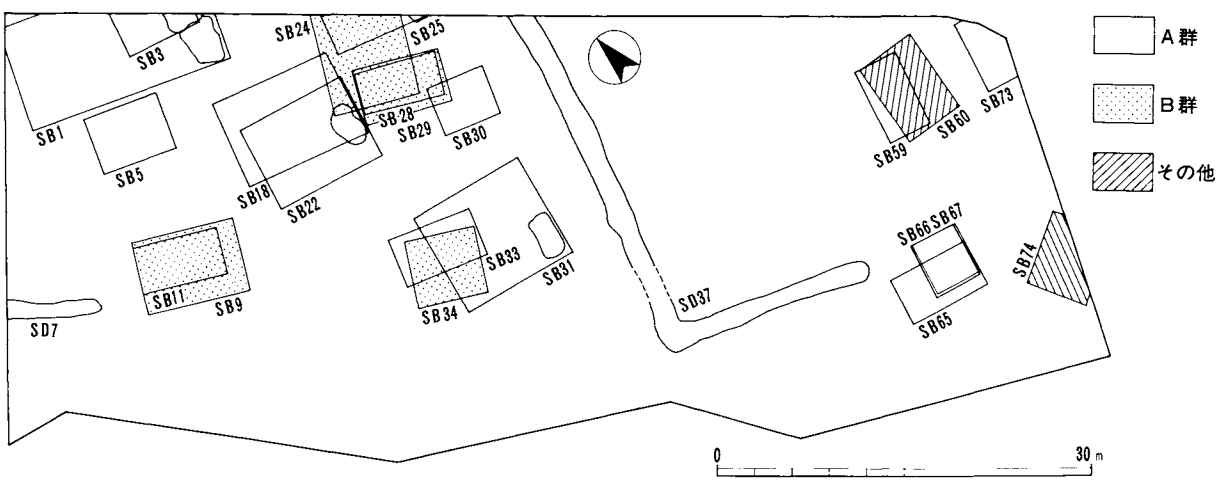
その他、これらに属さない棟方向を持つ建物にＳＢ60（Ｎ9°Ｅ）とＳＢ74（Ｅ25°Ｎ）がある。ＳＢ60は、柱穴遺物からＡ群・Ｂ群と同様の時期幅に納まるものと推定される。また、ＳＢ74は、柱穴遺物から、これらより後出する鎌倉時代後半の建物と推定する。

次に、これらの掘立柱建物を持つ屋敷地跡の性格について考えてみたい。美濃夜神社蔵の寛元２(1244)年の棟札に椋本村の地頭名が記されていることは既に述べた。この地頭が、幕府から正式に補任されたものか否かは、この棟札だけでは断定できないが、寛元２年前後に、何らかの領主権力を有した有力者が椋本の地に存在していたことは確かなようである。

一方、今回の調査では、区画溝ＳＤ37から、所有者の階層を窺わせる墨書山茶椀「侍器」が出土している。この一点を持って、地頭と記された有力者とＡ地区の屋敷地跡を結びつけることは危険を伴うものであるが、比較的まとまった量の輸入陶磁が出土していることなどからも、強ち否定もできないものである。（森川幸雄）

（３）Ｃ地区出土の土師器皿の製作技法について

大石遺跡からは多数の平安時代末から鎌倉時代前半の土師器皿が出土しているが、Ｃ地区ＳＸ81出土のものに限り、底部外面に粘土の接合痕跡が残る。



第50図　Ａ地区掘立柱建物・溝配置図（1:600）

これらは完形及びそれに近いもの22枚中18枚（口径9㎝前後の小皿13/15、同15㎝前後の皿5/7）に見られ、その他の多数の破片にも確認された。

粘土の接合痕跡は小皿でより明瞭に残る。これは底部の中程から始まり、底部と口縁部の境に至るとこれに沿ってほぼ1/4周して口縁部付近で右上がりに終わる。その痕跡は、幅が一様でないところから通常の粘土紐巻き上げによる痕跡とは異なったものと推定される。

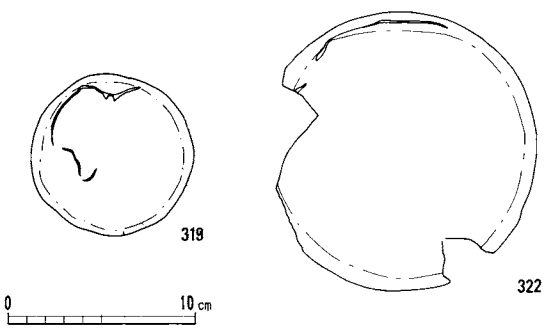
以下、小皿の接合痕跡から窺える制作技法について１つの推論を記す。

1．適当な大きさの粘土塊を指で押し広げ、皿の約半周を口縁部も含め成形する。
2．１の課程で余分となった粘土を巴の尾部状に引き出す。
3．２の課程で引き出された粘土で残りの半周部分を口縁部とともに成形する。
4．指押さえにより形を整える。
5．内面を丁寧になで、口縁部を横ナデして仕上げる。

以上のような製作課程により、小皿の接合痕跡ができたものではないだろうか。

一方、口径の大きい皿では、口縁部付近にしか接合痕跡が認められないため、小皿で検証できたような製作課程をそのままあてはめることができるか否かは今後の課題となろう。

以上、接合痕跡から推定される制作技法について述べたが、この痕跡と類似するものが阿山町馬場・小倉遺跡[8]出土の瓦器皿において数例見られ、注目される。今後、他の遺跡出土の土師器皿などについても再検討する必要があろう。　（伊藤徳也）



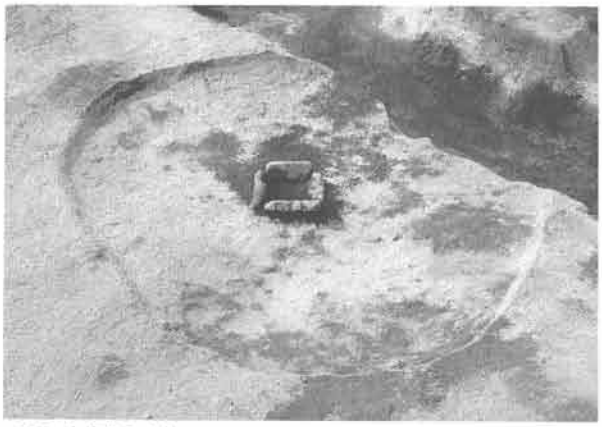
第51図　土師器皿底部外面接合痕跡（１：４）

〔註〕
① 芸濃町教育委員会・油田秀紀氏より御教授を得た。
② 『芸濃町史上巻』芸濃町教育委員会　1986年
③ 椙山女学園大学・江原昭善氏より御教授を得た。
④ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」　『Mie history vol.1』1990年
⑤ 『野呂氏館跡発掘調査報告』芸濃町教育委員会　1984年
⑥ 谷本鋭次「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県文化財連盟　1970年
⑦ 奈良大学・泉拓良氏より御教授を得た。
⑧ 川戸達也・東山則幸「小倉遺跡」『平成２年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告―第１分冊―』三重県埋蔵文化財センター　1991年

大石遺跡遠景（東から）

A地区全景（西から）

ＳＨ48　遺物出土状況（南西から）



ＳＨ48（南から）

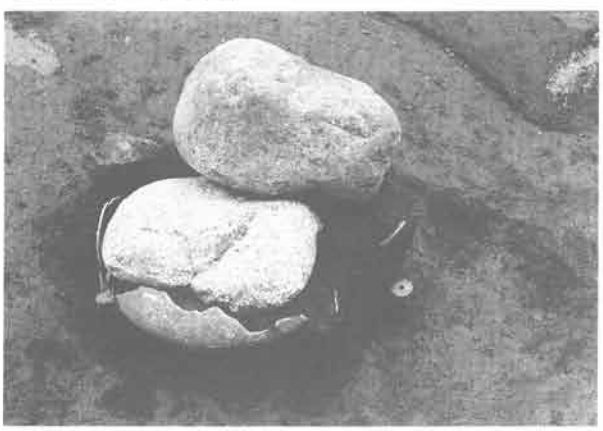
ＳＨ49（南から）

ＳＨ48　炉　（南から）

ＳＨ49　炉　（南から）

SH50　炉　（南から）

SK46　遺物出土状況（北から）



SX40　遺物出土状況（東から）

SX43　遺物出土状況（南から）

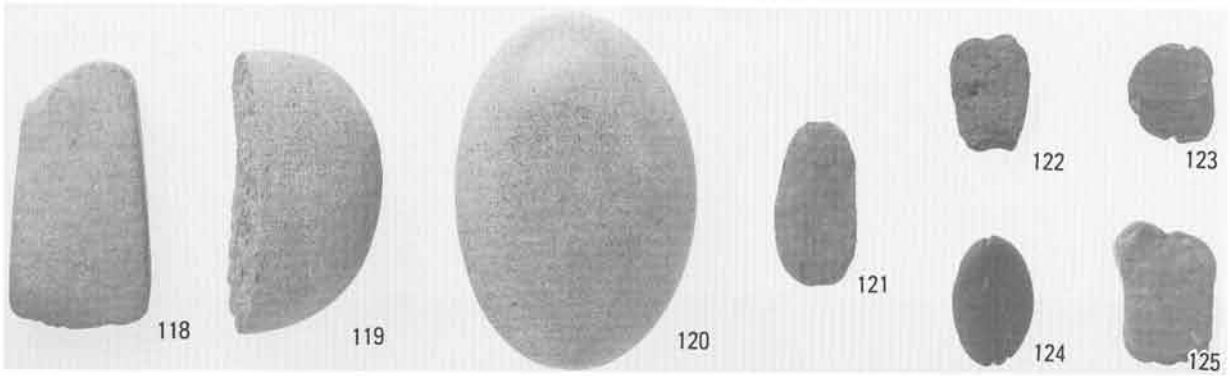
SX44　遺物出土状況（北から）

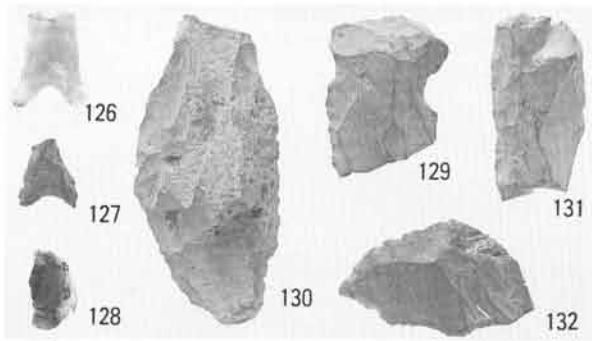
SX45　遺物出土状況（北から）

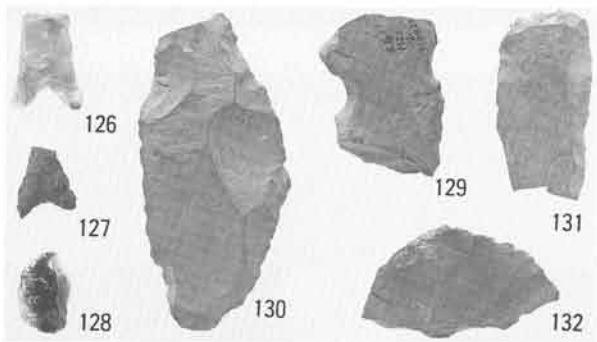
SB31・SD14（南から）

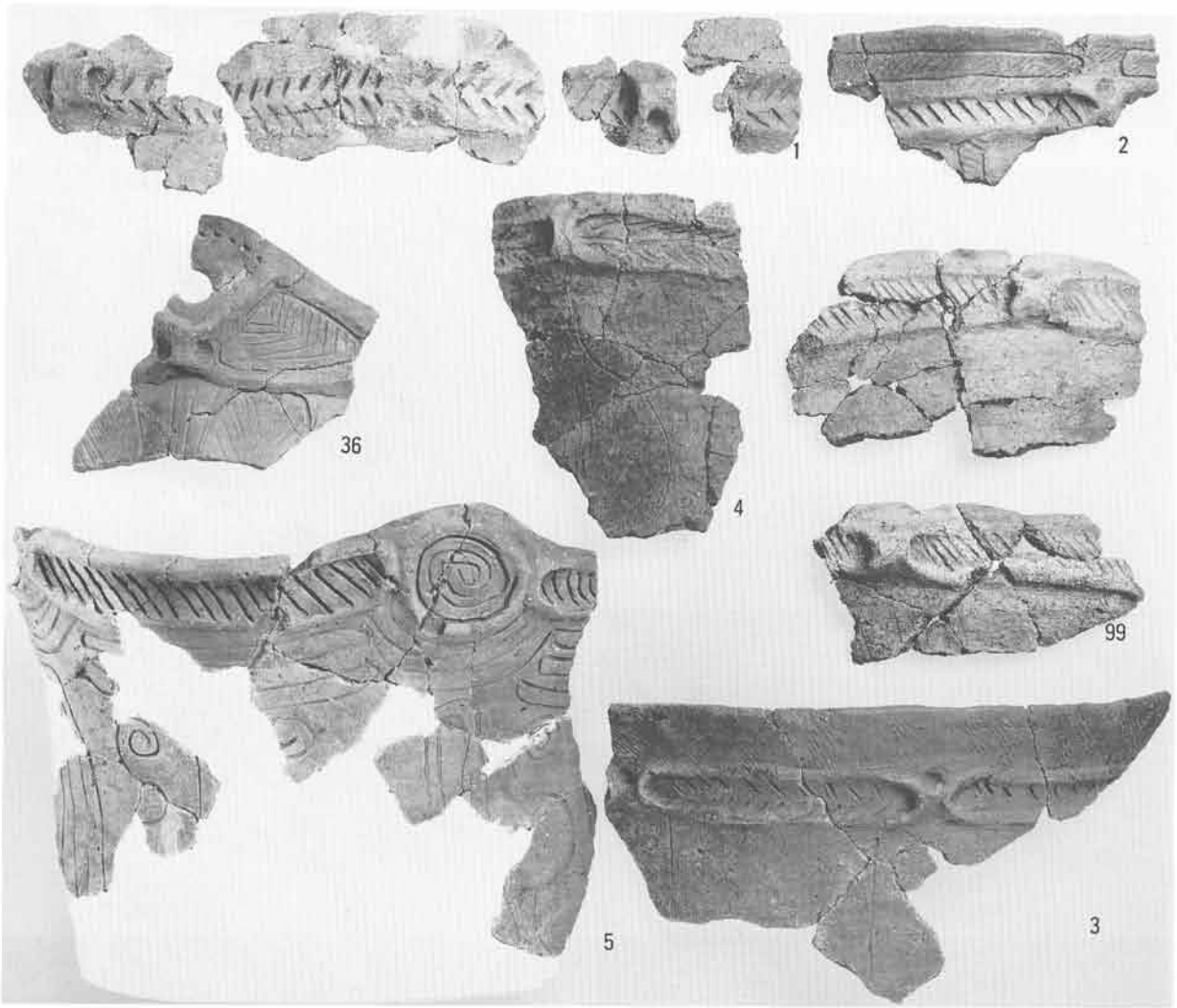
SD14・SZ15（東から）

PL. 7





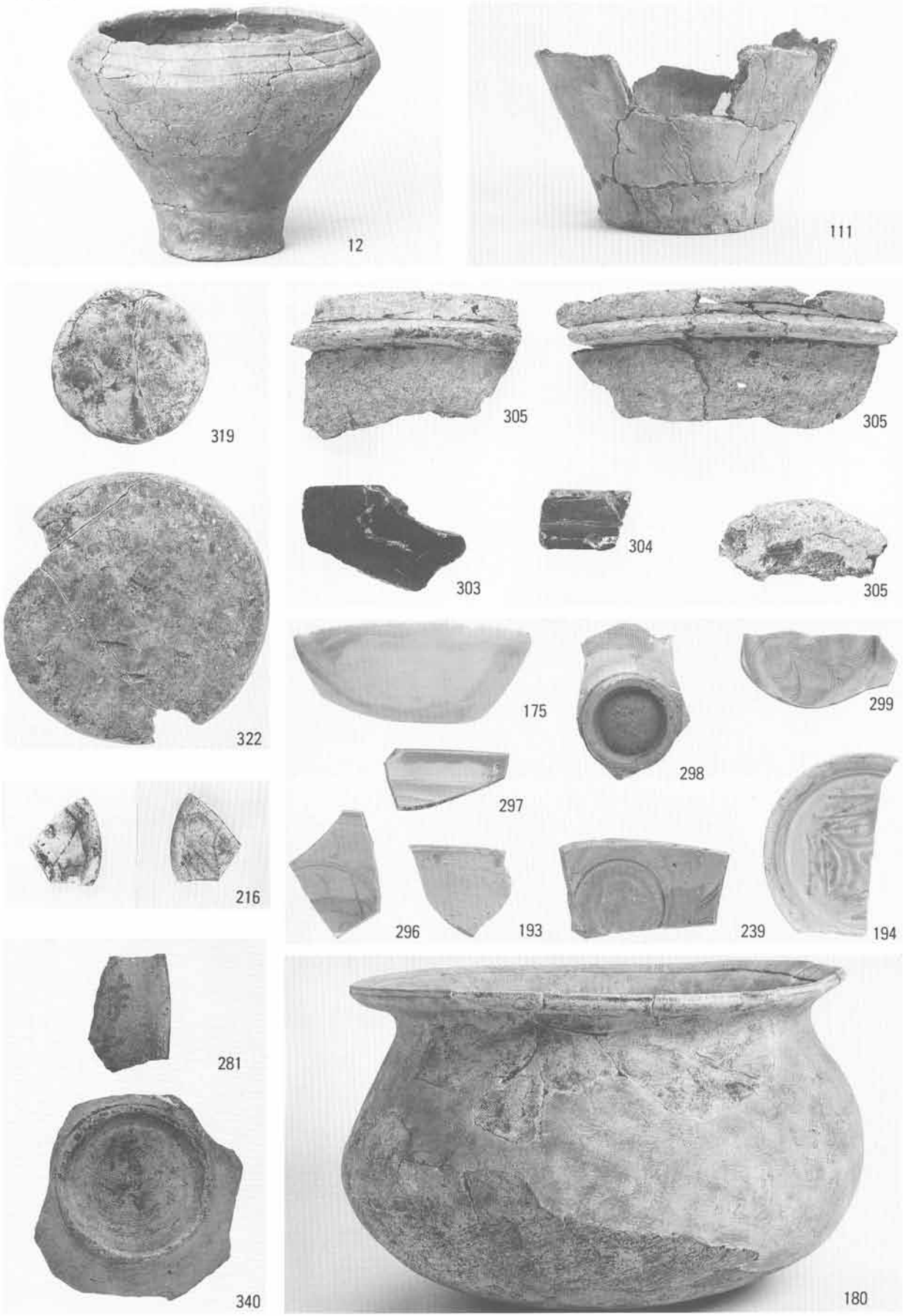




出土遺物（上段＝1：3，中段＝1：2，下段＝1：4）

出土遺物（1：4）

PL. 9



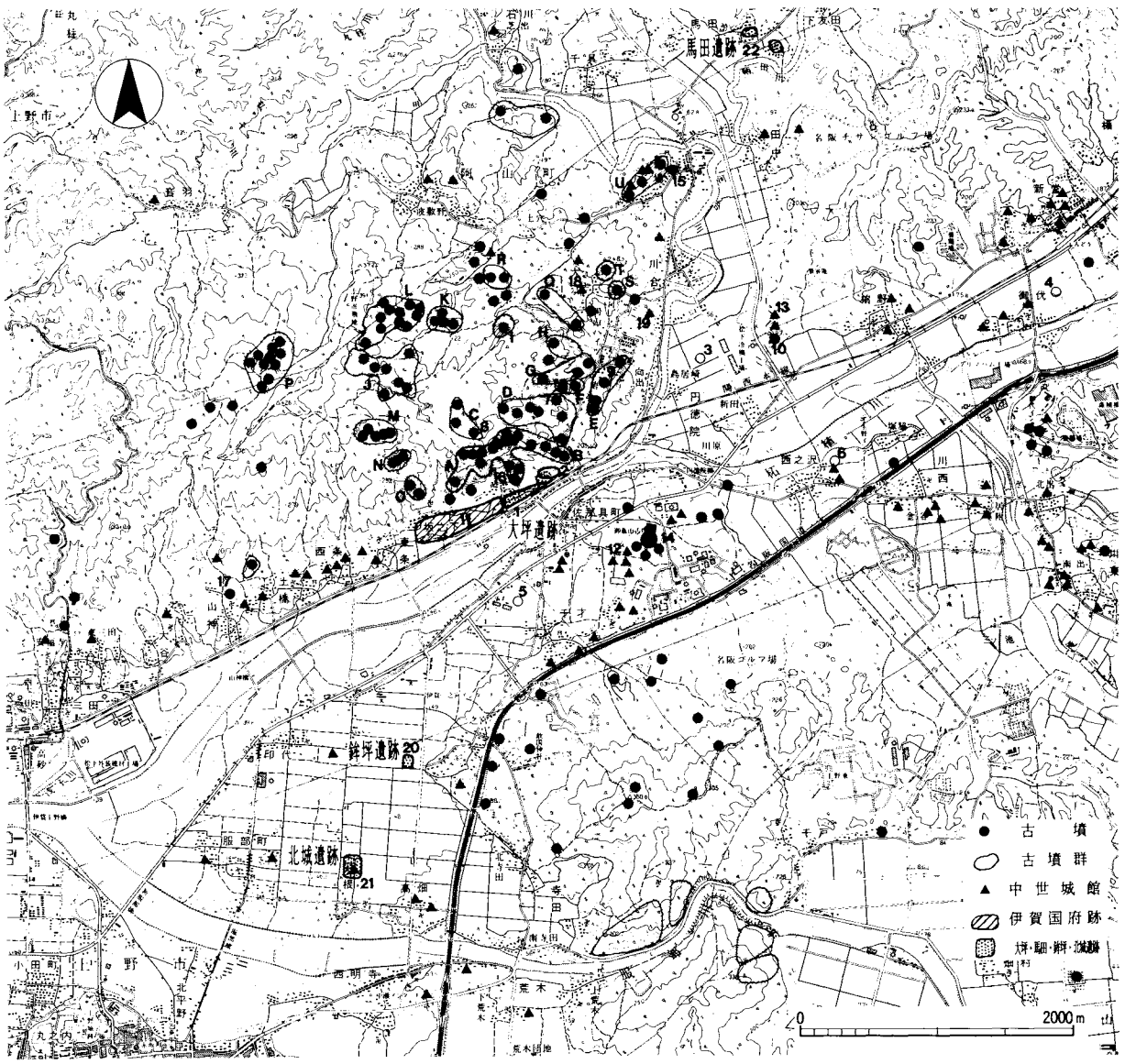
出土遺物（1：3，ただし12・111＝1：4）

Ⅳ　上野市外山　外山大坪遺跡（とやまおおつぼ）

1　位置と環境

大坪遺跡(1)の所在する上野市外山字大坪は、伊賀盆地の北部、いわゆる信楽高原の西南端部、府中と呼ばれている地区の北東部に位置する。鈴鹿布引山系に発する柘植川は、伊賀盆地最大の平野部である府中地区の北部を東から西に流れている。この地区を東西に貫通する大和街道（国道163号及び国道25号）は、古代から畿内と東国を結ぶ幹線道として重視されてきた。

外山地区は、北方に丘陵が迫り、南方は柘植川へ落ち込む狭い河岸段丘上に位置する。遺跡は、柘植川北岸ＪＲ関西本線の佐那具駅の北側に広がる標高150m前後の緩傾斜地で、現況は水田になっている。従来この地区には、綾の森遺跡(2)・六坪遺跡の存在が報告①されているが、今回の調査では、全てを大坪



A外山古墳群	F口笹尾古墳群	K東元谷古墳群	P波敷野古墳群	1大坪遺跡	6天道遺跡	11伊賀国府跡	16勘定塚古墳
B鷺棚古墳群	Gキラ上古墳群	L西元谷古墳群	Q城古墳群	2綾の森遺跡	7奥弁天4号墳	12喜春遺跡群	17山神寄建神社古墳
C奥弁天古墳群	H口熊谷古墳群	M石打古墳群	R立石古墳群	3北中溝遺跡	8源六谷1号墳	13恒岡氏城跡	18田矢伊予守城跡
D源六谷古墳群	I中熊谷古墳群	N奥ヶ谷古墳群	S東谷古墳群	4畔垣内遺跡	9上丸川1号2号墳	14御墓山古墳	19三蓋山城跡
E上丸川古墳群	J樋口谷片平古墳群	O蔦枕古墳群	T割尾古墳群	5宮の森遺跡	10東山古墳	15御旅所古墳	

第52図　遺跡位置図（1:50,000、国土地理院「上野」1:25,000から）

遺跡[2]として報告することとした。

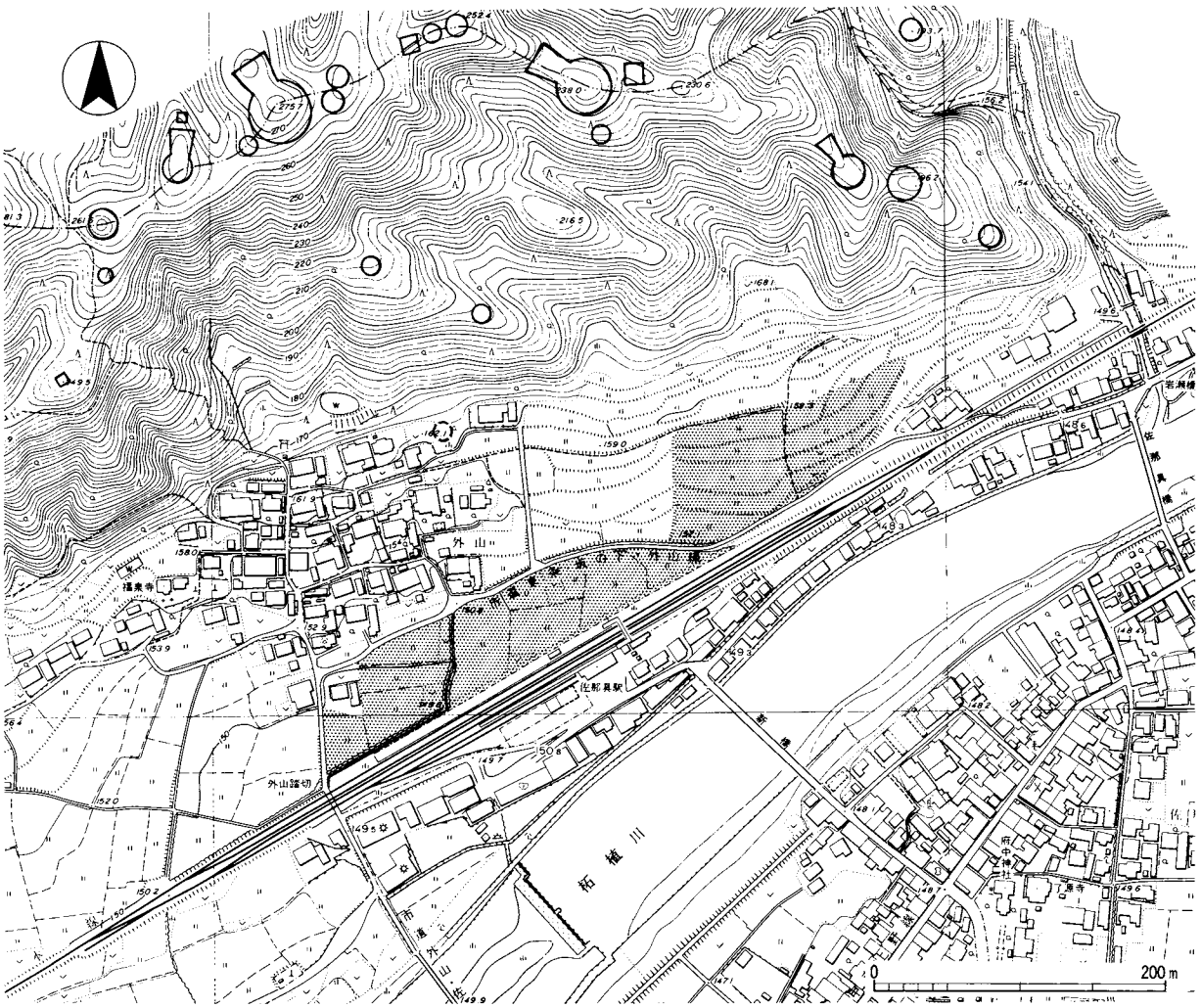
伊賀北部地方は、遺跡の密度が濃厚な地域として知られるところであり、多くの遺跡において調査が行われ、報告されている。

縄文時代の遺跡は当地区周辺において調査例が少なく数ヶ所で遺物の採集が知られる程度[3]であるが、弥生時代の遺跡は近年の調査により資料が増えつつある。北中溝遺跡(3)では、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落跡[4]が、平成元年度以前の伊賀国府推定地範囲確認調査では、柘植川左岸の印代地区東方から弥生時代後期の集落跡が広範囲で確認[5]されている。

古墳時代では、北中溝遺跡(3)・畔垣内遺跡(4)・宮の森遺跡(5)・天道遺跡(6)の発掘調査によって、古墳時代前期から後期にかけての集落跡が確認[6]されている。また、外山北方の丘陵上には、外山古墳群(A)をはじめとする数々の古墳群が存在し、これらの古墳の中で、奥弁天4号墳(7)・源六谷1号墳(8)・上丸川1号及び2号墳(9)等が発掘調査[7]されている。この他にも府中周辺では、河合の御旅所古墳(15)や佐那具の御墓山古墳(14)に代表される大形古墳の他、石川・千貝地区を北限として多数の古墳が築造されるようになり政治勢力と経済基盤が確立されるようになってくる。

律令時代に入ってからは、府中地区のほぼ全域に万町の沖と呼ばれる伊賀地方最大の条里地割が敷かれ、9世紀前半に鈴鹿越えの東海道（阿須波道）が開通するまで、加太越えの旧東海道が通っており、交通の要衝として栄えていたことをうかがい知ることができる。畿内の東の入口と言うべき当地は、政治上・軍事上の拠点として重視され、発展してきたものと考えられる。

平成2年度以降の伊賀国府推定地(11)範囲確認調査では、外山地区と境界を接する大字坂之下の国町地



第53図　遺跡地形図（1:5,000）

区を中心に国庁の施設と考えられる大型の掘立柱建物群が確認[8]されており、地方政治支配の拠点であったことを裏付けた。

奈良時代から平安時代にかけて、都に近い伊賀国では東大寺をはじめとする大寺院の荘園化による支配が進むようになり、荘園の開発に伴って人々の生活の場は、徐々に近江国境の山地に向かって拡大されていった。

中世になると、荘園制がゆるぎはじめ武士が台頭してくるが、特に強い勢力を持った支配者が現れることはなかった。中世末期、土豪たちは伊賀惣国一揆と呼ばれている武力による団結を図り、他国からの侵攻に備えたが、織田信長の伊賀攻めにあえなく破れることになる。この時代、伊賀各地には580余りの中世城館が築造[9]されており、府中地区周辺では喜春東館跡・喜春西館跡(12)・恒岡氏城跡(13)・菊永氏城跡等[10]が発掘調査されている。

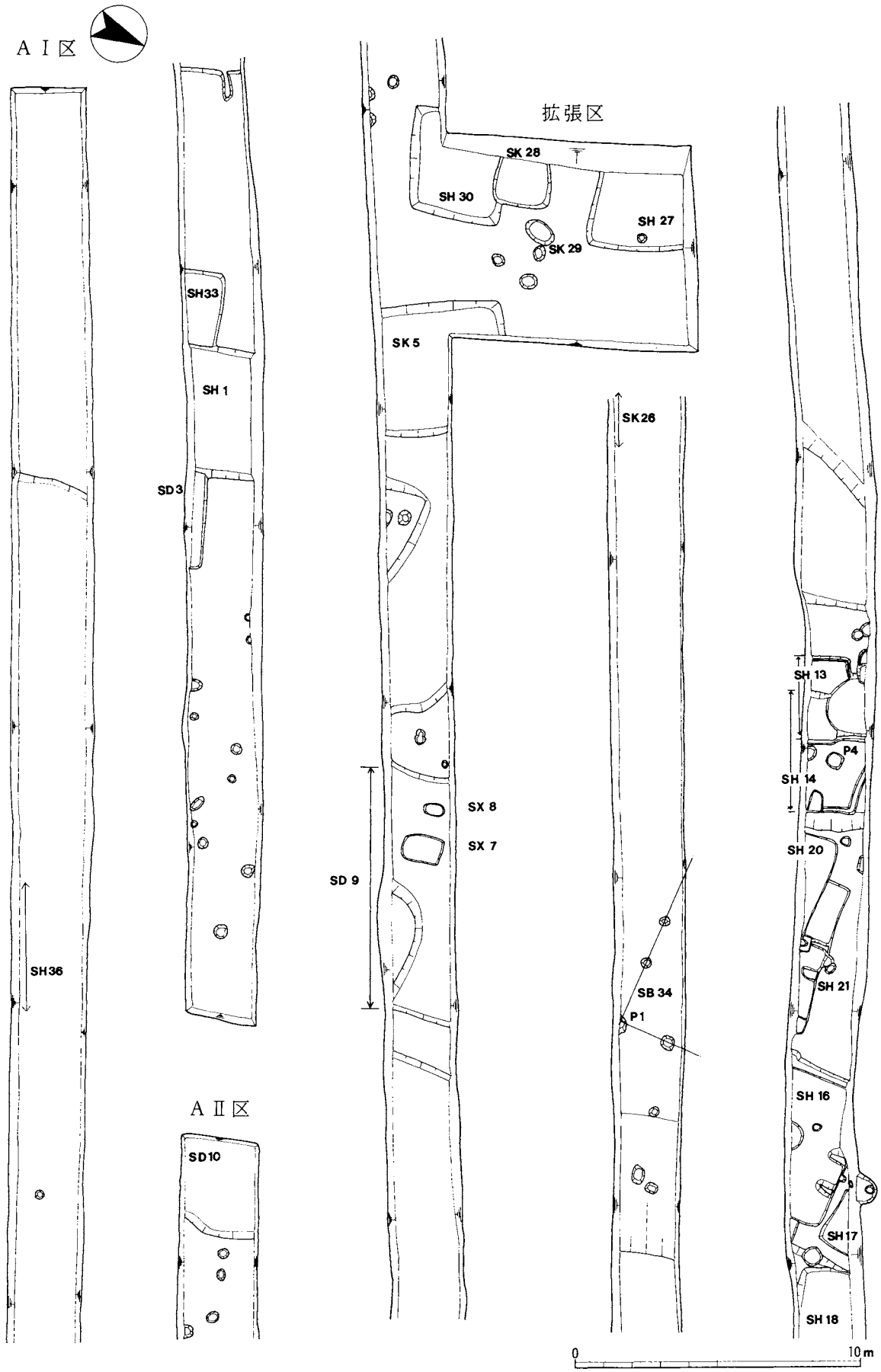
この他にも多数の遺跡で発掘調査が行われているが、それらの詳細についてはそれぞれの報告書を参考にされたい。

2 遺　構

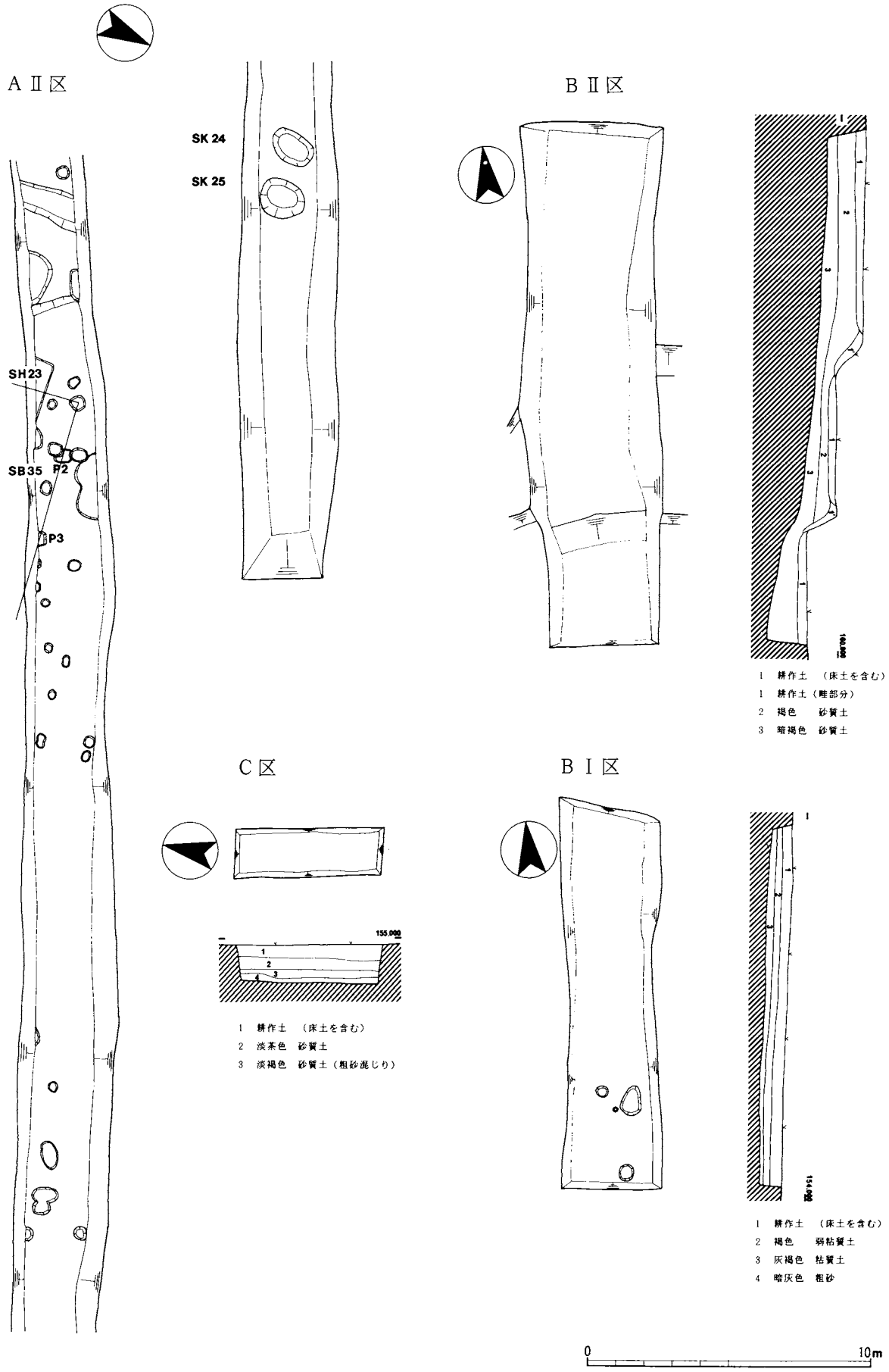
A区

A区は、外山集落の南、ＪＲ関西本線に沿った幅３ｍ、東西約300ｍの水路部分の調査区である。A区の西端から100ｍ程の所で字名が分かれているた

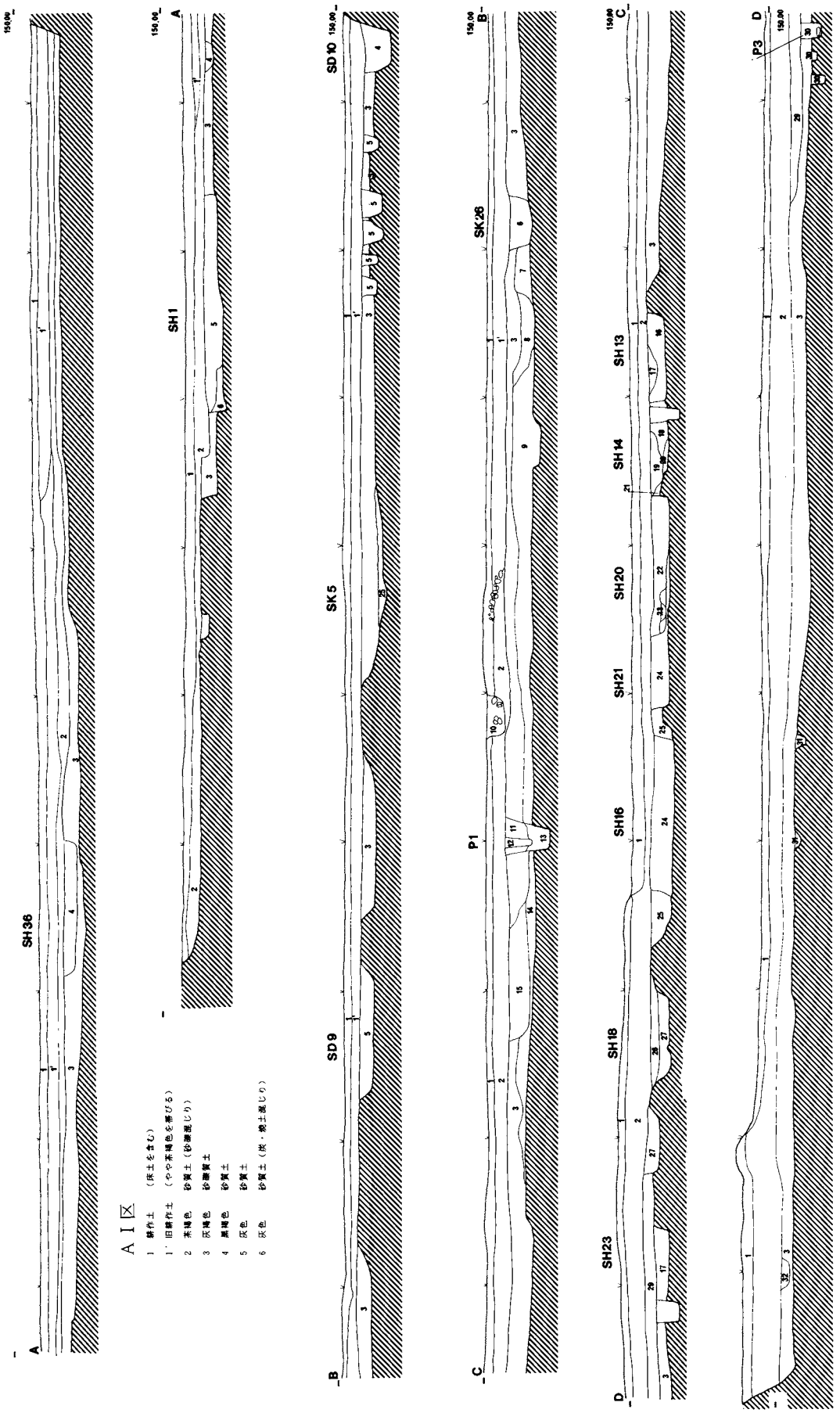
第54図　調査区位置図（1:2,000）



第55図　A I・A II 区平面図（1:200）



第56図 A II 平面図・B I・B II・C区平面図及び土層断面図 (1:200)

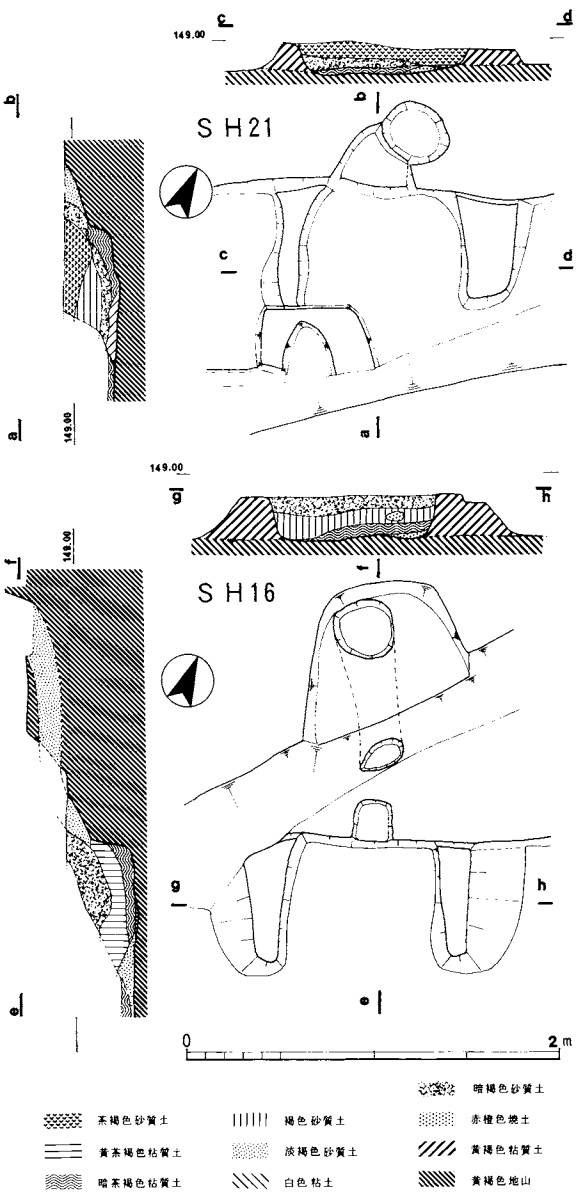


第57図　A区土層断面図（1:200）

め、字中田をＡＩ区、字大坪をＡII区とし、ＡII区西端で一部拡張区を設け、調査した。

この調査区の標高は150m前後でほぼ平坦である。土層観察には、トレンチの南壁断面を採用した。

基本的層序は、耕作土（表土）、床土、旧耕作土、旧床土、暗灰褐色弱粘質土、灰褐色砂質土である。主な遺構の検出面は、土層断面図では表土から0.6～0.7mであるが、検出が困難であるため1.0～1.2mまで下げ、検出を行った。また、後述するＳＤ９の東端で東西31m、深さ0.5～1.0mの落ち込みを検出した。遺物はほとんど出土していないが、自然流路の可能性も考えられる。この部分の遺構は落ち込みを完掘した状態で検出した。ＳＢ34は、土層観察の結果落ち込み上面から、南側断面では、ＳＫ26を確認している。



第58図　ＳＨ21・ＳＨ16竈実測図（1:40）

主な遺構の記述については遺構一覧表を参照されたい。（表14）

竪穴住居　13棟の竪穴住居が検出されているが、これらは次のように３種類に分類できる。

	A	B	C
竪穴住居	ＳＨ18,23,30	ＳＨ１,13,14 27,33,36	SH16,17,20 21
軸方向	13～16°	20～28°	１～９°
規模	3.5～(4.0)m	4.0～4.5m	4.5～4.9m
竈位置	未確認	東壁にあり ＳＨ１,14	北壁にあり ＳＨ20,21,16

出土遺物から、Ａ・Ｂについては古墳時代（４世紀代）、Ｃについては飛鳥時代（７世紀後半）に造られたものと考えられる。竈を検出した竪穴は表のとおりであるが、特にＳＨ16のものは残りがよく煙道をほぼ完全な形で検出することができた。竪穴北壁中央部から外へ1.3m延び、煙道上面から床面までは約0.6mの深さで、非常に残りがよい竪穴と言える。（図58）また、ＳＢ14からは幅0.25mの周溝を検出した。

ＳＢ34　自然河川下面で検出したもので東西２間（柱間不揃い）以上、南北１間以上の建物で、断面観察の結果河川上面より切り込んでいることを確認した。柱掘形は一辺1.3mの方形で深さは上面から1.5mと、規模の大きな建物である。

ＳＢ35　竪穴住居群の東側で検出された東西２間（柱間不揃い）以上の建物で、柱穴Ｐ２とＰ３からは根石が確認されている。

ＳＤ３　竪穴住居の一部とも考えられるが、ここでは一応溝とした。

ＳＤ10　Ａ6 区西端で検出された。埋土は暗青灰色の細砂で水を多量に含んでいる。最深部で木杭の破片と瓦器片の出土が見られ、調査区内では最も新しい時代まで存続した遺構ということができよう。

現在、大坪・中田の両小字の境界には潅漑用の水路がありＳＤ10の位置と重複するところから、中世からの境界を兼ねた水路である可能性が高いと考え

られる。

ＳＤ９　Ｌ字形に曲がる溝状遺構で、２つの土坑が切り合うことも考えられるが、明確な埋土の区別をすることはできなかった。

遺物は、主に溝の東側肩付近で、土師器椀、須恵器杯身・蓋・高杯等が出土した。

ＳＫ28　ＳＨ30を切る土坑で、土師器甕が出土している。

ＳＫ29　拡張区中央で検出された土坑で、遺物から７世紀中頃のものと考えられる。

ＳＫ５　拡張区にかかる土坑である。検出面から0.3m下でやや方形の土坑を検出している。土坑上面と土坑内の遺物（上層13～22、下層１～12）には、古墳時代と７世紀代という時期差がみられ、２つの遺構が重複している可能性もある。下の方形プランについては顕著な竪穴住居の特徴が見られないため土坑とした。

ＳＫ26　トレンチ南壁断面で確認された、東西1.9m、深さ0.8mの規模を持つ土坑で、北壁では検出されていない。

この土坑からは、７世紀後半と考えられる多くの遺物（23～40）が出土した。

ＳＫ24・ＳＫ25　Ａ区トレンチ東端で検出された土坑で、両土坑の中心間の距離は1.8mである。埋土は水を多量に含む、暗青灰色細砂である。ＳＫ25から墨書のある土師器杯(55)が出土している。

ＳＸ７　（図62）埋土中に炭を多量に含み、底面から少し浮いた状態で直径10cm～30cm程の石が20数個置かれているが、規則性はみられない。遺物は石の他、僅かに土師器片が見られるのみである。

ＳＸ８　（図62）土師器長胴甕(85)に土師器椀(84)をかぶせ、棺（あるいは蔵骨器）として使用した土坑墓であると思われる。

掘形は長径0.7m、短径0.45mで、軸方向はＳＸ７と揃っており、密接な関連があったものと思われる。両遺構の時期についてであるが、これらと重複するＳＤ９の埋土を切っており、７世紀後半の遺物が出土したＳＤ９よりは新しく、長胴甕の年代観も考慮すれば、７世紀末～８世紀前半と思われる。

Ｂ区

Ｂ区は、Ａ区の東端から北に向かって登る、標高153m～161mの丘陵斜面に作られた水田の水路部分の調査区である。

この水路部分の中で、土砂崩れの危険性が少ない２ヵ所を選び、南側をＢＩ区（延長15m）、北側をＢII区（延長20m）とした。

ＢＩ区　基本的層序は、表土（耕作土）、淡褐色砂質土、暗褐色粗砂（地山）であり、トレンチ西側では下層に褐灰色～青灰色の砂層がみられ、さらに深く落ち込んでいる様子がうかがえる。

主な遺構はピットと土坑であるが、いずれも遺物が伴わないため、時期や性格等については不明である。

ＢII区　基本的層序は、表土（耕作土）、褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗褐色砂礫～青灰色砂礫（地山）である。

このトレンチにおいて、遺構を確認することはできなかった。

Ｃ区

Ｃ区は、Ａ区東端から約150m東に位置し、遺跡の東縁辺部にあたる。

調査地点は標高155.2mの畑であるが、元の地形はかなりの傾斜地であったと思われる。基本的層序は（耕作土）、褐色粘質土、灰褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗灰褐色砂礫（地山）である。

このトレンチにおいて、遺構を確認することはできなかったが、包含層から瓦器を含む中世の遺物、木片等が出している。

3　遺　　物

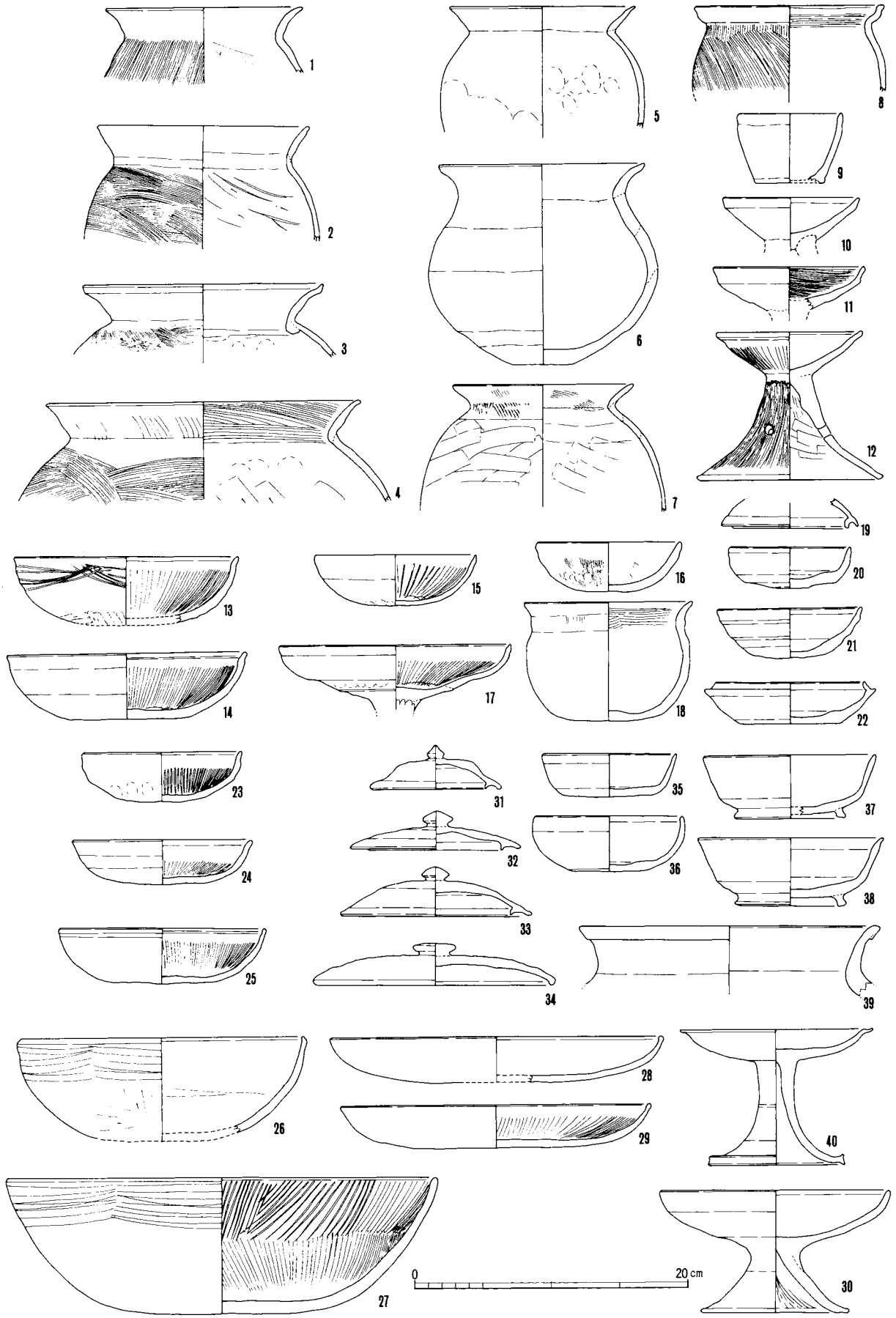
今回の調査で出土した遺物は、整理箱にしておよそ40箱程であった。これらの遺物は、Ａ地区に集中し、おおよそ古墳時代前期・飛鳥時代後期・奈良時代前期の３つの時期に分類できる。

以下に特徴的な遺物について概略を述べる。遺物の法量、調整等については遺物観察表を参照されたい。（以下、括弧内の数字は遺物№を示す）

ＳＫ５出土遺物（１～22）（図59）

下層出土の遺物には土師器甕（１～８）、土師器高杯（10～12）、土師器ミニチュア壺（９）がある。

土師器甕　口径約14～23cmの甕で、土坑の底で検出された土師器片が大量に見られる層からの出土



第59図　ＳＫ５・ＳＫ26出土遺物実測図（1:4）

である。口縁部の張り付け方や端部の調整等に相違はあるが、体部内面を板状の工具で調整していること、外面を斜め方向にハケで調整していること等が共通している。（8）は受口状口縁甕である。この他にも同種の甕は見られたが、小片が多く実測可能な遺物は非常に少なかった。

これらの下層遺物は、4～5世紀前半の時期のものと考えられる。

上層出土の遺物には土師器杯（13～15）、土師器椀（16）、土師器高杯（17）、土師器甕（18）、須恵器杯蓋（19）、須恵器杯（20～22）がある。

土師器杯　緻密な胎土で固く焼成されている。共通した特徴として内面に放射状の暗文が施されている。さらに（14・15）は、内面底部に螺旋状の暗文が施されている。

土師器高杯　上述の杯と同様の暗文が施され、杯体部の途中に段が見られる。

これらの上層遺物は、土師器の特徴が、飛鳥編年[11]の第II期に比定されることから7世紀中葉のものと考えられる。

ＳＫ26出土遺物（23～40）（図59）

土師器杯・鉢・皿（23～29）　いずれも内面に放射状の暗文が施される。これらは、飛鳥編年の第Ⅳ～Ⅴ期に比定されることから7世紀後半のものと考えられる。

須恵器高杯（40）　杯部は浅く、口縁部が水平に外側へ薄く引き延ばされている。

その他の遺構からの出土遺物（41～55）（図60）

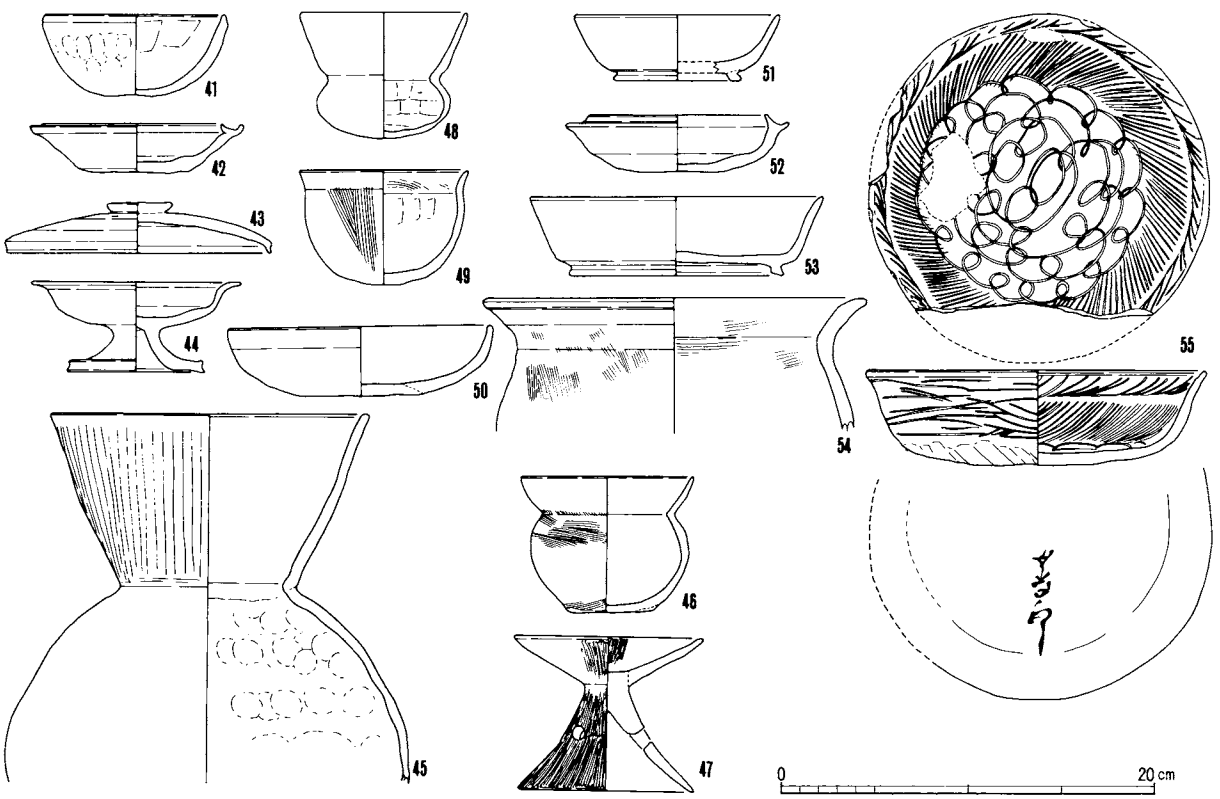
ＳＤ９出土遺物（41～44）　いずれも7世紀代のものと考えられる。須恵器高杯（44）は脚端部、口縁端部に（40）と同様の特徴が見られるが、口縁端部はやや下方に反っている。著しく低い脚部を持ち、希有な器形と言えよう。

ＳＨ18出土遺物（45～47）　いずれも古墳時代前期の特徴を持った土師器である。（46）は小型壺であるが、底部外面に粘土紐を高台状に張り付けた後、ナデ調整を施しており、一見平底に見える。

ＳＨ27出土遺物（48）　竪穴住居の床面上から出土した小型丸底壺である。器壁が薄く、体部が小さい特徴をもっている。

ＳＫ25出土遺物（55）　7世紀後半の内外面に丁寧に暗文を施した杯である。

外面底部に墨書があり、磨滅が著しく判読が困難であるが、□□印と読める可能性がある。



第60図　遺物実測図（1:4）

ＳＸ８出土遺物（84・85）（図63）

土師器椀（84）と土師器長胴甕（85）で、前述のように蓋を被せた状態で出土している。椀は、楕円形に大きく歪み、底部に平面を持たない。長胴甕の口縁端部は外に面を持ち、体部外面は全体にわたって縦方向のハケで調整されている。７世紀末～８世紀前半頃のものと思われる。

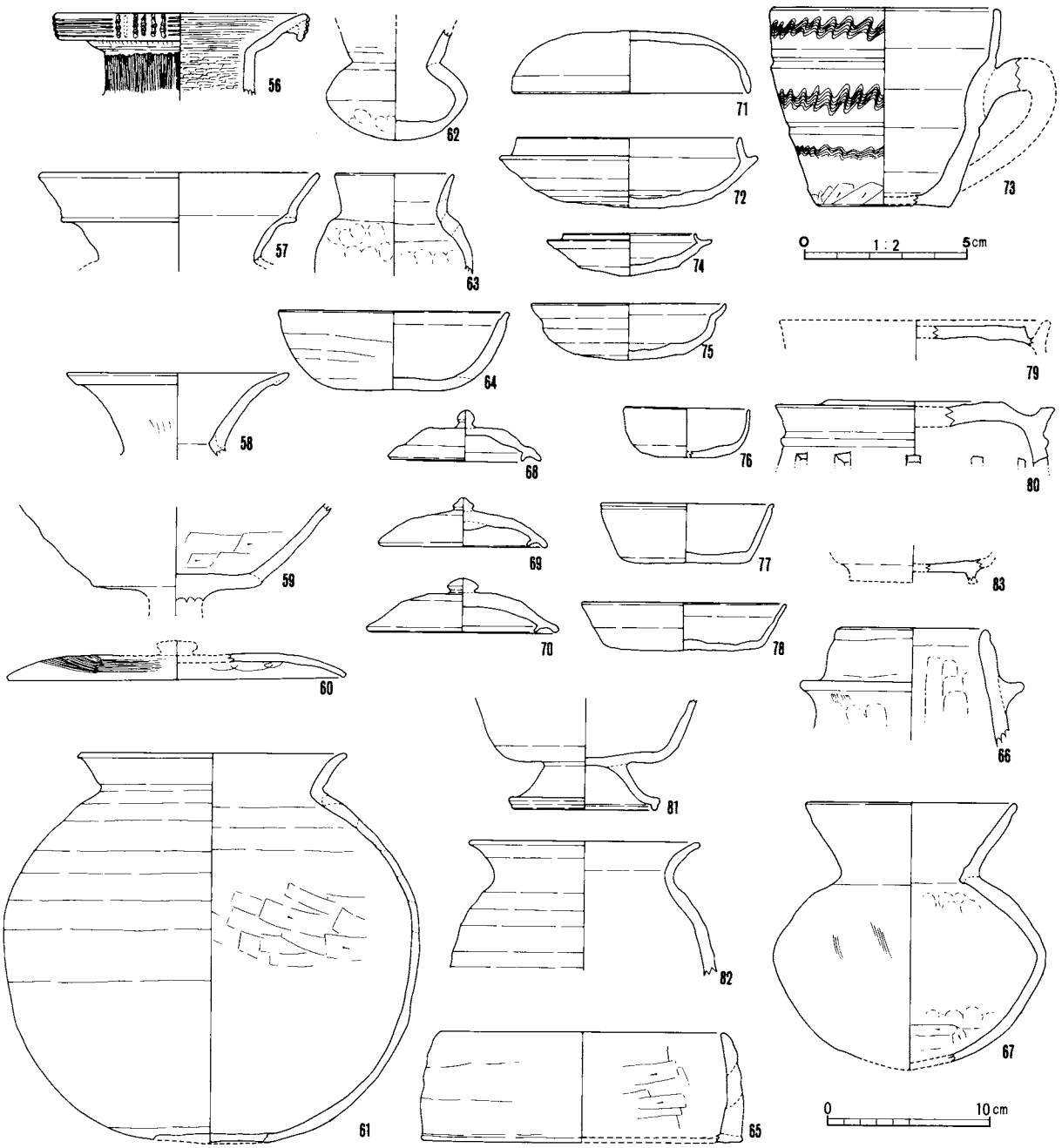
隣接したＳＸ７からは石の他に２種類の土師器の甕と考えられる破片が出土している。また、ＳＸ７の東端から20cmのところに須恵器の甕の底部が出土している。

包含層からの出土遺物（56～83）（図61）

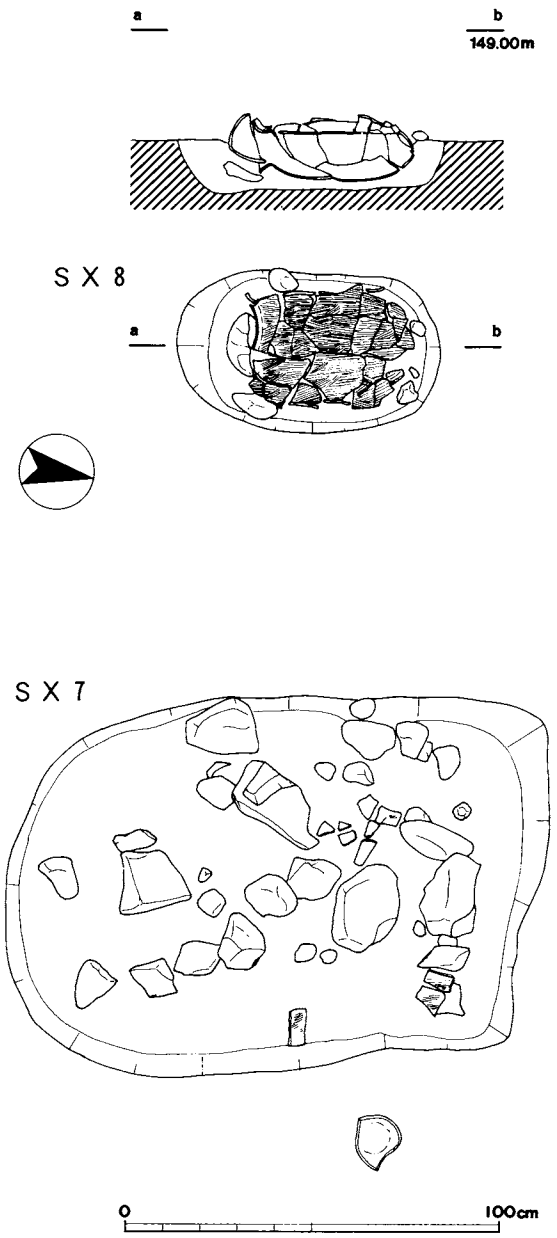
弥生土器壺（56）　口縁は垂下しており、内側に粘土を充填して張り付けている。

土師器杯蓋(60)　内外面に暗文が施されるが、内面の螺旋状暗文は二重の可能性がある。外面は４分割してヘラミガキを施しているものと思われる。中央部は欠損しているがツマミが付くものであろう。

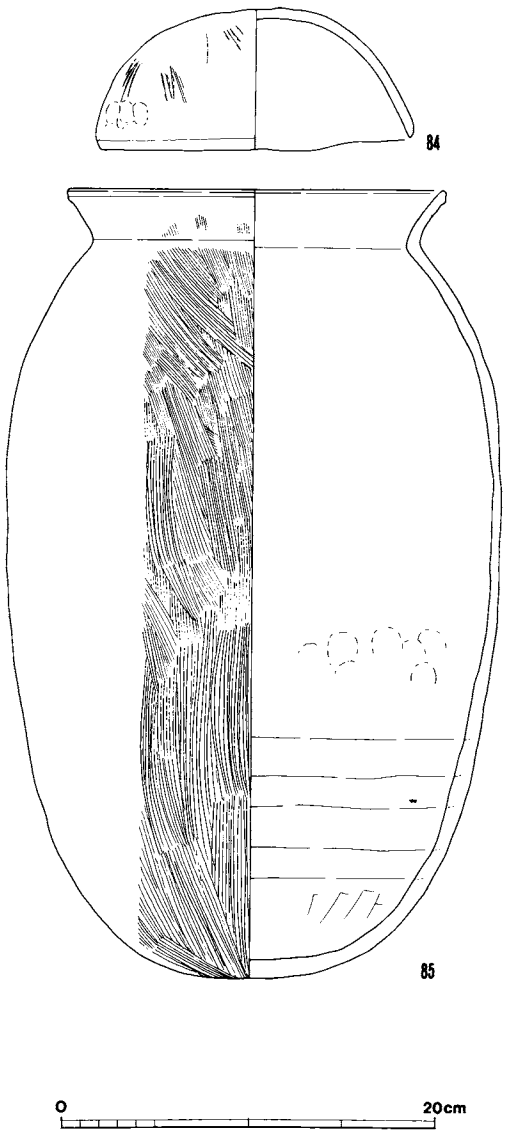
土師器甕（61）　粘土紐巻き上げ、又は輪積みによって作られたと考えられる接合痕が見られ、体部



第61図　遺物実測図（1:4、73は1:2）



第62図　ＳＸ７・ＳＸ８平面図（1:20）



第63図　ＳＸ８出土遺物実測図（1:4）

には煤が付着している。また、底部には焼成後、外側からと思われる穿孔が見られる。周辺を精査したが、土坑掘形等の遺構及び、他の遺物も確認できなかった。

土師器製塩土器（65）　いわゆる志摩式の製塩土器と考えられる。粗い胎土の中に藁状の繊維（スサ）を混入したと思われるような痕跡があり、外面底部にも藁の圧痕が残る。

土師器鍔付円筒状土器（66）　羽釜の様な鍔の付いた特殊な器形の土器で、下方に広がっている様子が見られるが、下部が欠損しているために全体の形状は不明である。鍔を水平に張り付けた後、縦方向のナデ及びハケで整えている。火にかけられた痕跡や使用痕は確認できない。

県内の類例は、嬉野町堀之内遺跡[3]と斎宮跡[4]（SK2250,SK5200）出土のものが報告されている。

須恵器杯身・杯蓋（71・72）　非常に緻密な胎土をもち、よく焼き締まった須恵器で６世紀代のものと考えられる。

須恵器把手付椀（73）　クシ描きの波状紋を３段に施した後、把手を張り付け、さらにヘラで調整している。５世紀後半のものと考えられる。

須恵器円面硯（79・80）　（79）は陸部のみの破片であるが中央部に使用痕が見られる。（80）は脚を欠するもので、スカシ穴は16穴に復元される。

緑釉陶器椀（83）　椀あるいは皿の底部片である。釉はやや黄色を帯びた緑色で内外面共に薄くかけられている。高台部は削り出しによって調整されている。

4　小　　結

限られた調査のため、広大な大坪～綾の森遺跡の全体像を考察するに至らないが、各地区ごとに概略をまとめてみたい。

A地区　遺物はA地区に集中して出土しており、古墳時代の遺物は、布留式に併行し、飛鳥時代の遺物は、飛鳥編年の第Ⅳ～Ⅴ期に比定できると考えられる。

また、古墳時代の竪穴住居と飛鳥時代の竪穴住居の遺構が検出されたが、調査区は河岸段丘の南端部に近いため、集落の中心は北側の現集落辺りかと推測される。

外山鷺棚古墳群の築造については、3号墳の5世紀初頭から1号墳の5世紀後半（勘定塚は7世紀前半）にかけての時期が推定されており、直ぐさま大坪遺跡との関連を考えることはできないが、この地域に古墳時代初期からの集落の存在を裏付けることができたと言えよう。

また、7世紀後半と考えられる大型の掘立柱建物や竪穴住居等の遺構や、さらに時代は下るが、緑釉陶器や円面硯等の伊賀国庁との関連を窺わせる遺物等から、伊賀国府となる地域を支えた基盤の一部であったことが推測できるであろう。

B地区　Ⅰ・Ⅱともに最下層は青灰色～青灰褐色の砂礫層である。この自然の流路であると思われる溝の中に、流れ込みと考えられる遺物が見られることから、トレンチ両側の段丘上に居住地区があるものと思われる。

C地区　C区からは、遺構は検出できなかったが、この地区から北東は鷺棚の丘陵が迫り、岩瀬川が南北に流れている。南側は柘植川に向かっての急斜面であるため、遺跡の端部であることが推測できる。

この様な状況から当地区は、外山丘陵と柘植川の間の狭く細長い土地ではあるものの、東側に広がる伊賀国府を含め、古墳時代から伊賀北部の政治・文化の拠点であったことが考えられる。

（川戸達也）

註

① 外山字綾の森において砂防ダム工事中に古墳時代の土師器（1点）・須恵器（2点）が出土している。（現在、上野市教育委員会保管）
昭和47年(?)の調査では六坪遺跡として遺跡台帳に登録されているが、該当の地域には六坪の地名は存在しない。

② 註①のように綾の森遺跡は分布調査による発見ではないために範囲が確定せず、六坪遺跡は所在不明である。今回の調査区は、中田・大坪・綾の森の3つの字にわたるが、遺跡の中心は大坪にあると思われるため、大坪の名称を使用することとした。また本年度は、名賀郡青山町において勝地大坪遺跡の調査も行われており、混乱を避けるために大字名の外山を併記し「外山大坪遺跡」と呼称することにした。

③ 縄文時代の遺物出土地
阿山町阿山ハイツ　ー石鏃
阿山町奥弁天古墳群ー石器
阿山町丸柱字早稲栗ー石鏃・サイドスクレーパー・磨石
伊賀町愛田字小波田ーサヌカイト製有舌尖頭器
伊賀町川西字野々奥ー磨製石斧
伊賀町天道遺跡　　ー縄文土器片
上野市印代東方遺跡ー縄文土器ミニチュア深鉢

④ 『北中溝遺跡発掘調査ニュース』　三重県教育委員会　1987

⑤ 『伊賀国府推定地他範囲確認調査ニュース』No.2　三重県教育委員会　1988

⑥ 鈴木克彦「畔垣内遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　第1分冊　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991
『宮の森遺跡発掘調査概要』　上野市教育委員会・上野市遺跡調査会　1979
服部久士・平子弘　『天道遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1989

⑦ 岡本武和・藤井尚登『奥弁天4号墳・源六谷1号墳』　阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会　1989
『故さとの歩み』　阿山町教育委員会　1980

⑧ 『平成3年伊賀国府推定地発掘調査現地説明会資料』　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991

⑨ 伊賀中世城館調査会の調査による。

⑩ 山本雅靖　『喜春遺跡群発掘報告』　上野市教育委員会・上野市遺跡調査会　1982
新田洋『恒岡氏城跡発掘調査報告書』　三重県教育委員会　1981岡本武和・藤井尚登『菊永氏城発掘調査報告』　阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会　1987

⑪ 『飛鳥・藤原宮 発掘 調査 報告Ⅱ』　奈良国立文化財研究所　1977

⑫ 土器の名称については、堀之内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告を参考にした。

⑬ 三重県埋蔵文化財調査報告87－8『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告ー第3分冊　2－』堀之内遺跡A・B地区　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991

⑭ 『史跡　斎宮跡　発掘調査概報』　三重県斎宮跡調査事務所年報1981　三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　1982
『史跡　斎宮跡　発掘調査概報』　三重県斎宮跡調査事務所年報1988　三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　1989

竪穴住居一覧表

遺構No.	位置	規模（m） NS×EW	主軸方向	備考	竈の位置	出土遺物	時期
SH36	A13	— × 4.5	—	断面で確認			4C？
SH33	A18	(1.4) × (2.5)	N23° W	SH1より古い			4C
SH1	A19	(2.3) × 4.5	N20° W	SH33, SD3より新しい	東壁	土師器杯	4C
SH30	拡28	3.4 × 3.5	N16° W	SK28より古い			4C
SH27	拡28	(3.4) × (2.6)	N25° W			土師器丸底壺	4C
SH13	A52	(1.4) × 3.0	N28° W	SH14より古い			4C
SH14	A52	(2.0) × 4.0	N24° W	SH13より新し	東壁		4C
SH20	A53	(1.1) × (3.6)	W7° S	SH21より新し	北壁		7C後半
SH21	A54	(1.6) × 4.6	W9° S	SH20より古い	北壁中央		7C後半
SH16	A56	(2.1) × 4.9	W5° S		北壁中央		7C後半
SH17	A56	(1.1) × (2.1)	N1° W				7C後半
SH18	A57	(2.1) × 3.5	W16° S			土師器高杯・壺	4C
SH23	A59	(0.7) × (2.1)	W8° S				7C後半

掘立柱建物一覧表

遺構No.	位置	規模：NS×EW(m)	主軸方向	備考
SB34	A44	1.8 × 1.7～2.3	W8° S	掘形の一辺1.3m、深さ1.5m（P1）
SB35	A60	— × 1.9～3.0	W10° S	根石あり（P1，P3）

溝一覧表

遺構No.	位置	規模（m） NS×EW	深さ	主軸方向	出土遺物	備考
SD3	A19	(0.4) × (3.4)	0.5	W26° S	須恵器杯	竪穴住居か？
SD10	A26	(2.5) × (3.3)	(0.9)		瓦器片　木杭片	
SD9	A35	(2.2) × 8.2	0.5	N9° W	土師器椀　須恵器蓋杯	

土坑一覧表

遺構No.	位置	規模（m） NS×EW	形状	出土遺物	備考
SK28	拡28	2.1 × (1.6)	隅丸方形	土師器甕	SH30より新しい
SK29	拡28	1.1 × 0.7	楕円形	須恵器杯	
SK5	A30	(4.4) × 4.6	方形か？	土師器甕・高杯・杯　須恵器杯	
SK26	A38	— × 1.9	—	土師器杯・皿・高杯　須恵器杯・蓋杯	
SK24	A68	1.6 × 1.1	楕円形		
SK25	A69	1.6 × 1.4	楕円形	土師器杯	
SX7	A34	1.5 × 1.0	長方形	炭・石・土師器片　須恵器	主軸方向 N7° W
SX8	A34	0.7 × 0.45	楕円形	土師器椀・長胴甕・石	

第14表　遺構一覧表　［（　）の数値は検出状況での距離で確定しない・—は不明］

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
1	19-3	土師器 甕	A-30 SK5下	14.3			体部内面イタナデ　体部外面タテハケ 口縁部内外面ヨコナデ	やや密	良	橙褐	10	外面に煤付着 体部欠
2	19-1	土師器 甕	A-30 SK5下	15.6			体部内面イタナデ　体部外面ナナメハケ 口縁部内外面ヨコナデ	密	良	橙褐～黒	40	外面に煤付着 体部欠
3	17-2	土師器 甕	A-30 SK5	17.6			体部内面オサエ後ナデ　体部外面ナナメハケ 口縁部内外面ヨコナデ	やや密～4mm 石英長石粒含	良	淡橙灰	口縁 50	体部欠
4	19-2	土師器 甕	A-30 SK5下	23.0			体部内面イタナデ　体部外面ナナメハケ 口縁部内面粗いハケ　口縁部外面ナナメハケ	密　雲母含	良	内　茶褐 外　暗褐	20	外面に煤付着 体部欠
5	18-6	土師器 甕	A-31 SK5	13.6			体部内外面オサエ後ナデ 口縁部内外面ヨコナデ	密	良	橙茶褐	口縁 35	
6	12-6	土師器 甕	A-30 SK5	15.0	14.5		体部内外面オサエ・ナデ 口縁部内外面ヨコナデ	粗	軟	淡橙白 黒褐	50	外面底部は黒褐色に変色
7	12-2	土師器 甕	A-30 SK5	13.2			体部内面イタナデ　口縁部ナナメハケ 体部外面ナナメハケ後ケズリ	粗　～2mm 石英長石含	良	内　淡褐 外　赤褐	20	
8	18-1	土師器 甕	A-30 SK5下	13.8	6.2		体部外面タテハケ後ナナメハケ 体部内面ナデ　口縁部内面ヨコハケ	粗 ～2mm砂粒含	良	内　淡茶 外　淡赤灰	60	外面に煤付着 受口状口縁
9	18-4	土師器 ミニチュア蓋	A-30 SK5	7.7	5.0		体部内外面オサエ 口縁部内外面ヨコナデ	密	良	橙褐	15	
10	12-8	土師器 高杯	A-30 SK5下	10.0		杯高 3.1	ヨコナデ	密	良	橙褐	杯部 100	脚部欠
11	18-3	土師器 高杯	A-30 SK5	11.0		杯高 3.1	杯部内面横方向ミガキ 杯部外面ヨコナデ	密	良	橙褐	杯部 25	脚部欠
12	12-7	土師器 高杯	A-30 SK5	10.7	10.7	脚径 13.6	杯部内面放射状ミガキ　脚部穿孔 脚部内面ケズリ　脚部外面縦方向ミガキ	密	良	明橙灰	65	放射状暗文一段 スカシ3穴
13	12-3	土師器 杯	A-30 SK5	16.2			内面ヨコナデ後ミガキ 外面ヨコナデ後ミガキ　底部外面ケズリ	密	良	灰褐	30	放射状暗文一段
14	14-1	土師器 杯	A-30 SK5	17.4	4.8		内面ヨコナデ後ミガキ　底部内面ミガキ 外面ヨコナデ　底部外面ナデ	密	良	外　橙灰 断　橙褐	35	放射状暗文一段 螺旋状暗文二重
15	17-1	土師器 杯	A-30 SK5	11.8	3.7		内面ヨコナデ後ミガキ 外面ヨコナデ　底部外面ケズリ	密	良	無い　淡橙灰	35	放射状暗文一段 螺旋状暗文一重
16	12-5	土師器 椀	A-30 SK5	10.6	3.6		内面イタナデ　口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ハケ・ナデ	粗	良	濃褐	80	
17	14-2	土師器 高杯	A-30 SK5	17.0		杯高 4.7	内面ヨコナデ後ミガキ　底部内面ミガキ 外面ヨコナデ・オサエ	密	良	橙灰	杯部 30	放射状暗文一段 螺旋状暗文二重　脚部欠
18	12-1	土師器 甕	A-30 SK5上	12.3	8.6		体部内面イタナデ・ナデ　体部外面ナデ 頸部内面ヨコハケ　頸部外面タテハケ	粗 ～1mm長石含	良	内　橙褐色 外　淡黄褐	50	外面底部に火を受けた痕跡
19	17-6	土師器 杯	A-31 SK5	10.0			ロクロナデ	密	硬	青灰	10	焼膨れ
20	12-4	土師器 杯	A-30 SK5	8.8	3.0		ロクロナデ　底部外面下1/2ロクロケズリ	やや密	硬	青灰	50	
21	13-3	土師器 杯	A-30 SK5	10.5	3.7		ロクロナデ　右回り 底部外面ロクロケズリ	密	硬	青灰白	90	焼膨れあり 杯蓋の可能性あり
22	13-9	土師器 杯	A-30 SK5上	11.0	3.0		ロクロナデ　右回り 底部外面ロクロケズリ	やや密	軟	淡茶灰	60	
23	9-1	土師器 杯	A-38 SK26	11.6	3.5		ロクロナデ　右回り 底部外面ロクロケズリ	密	良	橙	60	放射状暗文一段
24	11-5	土師器 杯	A-39 SK26	13.2	3.3		内面ヨコナデ後ミガキ 外面ヨコナデ　底部外面ロクロケズリ	密	良	表　橙灰白 断　橙褐	60	底部外面にヘラ記号（×） 放射状暗文一段
25	9-3	土師器 杯	A-38 SK26	15.2	4.0		内面ヨコナデ後ミガキ 外面ヨコナデ	密	硬	灰橙	25	底部外面に木の葉の痕跡 放射状暗文一段
26	10-1	土師器 鉢	A-38 SK26	21.2			内面ヨコナデ 外面ヨ上1/2ミガキ　底部外面ナデ・ケズリ	密	硬	明橙	10	黒斑あり
27	8-1	土師器 鉢	A-38 SK26	31.4	9.8		内面ヨコナデ後ミガキ 外面上1/3ミガキ	密	良	橙白	30	放射状暗文二段
28	11-3	土師器 皿	A-38 SK26	24.4	3.2		ナデ	密	良	橙	20	風化顕著　調整不明瞭
29	9-2	土師器 皿	A-38 SK26	22.7	3.1		内面ヨコナデ後ミガキ　口縁部ヨコナデ 外面ナデ	やや密	良	表　淡茶褐 断　茶褐	25	底部外面にヘラ記号（#） 風化顕著　放射状暗文一段
30	13-8	土師器 高杯	A-39 SK26	16.8	9.8	脚径 10.8	杯部ヨコナデ 脚部外面　ナデ　脚内面未調整	密	軟	橙灰	75	脚内部にシボリ目あり
31	11-1	土師器 杯蓋	A-39 SK26	9.6	3.2		ロクロナデ　右回り 外面上1/3ロクロケズリ	やや密	硬	灰白	95	外面灰被り自然釉 歪み多
32	10-2	土師器 杯蓋	A-38 SK26	12.4	2.9		ロクロナデ　右回り 外面上1/2ロクロケズリ	密 石英長石含	硬	灰白	50	
33	10-3	土師器 杯蓋	A-38 SK26	14.0	3.0		ロクロナデ　右回り 外面上1/3ロクロケズリ	密 石英長石含	硬	明灰白	20	
34	10-4	土師器 杯蓋	A-38 SK26	17.6	3.5		ロクロナデ　右回り	密	硬	明灰白	40	灰被り自然釉
35	11-2	土師器 杯	A-38 SK26	9.7	3.0		ロクロナデ　右回り 底部外面ロクロケズリ	やや密	硬	青灰白	80	

第15表　遺物観察表（1）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
36	10-6	須恵器 杯	A-38 SK26	10.9	4.0		ロクロナデ 外面底部ロクロケズリ	やや密 ~0.3mm長石含	硬	淡茶灰白	70	
37	3-2	須恵器 杯	A-38 SK26	12.6	4.6		ロクロナデ 外面底部ロクロケズリ　高台はりつけ	やや密	硬	灰白	40	
38	3-1	須恵器 杯	A-38 SK26	13.6	5.0		ロクロナデ 外面底部ロクロケズリ　高台はりつけ	密	硬	明灰白	45	
39	10-5	須恵器 甕	A-38 SK26	22.0			ロクロナデ　外面体部タタキ	密	硬	淡灰白	口縁 20	体部欠
40	2-5	須恵器 高杯	A-38 SK26	14.0	9.8	脚径 9.7	ロクロナデ	粗 ~1mm長石含	硬	灰白	75	杯部、歪み多し 一部灰被り
41	1-4	土師器 椀	A-34 SD9	9.6	4.3		内面イタナデ 外面ナデ　口縁部外面ヨコナデ	密	硬	橙灰	100 完形	
42	2-1	須恵器 杯	A-34 SD9	11.2	2.5		ロクロナデ 外面底部下1/3　ロクロケズリ	密	硬	明灰白	100 完形	灰被り自然釉 重ね焼融着 杯蓋の可能性あり
43	1-2	須恵器 杯蓋	A-34 SD9	14.3	2.7		ロクロナデ　右回り 外面上1/2ロクロケズリ	やや密	硬	明灰白	100 完形	
44	1-1	須恵器 高杯	A-34 SD9	11.2	4.7		ロクロナデ	密	硬	青灰	95	
45	16-1	土師器 壺	A-57 SH18	17.0			口縁部内面ヨコナデ 口縁部外面イタナデ　体部内外面・ナデ	粗　2~5mm 長石含	良	淡橙灰 黄灰白	40	
46	1-5	土師器 壺	A-57 SH18	9.2	7.2		内面ヨコナデ　口縁部内外面ヨコナデ 外面ナナメハケ　底部外面に粘土紐はりつけ	密	良	淡橙灰	90	
47	1-3	土師器 高杯	A-57 SH18	10.2	8.1		杯部内外面放射状のミガキ 脚部外面縦方向のミガキ　脚部に穿孔	密 石英長石細粒含	良	淡橙灰	95	スカシ3穴
48	19-4	土師器 小型丸底壺	A-拡張 SH27	9.0	6.7		体部内面上1/2ケズリ　底部内面ナデ 口縁部内外面ヨコナデ	やや密	良	淡橙白	60	
49	1-6	土師器 椀	A-15 SD4	9.0	6.1		内面イタナデ 外面タテハケ	やや密	良	内　茶褐 外　橙褐	30	
50	2-3	土師器 杯	A-19 SD1	14.2	3.6		ナデ	密	良	明橙	25	
51	18-2	須恵器 杯	A-52 Pit4	11.1	3.5		ロクロナデ　高台はりつけ 外面底部ロクロケズリ	やや粗	硬	灰白~灰緑	5	内外面灰被り自然釉
52	2-2	須恵器 杯	A-拡張 SK29	9.5	3.0		ロクロナデ 外面底部下1/3ロクロケズリ	やや密 長石粒含	硬	灰白	100 完形	
53	16-3	須恵器 杯	A-19 SD3	15.6	4.2		ロクロナデ　右回り　高台はりつけ 外面底部ロクロケズリ	密	硬	青灰白	70	
54	2-4	土師器 甕	A-拡張 SK28	20.6			体部内面ヨコハケ 体部外面タテハケ	密	良	橙灰	口縁 20	
55	5-1	土師器 杯	A-69 SK25	18.3	5.1		内面ナデ後ミガキ 外面ナデ後ミガキ・底部外面ロクロケズリ	密	良	表　淡茶褐 断　橙茶	90	放射状暗文二段螺旋状暗文 三重墨書あり（□□印）
56	17-3	弥生土器 壺	A-東端 排土	15.5			内面イタナデ・ミガキ　口縁端部はりつけ 外面ナデ・タテミガキ・クシ	やや密　石英 長石雲母含	良	表　明灰褐 断　黒灰	口縁 20	体部欠
57	17-4	土師器 二重口縁壺	A-拡張 排土	17.2			ナデ	密	良	明橙灰	口縁 15	風化著しく調整不明瞭 体部欠
58	14-4	土師器 壺	A-11 包含層	13.6			体部内外面ヨコナデ	密 ~2mm石英含	良	橙灰	頸部 40	頸部のみ
59	14-3	土師器 高杯	A-16 包含層				内外面ヨコナデ	やや密~2mm 石英長石含	良	淡褐	30	口縁欠・脚部欠
60	7-4	土師器 杯蓋	A-60 包含層	21.0	1.5		内面ナデ後螺旋状暗文 外面ナデ後ミガキ	密	良	橙	50	外面ミガキは4分割？
61	15-1	土師器 甕	A-17 包含層	16.5	23.5		体部内面イタナデ　口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ナデ　粘土輪積みの痕跡	密	良	明橙灰~ 灰白	100	焼成後底部に穿孔 内外に煤付着
62	7-3	土師器 小型丸底壺	A-57 包含層	体 8.7			内外面ナデ	密	良	淡橙灰白	70	口縁部欠
63	14-5	土師器 小型壺	A-12 包含層	7.4			内面オサエ　口縁部内外面ヨコナデ 外面ナデ　粘土巻き上げの痕跡	やや密 ~1mm長石含	良	黒~黒褐	25	還元焼成 底部欠
64	15-2	土師器 椀	A-14 包含層	14.2	4.8		内面ヨコナデ　口縁部ヨコナデ 外面ヨコナデ	密	硬	内　黄灰白 外　橙灰	90	
65	17-7	土師器 製塩土器	A-東端 排土	17.5	6.6		内面イタナデ　底部はりつけ 外面オサエ　粘土巻き上げの痕跡	粗 藁状繊維の痕跡	良	明橙灰白	10	志摩式製塩土器 外面底部に藁の圧痕
66	13-7	土師器 鍔付円筒状土器	A-36 包含層	9.4		鍔径 13.8	内面イタナデ　鍔部はりつけ 外面ナデ・タテハケ	やや密	良	内　淡橙灰 外　淡茶褐	口縁 25	鍔端部磨滅
67	15-3	土師器 丸底壺	A-16 包含層	13.0			内面ナデ口縁部内外面ヨコナデ 外面ハケ後ナデ	粗　2~5mm 長石含	良	橙褐	45	底部欠
68	13-2	須恵器 杯蓋	A-34 包含層	9.4	3.1		ロクロナデ 外面上1/3ロクロケズリ	やや密	良	灰白	50	外面灰被り
69	3-6	須恵器 杯蓋	A-36 包含層	10.4	3.0		ロクロナデ　右回り 外面上1/2ロクロケズリ	やや密	硬	灰白	100 完形	焼膨れあり
70	3-5	須恵器 杯蓋	A-61 包含層	11.8	3.3		ロクロナデ　右回り 外面上1/2ロクロケズリ	やや密	硬	灰白	100 完形	外面灰被り

第16表　遺物観察表（2）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度（%）	備考
71	13-5	須恵器 杯蓋	A-35 排土	14.6	3.8		ロクロナデ 外面上1/2ロクロケズリ　底部内面ヨコナデ	密 ～3㎜長石含	硬	青灰	40	
72	16-2	須恵器 杯	A-14 包含層	13.8	4.3		内面ロクロナデ右回り 外面ロクロナデ　底部1/3ロクロケズリ	密	硬	内　青灰 外　明灰	50	外面灰被り
73	7-1	須恵器 把手付椀	A-西端 排土	7.0	6.0		ロクロナデ　底部ケズリ　波状文三段 把手は施文のあとはりつけ	密	良	灰白～ 青灰	40	
74	13-1	須恵器 杯	A-33 排土	8.2	3.6		ロクロナデ　右回り 底部外面下1/3ロクロケズリ	やや密	硬	青灰	95	杯蓋の可能性あり
75	11-4	須恵器 杯	A-27 包含層	12.0	3.4		ロクロナデ 底部外面1/3ロクロケズリ	密	軟	淡橙灰白	70	
76	3-7	須恵器 杯	A-57 包含層	7.8	3.0		ロクロナデ 底部外面下1/3ロクロケズリ	密	硬	灰白	45	
77	13-4	須恵器 杯	A-45 包含層	10.6	3.6		ロクロナデ	やや密	硬	灰白	40	内面灰被り
78	3-4	須恵器 杯	A-60 排土	12.6	2.9		ロクロナデ　右回り 底部内面ヨコナデ	密	硬	灰白	80	
79	17-5	須恵器 円面硯	A-45 排土	陸径 13.2			表面ロクロナデ 裏面ナデ	密	硬	青灰白	20	硯面陸部のみ 中央部使用痕あり
80	3-3	須恵器 円面硯	A-50 包含層	17.2			ロクロナデ　ヨコナデ 脚にスカシ孔（16穴）	やや密	硬	明灰白	硯面 40	脚部欠
81	7-2	須恵器 杯	A-65 排土	脚 9.2			ロクロナデ	やや密 ～5㎜長石含	良	灰白	杯 30 脚100	杯部欠
82	7-5	須恵器 甕	A-50 包含層	14.2			ロクロナデ	密	硬	青灰白	口縁 80	体部欠
83	18-5	緑釉陶器 杯	A-東端 排土				内面ロクロナデ ケズリ出し高台	密	良	胎　灰白 釉　淡緑	―	高台部の破片（最大7.8㎝） 釉は薄くかかる
84	4-1	土師器 椀	A-34 SX8	16.9	7.6		内面ヨコナデ 外面ナナメハケ	やや密	良	内　灰茶褐 外　黒灰褐	100 完形	長胴甕（甕棺）の蓋に転用 口縁は楕円形 直径16.9～14.7㎝
85	6-1	土師器 長胴甕	A-34 SX8	20.2	41.7		体部内面オサエ・ナデ体部外面ハケ 口縁部内外面ヨコナデ　粘土輪積み	やや密	良	灰橙 一部　橙白	100	黒斑あり甕棺本体

第17表　遺物観察表（3）

PL. 10

AI区（東から）

AII区　西　（東から）

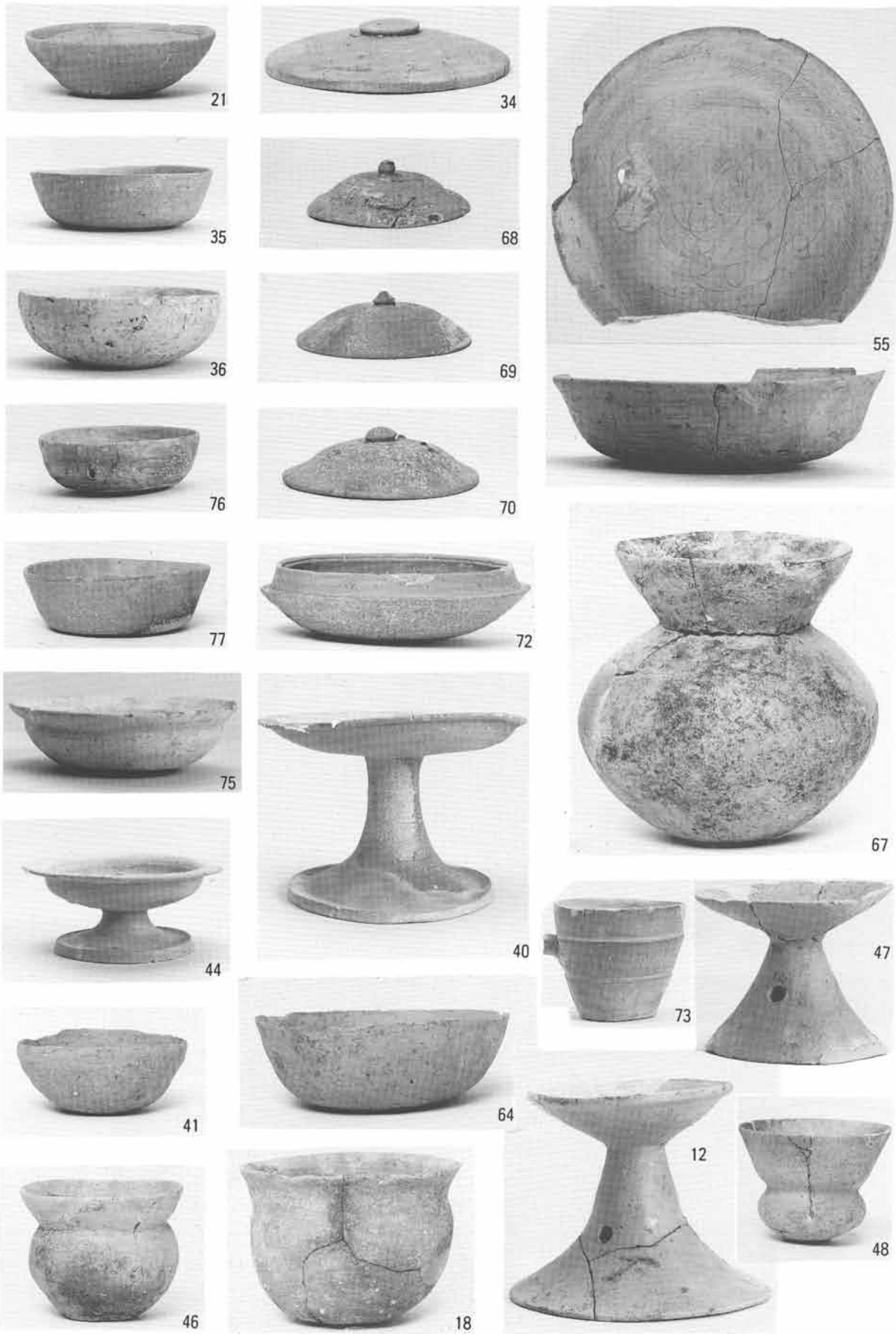
SX7・SX8（西から）

AII区　東　（西から）

拡張区（南から）

SH20・SH21（西から）

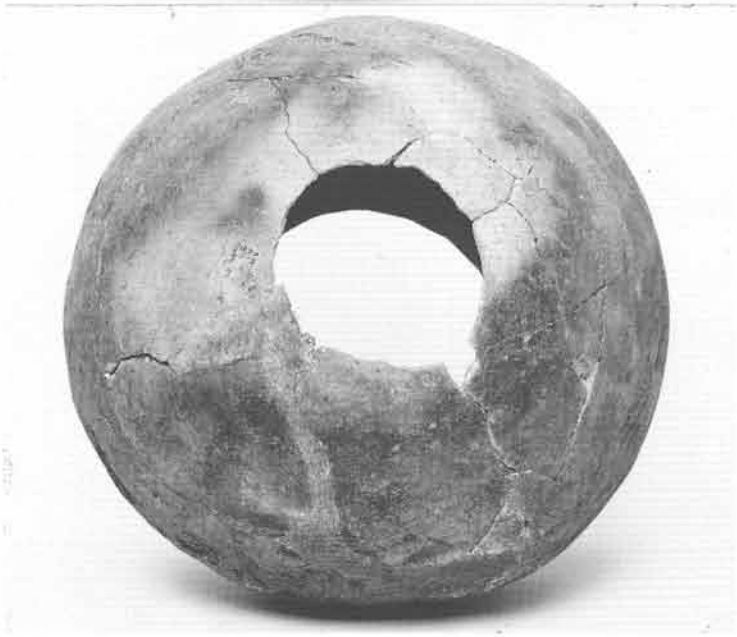
SH16（東から）



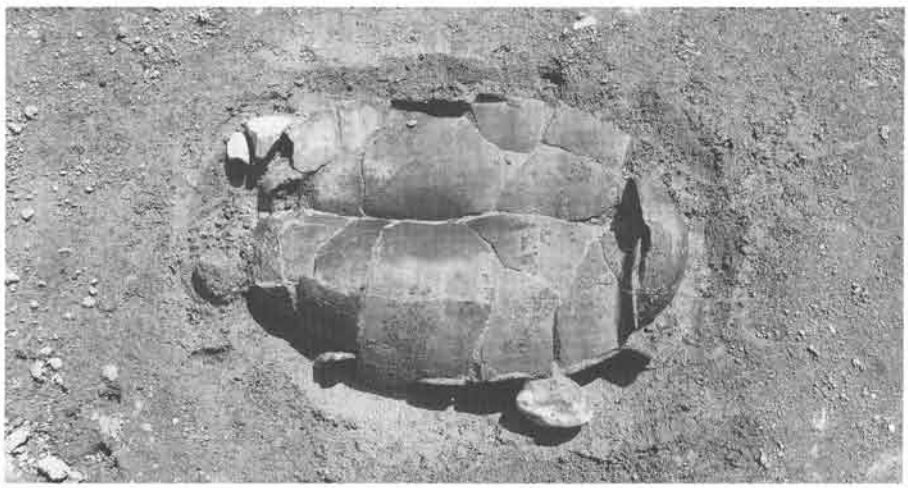
遺物　土師器・須恵器

84 (1:3)

84・85 (1:6)



61 (1:3)

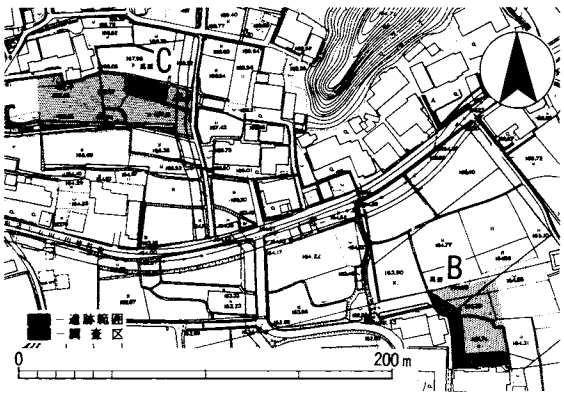


遺物　出土状況他

V　阿山郡阿山町　馬田（ばた）遺跡

馬田遺跡の所在する阿山郡阿山町大字馬田は、伊賀北部の河合川と鞆田川の合流点を中心に、南北に広がる沖積地の東北部に位置し、条里遺構が確認される地域である。中近世に至っては、集落内の戸数の割に無足人の数が多く、廃寺の多いことでも知られている。遺跡は、野田川北岸の河岸段丘上の雨請山麓に広がる標高160m～170mの緩傾斜地であり平安時代から近世までの遺物が散布している。

（馬田・鉾坪・北城遺跡の歴史的環境及び遺跡位置図は、Ⅳ外山大坪遺跡の報告を参照されたい。）

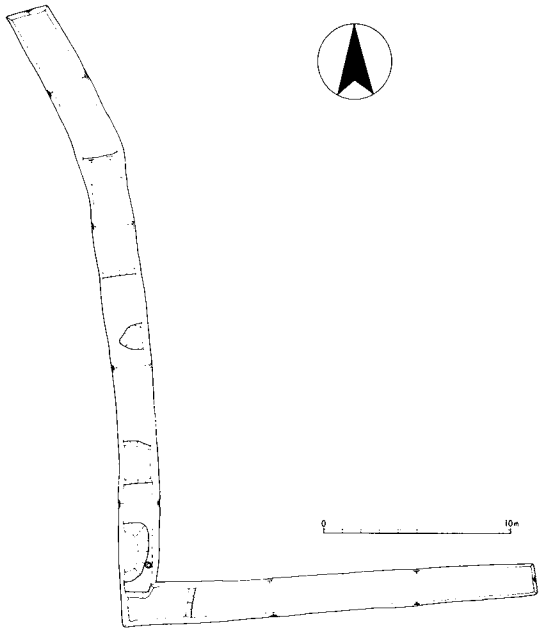


第64図　調査区位置図（1:4,000）

1．B地区（字澤田）

主な遺構は、土坑と溝状の落ち込みが検出されている。また、表土直下の埋土は撹乱を受けている様子が確認できる。

遺物は、瓦器椀片・陶器椀片等が見られるが、いずれも小片である。

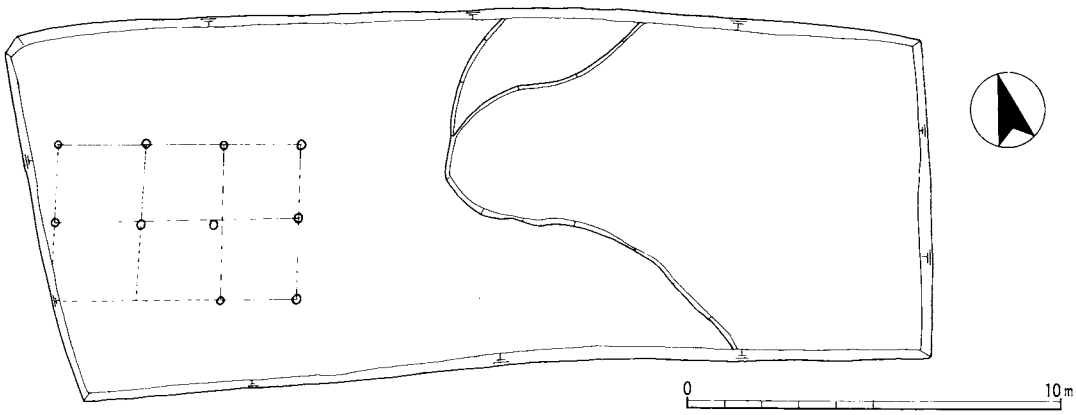


第65図　B地区平面図（1:400）

2．C地区（字稲端）

主な遺構は、西側でピットが、東側では谷状の大きな落ち込みが検出されている。ピットは3間×2間（柱間2.1m～2.4m）の東西棟の掘立柱建物になると考えられる。調査区東側では、暗灰色の砂礫層が厚く堆積しており、東ほど深くなっている。

遺物は、土師器片・瓦器片が包含層から出土したが、いずれも小片である。



第66図　C地区平面図（1:200）

3. まとめ

B地区は現代のほ場整備によって埋められた水田もしくは畑であり、遺物は北方の高い土地からの流れ込みによるものと考えられる。

C地区の掘立柱建物は、遺構に伴う遺物がないために時代を特定する事が困難であるが、時代的には中世であろうと思われる。また、調査区東の南北に通る道は「城の辻」（しょのつじ）、道を隔てた東側の小山は「城山」（じょうやま）と呼ばれていることから中世城館との関連を考えたい。東側は、土中に水を多く含み、砂層では青灰色を呈する。遺物の包含も少なく、河道の跡であると考えられる。

（川戸達也）

Ⅵ　上野市東条・羽根　鉾坪（ほこつぼ）・北城（きたんじょ）遺跡

1. 鉾坪遺跡

遺跡は、上野市東条字鉾坪に所在し、敢国神社西方、府中小学校南方の平地部に広がる遺物散布地であり、現況は標高145m前後の水田になっている。

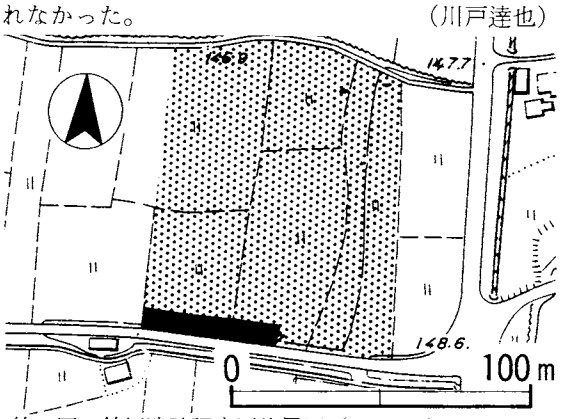
市道印代一之宮線沿いの調査区では、耕土直下に灰白色のシルト～灰褐色の砂礫層が認められたが、遺構や遺物は見られなかった。また、一部では道路側溝の工事に伴うと思われる撹乱も見られた。

2. 北城遺跡

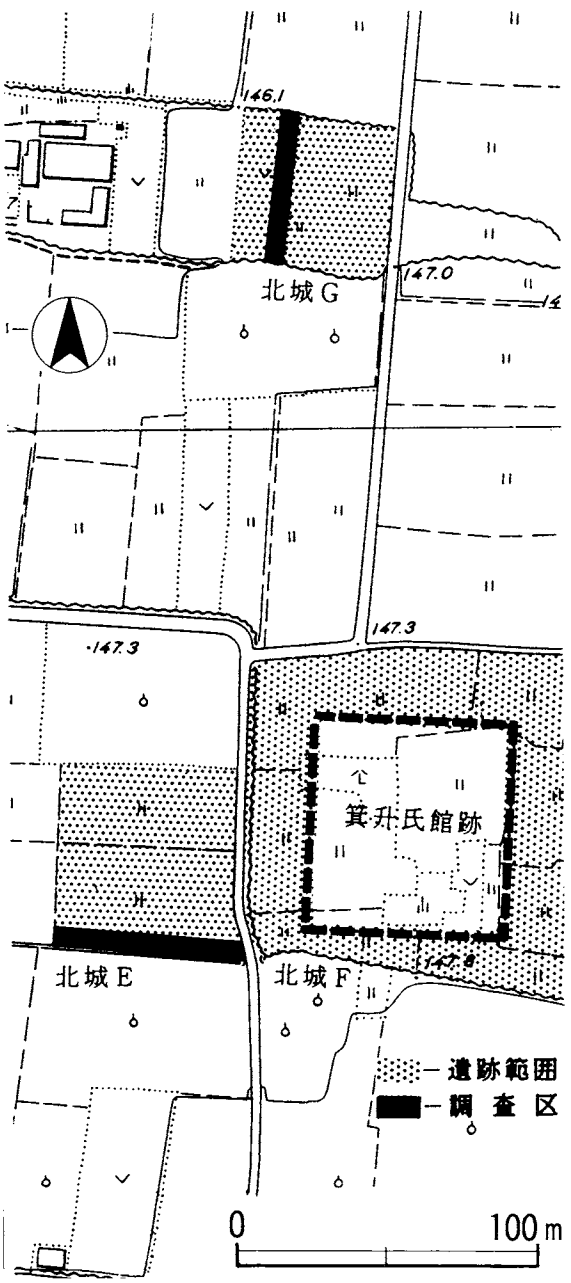
遺跡は、上野市羽根字北城に所在する。地元で、北ノ城（箕升氏館跡）と呼ばれている中世城館の周辺であり、現況は標高147m前後の耕地である。

E・F地区では館跡の南側、通称ホリ田と呼ばれている東西に細長い水田において、堀の埋土を確認することができた。遺物は、土師器片が包含層から出土している。G地区はF地区の北方約250mの畑及び果樹園である。調査の結果、遺構や遺物は見られなかった。

（川戸達也）



第67図　鉾坪遺跡調査区位置図（1:2,500）

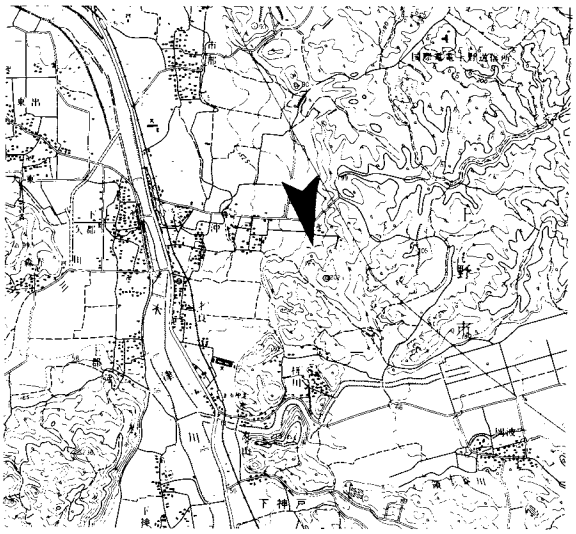


第68図　北城遺跡調査区位置図（1:2,500）

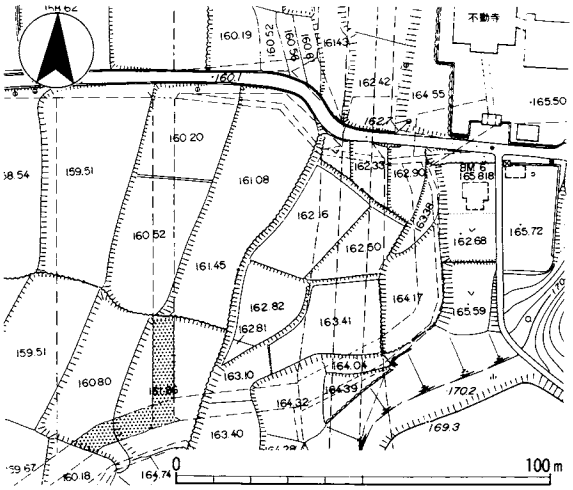
Ⅵ　上野市沖　馬場遺跡

当遺跡は行政上、上野市沖に所在する。地理的には上野盆地（旧伊賀盆地）の中央西寄りをほぼ南北に流れる木津川両岸に形成された沖積平野の東側標高161m上に位置する。

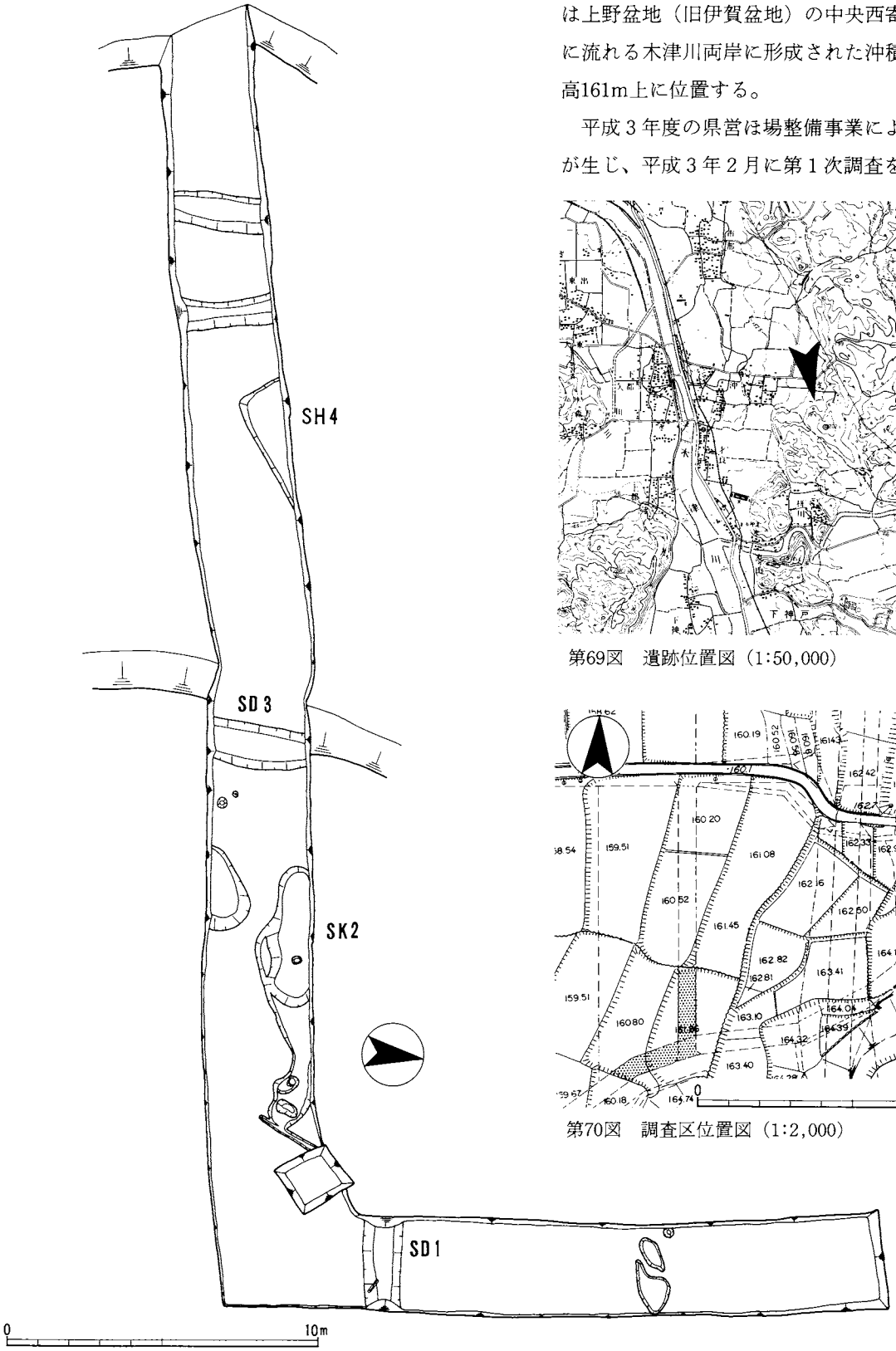
平成３年度の県営ほ場整備事業により調査の必要が生じ、平成３年２月に第１次調査を実施したとこ



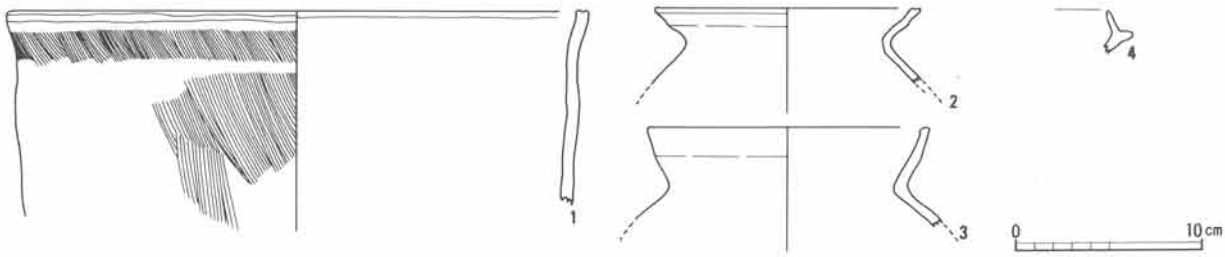
第69図　遺跡位置図（1:50,000）



第70図　調査区位置図（1:2,000）



第71図　遺構平面図（1:200）



第72図　遺物実測図（1:4）

ろ、事業地内2,800㎡にわたり遺跡が広がっていることが判明。そのうち事業により削平を受ける排水路部分および農道部分の一部を合わせた約260㎡について第２次調査をおこなった。調査期間は平成３年１０月７日～１０月９日の３日間であった。

調査区は排水路部分に沿い東西に41m×3.5mのトレンチ溝と南北に17.5m×3mのトレンチ溝を「L」字状に設定した。調査の結果、古墳時代中期（５世紀）～後期（６世紀後半）にかけての遺物が出土し、土坑、溝、竪穴住居等の遺構を検出した。

地山面は東から西に行くほどなだらかな傾斜となり、その両端の比高差は約2mになる。また、トレンチ東端から20mの地点より粘質土（所により粘土）に変わる。ここで検出した竪穴住居、溝の埋土（暗灰色土）の土、検出面（褐色土）の土は粘土に非常に近い。おそらく長期にわたる地下水の浸透により土質が変化したのではないかと考えられる。地山の土層は黄灰色粘質土である。以下主な遺構について遺物に触れながら述べる。

ＳＤ１　調査区東端で東西に延びる幅1.2m、深さ約0.4mの溝を検出した。埋土は暗灰色粘土で遺物等は含まず、ただ溝に伴う杭が出土した。

ＳＫ２　暗茶褐色の埋土で長辺4.4m、短辺1.6mの不定形な土坑である。東に溝状の遺構がつく。ここからは布留式に併行する土師器甕（3）、と同時期の近江系の受け口状口縁甕(2) 等、土師器を中心に破片が多く出土した。また、TK43型式に併行する須恵器の杯身（4）等も出土した。

ＳＤ３　暗灰色粘質土の埋土で南北に延びる溝である。溝は幅1.4m、深さ20cm程度であるが、検出時に上部を削平したため浅くなる。ＳＤ３からは土師器の甑（1)と須恵器の提瓶の体部片が出土した。

ＳＨ４　東西に入れたトレンチの一段下がった北側に竪穴住居の一角を検出した。ここからは土師器の細片が出土した。

（吉澤　良）

東西トレンチ　ＳＨ４近景

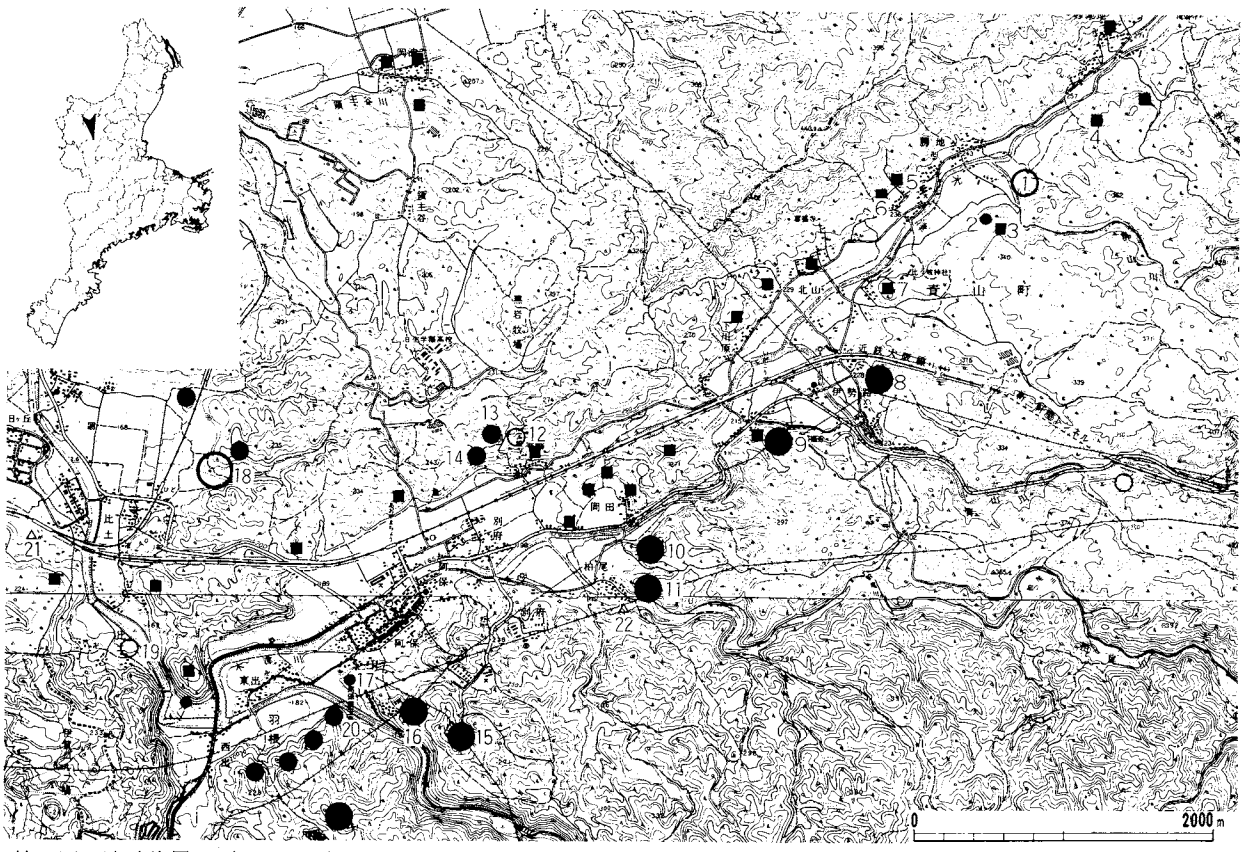
Ⅷ　名賀郡青山町　勝地大坪遺跡(A•B地区)、勝地大坪古墳群

1、位置と歴史的環境

青山町は伊賀盆地の南東端に位置し、行政上南東部を一志郡白山町、同美杉村に隣接し西部は山地を介して名張市、北部は上野市、大山田村に接する。また、集落は北西部を西流する木津川に形成された沖積平野、河岸段丘上に集中し、その他は山地と丘陵地の谷沿いに点在する。当遺跡（標高249m）は、青山町の北東部、木津川沿いにのびる県道伊賀青山線の沿線上に位置し、青山町勝地及び妙楽地に所在する。

青山町の歴史は縄文時代早期にまで遡ることができ押型文土器や石器等が出土している。確認される遺跡は木津川沿いに多く、5例中3例あり当遺跡もその支流にあたる。[1] 木津川に沿って人、物の流入が畿内からのこの地にあった蓋然性は高い。

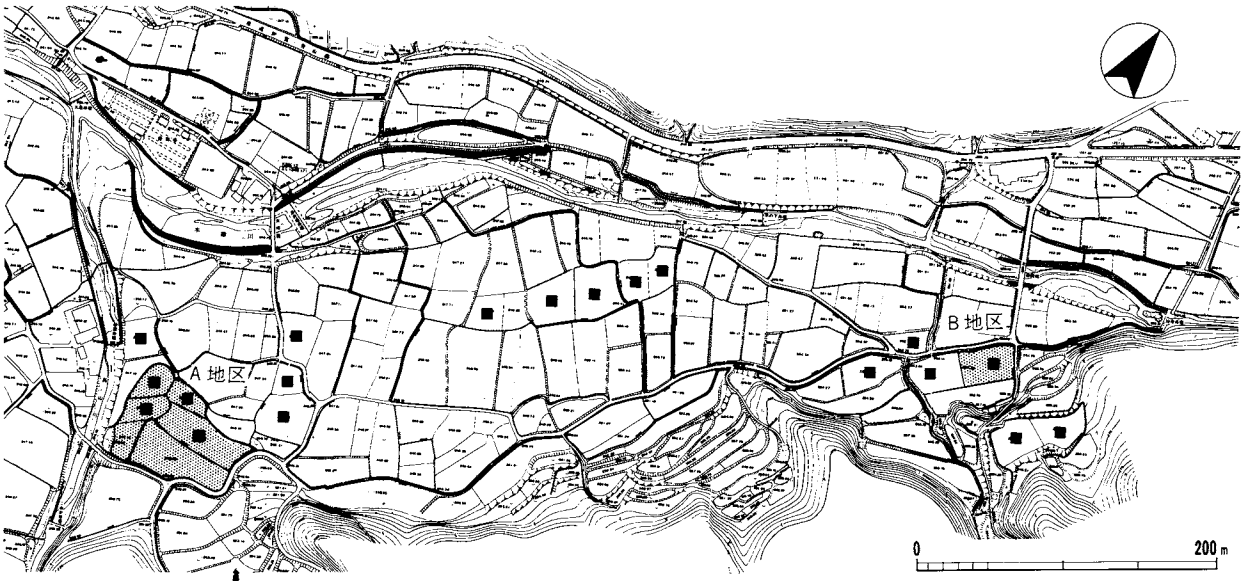
弥生時代はさらに遺跡数を増すが、それは農耕文化の開始と定住化による人口増とは無関係ではないだろう。古墳時代に入り前代から引き続く身分階層構造がより明確化されるが、当地では前期・中期に比定できる古墳は未だ見いだされない。なぜなら名張市美旗にある前方後円墳を主体とする被葬者の勢力に属していたからとの考え[2]もある。しかし、古墳時代後期に至って爆発的に横穴式石室を持つ小円墳が増加する。確認される古墳数は106基にのぼり[3]、今回の勝地大坪古墳群を加えて109基になる。歴史時代に入り、律令体制は政治を安定化させ都と地方の往来を盛んにさせる。この地も例外ではなく畿内と伊勢・東国を結ぶ交通の要衝として長期的に栄える。中世に入ると在地の有力者が徐々に力をつけ、後半では中央の政治的混乱が表面化する中で多くの土豪が伊賀に乱立する。その勢力は青山町では木津川沿いに多くの城館（現在遺跡数は47）[3] を構え、天下統一をねらう織田信長の侵攻を待つことになる。



第73図　遺跡位置図（1:50,000）

（※国土地理「伊勢路・阿保」1:25,000より）
■…中世城館　•…古墳
△…銅鐸出土地　●…古墳群　○…その他の遺跡

1. 勝地大坪　2. 宮下　3. 城氏城　4. 数内氏　5. 新左近　6. 甚次郎　7. 十郎館　8. 六地蔵　9. 赤井谷　10. 岡田向　11. 中森　12. 安田中世墓　13. 朝妻　14. 安田　15. 桐ヶ谷　16. 上代　17. 伝承息連別命　18. 城之越　19. 高瀬　20. 狐塚　21. 比土　22. 銅鐸



第74図　遺跡地形図（1:5,000）　■印…試掘坑

2、A地区の遺構・遺物

現況は南北に張り出す丘陵状の尾根の突端部を削平し、水田としている。調査区の標高は248.5m～249.17mである。第１次調査において顕著な遺構・遺物は見つけることは出来なかったが、遺跡周辺の水田の畦畔に使われている石が古墳時代の墳墓に伴う石材の可能性が高かった為、削平を受ける部分の1,700㎡について本調査を行った。調査区の土層の基本的層序は第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：暗青灰色土、第Ⅲ層：黄褐色土（地山）である。地山面は調査区南から放射状に北・西になだらかに下っていく。その比高差は1.0m～0.4mである。調査区外の西側は一段下るとフラットな状態になりそこから急峻な谷になる。調査区の東側も地山が急に落ち込んでおり、旧地形は谷と考えられる。検出した遺構は、縄文時代の土坑４基、横穴式石室を持つ円墳３基、その他多数のPit、土坑等である。

以下、主な遺構について概述するが、今調査が古墳を中心とするため時代別に遺構・遺物の順で一括して述べ、またその性格については結語で述べる。

1、縄文時代

①　遺　構

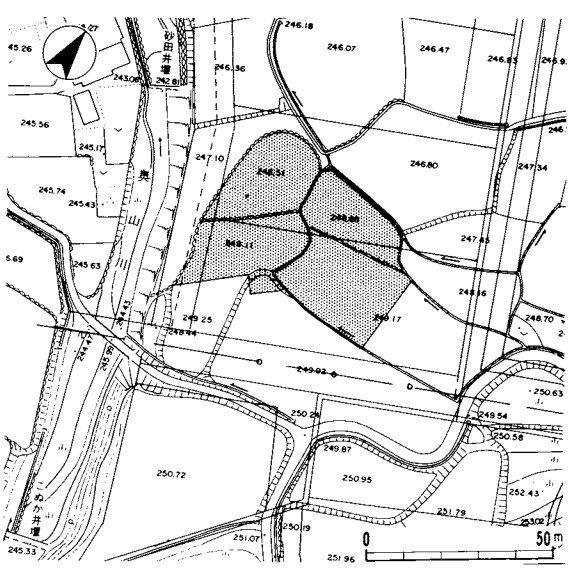
SK１　調査区南側中央付近で検出する直径1.1mの円形土坑で、底部に小穴をもつ。底部までの深さは、61cm、小穴を含む最深部は74cmとなる。SK1より土器片が少量出土した。

SK２　SK1より北へ約8mに位置する。直径1.4mの円形土坑で構造はSK1と同じであり、底部まで38cm、最深部までは48cmである。SK2からは時期不明の土器の細片が出土。

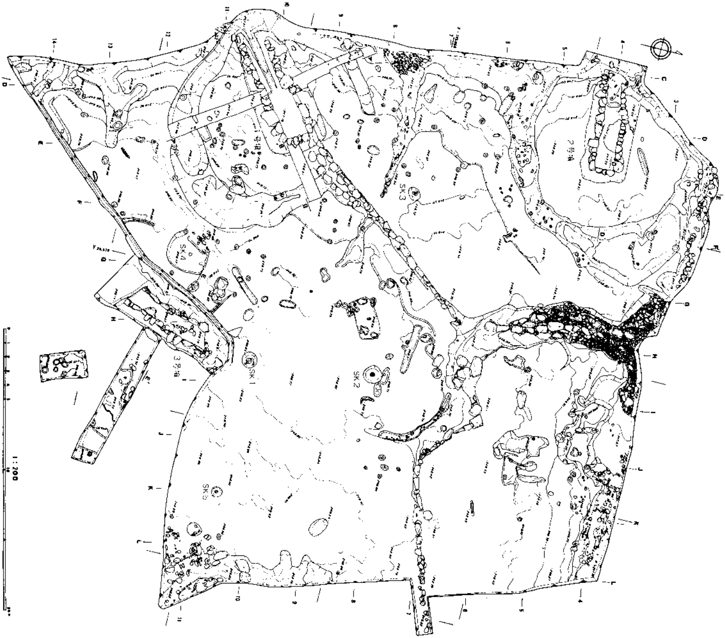
SK３　SK2より西へ約13mに位置し、径が長軸1.5m、短軸0.7mの楕円形の土坑で構造はSK1と同じである。土坑底部まで約50cm、最深部までは約70cmある。

SK４　調査区南側で検出した径約3mの方形に近い円形の土坑である。底面はフラットで一様である。SK4からは土器片（14）が出土した。

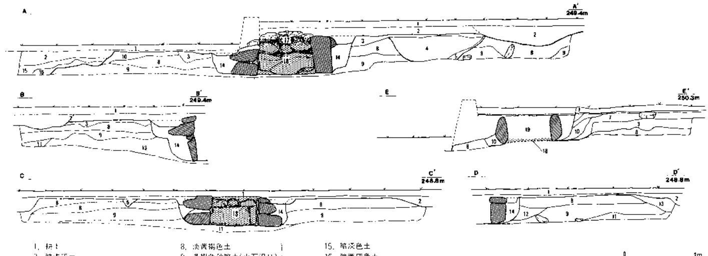
SK６　SK1より東へ約9mに位置し、径約80cmの円形の土坑である。構造はSK1と同じであり、土坑底部まで14cm、最深部まで25cmで、遺物はない。



第75図　A地区調査区位置図（1:2,000）



第76図 遺構平面図 (1:200)



1. 耕土
2. 暗茶灰土
3. 暗黒褐色土
4. 暗褐色灰色混り土(きめ細い)
5. 暗赤褐色
6. 暗茶褐色
7. 暗橙色砂質土

盛土

8. 淡黄褐色土
9. 黄褐色砂質土(小石混り)
10. 黄橙色土
11. 淡黄褐色砂質土
12. 淡褐色砂質土
13. 黄褐色(石混り)
14. 暗黒褐色土(橙色混り)－溝形埋土

地山

15. 暗灰色土
16. 暗黄灰色土
17. 暗黄灰色土(大石混り)
18. 暗赤褐色土
19. 攪乱土

第77図 1・2・3号墳墳丘断面図 (1:80)

Pit 5　長軸90cm、短軸60cm、深さ15cmの楕円形の穴で土器片（9)が出土した。

② 遺物

縄文時代にともなう土器、石製品は整理箱2箱である。これらの遺物は1・2号墳の墳丘盛土中および、2号墳石室内からのものが多い。

A、縄文土器

型式により2種類に分かれる。一つは押型文系土器(1～6)、一つは条痕文系土器(7～18)である。(1～5)は体部表面に山形文を施す。いずれも体部の一片であり形状は不明であるが尖底の深鉢土器であろう。（6）は大形のポジティブな楕円文を施す。押型文系土器では終末に見られる高山寺式に併行すると思われる。

（7～10）は器壁が比較的厚く、胎土中に繊維痕が見られ、内外面に貝殻条痕を施す。その形態から茅山下層式に併行するものと考えられる。（11～15）は前述（7～10）と同型式であるが、器壁が薄いという点で違いがある。器壁の相違により同型式での先後関係を推し量るにはあまりに資料不足というべきであろう。（16）は器壁厚く、曲面を有さないフラットな形状から条痕文系土器の平底底部と考えられる。（17,18）は体部外面に刺突痕・条痕がみられ、(18)では口唇部に刻目が施されている。これは茅山下層式から粕畑式への変化と見られよう。（19）は口縁部の上端部を欠く小片であるが、外面に刻目の突帯文を貼付している。（20）は内外面とも摩耗が激しく縄文の有無等は確認できない。ただ、繊維痕が残るため条痕文系土器の可能性がある。[4]

B、石製品

石製品の出土は縄文土器の出土位置と同様のほか2号墳石室床面およびその埋土中に含まれるものも多い。以下形態の特徴により述べるが、石質・器形の大きさ等は観察表を参照されたい。

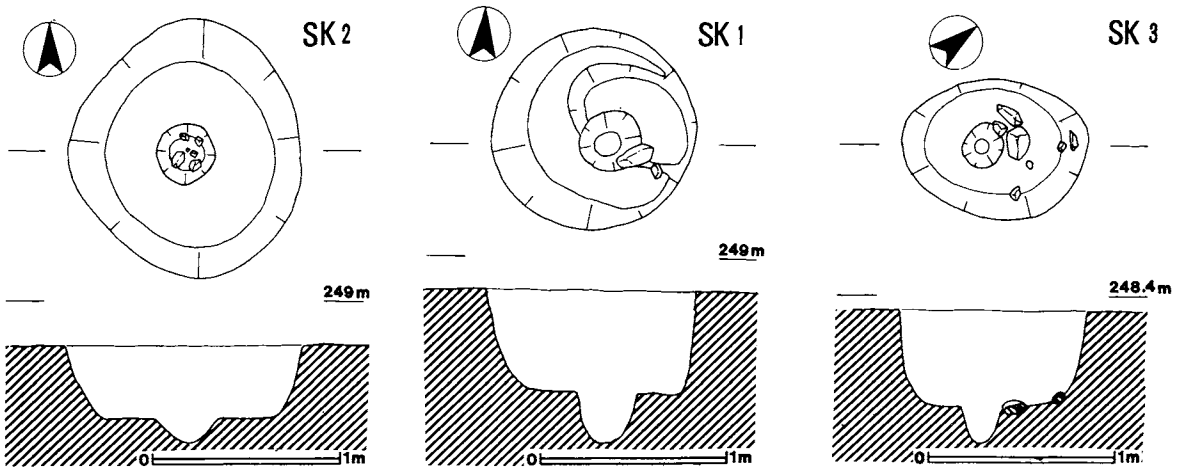
削器＝スクレイパー　（21～24,59～63）はサヌカイト製で、一次剥離した背面端部に二次加工を施し刃部としているものが多い。（22）は両面とも一次剥離面を多く残し、背面の一側縁部に微細な調整をおこない直線的な刃部を形成する。（22,23）はともに被断面に対して横位に使用しており、一次剥離によって生じた鋭利な断面を刃部としている。（60）はやや湾曲する剥片の背面端部に微細な加工を施し刃部をつくる。また、刃部の反対側にも調整を施した痕跡を残す。

異形石器　（25）は用途不明の石器で全面に加工痕を残す。

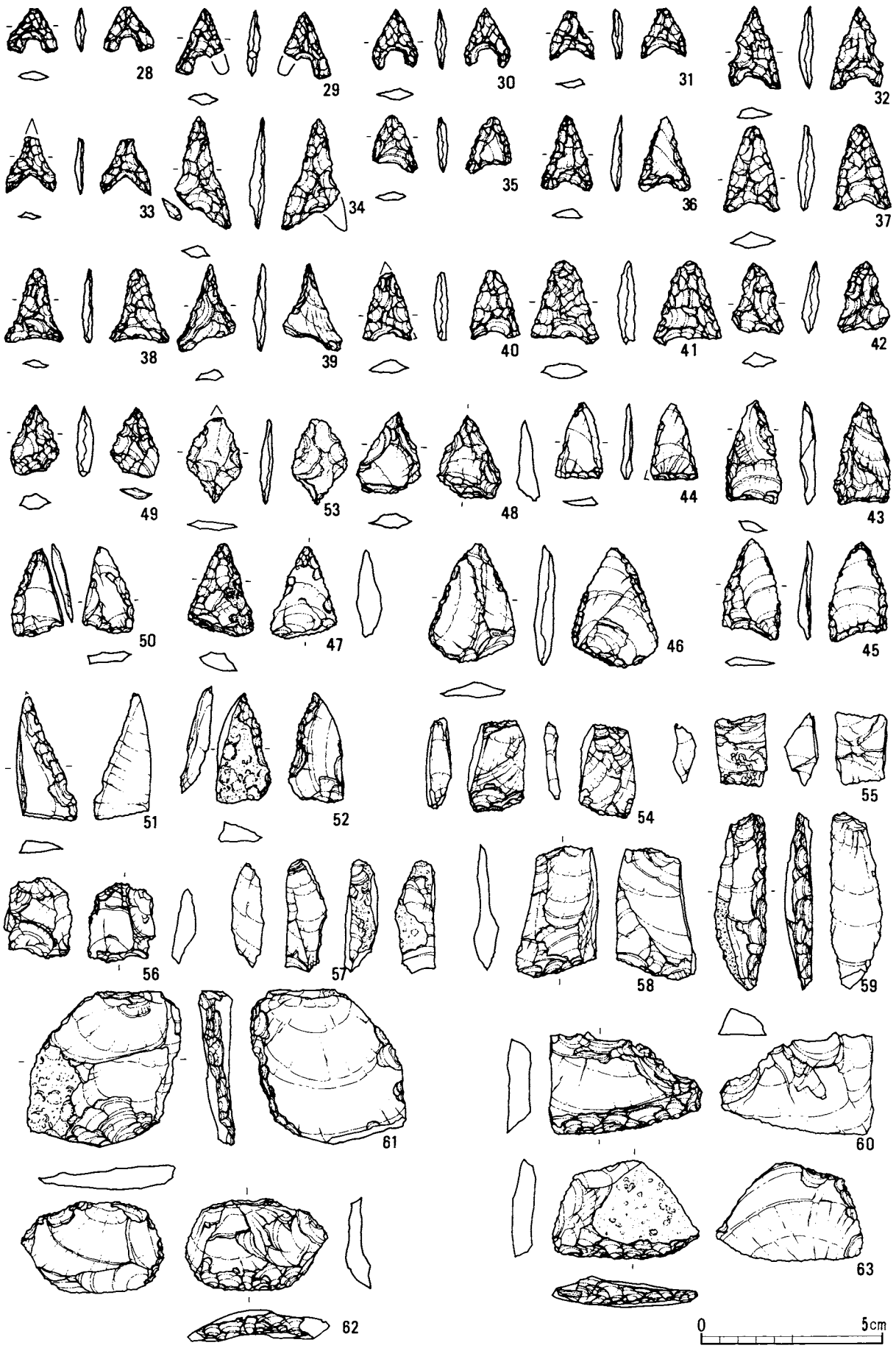
磨石　（26）は球状の石の面に使用痕をもち、その部位が平滑になっている。また、叩き痕も見られる。

台石　（27）は砂岩質の石で丸い平面形態を有し、両面に使用痕が認められる。

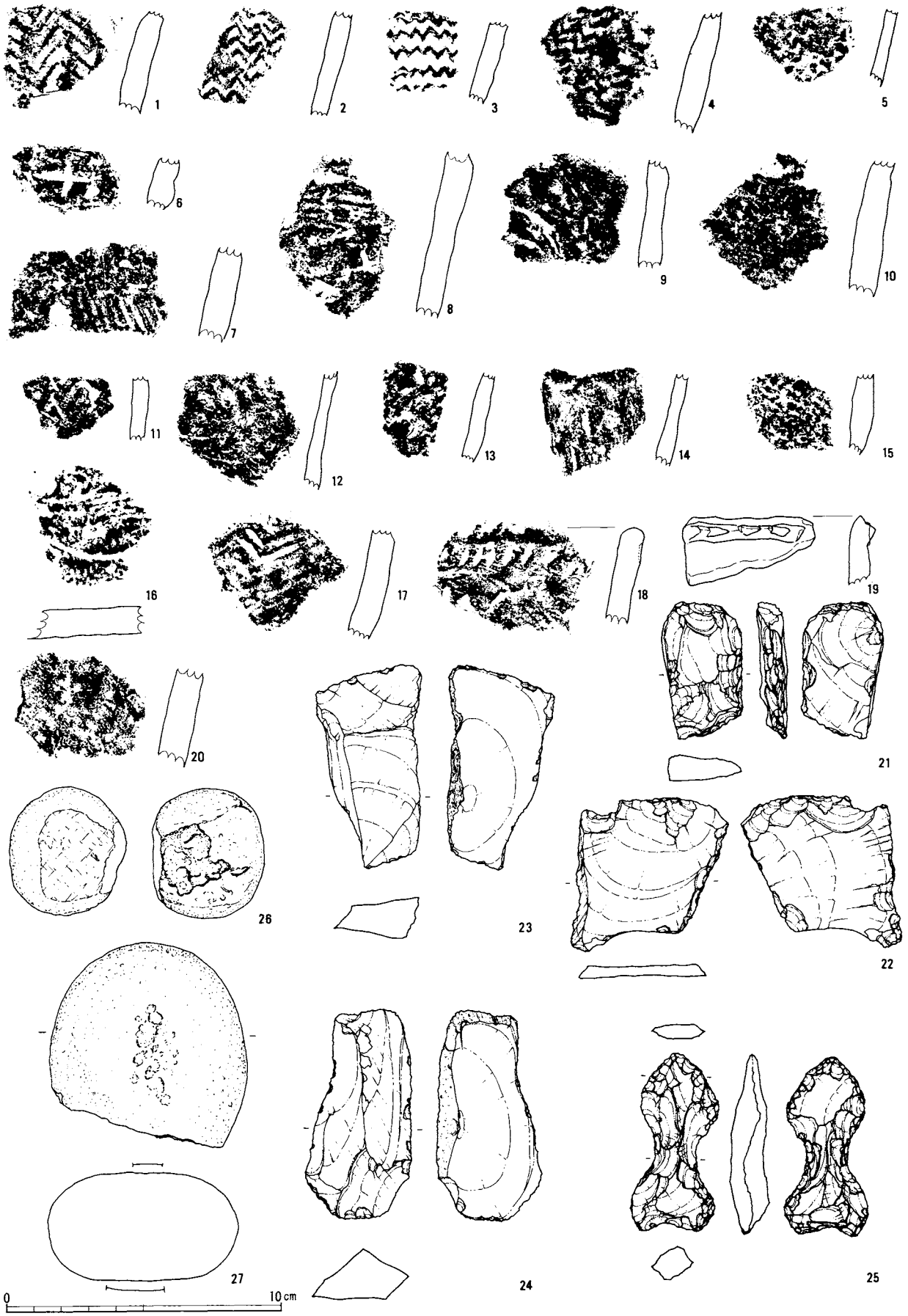
石鏃　（28～53）は（49）を除きすべてサヌカイト製で、基部につくりだしを持たない無茎石鏃を基本とし抉りを有するか否かのバリエーションで変化する。その意味では凹基無茎式が大半を占める。（28～32）は側縁部が外弯し、基部中央の抉りは丸く、逆刺部先端も丸くおさまる傾向がある。（33,34）は両面とも丁寧な調整がなされ、側縁中央部に抉りをもち三つ又状を呈する。（35）は左右非対象で、



第78図　縄文時代の土坑実測図（1:40）



第79図　縄文土器・石器実測図（1:2）



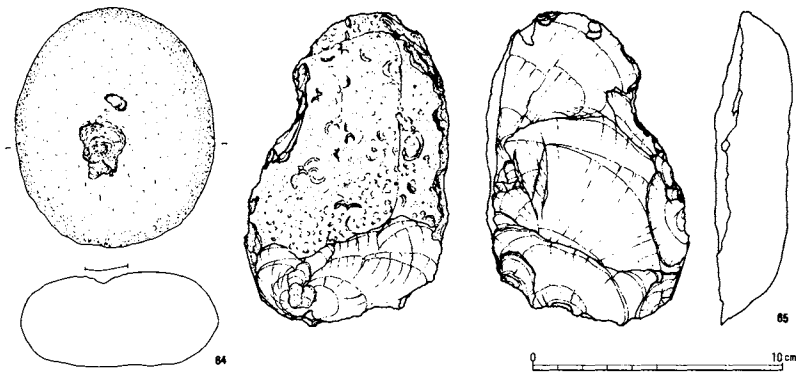
第80図　縄文時代石器実測図（2:3）

No.	登録No.	出土位置	特徴
1	34-1	D2・2号墳墳丘北下	大形の山形文を施す。体部片
2	34-2	D3・〃 墳丘上	山形文を施す。〃
3	34-3	D3・〃 墳丘下り面	〃 〃
4	34-6	2号墳 石室内（8C）	〃 〃
5	35-2	G8・包含層	〃 〃
6	36-5	G8・〃	大形のポシティブな楕円文 〃
7	36-3	E11・〃	貝殻条痕、繊維痕、器壁厚い
8	36-4	E10・〃	〃 〃
9	35-4	G10・Pit5	〃 〃
10	35-6	E11・包含層	繊維痕あり、器壁厚い
11	34-5	3号墳石室掘形北側	貝殻条痕、薄手、繊維痕
12	35-3	G12・3号墳石室側	繊維痕あり、器壁薄い
13	35-5	G8・包含層	〃 〃
14	36-1	F11・SK4	貝殻条痕あり、繊維痕、器壁薄い
15	35-1	D3・2号墳掘形北側	繊維痕あり、器壁摩耗
16	36-2	G10・包含層	貝殻条痕、繊維痕、平底の底部片
17	34-4	表面採取	外面刺突、裏面条痕あり、器壁薄い
18	37-1	G8・包含層	口縁部上面に刻み、側面に刺突あり 繊維痕あり
19	37-2	表面採取	口縁部側面に凸帯文を施す
20	36-6	D10・1号墳墳丘上	繊維痕あり

第18表　縄文土器一覧

No.	登録No.	出土位置	名称	規模（cm、g）				備考	石質
				幅	長さ	厚さ	重さ		
21	38	D2・2号墳丘	削器	4.9	2.9	1.1	19.0		サヌカイト
22	37	E3・周溝	〃	4.7	4.8	0.6	17.0		〃
23	39	E11・包含層	〃	7	3.7	1.0	43.0		〃
24	40	D11・〃	〃	7.5	3.8	1.8	46.0		〃
25	42	H4・〃	異形石器	3.0	6.4	1.5	—		〃
26	44	E11・〃	磨石	—	—	—	18.0		不明
27	45	D3・墳丘上	台石	—	—	—	—		砂岩
28	1	8A・2号石室中	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.3	凹基無茎式	サヌカイト
29	2	19A・〃	〃	1.5	1.8	0.4	0.4	〃	〃
30	5	D3・2号石室外	〃	1.3	1.6	0.3	0.3	〃	〃
31	3	9D・2号石室中	〃	1.2	1.4	0.3	0.3	〃	〃
32	10	21D・〃	〃	1.4	1.3	0.4	0.7	〃	〃
33	8	13B・〃	〃	1.4	1.5	0.3	0.3	〃	〃
34	11	C11・包含層	〃	1.8	3.0	0.4	1.0	〃	〃
35	12	7E・2号石室中	〃	1.2	1.5	0.3	0.4	〃	〃
36	14	J3・包含層	〃	1.5	2.1	0.3	0.6	〃	〃
37	9	C5・〃	〃	1.5	1.3	0.5	1.2	〃	〃
38	21	G7・〃	〃	1.6	2.0	0.3	0.6	〃	〃
39	17	E10・〃	〃	1.6	2.4	0.4	0.6		〃
40	7	C6・〃	〃	1.4	28	0.4	0.8	〃	〃
41	4	C12・〃	〃	1.9	2.8	0.5	1.7	〃	〃
42	6	9B・2号石室中	〃	1.5	2.0	0.5	0.8	〃	〃
43	18	C13・包含層	〃	1.5	2.7	0.5	1.8	〃	〃
44	23	J4・包含層	石鏃	1.2	2.0	0.3	0.7	平基無茎式	サヌカイト
45	13	C12・〃	〃	1.6	2.8	0.4	1.2	凹基無茎式	〃
46	19	I4・〃	〃	1.8	3.3	0.6	3.8	凸基無茎式	〃
47	15	4C・2号石室中	〃	1.3	2.5	0.7	2.3	平基無茎式	〃
48	22	J4・包含層	〃	1.7	2.2	0.7	2.2	凹基無茎式	〃
49	24	15B・2号石室	〃	1.3	1.9	0.5	1.0	平基無茎式	下呂石
50	16	J4・包含層	〃	1.5	2.2	0.3	1.2	〃	サヌカイト
51	20	J4・〃	〃	1.2	3.5	0.3	1.6	〃	〃
52	31	C4・2号石室	〃	1.5	3.0	0.6	2.3	〃	〃
53	30	G7・Pit 1	〃	1.5	2.3	0.4	0.8	凸基無茎式	〃
54	27	C5・包含層	楔形石器	1.5	2.5	0.7	3.4		〃
55	28	J4・〃	〃	0.9	2.0	1.4	2.9		〃
56	29	F8・〃	〃	1.9	2.1	0.5	2.3		チャート
57	25	E10・〃	〃	1.1	3.0	0.9	3.9		サヌカイト
58	26	J3・〃	〃	2.2	3.5	0.6	4.9		〃
59	36	I4・〃	削器	1.3	4.9	0.8	5.3		〃
60	34	E2・〃	〃	4.2	2.5	0.9	8.0		〃
61	35	G8・〃	〃	3.8	4.2	0.7	14.0		〃
62	32	D11・〃	〃	4.0	2.1	0.9	7.0		〃
63	33	C6・〃	〃	4.1	2.7	0.9	9.2		〃
64	46	H7・溝	凹石	—	—	—	380		花崗岩
65	43	E11・1号周溝	石核	8.0	12.0	2.9	302		サヌカイト

第19表　石器一覧（出土位置で数字が前に来る時は、2号石室内の区分による）



第81図　石器実測図（1:3）

一方に逆刺部をもつ。（36）は腹面に一次剝離面を残す。（36,37）とも二等辺三角形を呈し、基部中央が鈍く抉られる。（38）は両面に丁寧な調整がなされ基部が浅く抉られる。（39）は左右非対象で背面に二次調整がなされている。（40,41）は側縁部が直線的であり、浅い抉りをもっている。両面とも丁寧な調整がなされている。（44～47）は両面または片面に一次剝離面を残し、側縁部にのみ二次加工を施して刃部をつくる。（46,47）は凸基無茎式の石鏃である。（48,49）は基部のつくりが未調整であり、製作途上の可能性もある。（49）は下呂石と思われる。（50～52）両面に一次剝離面を残し、二次加工途中の形状であることから未製品の可能性がある。（53）は唯一凸基有茎式の石鏃で、風化が進み加工過程が不明瞭になっている。

楔形石器（54～58）は剝片を用いており垂直な上からと下からの力によって剝離した部分で形成する。

凹石（64）は楕円状の花崗岩質の石の中央部が使用により窪んでいる。

石核（65）は剝離痕をもつ母岩に上方より力を加えて剝離した石核片である。[5]

2、古墳時代

当初、調査区中央に遺存する数個の大型石材の付近に古墳の主体部があると想定したが検出し得えず、表土掘削後露出した石材により新たに西方向に開口部を持つ横穴式石室構造の円墳を3基検出した。3基の古墳はともに上部が後世の開墾（再利用を含む）等により削平を受けており、また石室上部の石材は周囲の畦畔に転用されている。1～3号墳より出土した主要遺物および石室規模の一覧は以下の通りである。

①1号墳

A、構造

a、位置　現況は水田（標高249.11m）であり、3基の古墳の内中央に位置し、規模も大きい。

b、周溝　調査区の南側で40cm程度残る周溝を検出する。地山を削って溝としているが、北側では田面が約0.6m低いため、削平を受けわずかに確認できるのみである。周溝の形状から本墳は円墳である。

c、墳丘　古墳の上部が削平されているため上部構造は不明であるが、墳丘断面から地山面と盛土との境界部を検出しており、これは墳裾にあたると考えられる。また、墳丘規模は約12mと推定される。石室掘形は地山を約1.2mの深さまで掘り下げその上に基底石を据えており、掘形幅は玄室幅の約2.5倍の広さをとる。南側では玄室から羨道にかけて直線的な掘形をつくるが北側では袖部の立柱石より急激に堀形を狭める。また、南側では地山を大きく掘り込む溝跡か土坑跡が断面より観察でき、その埋土4（暗褐色灰色混じり土＝きめ細かい柔らかな土質）には縄文時代の土器片が混じる。これは前後の切り合い関係から古墳造営以前に埋まっていたものと考えられる。

d、主体部

ア、玄室　石室の主軸は真北に対しN127°15"00'Wに振り、南西に開口する右片袖式の横穴式石室である。天井石は既に動かされており、西側の畦畔に使用されていた。玄室の平面は奥壁幅1.56m、中央部幅1.74m、玄門部幅1.56mで、中央部がやや膨らむ「胴張り」の構造となる。玄室長は3.3mで長方形を呈する。南北両壁は南で基底石より3段、北で2～3段の石を残す。石材は基本的に横位に用いられる。基底石は床面にくい込むようにして置かれ、1m前後の比較的大形の石材を配す。基底石より上は北側で奥壁付近に3段まで残すのみであとは全て後世に動かしている。また、北側は現在の畦畔に転用しており、畦畔の延長上に1号墳石室の北側側壁がくる。南側では0.5m大の中形石材を面を揃えるように3段まで積み上げ、小さな石を詰めて側壁の

	古墳の形	古墳規模	石室の形	全長	玄室		羨道部		遺物		
					幅	長さ	幅	長さ	土師器	須恵器	その他
1号墳	円墳	12m	横穴式石室 (右片袖) 南西に開口	8.3m	最大 1.7m 最小 1.5m	3.30m	最大 1.3m 最小 1.2m	5.0m	長頸壺 3 短頸壺 1 壺 2	杯蓋 7 杯身 4 提瓶 1 短頸壺 1 高杯 1 壺 1	鉄鏃 7 刀子 2
2号墳	円墳	12.4m	横穴式石室 (右片袖) 西に開口	7.0m	1.3m	4.0m	1.03m	3.0m	椀 5 甕 2	杯蓋 1 杯身 5 台付椀 1 長頸壺 1 短頸壺 1 蓋 1 提瓶 1	鉄鏃 19 刀子 4 馬具類 9 不明 4 砥石 1
			箱形石棺 (組合せ式)							杯身 1 有蓋短頸壺 1	刀子 1
3号墳	円墳	不明	横穴式石室 (両袖) 南に開口	6.7m	1.35m	2.9m	最大 1.2m 最小 0.9m	3.3m	甕 2	杯蓋 4 杯身 3	耳環 1 (金貼)

第20表　勝地大坪　古墳一覧

石材の安定をはかる。奥壁は長さ1.65m、幅0.64m、厚さ約0.2mの板状の一枚石で花崗岩質である。それを横位に用いているが、玄室の幅1.56mに対し奥壁の石材は10cm程長いため斜めに据えている。その上に中形の石材を積み、隙間を小石で補強する。

イ、玄門　袖石には高さ約1.6m、幅0.7m、厚さ0.7mの直方体状の大形の立柱石を北側に据え、南側にも同じように長さ0.9m、幅0.6m、厚さ0.5mの立方体状の立柱石を配して、玄門と羨道の区別を意識しているようである。また、袖石の底の一方が床面より浮いてきていることから後世の削平時に袖石頂部を西方向に動かした可能性がある。

ウ、羨道　玄門付近での羨道幅は約1.17m、開口部付近（北側壁は一部削平を受けているので羨道門は正確には不明）で1.4mを計る。羨道長は残りの良い南側壁で約5.0m、北側で3.5mを計る。羨道は羨門が広く玄門部がやや狭い裾広がり状を呈する。羨道部上に40～50cmの人頭大の河原石を数個検出するが、それが閉塞施設のための石か、玄室に据えられた棺台の石が「片ずけ」により移動したものか明確にできない。ただ、その中の一つは両面が平らな円盤状の石で明らかに玄室に置かれたそれと同じ物であると思われる。

オ、排水施設　羨道の始まる玄門部付近より長さ4.7m、幅0.5m、深さ0.12mの素掘の溝が設けられる。また、玄門から羨道門までは傾斜がつけられ、水の滞留を防ぐ工夫がなされる。

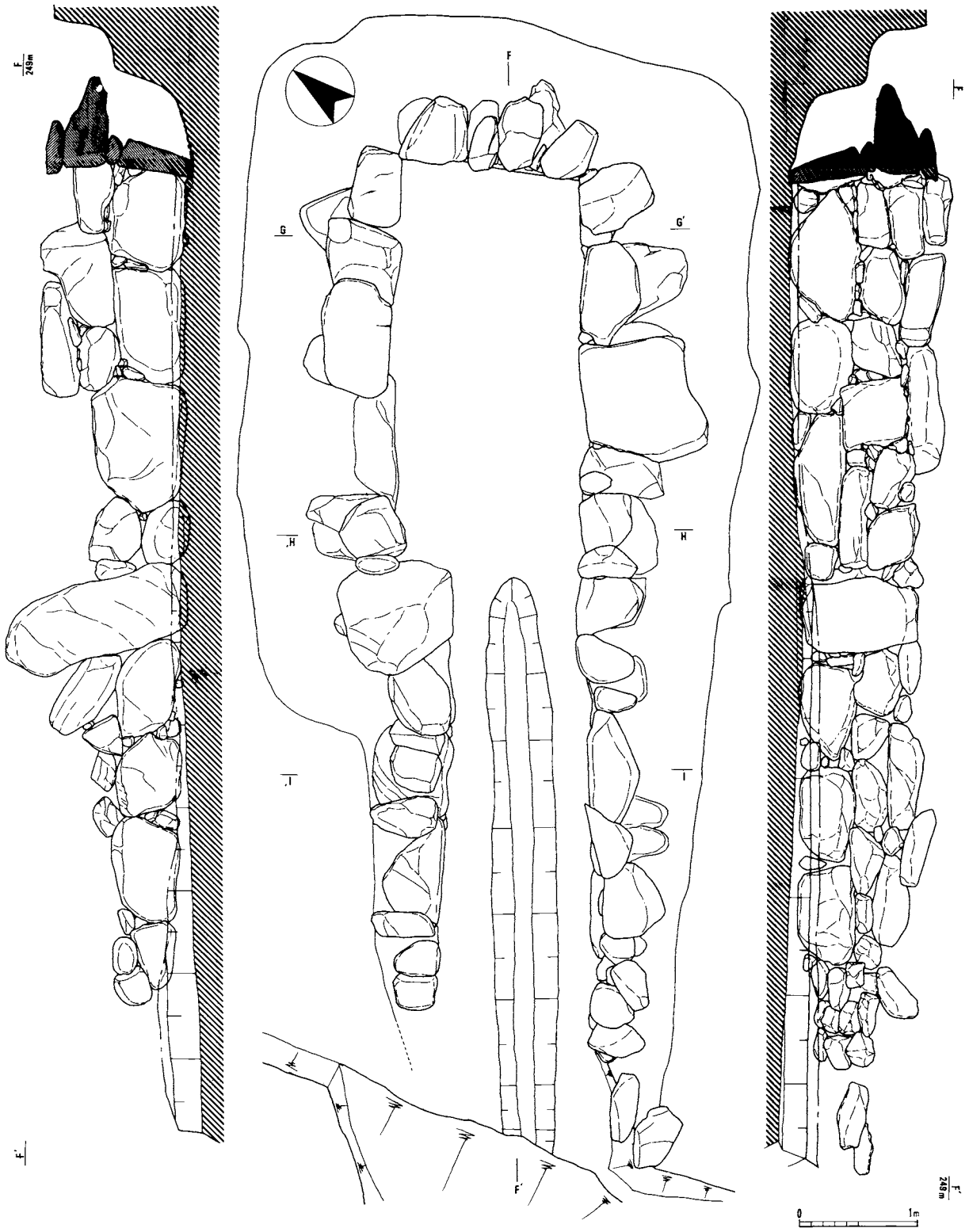
B、遺　物

a、遺物出土状況　遺物の出土状況を含めそれに至るまでの過程を説明すると、（1号墳墳丘断面図参照）表土掘削後まず石室の存在を確認した。石室内には人頭大から石室の石材（暗青灰色土）までが無数に入っていた。また、積石の中に瓦器椀（192,195）、瓦器皿（198）、鉄製の短刀片（201）等が出土し、さらに開口部付近では瓦器（190,191,193,194,196,197）を含む中世の羽釜（202）、鍋（203）、土師皿（199）、火鉢（200）の各片が出土した。中世の遺物を含む暗青灰色土は奥壁で20cm、開口部付近で40～50cmの層をなす。それらの土を取り除くと暗赤褐色の混じりのない一様な土になり、70cm前後堆積して床面に達する。図77には暗赤褐色土を除去した後の状況を示した。石室内（少なくとも側壁2段目より下）は一様な混じりのない土で埋まり、一種のパック状態を保っていた。その意味では墓として使用されなくなった直後の盗掘の可能性を除いてはその後の盗掘はないものと思われる。

b、玄室内出土の土器・鉄製品

遺物は玄室各所から出土するが、圧倒的に奥壁付近が多い。内訳は、第20表古墳一覧を参照。

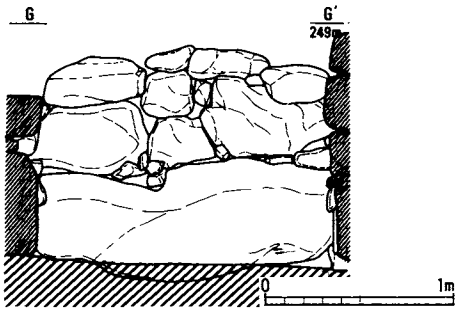
玄室には奥壁左側（開口部より見て）に縦方向に



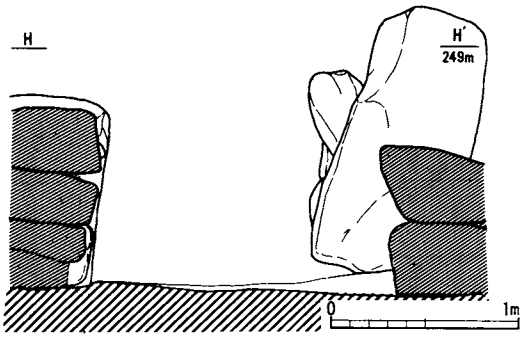
第82図　1号墳石室実測図（1:50）

人頭大の偏平な河原石が5個ずつ二列に並べられ、棺台としている。右側に配置された棺台の石はその後の「片付け」により左の棺台に乗っている状態で検出した。（図86）

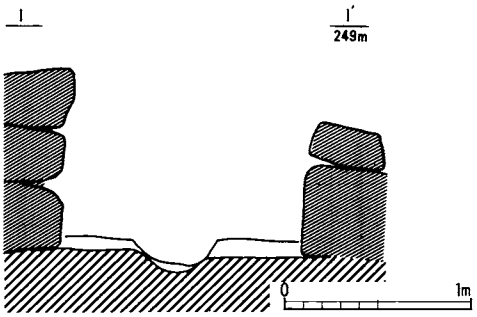
須恵器 杯蓋（66～72）ほぼ完形なものが多く、（67）を除くすべては奥壁付近にある。天井部から体部にかけて弱いの稜をつけ段を意識している。口縁端部の内面に弱い沈線をつけるもの（68,70,71,72）、つけないもの（66,69）とに分けられる。（66～70）は比較的口径が大きく口縁部の一端を人為的に欠い



第83図　1号墳玄室奥壁（1:40）



第84図　1号墳石室玄門部（1:40）



第85図　1号墳石室羨道部（1:40）

ている。（71,72）は口径が小さい点、口縁端部の欠損がない点で異なる。また、これらに型式差は認められない。**杯身**（73～76）は口径12.8～12.0cmまでの大きめの器形で立ち上がりはやや内傾するが、しっかりしている。（74,75,76）はいずれも口縁端部に人為的な破損による打ち欠き痕を施している。おそらく口縁端部を欠いた蓋と身とはセットになると考えられる。

須恵器　有蓋高杯（77）口径13cmの杯身に八の字に開く脚部がつき7.9cmの器高になる。内傾する立ち上がりをもつ口縁端部内面に弱い沈線を施す。脚裾端部は外傾し平坦面をつくる。口縁端部を人為的に欠いている。

須恵器 短頸壺（83）丸みを帯びた体部は上半より屈曲し肩をつくる。口頸部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。体部下半にヘラ削りを施し、それ以上口縁部までロクロナデをおこなう。低部外面に「×」のヘラ記号をつける。口縁の1/4を欠く。

須恵器 壺（85）球形の体部上半よりやや内傾気味に頸部につながる。頸部は丸く外反し、やや肥厚のある口縁端部をつくる。口縁部から体部下半までをロクロナデ、底部周辺はヘラケズリをおこなう。内面に炭化物の付着がみられ、完形品である。

須恵器 提瓶（86）口縁部、環状把手の一部を欠く。体部は前面が丸くふくれ、背面はほぼ平坦である。外反する口縁部外面に弱い段状の沈線を施す。肩には環状の耳がつく。前面をロクロナデ、背面体部周縁をヘラ削りし、中央部未調整である。

土師器 長頸壺（78,79,84）丸い体部にやや外反する長い頸部がつく(79,84)。（79）は体部を残すのみである。（78）は大きく外反し、体部径より大きい口径を有する。その意味では広口壺ともいえる。いずれも体部外面に弱いヘラ削りをかけ、体部上半より口縁部にかけて横ナデを施す。（84）は口縁端部の一部を欠く。

土師器 短頸壺（82）球形の体部に短い頸部がつく。頸部は外反し口縁端部は外側に面をつくる。体部外面に粗いハケメを全面に施し、内面上方に指圧痕を巡らす。頸部は体部と接合後横ナデをおこなう。

鉄製品（87～95）1号墳出土の鉄製品は鉄鏃（87～91、93,94）、刀子（92,95）の2種類である。いずれも錆による腐食がすすんでいる為詳細は分からず。鉄鏃[6]は三角形で腸抉を持つもの（91,93）、持たないもの（87,88,90）、また、逆刺部が認められるもの（89）等がある。鏃身部の断面の造りは不明瞭であるが、多くは平造りと思われる。（87,88）はほぼ完形である。（94）は頸部、茎が残るのみで鏃身部不明。刀子（92）は刀身先端部の一部を残すのみ。（95）は刀身中央部をが欠く。なお（87,95,94）は他の鉄鏃より3cm下の床面より出土。

c、羨道部出土の土器・鉄製品

須恵器 蓋（67）は羨道も開口部に近いところで出土し、体部の1/2を欠く。口径は14.6cmと大きめで玄室奥壁で出土したものと同様の蓋であろう。天井部と体部を弱い稜で表現し口縁端部は丸くおさまる。

土師器 壺（80,81）はいずれも羨道部中央付近で破

損した状態で出土する。底部は平底で体部から頸部にかけて丸みを帯び、短く外反する口縁部がつく。外面は横方向のナデに一部板ナデを縦にかける。粘土紐の継ぎ痕がみられる。

d、石室以外の遺物

1号墳周溝からの遺物　須恵器杯蓋（99）は体部1/4の残であるが、推定口径は14.4cmと大きい。天井部と体部の区別がなくなり、丸みを持つ。須恵器杯身（102）は体部1/2の残。推定口径13cmと大きめであり、口縁部の立ち上がりは内傾しながら延びる。**石製紡錘車**（103）滑石製で断面は台形状を呈する。中央部に直径6mmの穿孔がありほぼ正円形である。文様等はない。

e、包含層からの遺物

須恵器杯蓋　(96)推定口径15.6cm、器高5cmと大きく、天井部は平坦で体部との間に稜をつくり明瞭な段としている。口縁端部内面に弱い沈線を巡らし段を表現する。その他は観察表を参照されたい。

②　2号墳

A、構　造

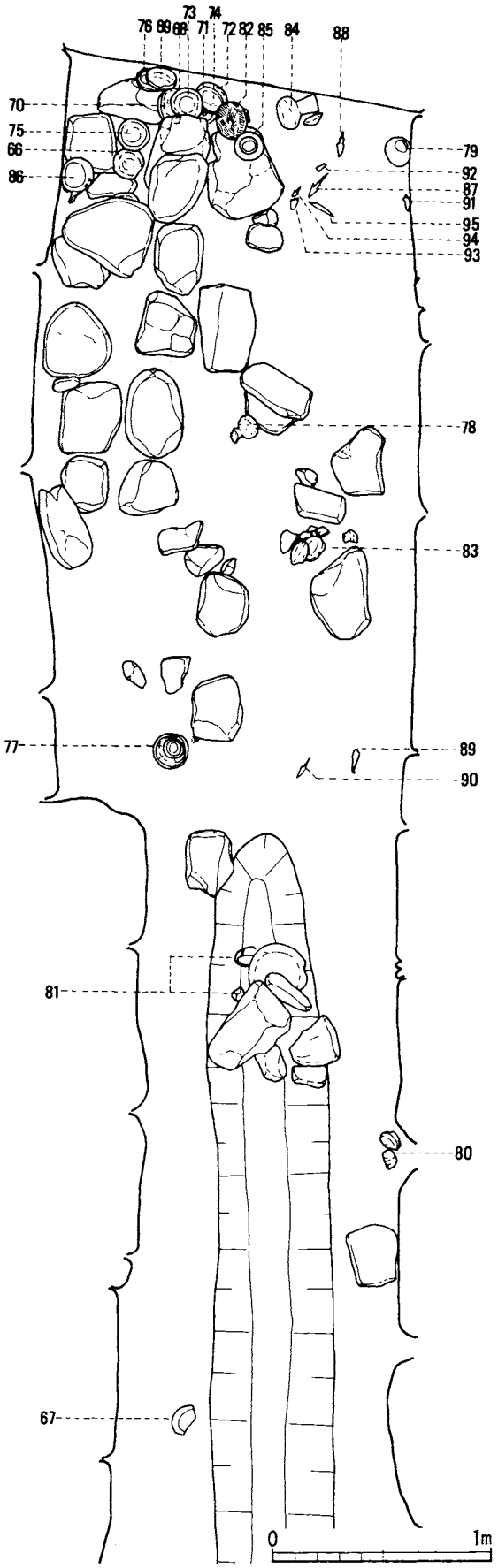
a、位置　現況は水田（標高248.51m）であり、尾根の下側に位置する。

b、周溝　深さ約0.3m、幅約1.5mの溝が巡る。調査区北側は段差のある畦畔になるため削平を受ける。地山を削って溝とする。周溝の形状により円墳であることが分かる。

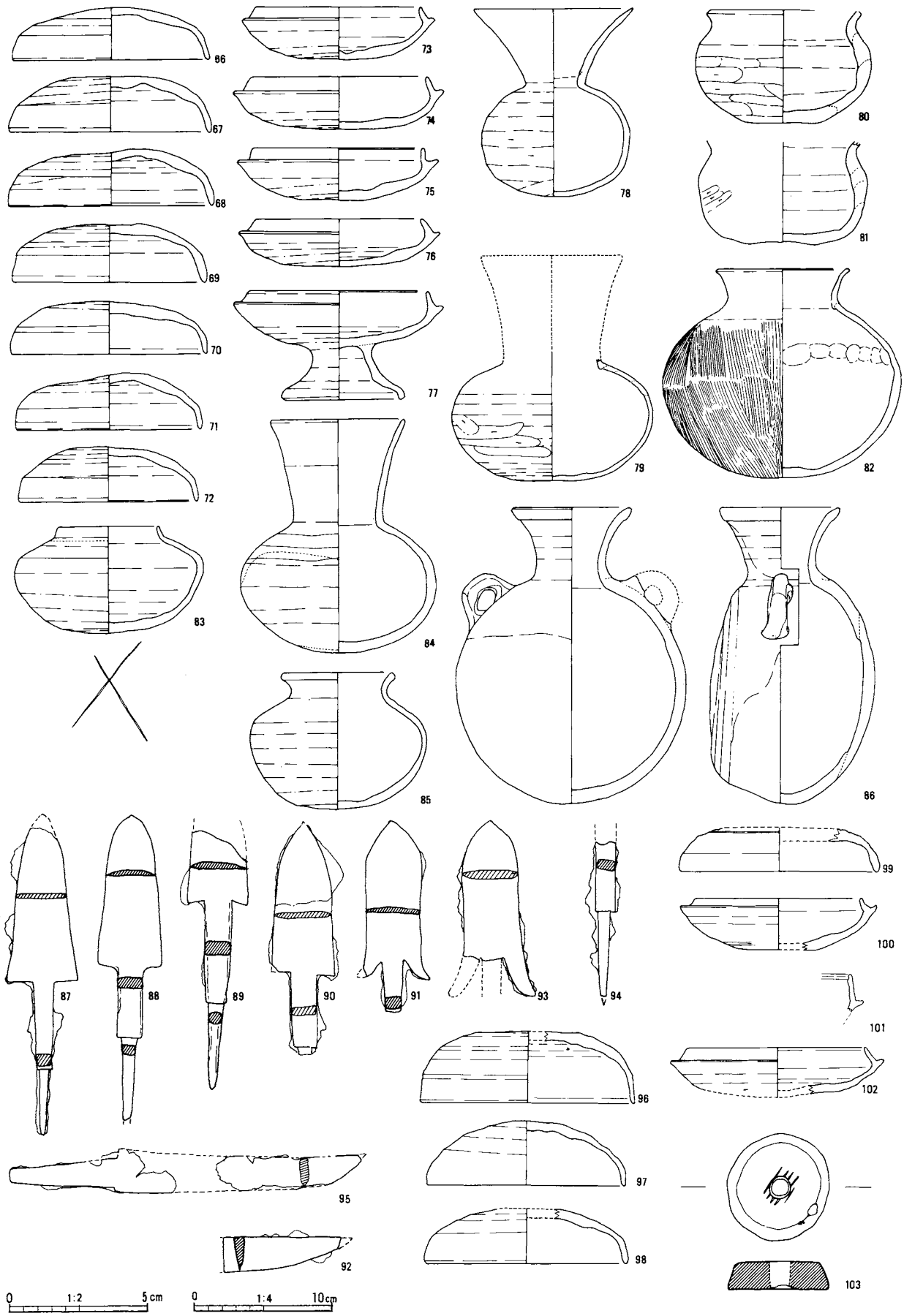
c、墳丘　1号墳同様に上部が削平されているためそれより上の構造は不明である。墳丘断面から北側では盛土面が残り、地山が下がっていくことにより周溝はもう少し深くなることが判る。南側は盛土が見られないことから地山は北よりも高く南から北へスロープ状に下がっていくと思われる。墳丘規模は12m前後と推定される。石室掘形は残存状態で地山面を約0.8m程掘り込み、その上面に基底石を据える。掘形幅は玄室幅の約2.4倍になり、北側の袖石部分でやや内側へ曲がり羨門へとつながる。それ以外では両側とも長方形な掘形を呈する。1号墳と比べれば石室長、玄室幅、羨道長、袖石の立柱石、石材等の規模はすべてにわたり小さくなっている。

d、主体部

ア、玄室　石室の主軸は真北に対しN93°45'00"



第86図　1号墳遺物出土状況図（1:30）



第87図　1号墳石室内遺物、包含層遺物実測図（66～86、96～102、1:4、87～95、103、1:2）

No.	登録No.	器種	出土位置・遺構	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
66	1－4	須恵器　杯蓋	玄室	14.4	3.8		天井部ヘラケズリ、口縁部～内面ロクロナデ	密（小石多く含む）	硬	青灰色	4/5	口縁部欠く
67	1－5	〃	羨道	14.6	4.0		〃	〃（石英・白石含む）	〃	〃	1/2	
68	4－8	〃	玄室	14.8	3.8		〃 粘土ひも巻き上げ痕あり	〃	〃	〃	完形	口縁部欠く
69	1－2	〃	〃	14.1	4.2		天井部未調整、口縁部～内面にかけロクロナデ	〃	〃	〃	〃	〃
70	1－3	〃	〃	14.2	3.8		天井部ヘラケズリ、口縁部～内面にかけロクロナデ	〃	〃	〃	〃	〃
71	4－7	〃	〃	13.6	4.0		天井部ヘラケズリ 一部未調整 口縁部～内面にかけロクロナデ	〃	〃	〃	〃	
72	1－1	〃	〃	13.0	3.9		天井部ヘラケズリ 口縁部～内面にかけロクロナデ	〃	〃	〃	〃	
73	1－8	須恵器　杯身	〃	12	3.8		内面～口縁部にかけロクロナデ、体部下半よりヘラケズリ	〃	〃	灰色	〃	体部外面灰かぶり、
74	1－6	〃	〃	12.4	3.7		〃	〃	〃	明灰色	〃	口縁部に刻目
75	1－9	〃	〃	12.0	3.4		〃	〃	〃	灰色	〃	〃
76	1－7	〃	〃	12.8	3.8		〃	〃	〃	青灰色	〃	〃
77	2－3	須恵器　有蓋高杯	〃	13.0	7.9	脚部3.6	内面～口縁部にかけロクロナデ、体部外面下半よりヘラケズリ、脚部を貼付ける。灰かぶる。	〃	〃	灰色	〃	口縁部の一部欠
78	4－2	土師器　長頸壺	〃	12.0	13.6		頸部～口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、体部下半より弱いヘラケズリ	精良	良	淡褐色	口縁部1/2欠く	
79	3－2	〃	〃	—	(8.4)		体部上半をナデ、下半よりヘラケズリ	良	良	淡黄色	1/2	口縁部欠く
80	3－1	〃　壺	羨道	11.2	8.2		口縁部ヨコナデ、内面、体部外面を横方向のナデ、粘土紐の継ぎ痕、底部に板ナデみられる	粗	軟	暗橙色	完形	
81	30－3	〃　〃	〃	—	(7.4)		口縁部をヨコナデ、体部外面ナデ、一部ヘラケズリ、底部内面を板ナデ	良	良	褐色	1/3	
82	3－3	〃　短頸壺	玄室	9.8	15.0		口縁部ヨコナデ、内面ナデ、体部外面ハケメ、上方に指圧痕	粗	良	暗橙色	ほぼ完形	
83	2－2	須恵器　〃	〃	7.4	7.7		内面～体部上半にかけロクロナデ、体部下半よりヘラケズリ	密（石英・白石含む）	硬	青灰色	口縁部を欠く	肩部に灰かぶり
84	4－1	土師器　長頸壺	〃	10	17.0		頸部上半をナデ、口縁部ヨコナデ、体部外面をヘラケズリ	精良	良	淡褐色	口縁部を欠く	黒斑あり
85	2－1	須恵器　壺	〃	8.0	9.8		内面～体部下半までをロクロナデ、外面底部をヘラケズリ、内面にタール状物質付着	密（石英・白石含む）	硬	青灰色	完形	
86	2－4	〃　提瓶	〃	8.4	21.4		前面は円盤を貼付後、ロクロナデ、背面は中央部未調整で周囲をヘラケズリ	〃	〃	灰色	口縁部を欠く	

第21表　1号墳出土土器一覧

No.	登録No.	器種	出土位置・遺構	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残有度	備考
96	19－4	須恵器　杯蓋	F8・包含層	15.6	5.2		天井部をヘラケズリ、口縁部～内面にかけロクロナデ	密（長石等含む）	硬	灰色	1/4	
97	20－2	〃	G8・〃	14.3	4.8		〃	〃	〃	〃	2/5	
98	17－4	〃	C10・1号墳石室	14.6	(4.0)		やや粗	〃	〃	1/3		
99	27－3	〃	F111・包含層	(14.0)	(3.2)		〃	やや密	〃	〃	1/4	
100	22－4	須恵器　杯身	G7・〃	(12.0)	(3.8)		内面～体部外面にかけロクロナデ	密（石英等含む）	〃	〃	1/5	
101	38－2	〃	I5・〃	—	—		口縁部ロクロナデ	〃	〃	〃	1/10	
102	30－2	〃	E11・〃	13	(3.6)		内面～体部外面にかけロクロナデ、底部ヘラケズリ	〃	〃	〃	1/2	

第22表　1号墳墳付近包含層出土土器一覧

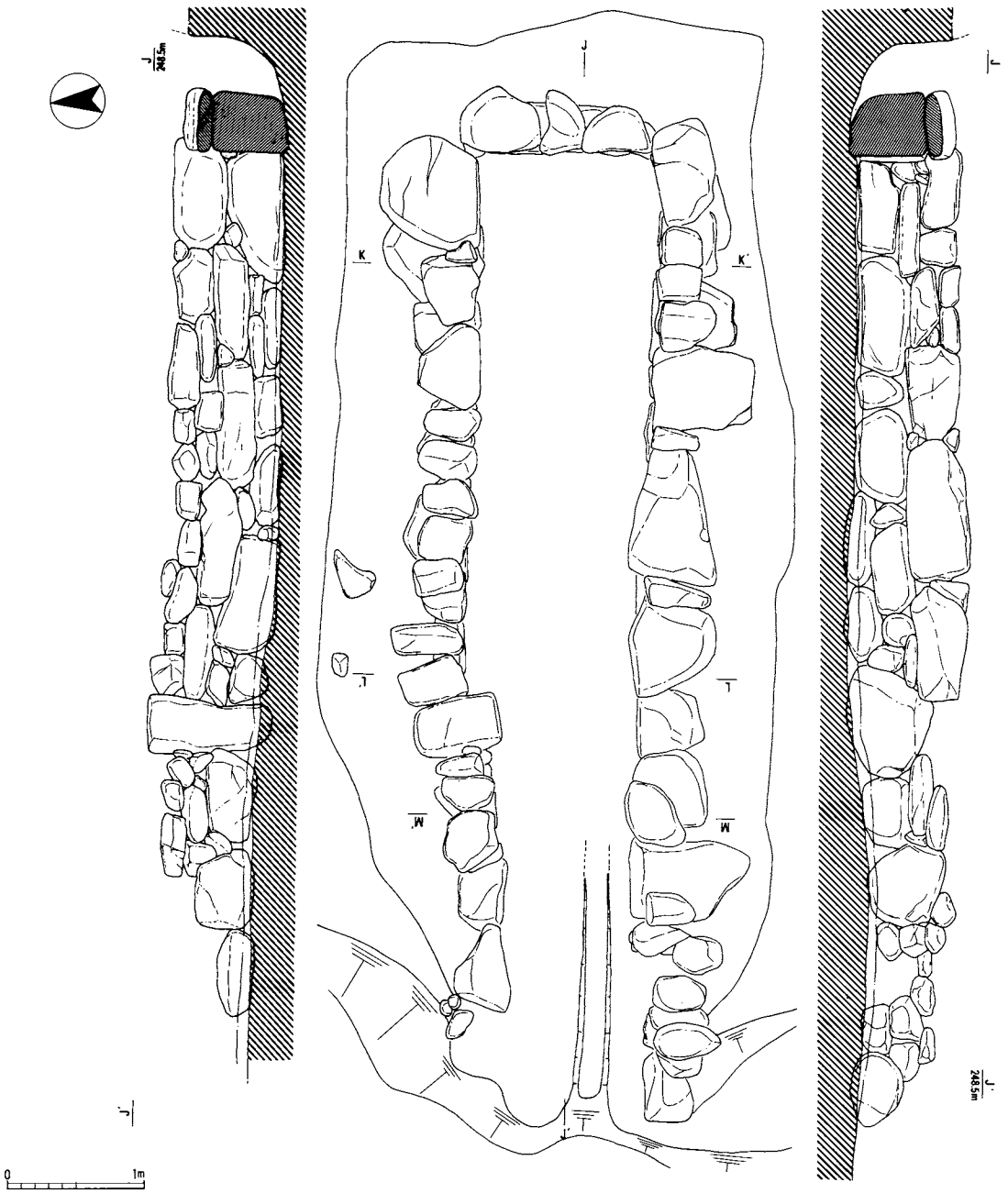
No.	出土位置	名称	備考	登録No.
87	玄室	鉄鏃	三角形、鏃身長5.5、幅3.7、平造、頸3.2	15－2
88	〃	〃	〃、〃 5.3、〃2.4、〃、頸部2.3	4－3
89	〃	〃	〃、〃(2.5)、〃2.2、〃両丸造	4－4
90	〃	〃	〃、〃 5.4、〃2.2、平造、頸部2.8	12－3
91	〃	〃	腸挟三角、〃5.0、〃2.0、両丸造	4－5

No.	出土位置	名称	備考	登録No.
92	玄室	刀子	刀身長(4.2)、幅0.9、柄部欠	4－6
93	〃	鉄鏃	腸挟三角、鏃身長5.0、幅2.5、両丸造	12－2
94	〃	〃	頸部のみ、頸部(2.5)、茎(3.2)	15－6
95	〃	刀子	切先～刀身の一部残、柄部3.8	24－4
103	C1・周溝	紡錘車	滑石製、直径3.8、厚さ0.8、0.6の穿孔	29－4

第23表　1号墳出土鉄製品・石製品一覧（単位＝cm）

Wに振り、真西に近い開口をもつ右片袖式の横穴式石室である。玄室の平面は奥壁幅1.32m、中央部幅1.38m、玄門幅1.31mで中央部が若干膨らむ「胴張り」になっている。玄室長3.96mで外観上まったくの長方形に見える。南北両壁は北で3～4段を残し、南で3段程度残す。石材は袖石以外はすべて横位に用いる。基底石の据付けは、石室掘形を掘った後据え易いように掘り窪める。基底石に使う石は南北壁とも最長1.0m～0.3mというように幅のある石をアトランダムに据えている。2段目以上は基底石と同じように大きさに関係なく積まれる。ただし、石材を横位に使うことと石材を積む面の高さを同じように保つことは配慮されているようである。しかし、検出されない上部が乱石積みになっている可能性は十分ある。奥壁は長さ1.16m、幅0.6m、厚さ0.44mの花崗岩の一枚岩を横位に用いる石と長さ0.56m、幅0.23mの立方体状の石を縦位に用いる石とで奥壁とする。その上に小形(50cm未満)の石を積んでいる。

イ、玄門　袖石には高さ0.9m、幅0.3m、厚さ0.6mの直方体状の石を北側に据え、南側には高さ0.5m、幅0.85m、厚さ0.5mの2号墳では大きい石材を据えて、玄門を意識したつくりになる。



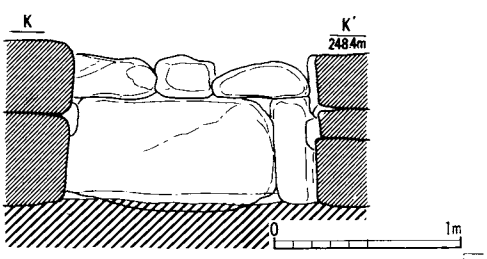
第88図　2号墳石室実測図（1:50）

ウ、羨道　玄門付近での幅は1.08m、開口部付近で（北側では羨道の一部が削平を受ける。）1.0mとほぼ同じ間隔であるが、北側の羨道壁は南に18cm振れそれに伴い南側の側壁も7cmと若干南に振れたつくりになる。玄門に近い羨道部内に横切るように深さ17cm、幅20～30cmの溝を検出。一次面では検出できなかったが、床面を下げることにより検出されたこと等から最初の埋葬時には玄室を閉じるため閉塞石を置く。その後の二次埋葬以降にこれらの石を取り除き、そのままの状態になったと思われる。

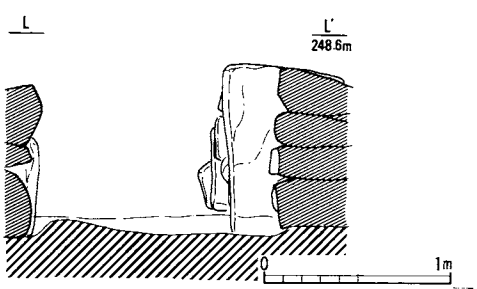
オ、排水施設　一次面に若干の溝状の遺構を検出。また、床面を下げると幾つもの小さな窪み状の遺構を検出した。床面の高低は羨道部が高く、玄室部が低い造りになっており吹き込みには弱いと思われる。その為、閉塞施設は堅固に造られたと思われる。

e、石棺

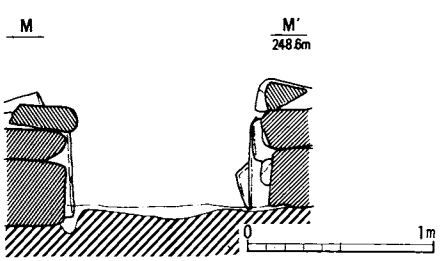
石室内には組合式の箱形石棺が玄室中央、南側壁に重なるように出土する。北側に２枚、南側に３枚、東側に１枚、西側に２枚の板石を置き各々の面とする。石棺天井部には20～30cmの板石を５枚、東から順に積んで蓋としている。板石の端部は少しずつ重ね合わせている。石質はいずれも砂岩系のもろい石である。石棺の規模は内法で長さ1m、幅は北側で40cm、南側で30cm、深さは北側で27cm、南側で36cmを計る。また、石棺底部は床面の地肌であり石などを敷いた痕跡はない。石棺内は暗赤褐色の土(石室内に堆積していた土と同質)で充満しており、その中より須恵器の杯身(116)、須恵器の有蓋短頸壺(118)、刀子(119)が出土した。石棺の蓋が開けられた形跡もみられず、盗掘はなかったと思われる。



第89図　２号墳玄室奥壁（1:40）



第90図　２号墳石室玄門部（1:40）



第91図　２号墳石室羨道部（1:40）

B、遺物

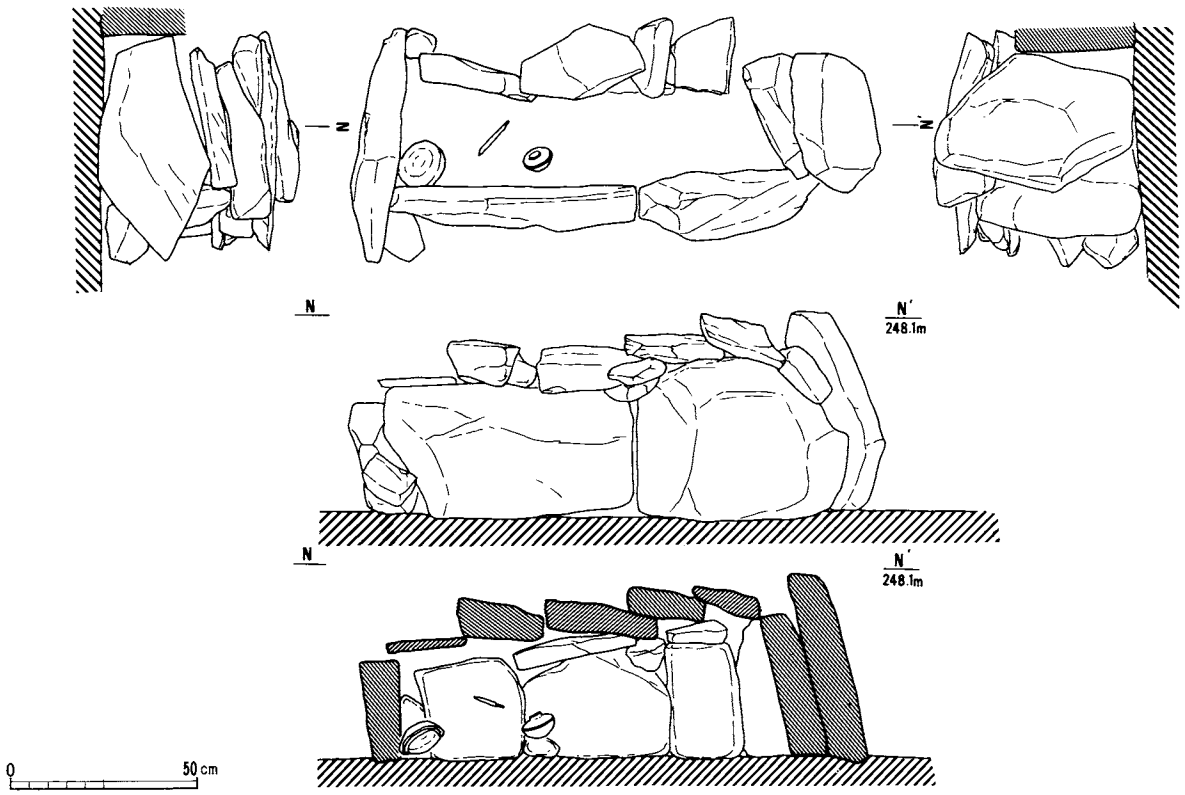
a、遺物出土状況　表土掘削後、石室の存在を確認した。石室内は一号墳と同様に一様な混じりのない暗赤褐色の土で埋まり、その深さは0.8mを計る。残存石室高より0.3m程下がったところで小型の組合式の箱形石棺が出土する。さらに下げると遺物の出土する床面付近となる。遺物出土状況から盗掘のあった可能性は低いと考える。

b、玄室内出土の遺物（石棺の遺物を含む）

遺物は玄室中央から玄門付近にかけて多く出土する。玄室には長さ30～50cm、厚さ10cm前後の両面が平らな河原石を敷き棺台とする。遺物は玄門付近に多く追葬の際に「片ずけ」がおこなわれた結果と考えられる。

須恵器 杯蓋（110）は口径13cmの比較的小型の蓋で天井部から体部にかけて弱い稜をつけ、口縁端部は丸くおさまる。**杯身**（104～108,116）は口径11cm程の小型で底部内面から口縁部までロクロナデをおこなう。底部外面はヘラ削り、又は未調整の両方がある。（104～106,108）は受け部が水平に延び、内傾する立ち上がりをもつ。（104）には体部側面に「Ｐ」字状、（105）には底部に「Ｉ」字状のヘラ記号がつく。（107,116）は外傾する短い受け部を有し、短めに内傾する立ち上がりをもつ。口縁部はやや薄手の端部をつくる。（116）は外面に自然釉がかかり内面に焼き膨れが見られる。

須恵器 台付椀（109）　口径13cmで体部に２条の凹線を巡らす椀に脚部が付く。口縁部は垂直に立ち上がり底部ヘラ削り後、外傾し裾端部に面をもつ脚を取り付ける。体部は楕円状に歪む。



第92図　2号墳出土石棺実測図

須恵器　提瓶（111）口縁部から体部上半を残し一次面より10cm上で破片状態で出土。口縁部は直線的に外傾し端部内面に弱い沈線をもつ。鍵状の把手を付ける。

須恵器 短頸壺（112）口頸部は外傾気味に立ち上がりながら口縁部につながり、端部は直線的に延び丸くおさまる。頸部から体部外面にかけカキ目を施す。

須恵器 長頸壺（113）体部中央に2条の凹線を入れその間に刺突文を巡らす。口頸基部から外傾する長い頸部が付く。底部は平坦で口縁部を欠く。

須恵器 蓋（117）口径7cm、器高1.9cmで口縁端部内面に面をもつ。（118）の蓋になると思われる。

須恵器 有蓋短頸壺（118）口径3.2cm、器高5cmの小型の壺で体部から肩にかけ2条の沈線を巡らす。口頸部は内傾し、直立する短い口縁部がつく。

土師器 椀（120～123）いずれも粘土巻き上げ痕を残し体部内外面にナデ、口縁部にヨコナデを施す。底の丸いもの（121～123）は内湾気味に立ち上がる体部に丸くおさまる口縁端部をつくる。（122）は内面にハケ目を施した後ヨコナデをする。底の平らなもの（120）は直線的に外傾する口縁部をつくる。底部外面に刻み目状の窪み痕がく。

土師器 甕（114,115）外面体部にハケメ、内面に板ナデを施す。（114）は粘土紐の継ぎ痕を残し（115）は頸部内面に指オサエをおこなう。

鉄製品（126～175）は玄門から羨道部にかけ集中して出土し、その数は破片を含め総数53点になる。主な副葬品は武器類、馬具類とに区分できる。また、不明なものもある。

(1)武器類

鉄鏃⑥（126～144）は全部で19点出土するが、整理の段階で接合できたものが6点ある。いずれも錆の進行が著しい。有茎鏃（126～142）と長頸鏃（143,144）とに分かれ、さらに有茎鏃は3タイプに分類できる。鏃身部が長三角形で直角な関部をもつもの。この中には鏃身のふくらがやや角ばる類五角形になるものも含む（126～138,142）、長三角形で腸抉をもつもの（134）、三角形で頸部が斜行するもの（135,136）である。長頸鏃では片刃で長い頸部をもつもの（143,144,159,160）がある。（159）は頸部と茎を残し、（160）は刃部の先端、茎を欠く。また、（161～169）は、鏃身部を欠損する頸部から茎までの有茎鏃の一部である。

刀子（119、147～151）（119）は刀身長7cm、柄部4.5cmと完形状態である。断面は二等辺三角形を呈す。（147）は刀身長8cm、柄部5cmとほぼ完形の状態

で残り柄部には木質が付着する。（149～150）は接合可。（148、151）はいずれも刀身の一部を残す。

直刀（178）は刀身長29cm、柄部7.0cmを計り断面平片刃造りになる。

柄木留金具（179）は袖石隅の石下から出土する。断面4mm幅の円柱状を呈し、内面に木質が付着する。直刀（178）の柄縁に装着する柄木留金具と思われ、内面に付着する木質は柄木の残滓であろう。

(2)馬具類

飾金具（145）袖石付近で出土し、花弁状の形態を有し中央部が球形に膨らむ。球形の真ん中に一辺6mmの方形の穴があく。（146）とあわせ歩揺付飾金具と思われる。

歩揺（146）は（145）から10cm前後離れた所より出土。断面0.9mmと薄く、内側が丸く彫れるように湾曲する。端部に小さな穴が開いていたと思われる痕跡を残す。[7]

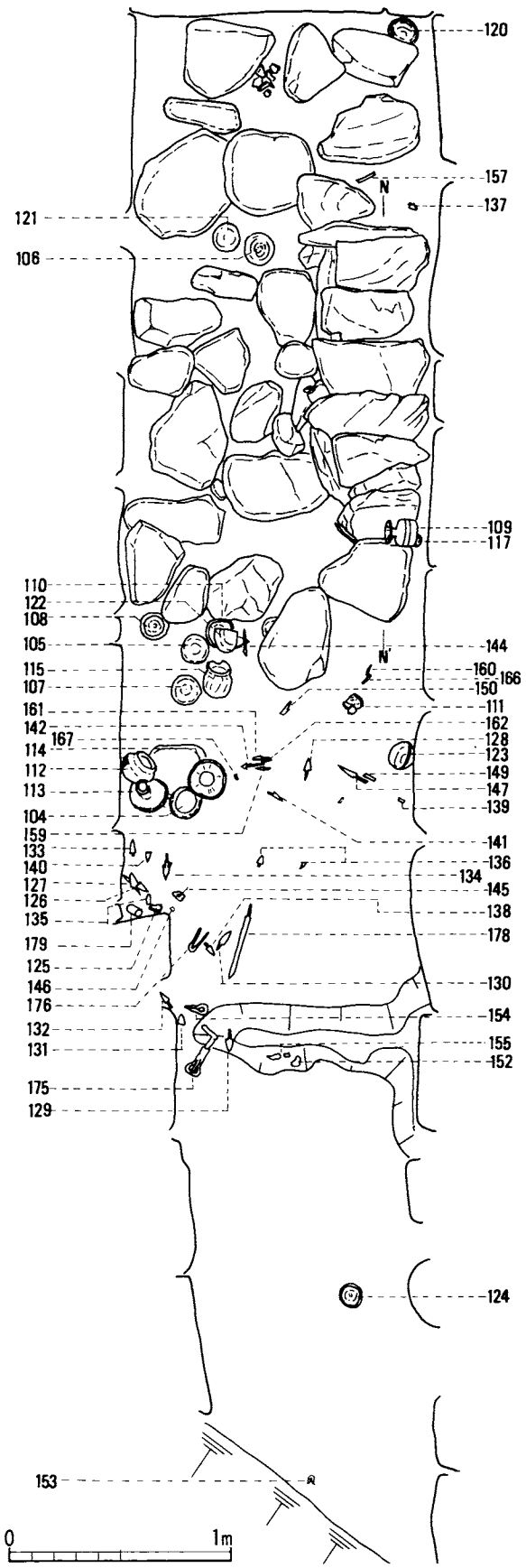
U字形留金具（152,153,155,156,174,176）は兵庫鎖につながるU字形の留金具である。（176）は残存状態は良いが錆が著しい。長さ14cm、幅1.5cmの金具でこれに付属する鋲は両側に各々5個つく。[8] これに木製の壺鐙が付いていたであろう。（152,153）はU字形の上端の一部。（155,156）はU字形の両側の鐙を留める金具であろう。（155,152）はほぼ同地点で出土し接合できる。（174）は丸みをもつ先端部に鋲がつく。

鞍金具（154）鞍に尻繋を取り付けるためのもので長さ6.5cmの円環に方形をつけた形態をする。[7] バックル状のそれと比べれば大きい。

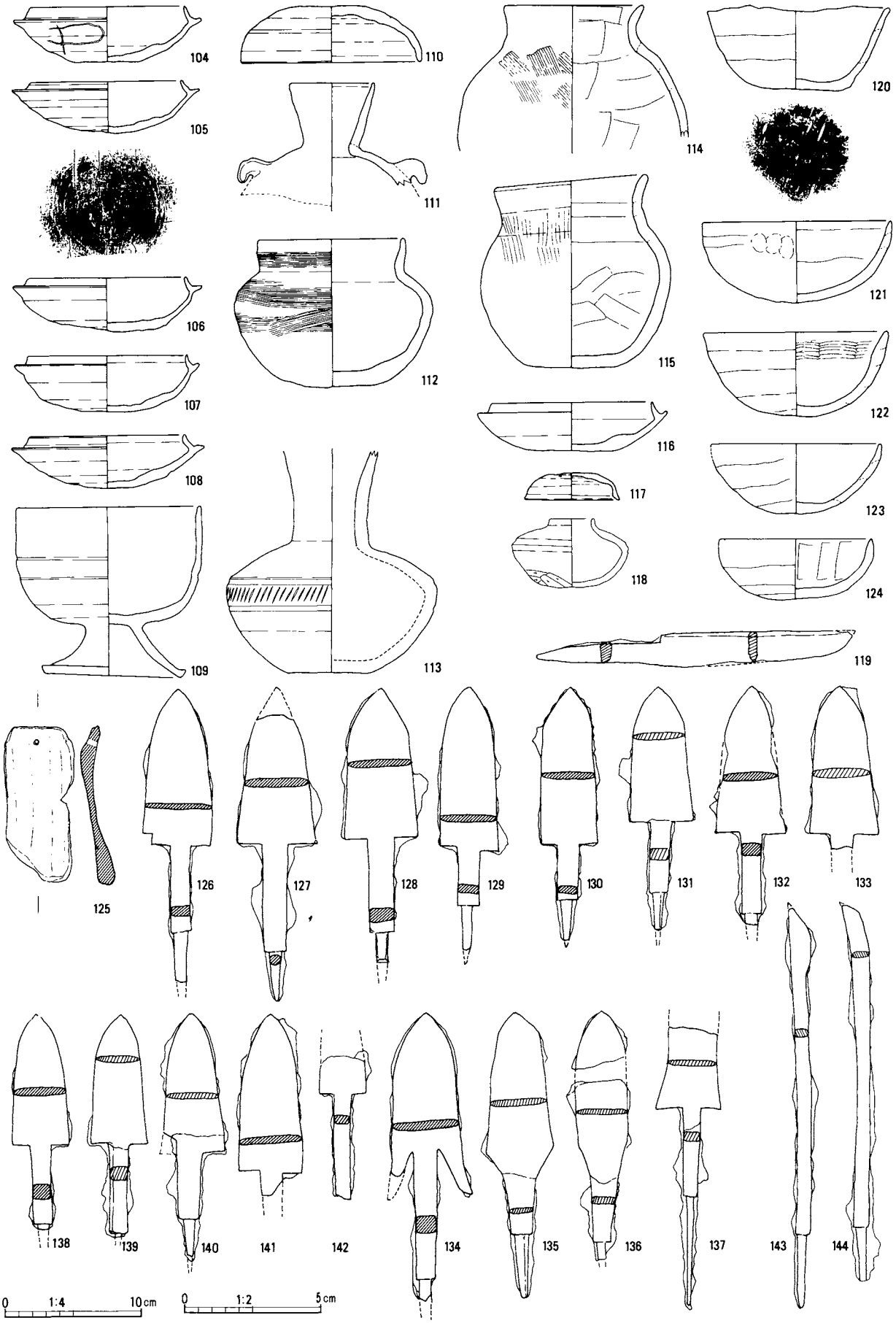
鉸具付兵庫鎖（175）は錆化が著しく判然としないが、10cm前後と大きめの鉸具に3連の鎖がつく。3番目の鎖はU字形金具（176）につながり、木製壺鐙がつくものと考えられる。[9]

(3)不明鉄製品

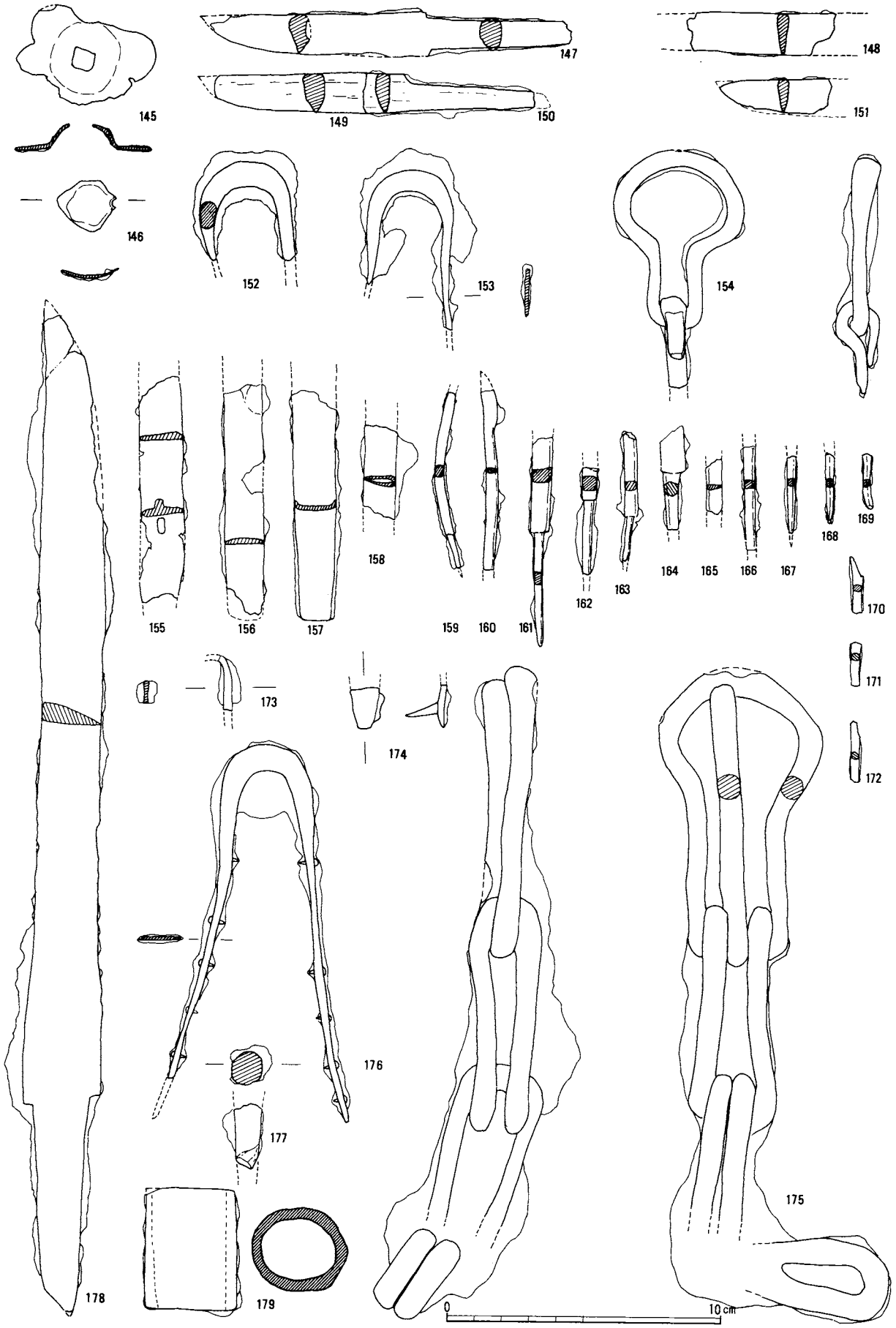
（157,158,170～172,173,177）鉄製品の一部で形態の判明しないものである。（157）は幅1.5cm、残存長8.4cm、厚さ2mmの細長い板状を呈する。両端が若干曲がる。（158,170～172,173）は出土位置は不明であるが玄門付近の埋土中より出土する。（170～172）は木質が巻き、（173）は小さな鉄芯が端部で曲がる。（177）は先端が尖り棒状になる。石棺床下より出土する。



第93図　2号墳遺物出土状況図（1:30）



第94図　2号墳出土遺物実測図（104～118、120～125＝1:4、119、126～144＝1:2）



第95図　2号墳出土鉄製品実測図（1:2）

No.	登録No.	器種	出土位置	包量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
104	5－4	須恵器　杯身	玄室	11.4	4		体部外面～内面にかけロクロナデ、体部底未調整、外面に「P」字状のヘラ記号	密（長石・雲母含む）	硬	灰色	完形	
105	32－1	〃　〃	〃	11.2	3.7		体部～内面にかけロクロナデ、体部底をヘラケズリ、底部にヘラ記号	〃	〃	〃	〃	灰かぶる
106	32－2	〃　〃	〃	11.5	3.9		体部外面～内面にかけ、ロクロナデ、体部底ヘラケズリ	〃（1㎜大の石含む）	〃	〃	〃	〃
107	32－3	〃　〃	〃	11.6	3.9		〃 〃	〃（0.5㎜　〃　）	〃	青灰色	〃	
108	5－2	〃　〃	〃	11.4	3.8		体部～内面にかけロクロナデ、底部ヘラケズリ	〃（石英・長石含む）	〃	灰色	〃	
109	7－1	〃　台付椀	〃	13.4	12.2	脚部3.8	内面～体部にかけロクロナデ、体部外面下半ヘラケズリ、脚を貼つける	やや密	〃	〃	〃	自然釉全体にかぶる
110	5－3	〃　杯蓋	〃	13.2	4.1		天井部未調整、口縁部ロクロナデ	密（長石含む）	〃	〃	〃	
111	32－4	〃　提瓶	〃	6.2	—		体部～口縁部ロクロナデ 鍵状把手つける	〃	〃	淡灰色	口縁部～体部	前面に灰かぶる
112	6－1	〃　短頸壺	〃	10.7	10.7		体部ロクロナデ後、カキ目施す	〃	〃	灰色	完形	
113	6－2	〃　長頸壺	〃	—	—		胴部中央に凹線を施し、縦の刺突文を巡らす	〃	〃	〃	口縁部を欠く	自然釉かぶる
114	7－4	土師器　甕	〃	9.9	—		口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ハケ目施す。	やや密	良	黄橙色	50%	

第24表　2号墳出土土器一覧

No.	出土位置	名称	備考	登録No.
126	玄室	鉄鏃	三角形、鏃身5.5、幅2.7、平造、頸部3.0、茎1.9	9－3
127	〃	〃	三角形、鏃身(48)、幅2.9、両丸造、頸部3.4、茎2.4	14－1
128	〃	〃	〃、〃5.4、〃2.7、平造、〃3.0、〃(1.2)	13－1
129	羨道	〃	〃、〃5.6、〃2.1、〃、〃2.1、〃(1.6)	9－4
130	〃	〃	〃、〃5.6、〃2.2、〃、〃、〃2.0、〃(1.4)	9－1
131	〃	〃	〃、〃4.2、〃2.3、〃	10－1
132	〃	〃	〃、〃5.2、〃2.5、〃、〃3.3	13－2
133	玄室	〃	〃、〃5.1、〃2.7、両丸造、〃0.6	8－4
134	〃	〃	腸抉三角、〃5.0、〃2.4、平造、〃4.6、〃(1.8)	13－3
135	〃	〃	類五角形、〃5.0、〃2.4、〃、〃2.4	13－4
136	〃	〃	〃、〃、　〃	8－
137	〃	〃	三角形、〃(3.0)、〃(2.4)、〃、〃3.4、〃4.0	8－5
138	羨道	〃	三角形、〃4.8、〃2.0、両造、〃3.0、〃欠	8－2
139	玄室	〃	〃、〃4.6、〃2.0、〃、〃3.2、〃欠	10－6
140	〃	〃	〃、〃5.6、〃2.4、平造、〃3.0、〃(1.4)	10－7
141	〃	〃	〃、〃5.6、〃2.4、〃、〃(0.8)、〃欠	12－1
142	〃	〃	(〃)、〃(1.4)、〃1.8、—、〃(3.8)、〃欠	10－8
143	〃	〃	長頸（片刃）、〃2.6、〃0.8、—、〃9.2、〃2.6	14－2
144	〃	〃	〃、　〃2.2、〃0.6、三角形、〃9.6、〃(1.8)	9－6
145	〃	馬具	飾金具、中央部6㎜の方形の穴あり	10－5
146	〃	〃	歩搖、中央部が窪む	18－7
147	〃	刀子	刀身長8.0、柄不5.0、柄不に木質残る	8－6
148	〃	〃	刀身部残5.2	15－4
149	〃	〃	刀身部残5.2	8－3
150	〃	〃	〃　1.5、柄部(4.5)、柄部に木質残る	15－10
151	〃	〃	〃　(4.0)、〃欠	24－6
152	羨道	馬具	U字形金具、残存長3.4	15－7
153	〃	〃	〃　、〃5.6	15－3
154	〃	〃	鞍、残存長9.0	8－5

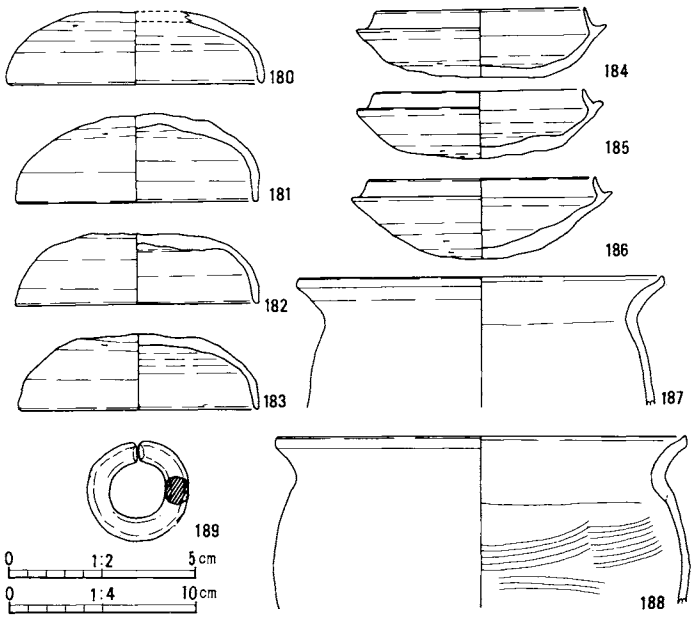
第25表　2号墳出土鉄製品一覧（備考中の単位はcm）

No.	出土位置	名称	備考	登録No.
155	羨道	馬具	U字形金具片、残存長8.0、鋲留あり	10－4
156	玄室	〃	〃　、〃8.2	29－7
157	〃	不明鉄片	板状のもの、残存長8.0、先端細くなり両端曲る	9－2
158	〃	〃	〃　、断面空洞になる	18－1
159	〃	鉄鏃	頸部のみ、頸部長(5.2)、茎(1.5)	10－3
160	〃	〃	長頸（片刃）、鏃身長1.7、幅0.6、頸部5.0、茎(1.5)	18－7
161	〃	〃	頸部のみ、頸部(3.4)、茎(4.2)	8－7
162	〃	〃	〃　、〃(1.2)、〃(2.4)	13－6
163	〃	〃	〃、〃(2.8)、〃(1.8)、木質付着	15－5
164	〃	〃	〃、〃(1.7)、〃(2.2)、茎に木質付着	18－4
165	〃	〃	片刀の片？鏃身部(2.0)	24－2
166	〃	〃	頸部片、頸部(3.7)、茎欠	18－8
167	〃	〃	茎のみ、茎(2.7)	18－2
168	〃	〃	〃　、〃(2.6)	18－10
169	〃	〃	〃　、〃(2.0)	29－8
170	〃	不明鉄片	残存長(82.1)、木質周りに付着	24－3
171	〃	〃	〃　(1.6)、　〃	24－3
172	〃	〃	〃　(2.0)、　〃	24－3
173	〃	〃	〃　(1.5)、　〃	18－12
174	〃	馬具	U字形金具の端部か？、鋲がつく	29－6
175	羨道	〃	鈹具付兵庫鎖、残存長23	11－1
176	〃	〃	U字形金具、残存長14、5ヶ所に鋲あり	13－5
177	玄室	不明鉄片	先端の尖った棒状の形態	18－11
178	羨道	直刀	刀身長29、刀身幅2.5、平片刃、柄部7.0	10－2
179	玄室	柄榴金具	残存長4.2、内面に木質残る。No.178に装着可	13－8
119	石棺	刀子	刀身長7.2、刀身幅1.2、柄部4.4	8－8

189	玄室	耳環	直径2.6、断面0.6、重さ15.9g、金貼り	30－5

3号墳出土装身具

第96図　3号墳石室実測図及び遺物出土状況図（1:50）



第97図　3号墳出土遺物実測図（180～188＝1:4、189＝1:2）

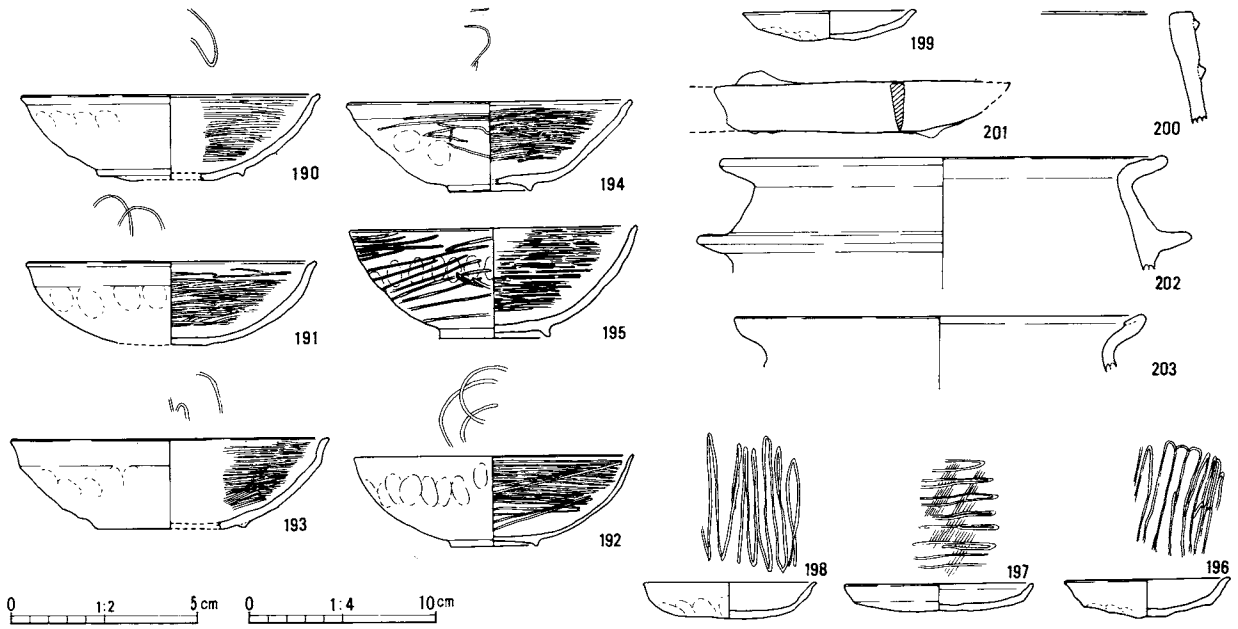
(4)石製品

砥石（125）は玄門隅で割れた状態で出土した。長方形で弯曲した造りをし、端部中央に紐通しの穴が開く。両面にともに平滑で使用痕残る。

③　3号墳

A、構　造

a、形状 現況は水田（標高249.92m）で東側の一段高くなる畦畔側面に石室に使用される大形石材の一部が露出する。調査の結果、撹乱土の中より3号墳石室を検出する。石室の主軸は真北に対してN168°00'00"Wに振りほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室であり、円墳と思われる。周溝は上部削平のため消失しているものと考えられる。石室は撹乱が激しく基底石を1段残す（一部2段）のみであり、奥壁およ



第98図　1号墳石室上部出土遺物（土器1:4、鉄製品1:2）

び羨道門入り口は削平を受け石材は存在しない。石室全体は「く」の字状に括れる。墳丘断面より掘形は西側で地山を15cm程掘り下げそこに基底石を置き、東側では盛土の中で掘形を検出する。東側の残存掘形は約75cmで基底石一段分に相当する。地山面が低いため盛土をおこない、その後石室構築に必要な掘形を掘り、地山に近い土を裏込めに使用したと思われる。掘形幅は玄室幅の2.5倍（1号墳）～2.4倍（2号墳）とし、3.4mと想定できる。

b、主体部

ア、玄室　玄室の平面は奥壁幅見込みで1.35m、中央部1.37m、玄門部ともに1.37mであり玄室長は2.9mの長方形を呈する。奥壁は削平により存在しないが、奥壁断面からその位置が復元できる。基底石は1m内外の石を横位に使用する。

イ、玄門・羨道部　玄門は両袖式になるが大きな石を用いて玄門を意識することはない。羨道は玄門付近で0.9mと狭く、羨道門近くで1.2mとやや広くなり裾広がり状になる。羨道長は残りの良い東側で3.3mを計る。また、羨道部途中が窪み状になるが閉塞施設の石積痕の可能性がある。

B、遺　物

a、石室内出土遺物

石室内は床付近まで撹乱した土で埋まり副葬品の多くは消失している。床面に若干の遺物が残っている状況である。遺物が埋葬当時の状態を保っているかどうかは不明。以下出土遺物について説明する。

須恵器 杯蓋（180～183）は口径12.8～13cmまでで天井部から口縁部にかけて丸くつながる。稜、凹線等の段を表すものは不明瞭である。天井部の調整技法にヘラ削りをした後ナデを施すもの（181～183）とヘラ削りのみのもの（180）との2種類がある。

須恵器 杯身（184～186）は口径11～12cmの小形のもので、底部が丸く底をヘラ削り後ナデるもの（184,185）と口径・器高共に大きめで底部がやや尖り、底部をヘラ削りするもの（186）とに分かれる。

土師器　甕（187,188）は頸部から口縁部にかけ外反し口縁外面にやや内傾気味に直立する面をつくる。内面には段を施し、体部上半に粘土接合痕を残す。

耳環（189）直径2.6cm、断面6mmのほぼ球形を呈し表面を金貼り（15.9g）にする。残存状態は良好で金色に輝く。

3、中世（平安時代末～鎌倉時代）

①、中世の遺構・遺物

1号墳石室上部の積石遺構及びその出土遺物が相当する。出土状況は「1号墳の遺物出土状況の項」を参照されたい。以下遺物について記述する。

a、石室内集石

瓦器 椀（192,195）は口縁上端内面に沈線をもつ。内面に密なミガキをかける。（192）は器高指数32で外面に指オサエ痕を残し重複する連結輪状文を施す。（195）は器高指数37で外面に疎のミガキをか

No.	登録No.	器種	出土位置・遺構	法量（cm） 口径	器高	その他	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
115	5−1	土師器 甕	玄室	11	13.6		口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、頸部ハケ目	やや粗	良	明赤褐色	1/4	
116	7−3	須恵器 杯身	〃	11.7	3.4		内面〜口縁部にかけロクロナデ	やや密	硬	灰色	完形	外面灰かぶり
117	25−4	〃 蓋	〃	7.0	1.9		天井部ヘラケズリ後ナデ、口縁〜内面ロクロナデ	密（長石等含む）	〃	〃	〃	
118	8−1	〃有蓋短頸壺	〃	3.2	5.0		内面〜外面胎部にかけロクロナデ、底部ヘラケズリ	やや密	〃	灰白色	〃	
120	31−2	土師器 椀	〃	13.4	5.6		口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指押阿蘇あり、底部にスジ目	〃	良	橙灰色	〃	黒斑あり
121	31−1	〃	〃	13.8	6.0		口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面に指押痕あり	良（石英含む）	〃	赤褐色	〃	
122	7−2	〃	〃	13.4	6.0		〃 、内面にハケメ、 〃	やや密	〃	黄橙色	〃	
123	31−3	〃	〃	12.4	5.0		口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ユビオサエ痕	〃	〃	赤褐色	〃	
124	30−4	〃	羨道	11.2	4.4		〃、内面板ナデ後指ナデ、外面ナデ	良	〃	暗橙色	〃	
125	8−9	石製 砥石	〃	—	—		長さ11.2cm、幅5cm、厚さ1cm、両面に使用痕あり、端部中央に4mmの穴あり					

第26表　2号墳出土土器一覧

180	23−1	須恵器 杯蓋	玄室	12.8	4.6		天井部ヘラケズリ、口縁部〜内面にかけロクロナデ	密（長石等含む）	硬	灰色	3/4	
181	25−2	〃	〃	13.6	(4.0)		〃	〃	〃	〃	2/5	
182	21−2	〃	〃	13.0	3.8		天井部ヘラケズリ後ナデル 〃	〃	〃	〃	3/5	
183	23−3	〃	〃	12.8	4.0		〃	〃	〃	灰白色	3/5	
184	25−1	須恵器 杯身	〃	11.2	3.5		内面〜体部上半までをロクロナデ、底部ヘラケズリ後ナデル	〃	〃	灰色	ほぼ完成	
185	23−4	〃	〃	11.2	3.7		〃	〃	〃	〃	〃	
186	23−2	〃	〃	12.2	4.2		〃 、底部ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
187	21−4	土師器 甕	羨道	22.0	—		内面ハケ目、口縁部横方向ナデ、体部外面ナデ	やや密	良	淡黄色	1/5	
188	21−3	〃	玄室	19.6	—		内面ナデ、 〃	〃	〃	〃	1/5	

第27表　3号墳出土土器一覧

190	28−3	瓦器 椀	C8・開口部	10.0	(4.4)		口縁部ヨコナデ、内面ナデ後ミガキ施す、外面指押痕	密（石英含む）	良	暗灰色	1/4	
191	19−2	〃	C10・ 〃	14.4	(4.4)		〃	密	〃	〃	2/5	
192	17−5	〃	D9・玄室	15.0	4.8		〃	〃	〃	〃	2/5	
193	28−4	〃	C10・開口部	17.0	4.7		〃	〃	〃	〃	1/6	
194	19−1	〃	C10・ 〃	15.2	(4.6)		〃 外面指押痕、ミガキ施す	〃	〃	灰色	3/10	
195	29−1	〃	C9・玄室	15.4	5.8		〃 外面指押痕、粗いミガキ	〃	〃	暗灰色	1/3	
196	28−2	瓦器 皿	C10・開口部	8.8	2.0		口縁部ヨコナデ、内面底部ナデ後ジクザクのミガキ施す	〃	〃	〃	1/2	
197	16−4	〃	C10・ 〃	10.0	1.4		〃	〃	〃	〃	2/5	
198	16−1	〃	D9・玄室	9.2	1.6		〃	〃	〃	灰色	2/3	
199	27−2	土師器 皿	C10・開口部	9.2	1.5		内面〜口縁部にかけヨコナデ、外面底指押後ナデ	〃	軟	暗橙色	1/2	
200	29−3	瓦質 火鉢	C10・ 〃	—	—		口縁部ナデ後、2条の突帯施す	やや密	〃	〃	1/20	
201	26−6	短刀	C9・玄室	—	—		切先・胴部・柄部を欠く残存刀身長7.0cm					

第28表　1号墳出土中世土器、鉄製品一覧（202、203は紙面の都合上、割愛する）

け細切れの連結輪状文を施す。

瓦器 皿（198）はやや外反気味の口縁にジグザグのミガキを施す。体部下半に指オサエあり。

短刀（201）は残身長7cmで切先、柄部を欠く。

b、羨道付近

瓦器　椀（190,191,193,194）口縁部上端内面に沈線がもち内面に密なミガキをかける。底部には1〜2個の連結輪状文を施す。（190,191,193）は外面に指オサエ、（194）は外面に疎のミガキが認められる。

瓦器　皿（196〜198）内面底部にジグザグのミガキを施す。（197）の口縁端部は丸くおさまる以外は端部を外へつまむ。

土師器　羽釜（202）は体部上半に鍔をつけ、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸くおさまり内面にわずかな段をもつ。

土師器 鍋（203）口径22cmで外反する口縁部に折り返しがつき段をつくる。

土師器 皿（199）薄手で浅くゆるく内傾する口縁部をもち端部は外傾する。体部下半に指オサエ痕あり。

瓦質　火鉢（200）は口縁部外面にに2条の突帯を

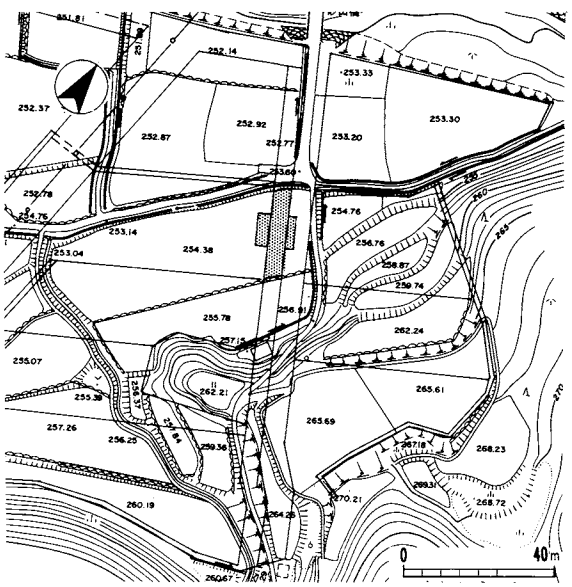
施し、口縁端部は肥厚し上方に面をもつ。口径、器高とも不明。

3、B地区の遺構・遺物

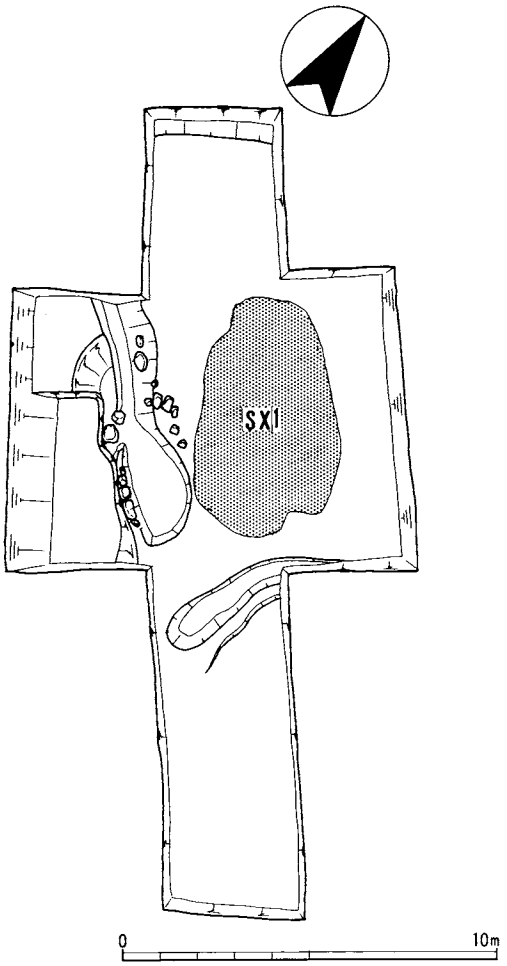
B地区(標高255mに位置する)は名賀郡青山町妙楽地に所在し、現況は水田である。木津川支流左岸の河岸段丘上に位置し、東側には薮内氏城館祉がある。平成3年2月の第1次遺跡範囲確認の結果、750㎡にわたり遺跡である事が判明。ほ場整備事業により削平を受ける排水路部分約120㎡について調査を行う。調査の結果、平安時代末期～鎌倉時代にかけての積石の集石遺構1基、溝2条を検出する。

1、遺　構

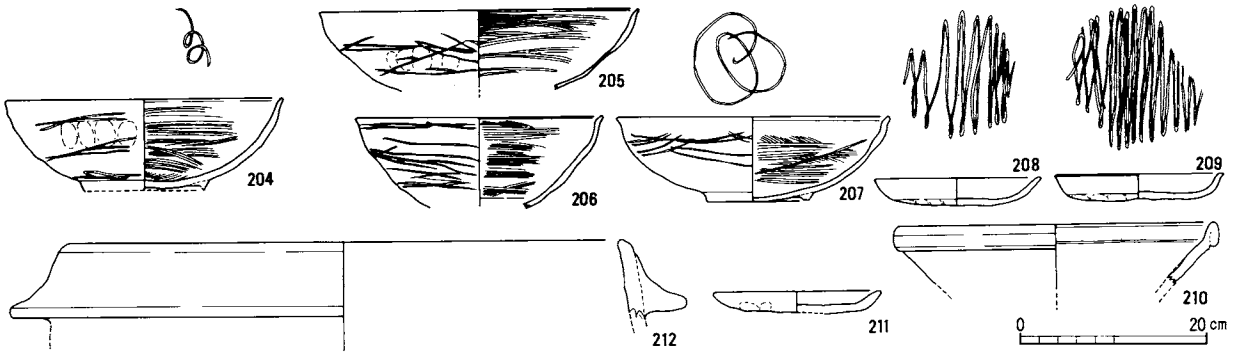
調査は排水部路分に沿って南北に21.5m×3.5mのトレンチを入れ、一部東西に各々3m×7mの拡張を行う。遺構検出面までの土層の層序は第1層＝耕土（暗灰色土）、第2層＝暗青灰色土、第3層＝茶褐色土石混じり（拳大）、第4層＝暗青灰色（褐色混じり）土、第5層＝暗褐色土（検出面）である。検出面までの深さは約0.7mで検出面は北端から16mの所で土質が褐色粘質土（拳大石混じり）に変わり自然の地山となる。主な遺構はトレンチ中央部で検出したSX1（集石墓？）であり、長軸6.4m×短軸3.4mの長円形の土坑の中にほぼ長方形状に、拳大から人頭大の石が無秩序に積まれている。土坑は最深部で約0.4mを計り、なだらかな窪み状を呈する。石は土坑底部まで積み重なっており、積石中よ



第99図　B地区調査区位置図（1:2,000）



第100図　B地区遺構平面図（1:200）



第101図　B地区出土遺物実測図（1:4）

り瓦器椀（204～207）、瓦器皿（208,209）、土師器皿（211）、白磁椀片（210）等が出土した。中には完形品に近いものもあり意図的に置いたと考えられる。これはA地区で検出された1号墳石室内上部の遺構と酷似し、おそらく同じ機能を果たしていたものと考えられる。SD1は小量の土師器が出土したのみである。SD2も遺物もなくその機能も不明。

2、遺　物

平安時代末期（12C中）から鎌倉時代（13C初頭）にかけての遺物が小量出土。特に積石遺構からの出土遺物が中心である。

瓦器椀（204～207）は口縁部内面に沈線を有し、内面に密なミガキをかける。（204,205）は器高指数30未満で体部外面に粗いミガキ、指オサエが認められる。（206,207）は器高指数33,34で外面にミガキを施す。（207）は底部に簡略された連結輪状文を施し、丁寧な造りの高台をもつ。

瓦器皿（208,209）は内面底部にジグザグのミガキを施す。（209）は体部内面にも細かなミガキを施す。

白磁椀（210）は乳白色の釉が内外面にかかり体部は直線的に外傾する。口縁端部は玉縁状をなし外面に面をつくる。

土師器皿（211）比較的厚手の体部に短く外傾する口縁部がつく。底部に指オサエ痕が良く残る。

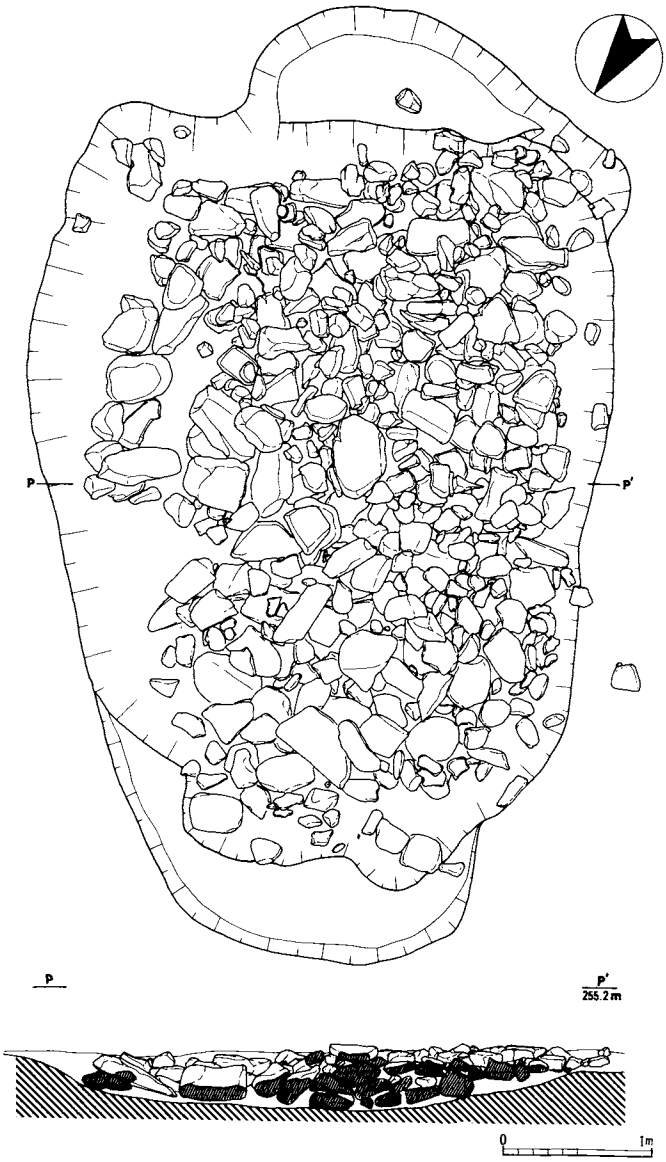
土師器羽釜（212）推定口径30cmあり、口縁部外面に断面三角状の鍔を巡らす。外面に煤が付着する。

4、結　語

縄文時代及び古墳時代の代表的な遺構・遺物についての事実関係を述べてきたが、ここで遺跡の性格について若干述べて結語にかえたい。

1、縄文時代の遺構・遺物

底部に小穴を有する4基の土坑を検出するが、これらは獣を捕獲する為の落とし穴と考えられる。このような遺構は伊賀では類例を聞かないが、関東には多い[18]。土坑中央に穴を掘り、先端部を鋭利にした木等をそれに差し込んで獲物を捕らえたのであろう。当遺跡では東西方向に4カ所設けられており、獣の通り道に仕掛けられたものと考えられる。また、共伴する石鏃も多くここが狩猟の場であった可能性が高い。時期的にはSK4,Pit5等からの出土遺物により早期末と考えられる。包含層からはポジティブな押型文も出ており早期の遺物もある。



第102図　B地区集石遺構ＳＸ１（1:50）

2、1号墳～3号墳の遺構・遺物

①　石室の築造過程について

1号墳の奥壁を見ると側石は奥壁に接して立てられ、奥壁で蓋をしたような造りになっている。おそらく掘形段階で目安を設けてを掘り、次に基底石を側面から順次据え最後に奥壁を据える段階で鏡石の幅と奥壁の幅が合わず30cmずらすことになったと思われる。むろん北側の側壁を長く造った事も要因に入る。2号墳は不明。3号墳は東側の石が奥壁を挟むように立てられており鏡石を据えた後、両サイドに側壁を設けたと思われる。

② 遺物の時期について

1～3号墳の副葬品で時期比定可能な遺物は須恵器類である。1号墳では杯蓋・身の口径が大きく、体部と天井部に弱いながらも稜をもち口縁内面に段を有するものもある等中村編年のII－3段階[13]、田辺編年のTK43型式[14]に併行すると考える。提瓶も同時期であろう。有蓋高杯は透かし等を有さないことからII－3段階より新しくなるだろう。土師器長頸壺では新しい程頸部が長くなる傾向があり、その形態・条件から（84）は清水編年のII－b,c[15]に、（78）は（84）より古い造りを有する。以上の事から1号墳は時期差のある2つの副葬品が認められ、6世紀後半の早い段階と少し後の時期のものが考えられる。2号墳では杯蓋・杯身とも小型化する。天井部から口縁部にかけて丸くなり、口縁端部の段もなくなる。杯身は立ち上がりも短く内傾するなどII－5,6段階、TK209型式に併行しよう。また、TK209型式より出現する台付椀（109）、刺突文を施す須恵器の長頸壺（113）はII－5段階から見られる。提瓶がこの中では古く、口縁、鍵状把手の形態からII－4段階前後か。以上から2号墳は6世紀末～7世紀初頭の遺物が中心であると考えられる。3号墳の須恵器の杯蓋・身とも小型化しており形状では2号墳の須恵器に近くII－5段階と考えたい。3号墳の遺物は6世紀末頃のものであろう。

③ 石室の形態と時期について

石室の形態的変遷には玄室比（玄室の幅と長さの比率）および羨道比[16]からと袖石の変化の目安[17]から考える場合がある。玄室比は玄室幅を基準とし新しい程玄室長は長くなる。仮定的に考えると1号墳の玄室幅は1:2.1、2号墳は1:3、3号墳は1:2.1でここでは2号墳が新しい事を意味し1、3号墳は2号墳よりは古い事を示す。袖石を伴う石室の変化で見れば、両袖大→両袖小→片袖大→片袖小→無袖大→無袖小→小石室へと変化する傾向にある。1号墳は片袖大、2号墳は片袖小、3号墳は両袖小であるから当てはめると、それぞれが隣合っており2号墳は1、3号より新しく1号墳は3号墳より新しいことになる。以上2つを併用すれば3号墳→1号墳→2号墳の順に造営されたという結果が出る。出土遺物の時期では1号→2号の流れには整合性があるが、3号墳は床面まで破壊されているため出土遺物で石室造営時期を決めるのは困難である。ただ、包含層遺物の中に稜が明確で体部と天井部の区別が明瞭な杯蓋（96）があり、杯身（101）にも高い立ち上がりと口縁内面に明瞭な沈線を施す破片が出土している。型式はII－1段階、MT15型式、時期は6世紀前半後葉としたい。さて、3号墳の遺物は破壊に伴い近辺に多く散逸している筈であり、包含層に混じっていたものが今回出土したとも考えられる。したがって、3号墳をその時期に置いて考えると6世紀前半後葉（3号墳）→同世紀後半（1号墳）→同世紀末（2号墳）の順に造られたのではないだろうか。これらの群集墳は尾根の上から下に向かって造営されて行ったことになる。

④ 埋葬形態について

6世紀後半より単次葬から複次葬へと埋葬形態も変化するが、当遺跡もその例外ではない。地域の有力者は一家族に一墓域を有し戸主とその血縁者を追葬する。戸主の死を契機に古墳を造営するが、一家族が墓域内に造墓するのは盛行期間50年～70年間に2基～4基前後とする考え[18]は勝地大坪古墳にも概ね当てはまる。なぜなら、他と独立した群集墳であること、検出された3基の古墳の営まれた時期は出土遺物より6世紀後半前後～7世紀前期前葉と思われること等により有力一家系の3代にわたる造営墓であり戸主とその家族が追葬されたとみたい。

⑤ 追葬について

1号墳では土器等に口縁部の一端を欠いたものがあり、それを除けば他の土器は極端に減る。これは追葬数の上限を仮定させる。また奥壁右に棺台が2列残ることは左も同じ配置であり計4列の棺台が敷かれたことを意味し、2棺並列配置が想定できる。さらに、右側の床面からの出土遺物に上下で3cmのレベル差があり1次埋葬、2次埋葬に相当しよう。その結果、埋葬は奥壁に向かい左右に時期をおかずに2棺据え、その後に奥壁右側を片ずけ、1棺据えると考えられる。

2号墳出土の組合せ式箱形石棺は遺骨整理箱の可能性は低く出土遺物、法量等から幼児を埋葬したものであろう。遺物の出土状況から頭位は東向きであり、刀子の位置は幼児の胸元の位置を示していると

思われる。

埋葬の時期差は狭くその順位は不明であるが、埋葬回数を出土状況から想定すると、まず玄室中央の床面に小石を敷きつめその上にNO.1の埋葬が行われたと思われる。続いて、手前にNO.2の埋葬が行われたと考えられる。なぜなら、玄室幅は1.32mと狭く、また4mと長いつくりになっていることから棺は縦列配置の可能性が高い。その後片ずけられるが、手前側の棺には馬具類などが納められており、片ずけの際に玄門から羨道付近に寄せられたと思われる。それは奥壁からでは距離があること、奥壁付近にも鉄の小片が出土してもよいが出ないこと等があげられる。次いで棺台が設置されNO.3の埋葬がある。と言うのは奥壁右の土師器椀が棺台に挟まれた形で出土しているからである。そして、NO.4として右側の棺台を片ずけ石棺を置く。NO.3、NO.4は後先が逆転することも、同時であることも考えられる[12]。したがって、3号墳は4回が想定できる。

3、中世の遺構・遺物

1号墳の石室を掘り下げる段階で石室上部に石材、河原石が無造作に積んであるのを検出した。その中より完形に近い瓦器等が出土したのは前述の通りである。当初これを破壊時の混入物と考えたが、2号墳では全く見られない状況である。さらに、B地区においても同様な遺構を検出し、規模、形状、中からの出土遺物等より人工的な造作であると考える。出土遺物では1号墳の瓦器は山田編年のII－3～III－1段階[13]にあたり、時期は12世紀中頃～13世紀初め頃と考えられ、B地区と同時並行していたもよう。1号墳積石中より土器以外に短刀片（201）も出土していることから墓として使われた可能性がある。現在、勝地から1kmほど東へ行くと妙楽地に滝地区がある。そこに中世末から使われている墓域がありその中に石を積んだ形状のものがある。それが中世の墓の一形態とするならA・B地区の積石も同じ機能を有していたと考えるのは早急であろうか。いずれにせよ1号墳は中世初期に石室の「再利用」が行われた蓋然性は高い。

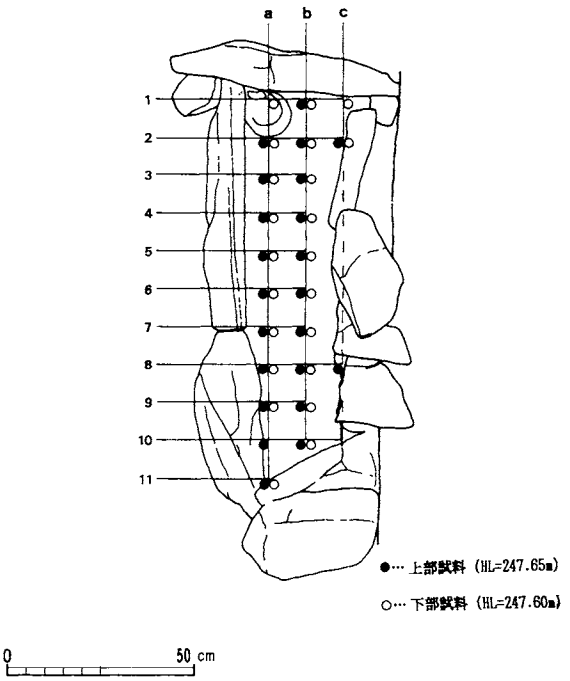
4、課　題

当遺跡について概観してきたが、ここで幾つかの疑問点を述べたい。まず、各古墳の営みの期間であるが前述の中で3号墳を6世紀後半前後～6世紀末としたが、他の古墳の使用期間に比べ長いこと。第二に1、2号墳の埋葬順位が不明確であること。第三に1号墳の「再利用」を中世の墓の可能性大としたが、それの当否について。今後、中世の墓の形態が明らかにされていく中で解明されるであろう。

（吉澤　良）

注

① 『青山町史』青山町史 1979
② 門田了三『霧ケ谷15号墳』青山町遺跡調査会　1989
③ 『青山町の文化財』　青山町教育委員会　1991
④ 泉　拓良氏（奈良大学教授）により縄文時代の土器について御教示を受けた。
⑤ 久保勝正氏（斉宮歴史博物館）による実測、トレース、及び助言を頂く。
⑥ 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究論集』第八　吉川弘文館　1988
⑦ 望月幹夫ほか『古墳の知識II・出土品』東京美術　1988
⑧ 『龍子向イ山」『山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告8 』兵庫県教育委員会　1987
⑨ 坂本美夫『馬具』ニューサイエンス社　1989
⑩ 『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター　1991
⑪ 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本5』1970
⑫ 森岡秀人「追葬と棺体配置」『関西大考古学研究室開設30周年記念』関西大学　1983
⑬ 中村　浩『研究入門　須恵器』柏書房　1990
⑭ 『陶邑古窯祉群Ⅰ』平安考古学園クラブ　1966
⑮ 清水真一「土師器長頸壷のに関する一考察」『橿原考古学研究論集第9』吉川弘文館　1988
⑯ 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』42・43合併号　1966
⑰ 水野正好「群集墳の諸問題」『帝塚山考古学』第4　1984
⑱ 山田　猛「瓦器に関する若干の考察」『中世土器の基礎研究II』中世土器研究会　1986



第103図　2号墳石室石棺内のリン・カルシウム分析試料採取地点

	試料番号	土色・土性			リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g
上部 aライン	2	暗褐色	(10YR3/3)	L	2.21	1.28
	3	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.21	1.36
	4	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.07	1.13
	5	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.27	1.82
	6	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.40	1.48
	7	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.19	1.08
	8	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.20	2.60
	9	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.22	1.60
	10	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.32	1.44
	11	暗褐色	(10YR3/3)	L	2.11	1.22
bライン	1	褐色	(10YR4/4)	L	2.37	1.71
	2	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.05	1.45
	3	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.71	1.73
	4	褐色	(10YR4/4)	L	2.47	2.71
	5	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.31	1.49
	6	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.25	1.63
	7	暗褐色	(10YR3/3)	L	2.19	2.06
	8	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.19	1.60
	9	褐色	(10YR4/4)	L	2.27	1.56
	10	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.28	1.47
cライン	2	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.77	0.77
	8	褐色	(10YR4/4)	L	1.95	2.68
下部 aライン	1	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.45	1.34
	2	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.35	1.17
	3	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.74	1.08
	4	暗褐色	(10YR3/3)	L	2.01	1.30
	5	鈍い褐色	(10YR4/3)	L	2.10	1.73
	6	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.83	2.28
	7	褐色	(10YR4/4)	L	2.01	1.29
	8	褐色	(10YR4/4)	L	2.07	1.61
	9	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.91	1.16
	11	褐色	(10YR4/4)	L	2.07	1.21
bライン	1	鈍い褐色	(10YR4/3)	L	2.89	1.11
	2	鈍い褐色	(10YR4/3)	L	2.44	1.60
	3	褐色	(10YR4/4)	L	2.19	1.95
	4	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.92	1.48
	5	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.88	1.64
	6	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.62	1.47
	7	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.88	1.57
	8	暗褐色	(10YR3/4)	L	1.88	1.58
	9	褐色	(10YR4/4)	L	1.60	1.25
	10	褐色	(10YR4/4)	L	1.88	1.96
cライン	1	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.13	1.30
	2	暗褐色	(10YR3/4)	L	2.03	1.18

（1）リン酸、カルシウムの単位は、ともに乾土1gあたりのmgで表示。
（2）土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（3）土性の判定は、土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による。
L…壌土（ある程度を砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土を同じくらいに感じられる。）

第29表　2号墳石室石棺内土壌のリン・カルシウム分析結果

5. 勝地大坪2号墳石室石棺内リン・カルシウム分析

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

（1）試料採取と分析試料

2号墳石室の石棺内底面付近の覆土を水糸レベル247.65m地点から5cm厚の深さで2回堀り下げ、水糸レベル247.65m地点の上部22点（aライン10点、bライン10点、cライン2点）、水糸レベル247.60m地点の下部22点（aライン10点、bライン10点、cライン2点）合計44点の試料が面的に採取された。リン・カルシウム分析は、この44点すべてについて行った（図1）。

（2）　分析方法

風乾、粉砕、篩別した試料について、硝酸・過塩素酸分解を行った後、リン含量はバナドモリブデン酸法、カルシウム含量は原子吸光光度法でそれぞれ測定した。以下に具体的な操作工程を示す。

①試料を風乾後、軽く粉砕して2mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。

②風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。

③風乾細土試料1.00gを秤りとり、はじめに硝酸（HNO_3）5*ml*を加えて加熱分解し、放冷後、過塩素酸（$HClO_3$）10*ml*を加えて再び加熱分解を行い、放冷する。

④この分解液を水で100*ml*に定容し、直ちにろ過する。

⑤ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色a液を加えて分光光度計によりリン濃度を測定し、試料中のリン含量をP_2O_5mg/gとして求める。

⑥別にろ液の一定量を試験管に採取して、干渉抑制剤を加えて原子吸光光度計によりカルシウム濃度を測定し、試料中のカルシウム含有量をCaOmg/gとして求める。

（3）　結　果

分析結果を表1に、石棺のリンおよびカルシウム含量の分布を図2・3に示す。

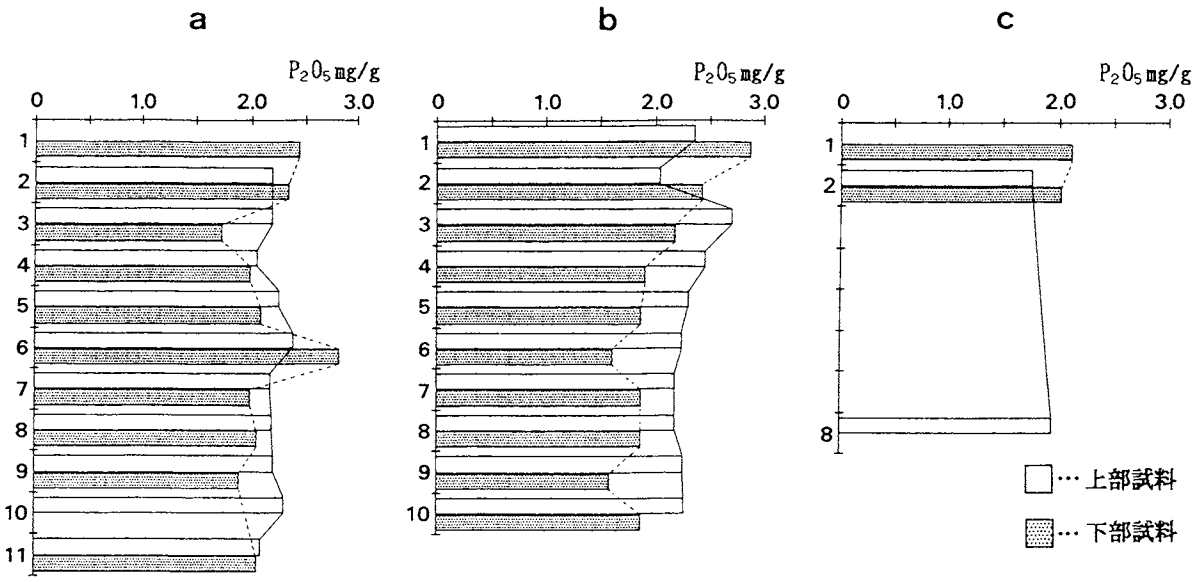
リン：上部試料22点の総平均含量は2.23mg/gで、CV（変異係数;標準偏差/平均値×100）は8.34%である。また、上部試料（aライン）の結果は試料10点の範囲が2.07～2.40mg/g（平均2.22mg/g、CV

4.27%）で、平均含量は総平均含量と同じである。しかし、ＣＶが低くバラツキは小さい。また、試料５・６・10では含量が総平均含量と比較して若干多く、相対的な富化がわずかに認められる。ｂライン試料10点の範囲は、2.05～2.71mg/g（平均2.31mg/g、ＣＶ7.79%）で、ａラインよりも平均含量・ＣＶともやや高く、バラツキが大きい。また、試料３・４で相対的な富化が認められる。ｃラインの試料は２点だけであるが、平均含量1.86mg/gの値はａ・ｂ両ラインの含量よりもやや低い傾向にあり、富化は認められない。

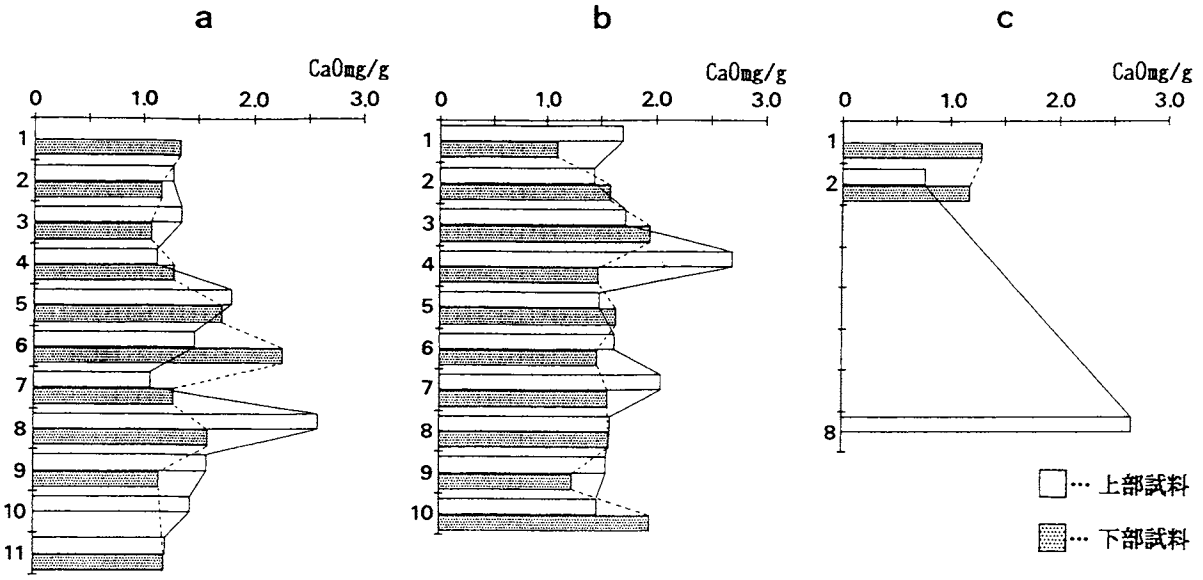
一方、下部試料22点では総平均含量2.09mg/g、ＣＶが16.8%で、上部試料に比較して平均含量はやや低い。しかしＣＶが高く、バラツキは大きい。また、下部試料ａラインの結果は試料10点の範囲が1.74～2.83mg/g（平均2.15mg/g、ＣＶ14.5%）で、同ラインの上部試料と平均含量は近似する。しかし、ＣＶが高く、バラツキは大きい。また、試料１・２・６で含量が多く、相対的な富化が認められる。ｂライン試料10点の範囲は1.60～2.89mg/g（平均2.02mg/g、ＣＶ19.4%）で、同ラインの上部試料よりも平均含量は低い。しかしＣＶが高く、バラツキは大きい。これはａラインと共通した傾向である。また、試料１・２でも相対的な富化が認められる。ｃライン試料２点の平均含量2.08mg/gで、総平均含量とほぼ同じである。

カルシウム：上部試料22点の総平均含量は1.62m/g、ＣＶ26.1%で、リンに比較して平均含量は低い。しかし、ＣＶが著しく高く、あきらかにバラツキが大きい。また、上部試料ａ・ｂ・ｃ各ラインの結果はａライン試料の範囲が1.08～2.60mg/g(平均1.50mg/g、ＣＶ29.7%）で、総平均含量よりも平均含量は低い。しかし、ＣＶが高く、バラツキは大きい。また、試料５・８・９で含量が多く、相対的な富化が認められる。ｂライン試料の範囲は1.45～2.71mg/g（平均1.74mg/g、ＣＶ22.1%）で、総平均あるいはａラインの平均よりも高い平均含量である。しかし、ＣＶは低くバラツキは小さい。また、試料４・７では相対的な富化が認められる。ｃライン試料は平均含量1.73mg/gの値を示すが、２つの試料にあきらかな差が認められる。

一方、下部試料22点では総平均含量が1.49mg/g、ＣＶ21.4%である。上部試料に比較して平均含量がやや低い。また、ＣＶも低く、バラツキは小さい。下部試料ａ・ｂ・ｃ各ラインの結果はａライン試料の範囲が1.08～2.28mg/g（平均1.42mg/g、ＣＶ25.7%）であり、平均含量が同ラインの上部試料に比較してやや低い。ＣＶも低く、バラツキは小さい。また、試料５・６・８では相対的な富化が認められるｂライン試料の範囲は1.11～1.96mg/g(平均1.56mg。/g、ＣＶ17.0%）で、平均含量が同ラインの上部試料よりもやや低く、ＣＶも低い。これはａラ



第30表　２号墳石室棺内土壌のリン含量分布



第31表　2号墳石室石棺内土壌のカルシウム含量分布

インと傾向を同じにする。また、各ライン同様に試料3・10に相対的な富化が認められる。cライン試料の平均含量は1.24mg/gと上部試料よりも低い値を示すが、試料のバラツキはあきらかに小さい。

（4）考　察

リン・カルシウム含量は、石棺内の上部・下部あるいは各ラインの間でわずかに差があり、相対的な富化傾向を示す箇所がいくつか存在することがわかった。しかし、試料全体の成分量は、一國（1989）で報告されている土の一般的元素組成(リンとして800mg/kg、カルシウムとして1.5%)、あるいは、Bolt and Bruggenwert（1980）で報告されている普通土壌の一般的なリン酸含量（リン酸として0.1～0.25%）、さらには竹迫ほか（1980）で報告されている周溝墓のリン酸含量（リン酸として最低値が360mg/g、最高値が720mg/100g）からすれば、決して高い含量範囲とは言えない。したがって、この石棺内に人骨の埋納された痕跡を明確に示唆するデータとは言えない。しかし、埋葬施設としての性格を有する石棺は、あくまでも遺体を納める場所とされるため、埋納後他所へ遺体が移されない限り遺体そのものが元々存在していなかったとは考えにくい。したがって、リン・カルシウムの顕著な富化が認められなかったことは、おそらく石棺内が人骨の分解をかなり速く進ませる環境にあり、しかも石棺内で分解した成分は土壌中に取り込まれるよりも石棺外へ流出した方が多かったことに起因する可能性がある。このような観点から相対的に両含量の高かった箇所を再検討してみると、人骨が分解・流失した後にわずかに残存している状況と考えることもできる。しかし、このような遺構内試料を対象にしたリン・カルシウム含量のわずかな富化がどこまで意味のある違いを持つのかを具体的に調査・報告した事例は少なく、リン・カルシウム分析の今後の課題とも言える。また、今後はリン・カルシウム分析だけでなく、人の元素組成の無機成分の中で比較的多く含まれる硫黄・ナトリウム・マグネシウム・カリウム成分（Bowen,1979）の分析など多角的な検証が必要である。その成果によっては、顕著な富化（高濃度な集積）だけにこだわることなく、相対的な傾向の把握によって遺体存在の痕跡を指摘できる可能性もあろう。

〈文　献〉

土壌標準分析・測定法委員会編(1986)土壌標準分析　・測定法. 354p.,博友社.

土壌養分測定法委員会編(1981)土壌標準分析法. 44　0p.,養賢堂.

G.H.Bolt,M.G.M.Bruggenwert(1980)土壌の化学, 岩田進午ほか訳. 309P.,学会出版センター.

H.J.M.Bowen(1979)Environmental Chemistry Of the Elements, Academic, Press,London, p.333.

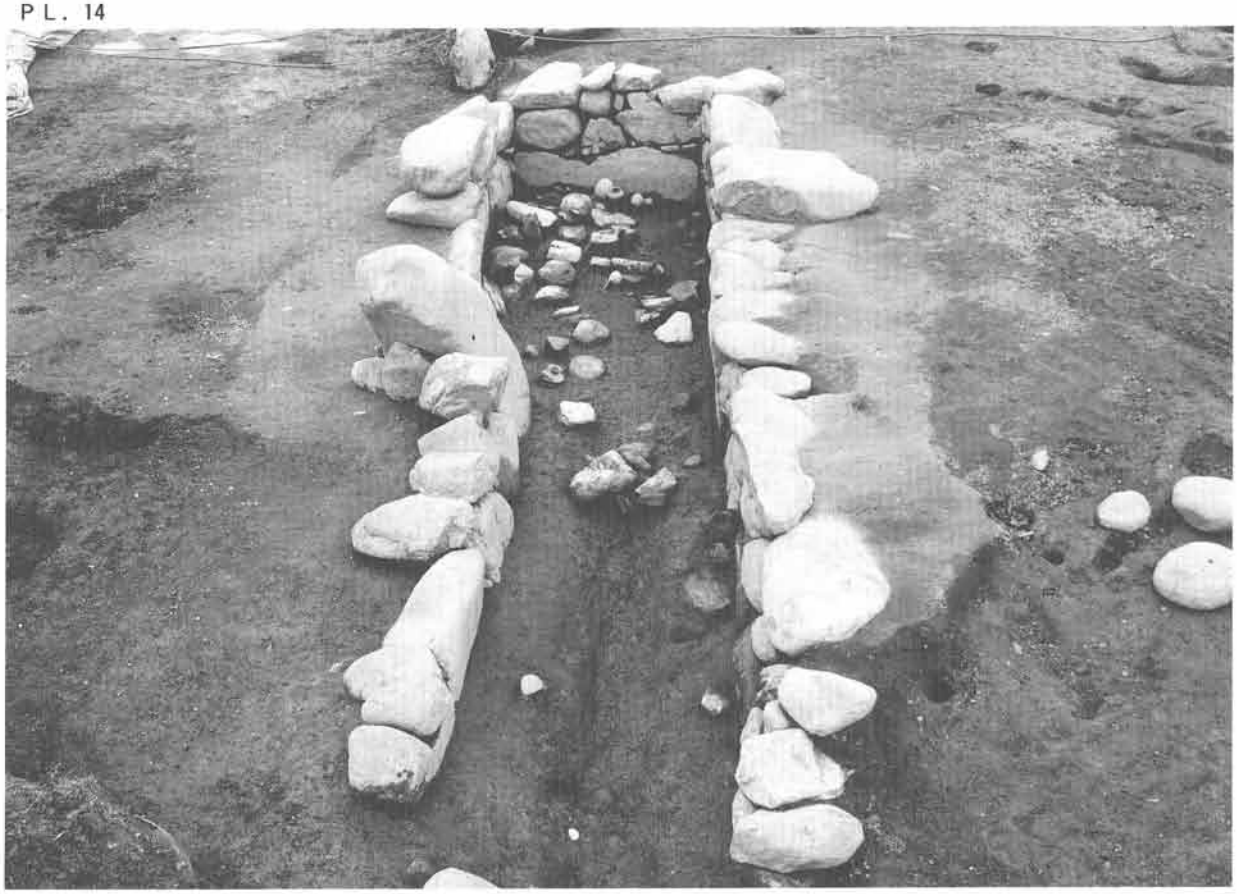
久馬一剛・永塚鎮男編(1987)土壌学と考古学.214p 博友社.

一國雅巳(1989)土の化学, 季刊化学総説NO.4,p.3－5, 学会出版センター.

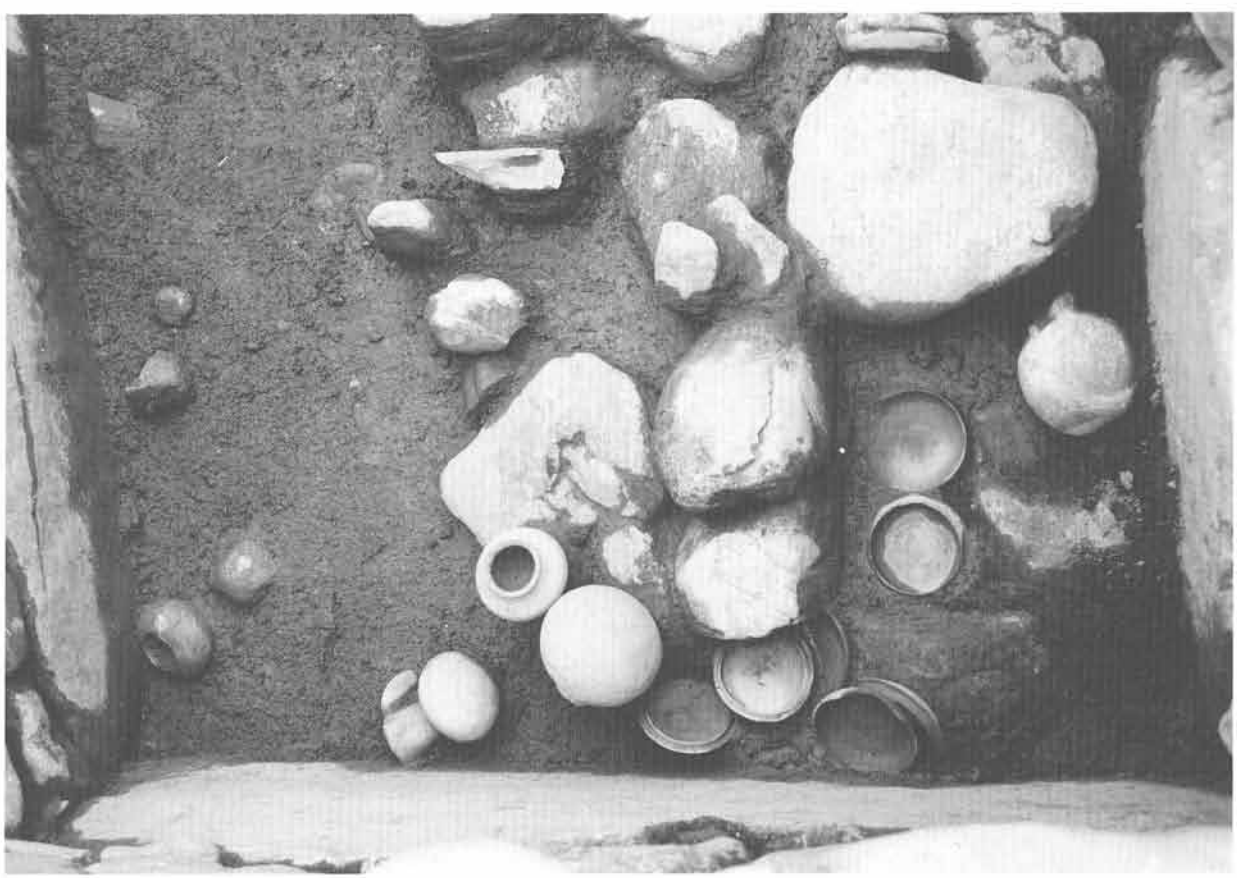
京都大学農学部農芸化学教室編(1957)農芸化学実験書（第1巻）. 411p.,産業図書

遺跡遠景（図矢印部）上野農林事務所提供

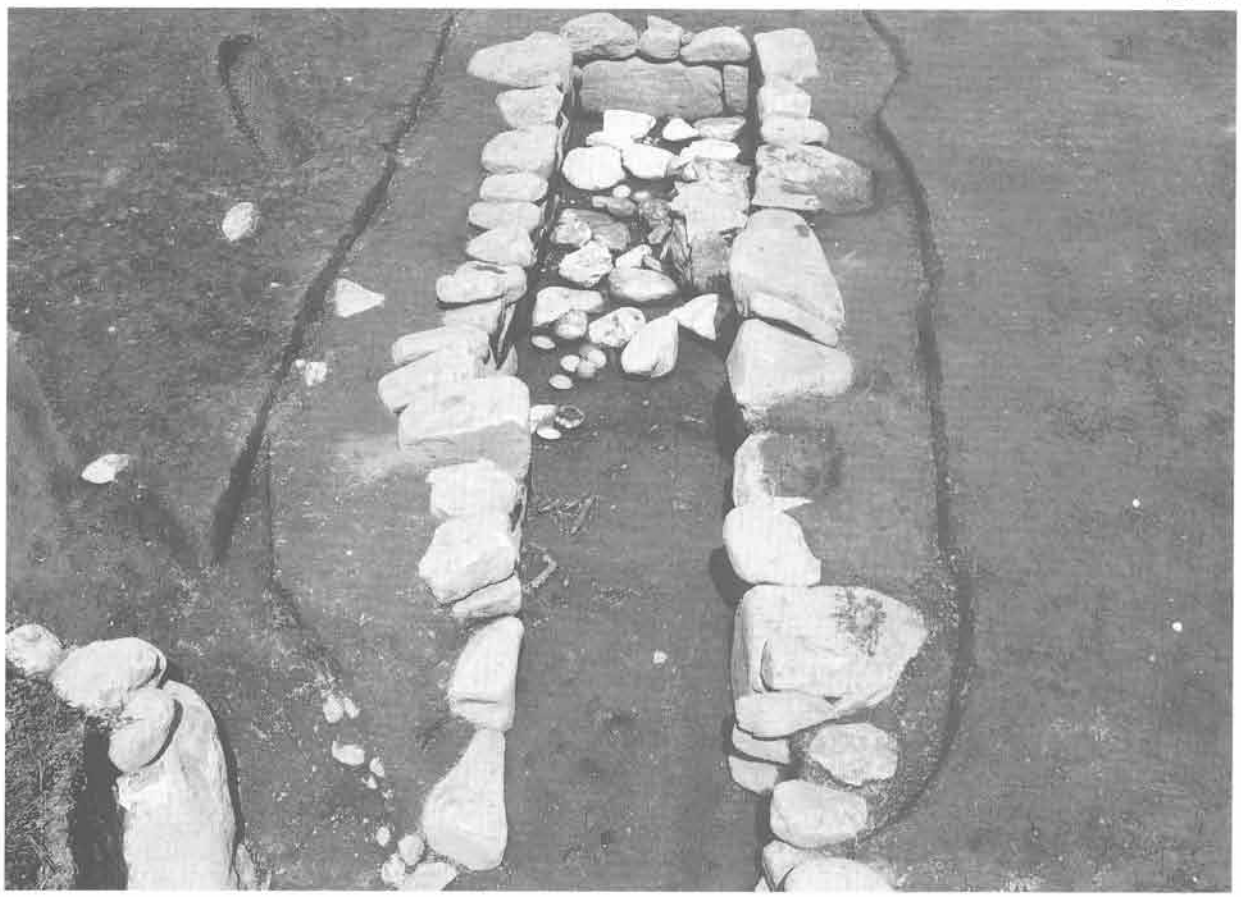
調査区全景（A地区）



１号墳遺物出土状況（西より）



１号墳遺物出土状況（奥壁付近）



2号墳遺物出土状況（西より）

2号墳出土状況（東より）

2号墳出土石棺開口後（東より）

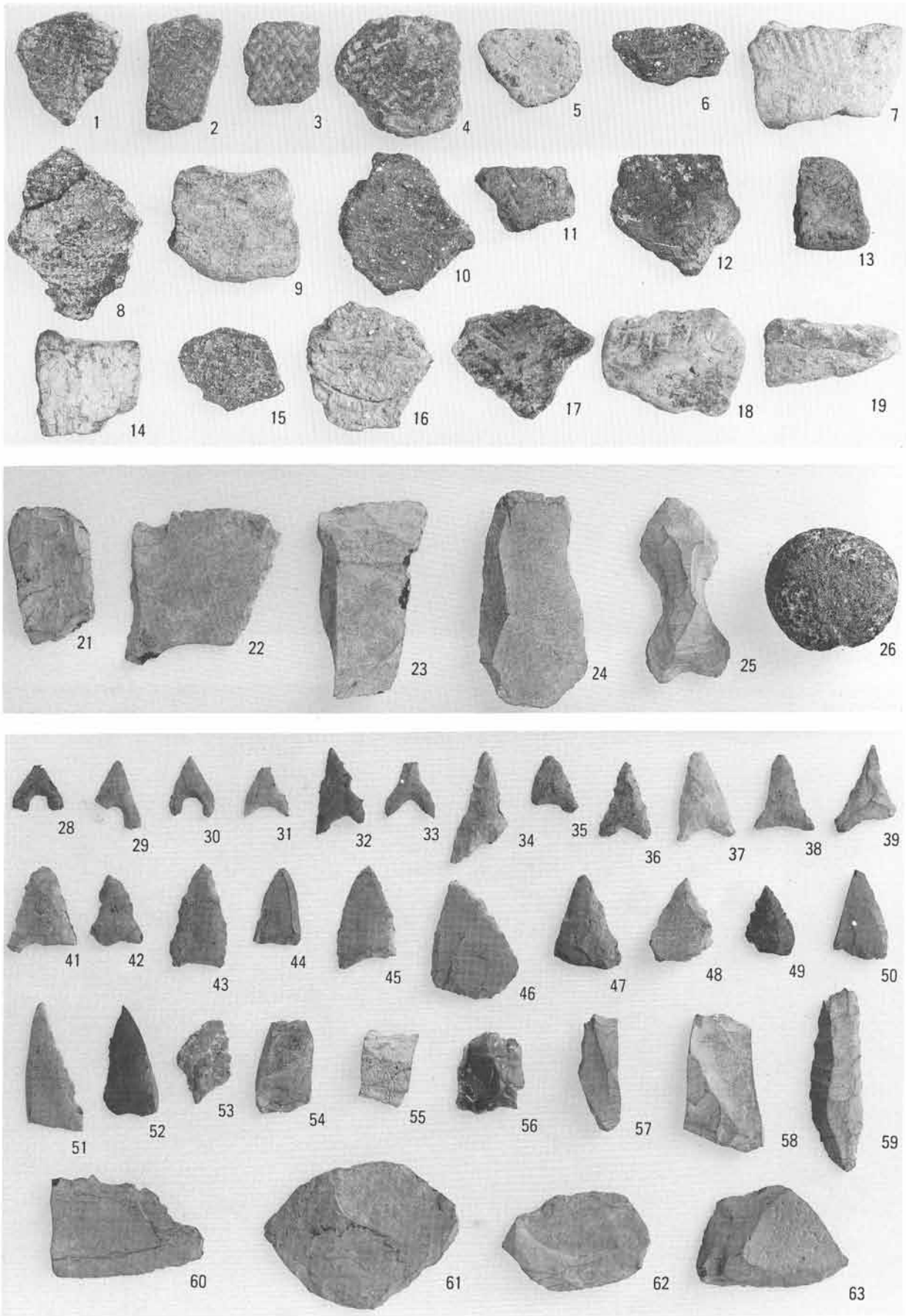
３号墳（北東より）

縄文時代の土坑（ＳＫ３）

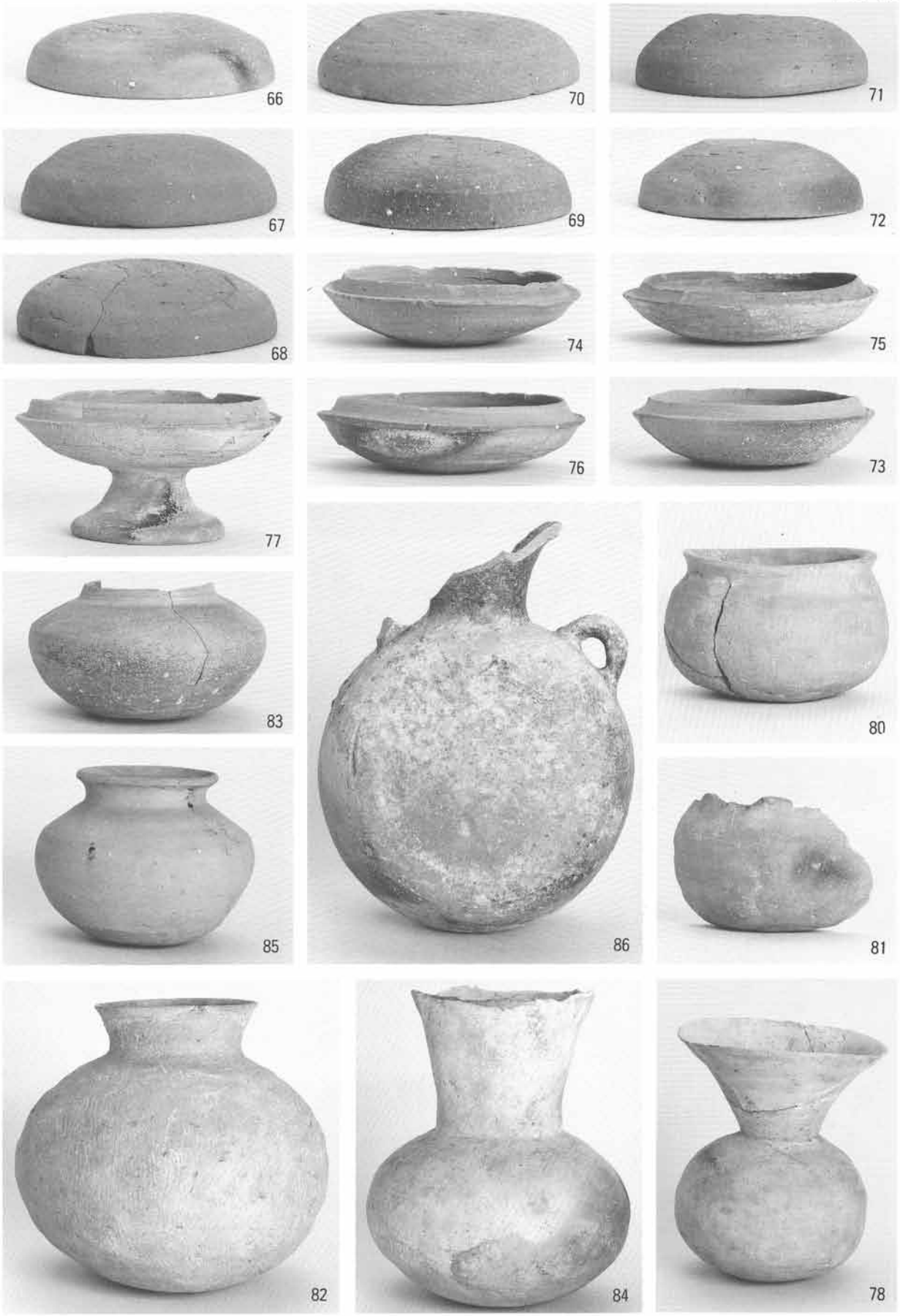
Ｂ地区全景

Ｂ地区ＳＸ１（北より）

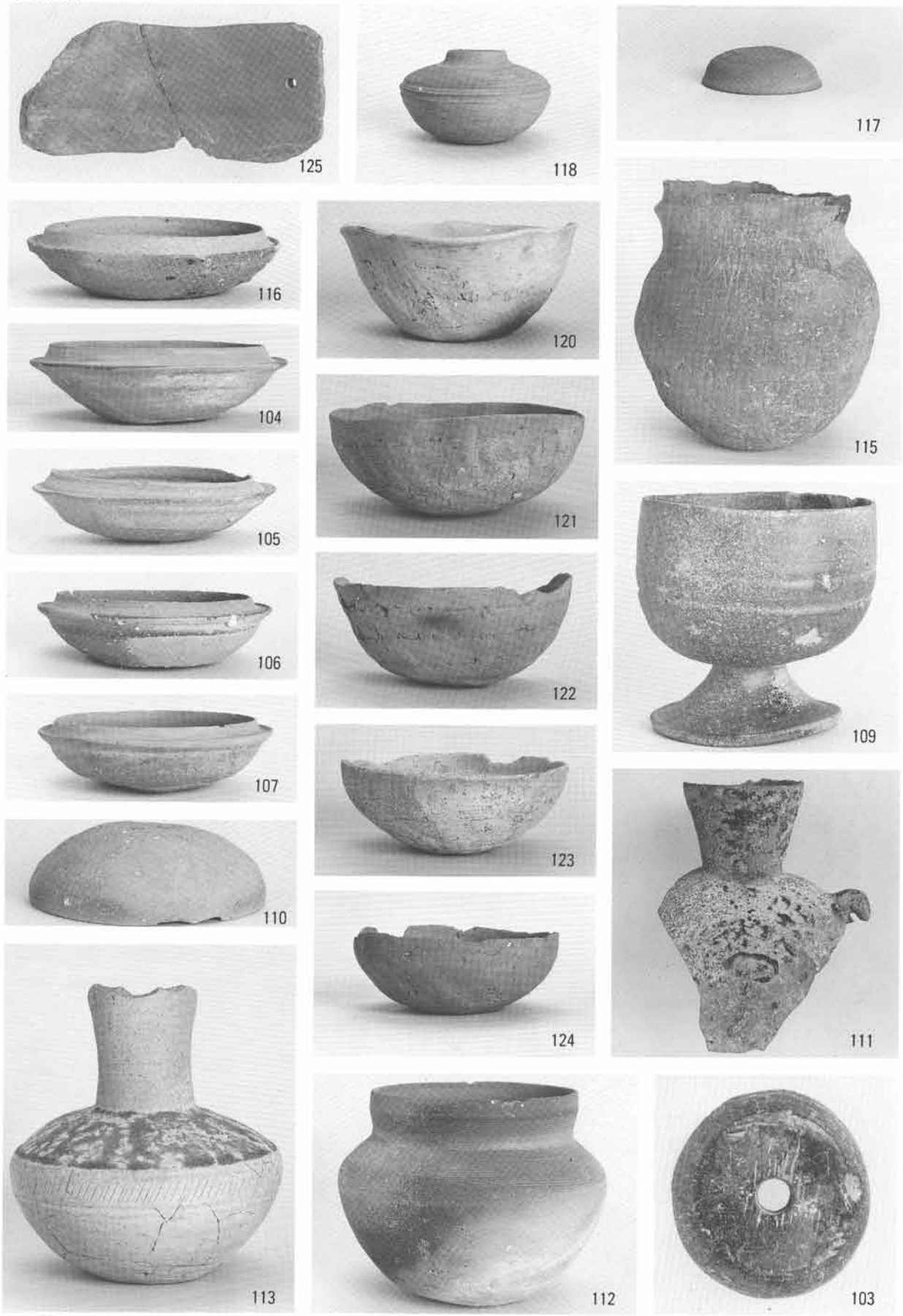
PL. 18



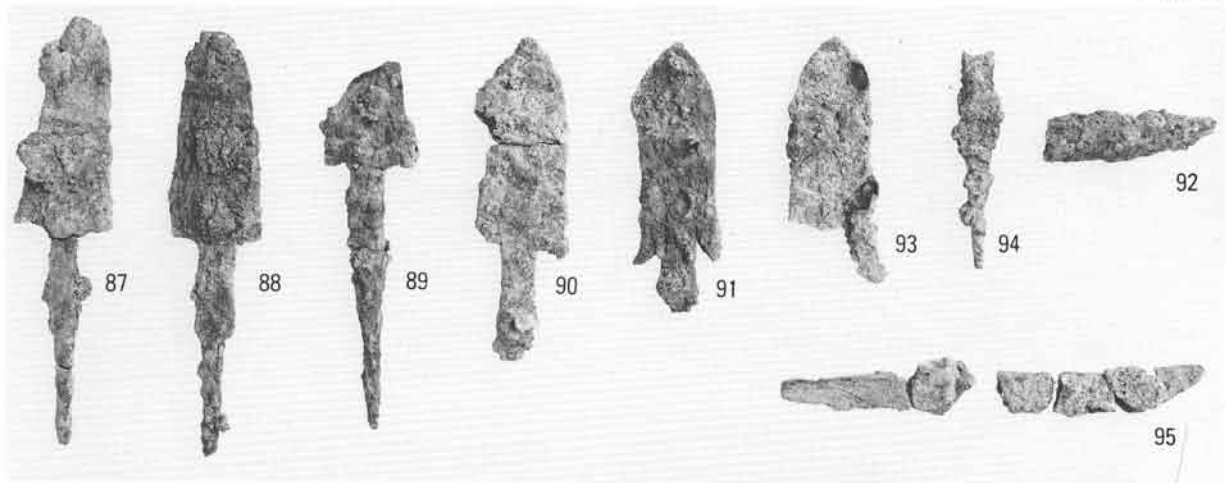
上段　縄文土器、中段　石器（1：2）、下段　石器（2：3）

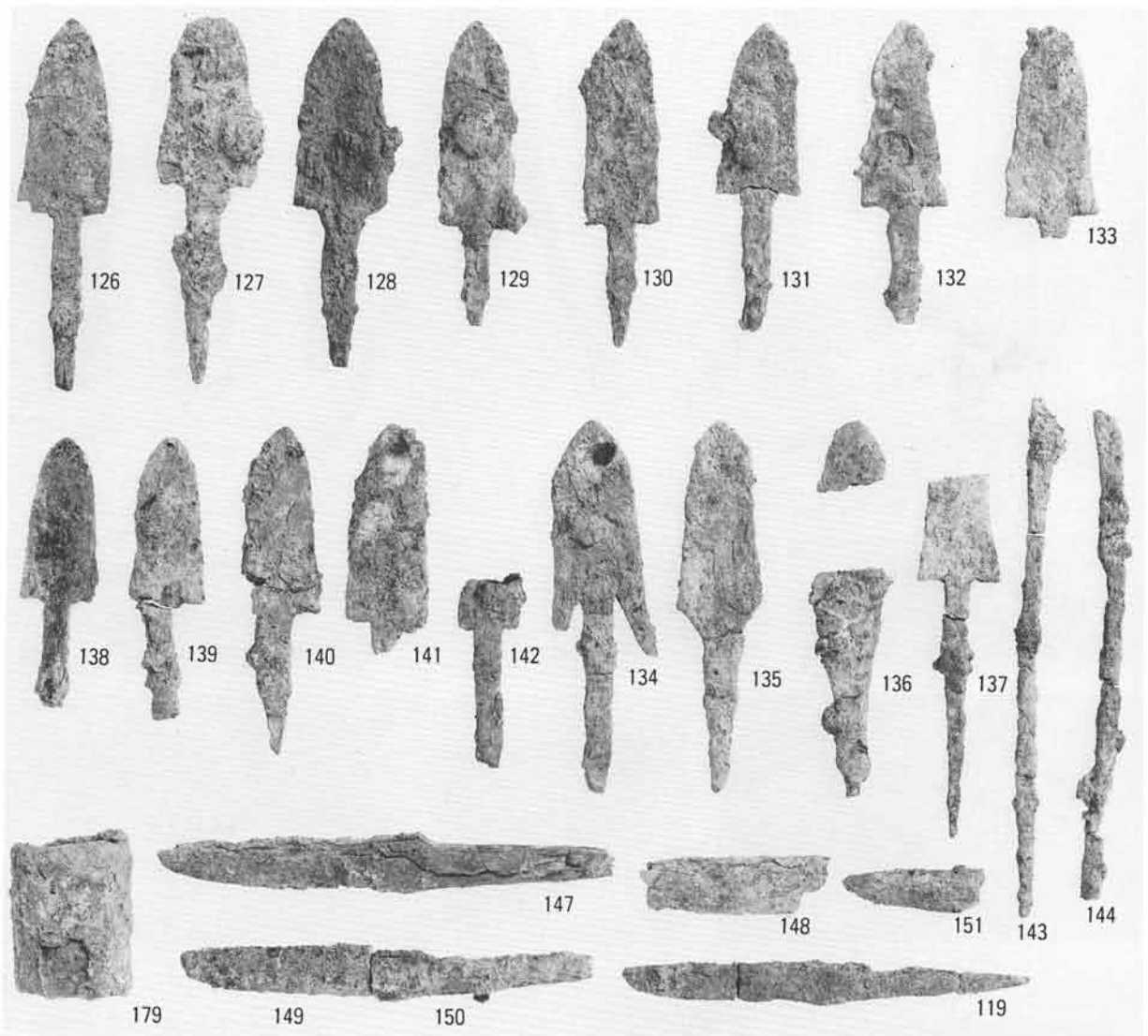


1号墳出土土器（1：3）

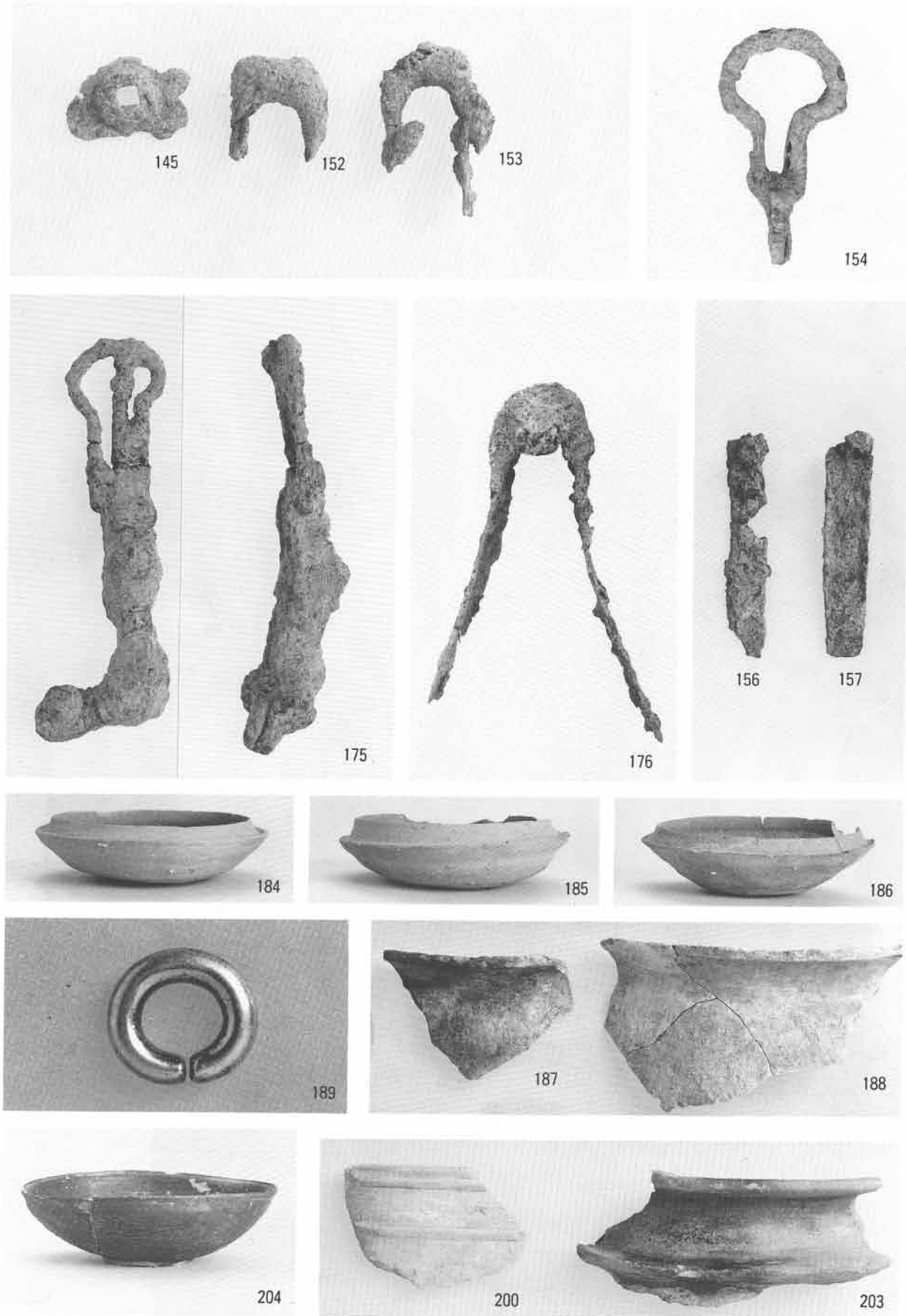


2号墳出土遺物　103（1：1）、125（1：2）、104～124（1：3）





上段　1号墳出土鉄製品1：2、中・下段　2号墳出土鉄製品119～151（1：2）、178（1：3）



2 号墳出土鉄製品(145～157＝1:2、175＝1:3) 3 号出土遺物(189＝1:1、184～188＝1:3) 1 号墳内出土遺物(200,203＝1:3)

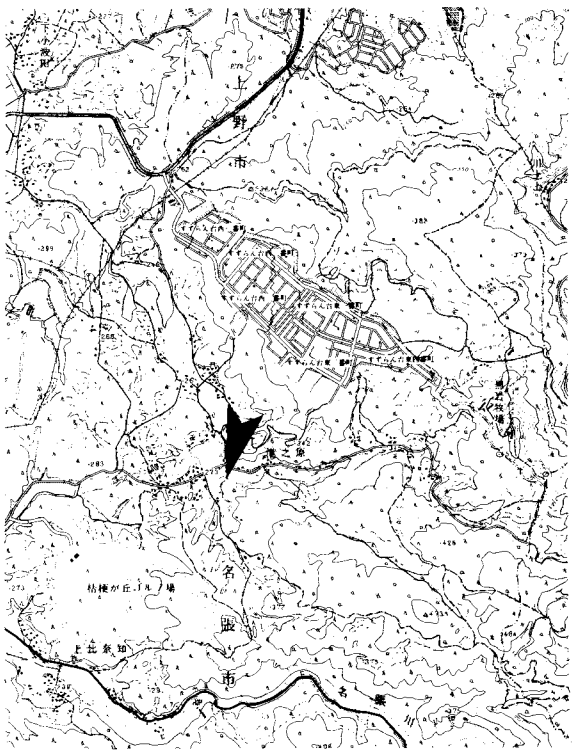
Ⅸ　名張市滝之原　天久保遺跡

当遺跡は行政上、名張市西部の滝之原に所在する。地理的には、木津川上流を流れる名張川とその支流宇陀川の合流する地域に形成された沖積平野にあり、周囲を平地との比高差50m～100m程の低丘陵に囲まれた狭隘な谷合いにできた平地部（標高276m）に位置する。平成３年度の県営ほ場整備事業により調査の必要が生じ、平成３年２月に第１次調査を実施したところ、事業地内約1,000㎡にわたり遺跡があることが判明。そのうち事業により削平を受ける部分について平成３年１０月１８日～２３日まで第２次調査を実施した。

調査は南北に29m×4m、東西に13m×4mと「L」字状にトレンチ溝を入れ調査を行う。検出した遺構は、南東隅に土坑を持つ掘立柱建物１棟、南北に桁行をもつ掘立柱建物２棟、その他土坑等を検出した。これらの遺構の時期は遺物より平安時代末頃（12世紀中葉）のものと考えられる。

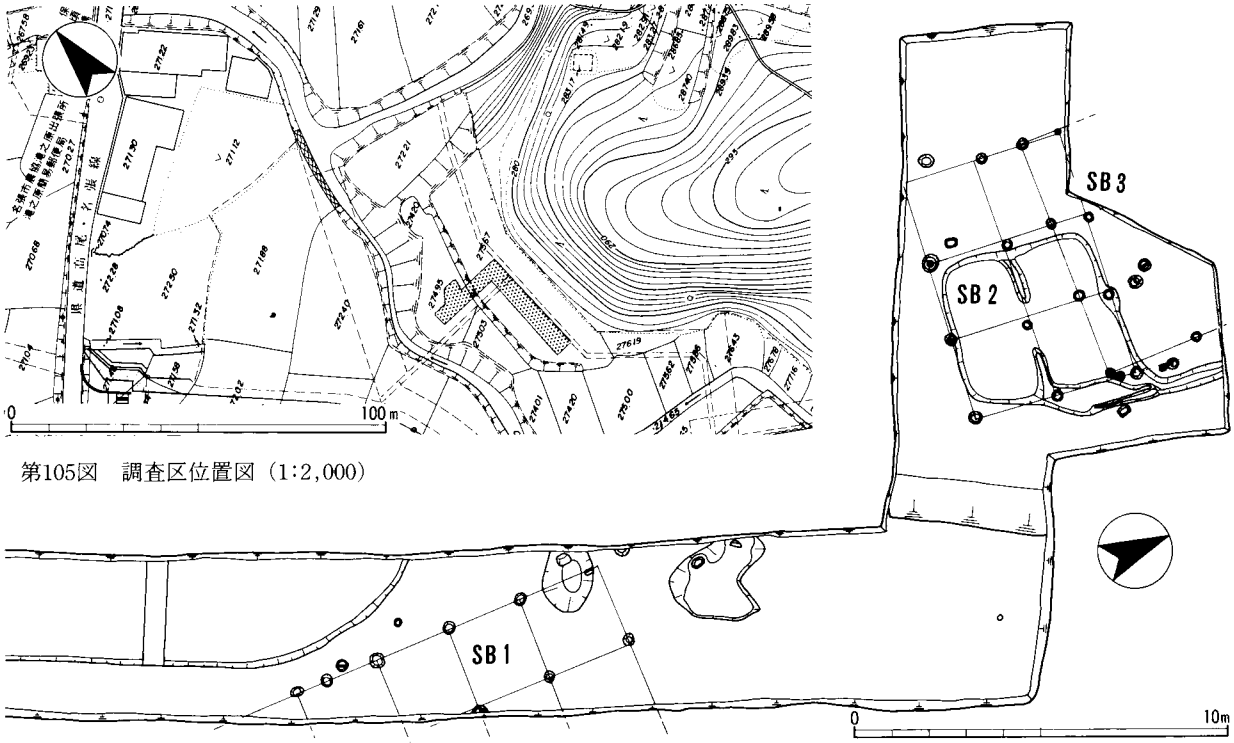
ＳＢ１　桁行５間以上×梁行２間以上で東側は山にあたるため南北棟の総柱建物と思われる。棟方向はＮ５°Ｅでほぼ北方向を向く。柱穴からは炭化物片、瓦器片が出土する。

ＳＢ２　掘立柱建物の南東隅に２間(4m)×２間



第104図　遺跡位置図（1:50,000）

第105図　調査区位置図（1:2,000）



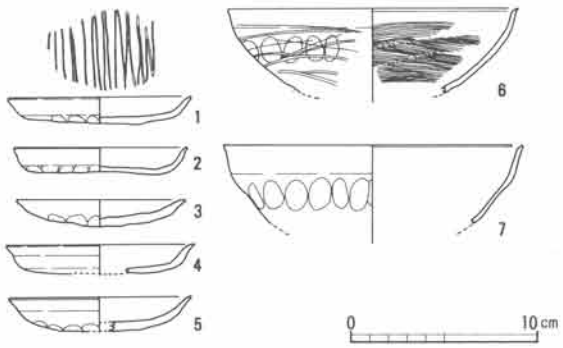
第106図　遺構平面図（1:200）

(4m)の土坑をもち、その深さは平均20cmを計る。土坑には北に延びる幅50cmの溝が取りつく。見方によっては南側からも溝がつくようにも見れる。また、土坑は中央で2分できた可能性を残す。なお、検出時はこの土坑が切り合う関係にはなかった。土坑内より完形品を含む土器（1～6）が出土した。建物は梁行（南北）2間×桁行（東西）3間の総柱の掘立柱建物と考えられる。棟方向はE16° Sで東西棟の建物である。柱間寸法は桁行が約2.4m間隔、梁行は約2.2m間隔で柱掘形は平均25cm～30cmの円形である。柱穴より瓦器椀（7）が出土した。埋土はすべて暗茶褐色の粘質土である。

ＳＢ３　ＳＢ２と切り合ように建てられ、梁行（東西）３間×桁行（南北）１間を検出したが、桁行きは調査区外へ延びており、南北棟の掘立柱建物であると考えられる。棟方向はN5° Eである。柱穴より土師器片が出土している。

実測可能な遺物はＳＢ２の土坑からの遺物が大半を占め、その他は細片が多い。

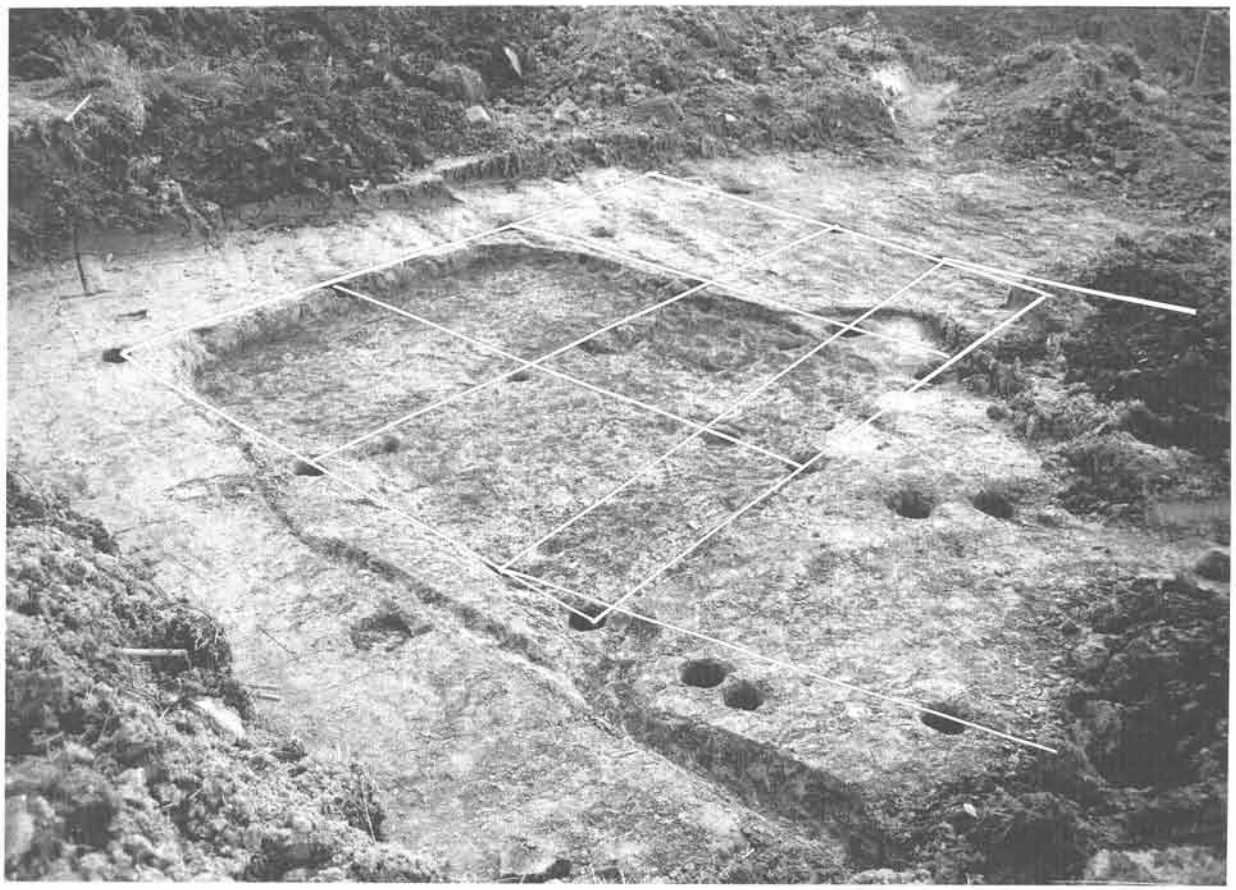
瓦器　皿（1、2）（1）は外面底部に指オサエを残し、内面にジグザグのミガキを施す。（2）は器壁が薄手で摩耗が激しく内外面の調整は不明。



第107図　遺物実測図（1:4）

土師器　皿（3～5）（3、5）は体部から底部にかけ丸味をもち口縁部が外傾する。底部に指オサエ痕を残し、内面にナデ調整を施す。（4）は底部が平らで器壁が薄い。

瓦器 椀（6、7）（6）は内外面にミガキを施し、外面に指オサエを残し、口縁部に段状の沈線を巡らす。底部を欠く。（7）は内外面の摩耗が激しく調整不明。これら遺物の時期は土師器、瓦器共に１２世紀中頃の所産と考えられる。　（吉澤　良）


ＳＢ２，ＳＢ３　近景

平成３(1992)年３月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 99―1

平成３年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

―― 第１分冊 ――

1992（平成４）年３月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　オリエンタル印刷株式会社